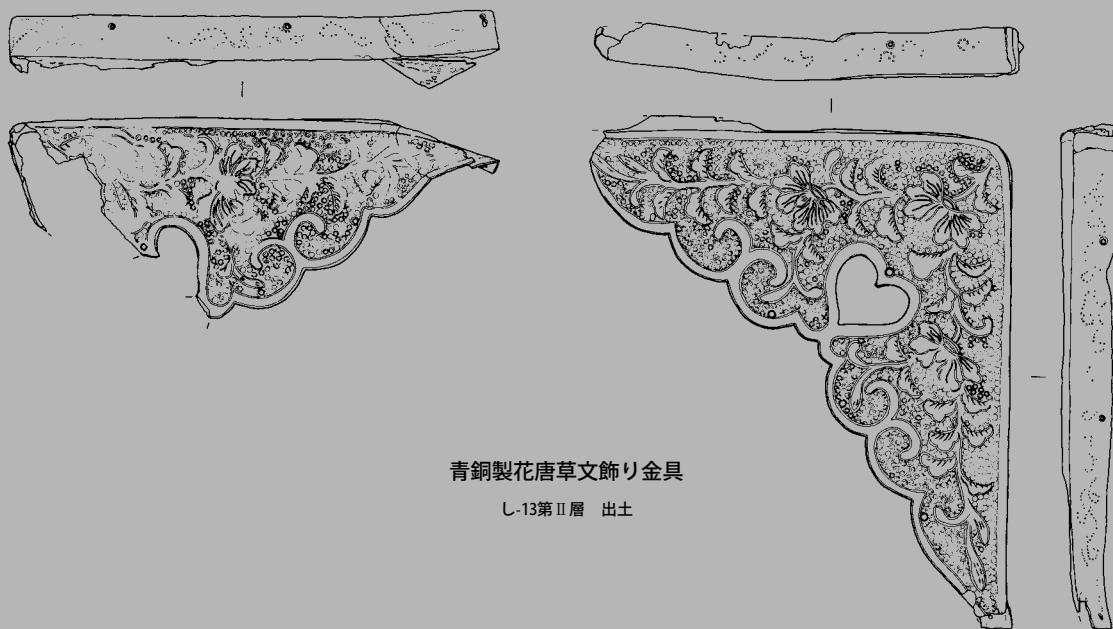


# 真珠道跡

－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書( I )－



青銅製花唐草文飾り金具

レ-13第II層 出土

2006年（平成18）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

# 真珠道跡

－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書( I )－

2006年（平成18）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



## 序

本報告書は、県営首里城公園整備に伴い平成 15・16 年度に県立埋蔵文化財センターが実施した、真珠道地区の発掘調査の成果をまとめたものです。

真珠道は、守礼門の東側隣接地を起点とし、金城坂（現石畳道）、識名坂、真玉橋、豊見城城下の東北側を廻り、那覇港南岸から屋良座森グスクに至る石畠道で、琉球王国の主要な軍用道路でもありました。

発掘調査では、第二次世界大戦や戦後の道路建設などの影響を受けて真珠道があったと推測される深さまで破壊されており、明確に真珠道を確認することはできませんでした。しかし、更なる下層より、石積と石敷きが組み合わされた遺構を検出しています。また、遺構の埋め土より、多量の沖縄産陶器、本土産陶磁器、中国産陶磁器、金属製品、骨製品、窯道具、自然遺物などが検出されています。

本報告書が、琉球王国の歴史と文化を理解する資料として広く活用されるとともに、文化財に対する保護に活用していただければ幸いです。

末尾ながら事業実施にあたり御指導・御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

2006 年（平成 18）3 月

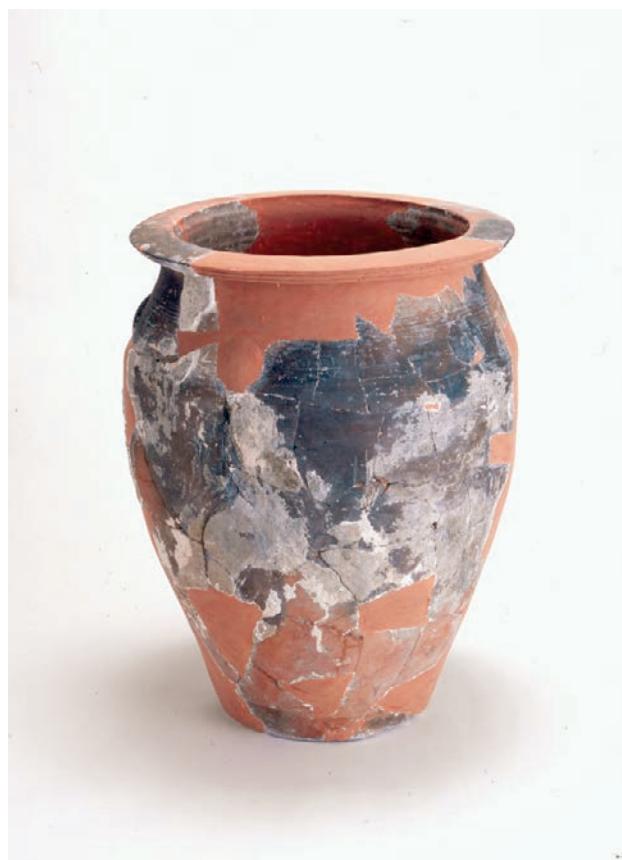
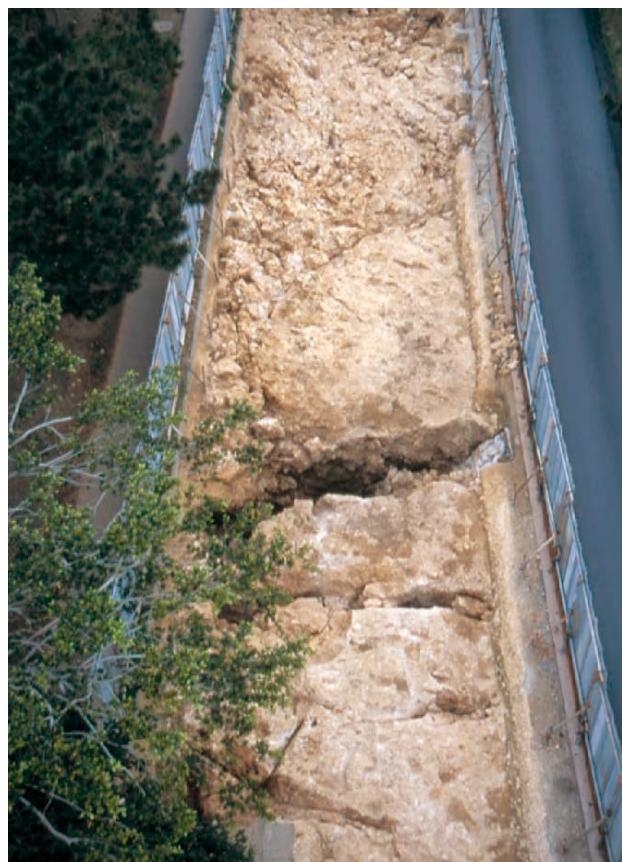
沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 田場清志





卷頭図版 1 首里城跡（航空写真）



卷頭図版2 上段：左 平成15年度全景（南側より望む）・右 16年度全景（南側より望む）  
下段：左 金属製品・石製品・骨製品 ・右 沖縄産無釉陶器（瓈）

## 例　言

- 1 本報告書は、平成15・16年度にかけて実施した首里城公園内の真珠道跡の発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 発掘調査は県営首里城公園整備事業に伴うもので、沖縄県土木建築部からの分任事業として沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。
- 4 本報告書で使用した航空写真は国土地理院93OK I NWAC49-12と同院が保管している1944年の米軍撮影の3PR/5M3IVXXIBCJAN-3F/152.4RESTを複写した。
- 5 出土遺物の同定は下記の方々に御協力をいただいた。記して謝意を表します（職名等は当時、敬称略）。

骨製品 渡辺治雄氏（ライオン株式会社お客様相談室）

- 6 本報告書は、金城亀信、青山奈緒を中心に、比嘉優子ほかの協力を得て、編集を行った。各節の執筆者は以下に示す通りである。

知念隆博	第1章、第2章、第3章、第4章、第5章 第14~17, 26節、第6章
金城亀信	第5章 第1~6, 12, 13節
青山奈緒	第5章 第8, 9, 22, 27節
比嘉優子	第5章 第10, 11, 20節
喜多亮輔	第5章 第23, 24節
長濱健起	第5章 第19, 25節
山田浩久	第5章 第7節
山本正昭	第5章 第18節
伊藤圭	第5章 第21節
- 7 本報告書に掲載された出土遺物の撮影及び現像・焼付は光嶋香、矢舟章浩が行った。
- 8 発掘調査で出土した遺物及び実測図、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

## 報告書抄録

ふりがな	まだまみちあと							
書名	真珠道跡							
副書名	首里城真珠道跡発掘調査報告書(I)							
卷次	一							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	知念隆博・金城亀信・青山奈緒・長濱健起・伊藤圭・比嘉優子・喜多亮輔・山本正昭・山田浩久							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8751・8752							
発行年月日	平成18(2006)年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
まだまみちあと 真珠道跡	おきなわけん なはし 沖縄県那覇市 しゅりとうのくらちよう ちょうめ 首里当蔵町3丁目 きんじょうちよう ちょうめ 金城町1丁目	47201	—	26° 12'	127° 43'	2004.9.16 ～ 2005.3.25	570	県営 首里城公園 整備事業
所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物		特記事項		
真珠道跡	道路跡	中世 近世 近代 現代	石積み(近世・近代) 石敷き(近世・近代)	(中国)青磁・白磁 染付 瑞璃釉 青磁染付 黒釉陶器 彩釉陶器 無釉陶器 (中国・タイ)褐釉 陶器(タイ)半練土器 国産(染付) 色絵 印判手 陶器(沖縄) 施釉陶器・無釉陶器 陶質土器・瓦質土器 カムイヤキ・土器 瓦・埠 土製品 坪堀・窯道具 金属製品・錢貨 貝製品 骨製品 煙管 玉 石器・石製品 円盤状製品 貝類遺存体 節足・脊椎動物遺存体		特になし		

## 目 次

序

卷首図版

例言

報告書抄録

<b>第1章 調査に至る経緯</b>	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
<b>第2章 位置と環境</b>	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
<b>第3章 調査の概要</b>	6
第1節 調査経過	6
第2節 調査区の設定	6
<b>第4章 検出遺構</b>	8
第1節 層序	8
第2節 遺構	8
<b>第5章 出土遺物</b>	11
第1節 青磁	11
第2節 白磁	16
第3節 染付	19
第4節 色絵	28
第5節 褐釉陶器	32
第6節 その他の輸入陶磁器	33
第7節 本土産陶磁器	37
第8節 沖縄産施釉陶器	51
第9節 沖縄産無釉陶器	65
第10節 陶質土器	71
第11節 瓦質土器	74
第12節 カムイヤキ	74
第13節 土器	75
第14節 土製品	77
第15節 屋瓦・埠	78
第16節 窯道具	79
第17節 垗堀	79
第18節 金属製品	80
第19節 銭貨	84
第20節 貝製品	86
第21節 骨製品	87
第22節 煙管	89
第23節 玉類	90
第24節 石器・石製品・石造製品	90
第25節 円盤状製品	93
第26節 貝類遺存体	95
第27節 節足・脊椎動物遺存体・更新世化石獸骨	97
<b>第6章 結語</b>	102

## 図目次

第1図 沖縄本島の位置図	3
第2図 首里城及真珠道の位置図と周辺の遺跡	4
第3図 首里古地図	5
第4図 グリッド配置図	7
第5図 調査範囲	9
第6図 石積み・石敷き遺構	10
第7図 層位断面図	10
第8図 青磁	15
第9図 白磁	18
第10図 染付 1	25
第11図 染付 2	26
第12図 染付 3	27
第13図 色絵 1	30
第14図 色絵 2	31
第15図 中国・タイ産褐釉(1~8) その他の輸入陶磁器1(9~17)	35
第16図 その他の輸入陶磁器2	36
第17図 本土産陶磁器 1	42
第18図 本土産陶磁器 2	43
第19図 本土産陶磁器 3	44
第20図 本土産陶磁器 4	45
第21図 印判手 1	46
第22図 印判手 2	47
第23図 印判手 3	48
第24図 印判手 4	49
第25図 印判手 5	50
第26図 沖縄産施釉陶器 1	59
第27図 沖縄産施釉陶器 2	60
第28図 沖縄産施釉陶器 3	61
第29図 沖縄産施釉陶器 4	62
第30図 沖縄産施釉陶器 5	63
第31図 沖縄産施釉陶器 6	64
第32図 沖縄産無釉陶器 1	68
第33図 沖縄産無釉陶器 2	69
第34図 沖縄産無釉陶器 3	70
第35図 陶質土器	73
第36図 カムイヤキ須恵器	74
第37図 土器	76
第38図 土製品	77
第39図 窯道具・坩堝	79
第40図 金属製品 1	82
第41図 金属製品 2	83
第42図 錢貨	85
第43図 貝製品	86
第44図 骨製品	88
第45図 煙管	89
第46図 玉・石器・石製品 1	91

第47図 石製品・石造製品 2	92
第48図 円盤状製品	94

## 表目次

第1表 青磁出土状況一覧	11
第2表-a 青磁観察一覧	12
第3表-b 青磁観察一覧	13
第4表-c 青磁観察一覧	14
第5表 白磁出土状況一覧	16
第6表 白磁観察一覧	17
第7表 中国産染付出土状況一覧	19
第8表 中国産染付観察一覧	21
第9表 中国産染付観察一覧	22
第10表 中国産染付観察一覧	23
第11表 中国産染付観察一覧	24
第12表 中国産色絵出土状況一覧	28
第13表-a 中国産色絵観察一覧	28
第14表-b 中国産色絵観察一覧	29
第15表 褐釉陶器出土状況一覧	32
第16表 褐釉陶器観察一覧	32
第17表 その他の輸入陶磁器出土状況一覧	33
第18表-a その他の輸入陶磁器(中国産) 観察一覧	33
第19表-b その他の輸入陶磁器 (中国産・タイ産)観察一覧	34
第20表 本土産陶磁器観察一覧	38
第21表 本土産陶磁器観察一覧	39
第22表 本土産陶磁器観察一覧	40
第23表 肥前出土状況一覧	41
第24表 瀬戸・美濃出土状況一覧	41
第25表 九州系磁器出土状況一覧	41
第26表 薩摩出土状況一覧	41
第27表 薩摩褐釉出土状況一覧	41
第28表 九州系陶器出土状況一覧	41
第29表 関西系出土状況一覧	41
第30表 印番手・型紙刷り出土状況一覧	41
第31表 銅版転写・色絵出土状況一覧	41
第32表 銅版転写出土状況一覧	41
第33表 ゴム判出土状況一覧	41
第34表 沖縄産施釉陶器出土状況一覧	51
第35表 沖縄産施釉陶器観察一覧	54
第36表 沖縄産施釉陶器観察一覧	55
第37表 沖縄産施釉陶器観察一覧	56
第38表 沖縄産施釉陶器観察一覧	57
第39表 沖縄産施釉陶器観察一覧	58
第40表 沖縄産無釉陶器出土状況一覧	65
第41表 沖縄産無釉陶器観察一覧	66
第42表 沖縄産無釉陶器観察一覧	67

第43表	陶質土器火炉分類表	72
第44表	土器出土状況一覧	75
第45表	土製品出土状況一覧	77
第46表	坩堝出土状況一覧	79
第47表	釘觀察一覧	81
第48表	錢貨觀察一覧	84
第49表	ヤコウガイ出土状況一覧	86
第50表	歯ブラシ分類表	87
第51表	歯ブラシ觀察表	87
第52表	煙管計測表	89
第53表	石器・石製品・石造製品	90
第54表	円盤状製品觀察一覧	93
第55表	巻貝集計表	95
第56表	二枚貝集計表	95
第57表	巻貝集計表	96
第58表	二枚貝集計表	96
第59表	イカ出土状況一覧	98
第60表	魚類出土状況一覧	98
第61表	リクガメ出土状況一覧	98
第62表	ヘビ出土状況一覧	98
第63表	トリ出土状況一覧	98
第64表	ニワトリ出土状況一覧	98
第65表	モグラ出土状況一覧	99
第66表	ネズミ出土状況一覧	99
第67表	イヌ出土状況一覧	99
第68表	ネコ出土状況一覧	99
第69表	ウシ出土状況一覧	99
第70表	ヤギ出土状況一覧	99
第71表	ヤギ歯出土状況一覧	99
第72表	ブタ出土状況一覧	100
第73表	ブタ歯出土状況一覧	100

## 図版目次

図版1	遺構検出状況 1	107
図版2	遺構検出状況 2	108
図版3	青磁	109
図版4	白磁	110
図版5	中国染付 1	111
図版6	中国染付 2	112
図版7	中国染付 3	113
図版8	色絵	114
図版9	中国産・タイ産褐釉陶器	115
図版10	その他の輸入陶磁器	116
図版11	本土産陶磁器 1	117
図版12	本土産陶磁器 2	118
図版13	本土産陶磁器 3	119
図版14	本土産陶磁器 4	120
図版15	沖縄産施釉陶器 1	121

図版16	沖縄産施釉陶器 2	122
図版17	沖縄産施釉陶器 3	123
図版18	沖縄産施釉陶器 4	124
図版19	沖縄産施釉陶器 5	125
図版20	沖縄産施釉陶器 6	126
図版21	沖縄産施釉陶器 7	127
図版22	沖縄産施釉陶器 8	128
図版23	沖縄産施釉陶器 9	129
図版24	沖縄産施釉陶器 10	130
図版25	沖縄産無釉陶磁器 1	131
図版26	沖縄産無釉陶磁器 2	132
図版27	沖縄産無釉陶磁器 3	133
図版28	陶質土器 1	134
図版29	陶質土器 2	135
図版30	陶質土器 3	136
図版31	陶質土器 4	137
図版32	瓦質土器 1	138
図版33	上:瓦質土器 2 下:丸い形(1~3) 土器(4~13)	139
図版34	上:土製品 下:窯道具・坩堝	140
図版35	瓦 1	141
図版36	瓦 2・塼	142
図版37	金属製品 1	143
図版38	金属製品 2	144
図版39	金属製品 3	145
図版40	錢貨	146
図版41	貝製品	147
図版42	上:貝製品 下:煙管	148
図版43	骨製品	149
図版44	玉・石器・石製品 1	150
図版45	石器・石製品 2	151
図版46	円盤状製品	152
図版47	貝類遺存体:巻貝 1	153
図版48	貝類遺存体:巻貝 2	154
図版49	貝類遺存体:二枚貝	155
図版50	骨 1 サカナ	156
図版51	骨 2 上:リクガメ 下:ニワトリ	157
図版52	骨 3 上:イヌ 中:ネコ 下:ヤギ	158
図版53	骨 4 上:ヤギ 下:ウシ	159
図版54	骨 5 ブタ	160

# 第1章 調査に至る経緯

## 第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、県営首里城公園の整備に伴うものであり、整備は県土木建築部が実施している。首里城公園は、1991年を初年度として、毎年着実に整備を実施しており、これまでに龍潭地区、ハンタン山地区、上の毛地区、首里杜館地区、管理用道路地区などで完了している。今回の調査区は、現在は那覇市道49号線として整備されているが、その地下には真珠道の存在が想定されている箇所である。現在でも車道として供用されているため、県文化課、埋蔵文化財センター及び県土木建築の調整により、車道の片側ずつの調査を実施する方法で対応することとなった。

調査範囲及び調査方法が決まったことにより、県土木建築部は文化財保護法第94条第1項に基づく通知を提出し、これを受けて県教育委員会より事前の発掘調査が必要な旨の回答を行い、平成15・16年度に埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、平成17年度に資料整理、報告書作成を実施した。

## 第2節 調査体制

発掘調査は、平成15・16年度、資料整理及び報告書作成は平成17年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。その体制は以下の通りである（職名等は当時）。

平成15年度

事業主体 沖縄県教育委員会

教育長 山内 彰

教育次長 井上 勝己（予算担当）・仲宗根用英（業務担当）

事業所管課 沖縄県教育庁文化課

課長 日越 国昭

課長補佐 大城 慧（事業担当）・上地 泰順（事務担当）

記念物係 係長 島袋 洋・専門員 中山 晋（事業担当）

文化係 主幹兼係長 宮国 栄（事業事務担当）・主事 富里 貴子

事業所管 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 安里 嗣淳

事業総括・事業事務

副所長兼庶務課長 安富祖英紀

庶務課 主査 比嘉美佐子・主査 西江 幸枝・主事 川元 哲哉

事業実施 沖縄県立埋蔵文化財センター

調査課 課長 盛本 熊

調査課 専門員 知念 隆博・専門員 金城 達・文化財調査嘱託員 新垣 力

発掘調査作業員

安次富マサ子、新垣キク、有田康信、大城輝子、大城由美子、呉我フジ子、

小波津ヨシ子、佐渡山正子、志喜屋タツ子、桃原隆信、當間和子、當間フミ、

中塚末子、仲程健、比嘉洋子、真栄城千枝子、宮国恵子、山内淳、与那嶺勢津子

資料整理作業員

高野ひろみ、友利美佐江

平成16年度

事業主体 沖縄県教育委員会

教育長 山内 彰

教育次長 宮城 清志（予算担当）・仲宗根 用英（事業担当）

事業所管課 沖縄県教育庁文化課

課長 名嘉 政修

副参事兼課長補佐 千木良 芳範（事業担当）

課長補佐 上地 泰順（事業担当）

記念物係 係長 島袋 洋・専門員 中山 晋（事業担当）

文化係 主幹兼係長 宮国 栄・主事 富里 貴子（事業事務担当）

事業所管 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 安里 嗣淳

事業総括・事業事務

副所長兼庶務課長 赤嶺 正幸

庶務課 主査 比嘉美佐子・主査 西江 幸枝

同 上 主事 城間奈津子

事業実施 沖縄県立埋蔵文化財センター

調査課 課長 盛本 熱

調査課 専門員 知念 隆博・文化財調査嘱託員 宮城 奈緒

発掘調査作業員

阿多利力、新垣範久、石垣浩充、川上初枝、川上益子、吳我フジ子、小橋川哲、

崎濱スエ子、佐渡山正子、中塚末子、仲間勝也、中村フサ子、八尋心、比嘉洋子、

平安名哲子、宮城悦子

資料整理作業員

池原直美、玉那覇キミ子、玉寄智恵子

平成17年度

事業主体 沖縄県教育委員会

教育長 仲宗根 用英

教育次長 宮城 清志（予算担当）・仲村 守和（事業担当）

事業所管課 沖縄県教育庁文化課

課長 千木良 芳範

課長補佐 島袋 洋（事業担当）・崎濱 文秀（事務担当）

記念物係 主幹兼係長 盛本 熱

記念物係 専門員 知念 隆博・専門員 新垣 力（事業担当）

文化係 主幹兼係長 宮国 栄・主任 神谷 リカ（事業事務担当）

事業所管 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 田場 清志

事業総括・事業事務

副所長兼庶務課長 赤嶺 正幸

庶務課 主査 比嘉 美佐子・主査 山田 恵美子・主任 城間奈津子

事業実施

調査課長 岸本 義彦

主任専門員 金城 亀信・専門員 青山 奈緒

文化財調査嘱託員 久貝 弥嗣・文化財調査嘱託員 宮城 奈緒

文化財調査嘱託員 光嶋 香・文化財調査嘱託員 仲宗根 瑞香

文化財調査嘱託員 比嘉 優子・文化財調査嘱託員 仲間 留美

資料整理作業員

新垣ますみ、池原直美、石嶺眞由美、伊波まさみ、大嶺愛子、親川守人、

喜納ひとみ、金城敬子、久保田有美、小濱かおり、城間五百子、瑞慶覧尚美、

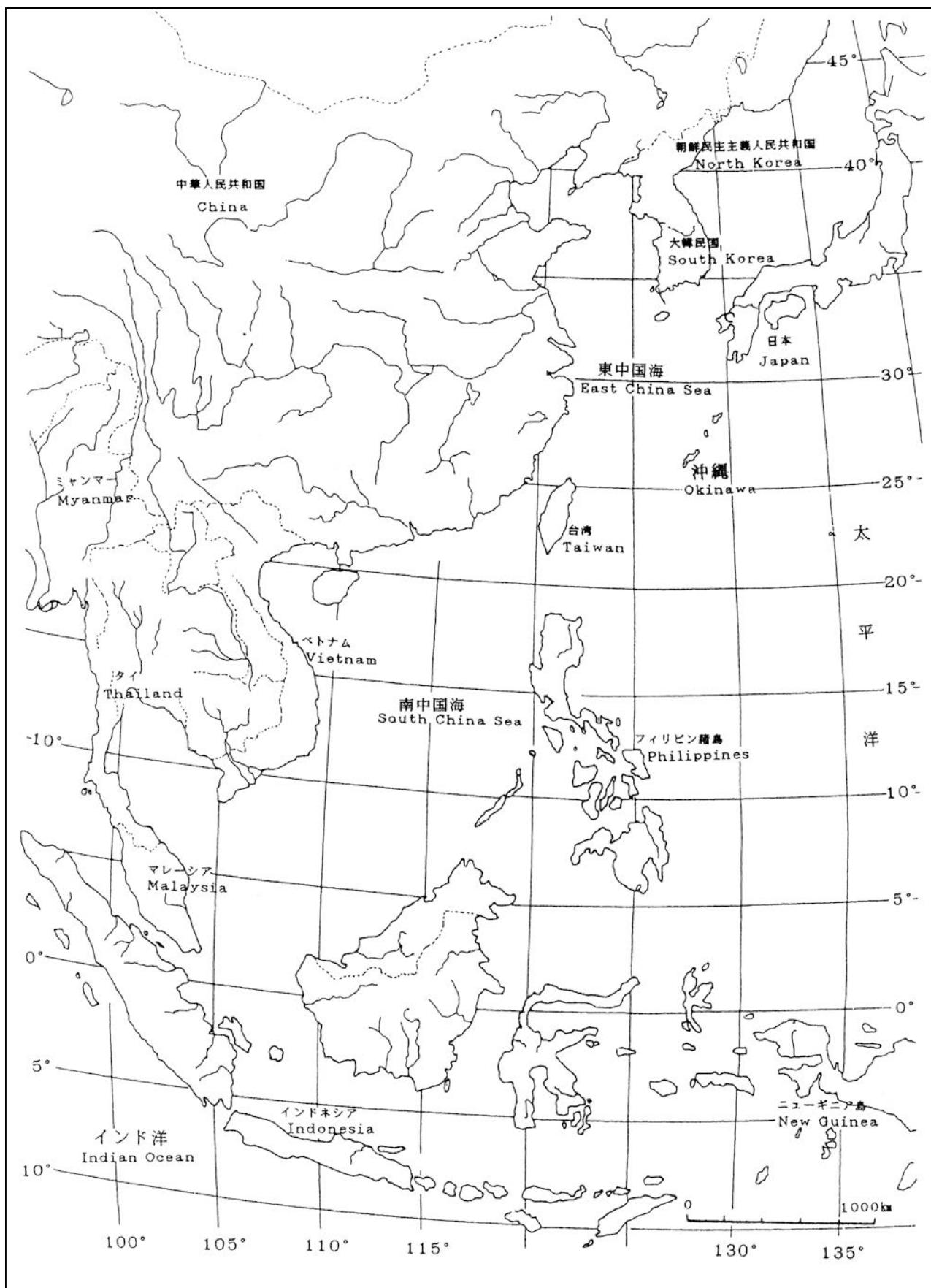
高良三千代、玉那覇キミ子、玉寄智恵子、當間あきの、當山 実、仲宗根めぐみ、

仲間留美、中山まり、中山由美、野村知子、外間瞳、真榮城和美、前田和枝、

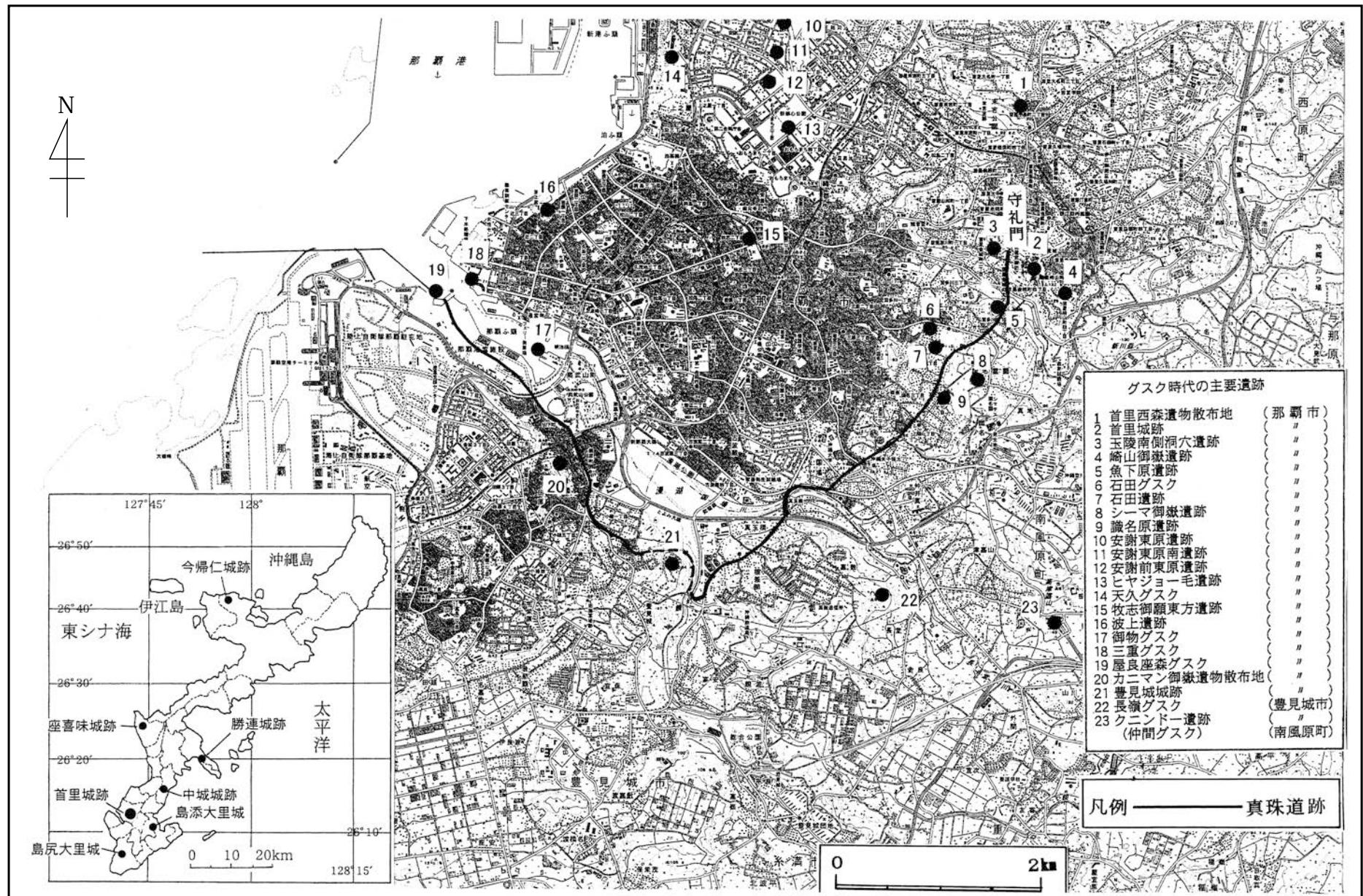
松門孝、山下美也子、與古田愛、

資料整理作業協力者

上原園子、金城克子、城間千鶴子、城間いづみ、比嘉洋子、照屋利子



第1図 沖縄県本島の位置図



第2図 首里城跡及び真珠道の位置図と周辺の遺跡

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

首里城跡が所在する那覇市首里は、首里台地と称される標高100～130mの琉球石灰岩の台地に所在する。遺跡を囲む環境として北側を虎頭山及び弁ヶ嶽などの丘陵部、河川では真嘉比川が延びており、南側は安里川の侵食により、凹地を形成するなど自然の地形を巧に利用している。

首里城跡周辺の地層の重なりは、上層が琉球石灰岩、下層は基盤である第三紀島尻層群となっている。透水層である琉球石灰岩に降り注いだ雨水は、不透水層である島尻層群との境より湧泉として湧き出すこととなる。そのため、首里は豊富な湧泉が多数確認されており、遺跡の所在する周辺にも多数存在する。

真珠道跡は、首里城跡から少し下がり、標高約 113mに位置する。首里城とは接していなかったと考えられ、道跡の東側には首里城跡の城壁がそびえ、西側は天界寺の松尾があったが、現在は造成され、広場となっている。北側は、園比屋武御嶽石門及び守礼門があり、南側は真珠道である金城町の石畳道が続いている。

### 第2節 歴史的環境

首里城の築城年代については不明な部分が多いが、1427年建立の「安国山樹華木之碑記」から、尚巴志王代(1422～1439年)には、首里城の基本的な形はできあがっていたと考えられる。その後、第二尚氏王統になり尚真王代(1477～1526年)に歓会門や久慶門の整備、北側外郭の整備が行われ、尚清王代(1527～1555年)に繼世門及び南側外郭の整備が行われ、復元が進んでいる現在の首里城の様子に近づいたと考えられる。

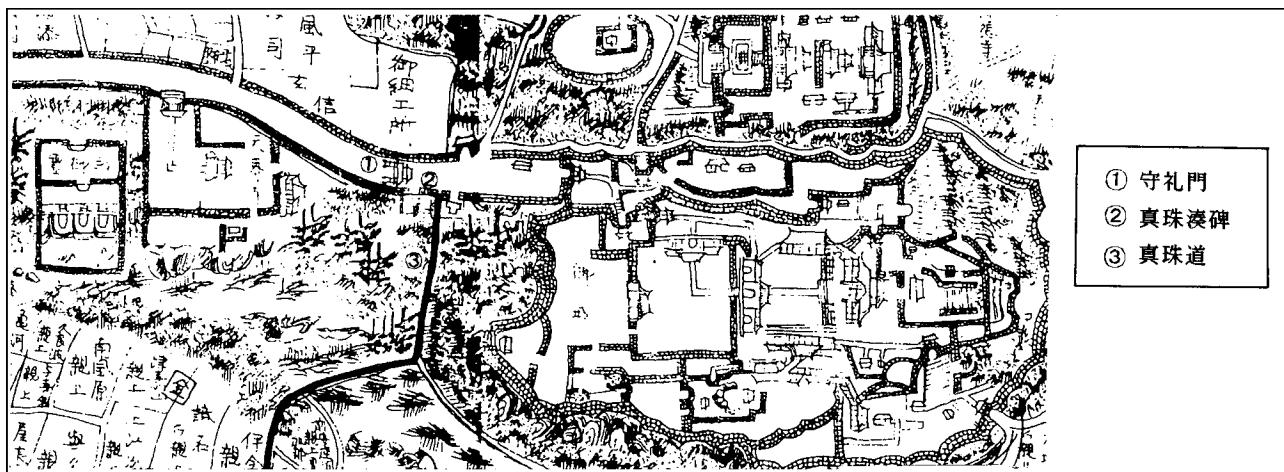
真珠道は、1522年に整備された道であり、起点を守礼門東側に隣接する「国王頌徳碑」と「真珠湊碑」の両石門とし、金城坂(現石畳道)、識名坂、真玉橋、豊見城城下の東北側を廻り、那覇港南岸から屋良座森グスクに至る道であり、主要な軍用道路でもあった。

真珠道について記載された史料は少数であり、詳細であるは「真珠湊碑」である。  
その他については、古地図及び古写真等でも詳細な記録とはなっていない。

去る沖縄戦において、首里城一帯は、首里城の地下に日本軍の第32軍司令部壕が構築されたことから米軍による集中砲火を浴び、首里城をはじめとして、多数の貴重な文化遺産が焼失した。

戦後、首里城跡は1950年に琉球大学が設置され、往時の姿は僅かに残すのみとなっていた。真珠道跡周辺も、東側は琉球大学建設の際に造成が行われ、西側は駐車場となった。また、真珠道跡は那覇市道守礼門南側線として整備され、面影はなくなった。

その後、琉球大学が西原町に移転してからは、外郭を沖縄県教育委員会、内郭を国、外郭より外側を沖縄県土木建築部が整備し、国営公園及び県営公園として公開されている。真珠道跡に関しても、今後、整備され、往時の歴史的景観を取り戻すこととなっている。



第3図 首里古地図（一部改変 国営沖縄記念公園事務所1995国営沖縄記念公園首里城地図計画・設計の記録）

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査経過

平成15年度（平成15年10月17日～平成16年2月28日）

平成15年度は、那覇市道守礼門南側線として使用されている車道の東側を調査した。調査に先立ち、警察からの指導により、調査区の周囲を鋼板によって囲い、掘削して落込んだ部分に周辺住民や観光客が誤って落ちることを防ぐための作業を行った。その後、アスファルト及び路盤材を除去し、不発弾等の危険物の混入の有無を確認した上で、本格的に調査に取りかかった。

路盤材の下層にある造成土を除去する作業を進めていくと、遺構ではなく、琉球石灰岩の岩盤を確認する部分が大部分を占めた。造成土を除去した段階で、真珠道跡周辺は、第二次世界大戦若しくは戦後の造成により大幅に地形改変を受けたことがわかった。

その後、岩盤の裂け目に沖縄産陶器を多量に包含する土が詰まっていることが確認でき、掘下げていくと石積を検出した。この石積は脆い土に積み上げられていたことから、調査中の降雨により崩壊の危険が生じた。そのため、石積の根石の確認までには至らなかったが、実測を行い、土のう袋により養生を行った。

調査区の北側においては、明褐色土が岩盤を覆っており、慎重に掘下げると、リュウキュウムカシキヨン及びリュウキュウジカの化石を包含していた。調査区外の北側にも延びていると考えられたが、調査区の拡張も限られていたため、次回の調査へ延期とした。

実測、写真撮影等の作業を終了したことを確認して、埋め戻しを行い、平成16年2月28日をもって、沖縄県土木建築部へ現場の引渡しを行い、現地調査を終了した。

平成16年度（平成16年11月1日～平成17年3月31日）

平成16年度は、平成15年の調査区と接するように西側に設定した。平成15年度同様に警察の指導により調査区の周囲を鋼板によって囲い、事故を防ぐ安全対策を行った後に調査を開始した。

アスファルト及び路盤材の除去作業の段階で、地形改変を受けているなどの平成15年度の調査と同様な状況となっていたため、遺構が確認されていた箇所及びシカ化石が確認されていた箇所の周辺を重点的に調査することとした。

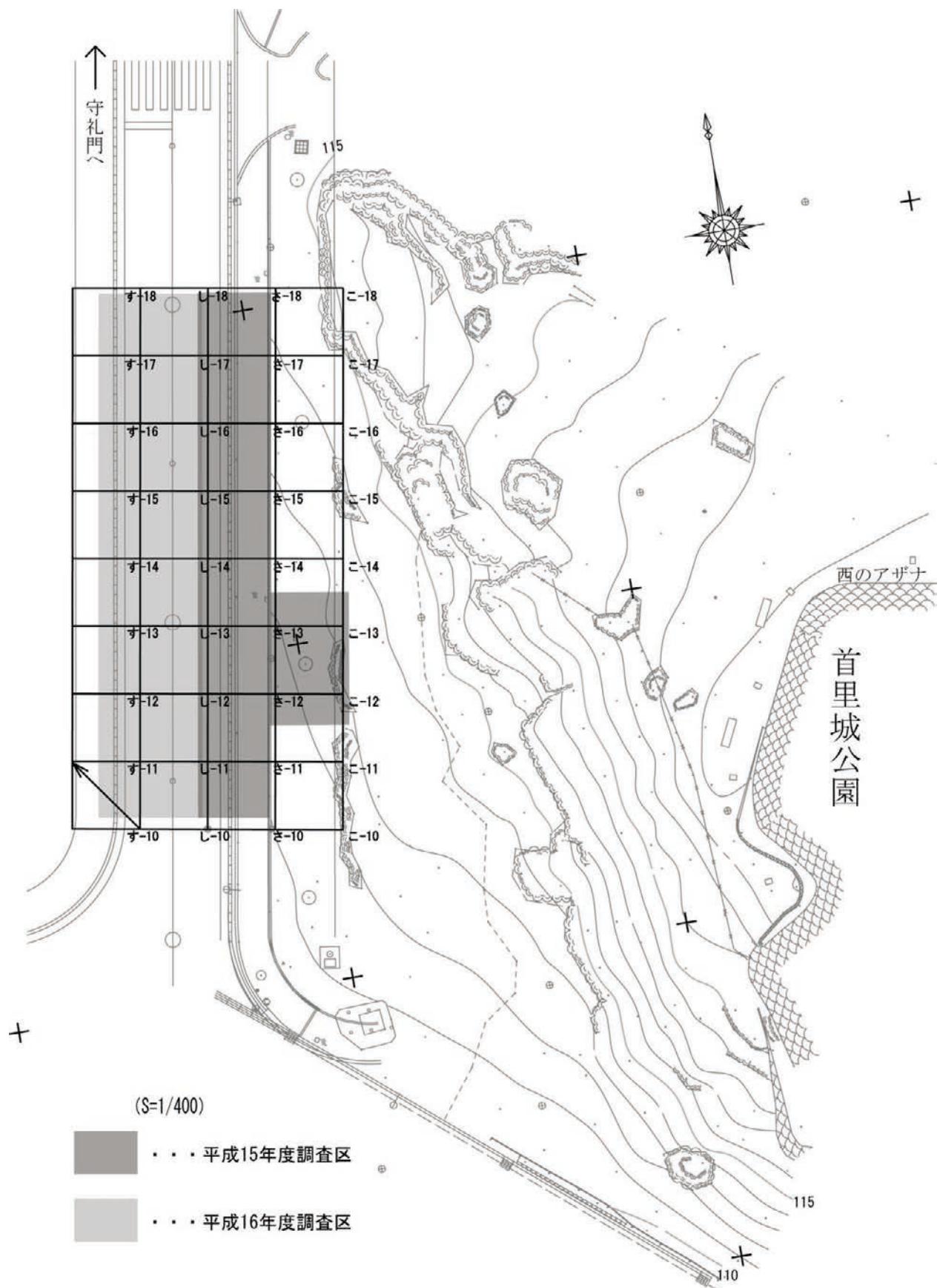
平成15年度に石積を確認した箇所の延長部分では、石積の延長を確認するとともに石積の根石外側に石敷きを確認した。シカ化石を確認した部分（しー16～18グリッド）の西側では、シカ化石の確認はできていない。

事前の調整により、埋め戻しは南部土木事務所が実施することになっていたため、実測、写真撮影等の作業を終了した後に現場を引き渡し、南部土木事務所により石積及び石敷きは白砂で養生された後、土にて埋め戻され、道路として復旧された。

平成17年3月には遺物の整理を行い、平成15・16年度の現地調査を終了し、平成17年度に資料整理及び報告書刊行を行い、今回の発掘調査の一連の作業を終了した。

### 第2節 調査区の設定

今回の調査区は、真珠道跡の検出を目的として、また、周辺住民、県立芸術大学の関係者及び周辺住民の生活に影響の少ない方法を選択して設定した。調査の基本となるグリッドは那覇市道守礼門南側線に沿って、5m四方で設定し、南北に算用数字、東西にひらがなで表し、南東側を示準してグリッドを呼称した。



第4図 グリット配置図

## 第4章 検出遺構

### 第1節 層序

今回調査を行った箇所は、第二次世界大戦及び戦後の造成により大きな地形改変を受けていたため、本来の真珠道の標高までは破壊若しくは搅乱を受けていた。そのため、良好な層序は無く、遺物を多量に包含する層についても、締りが悪く、往時の土壤の堆積とは考え難い。以下に各層序についての略述を行う。

I層—造成土。上層は道路建設の際の細碎石灰岩、下層は他の場所より持ち込まれた造成土。

II層—黒褐色で遺物を多量に含む層。基本的にこ—12・13、さ—12・13、し—12・13で確認されている。

III層—明褐色土。地山であり、北側においてはシカ化石を包含する。

### 第2節 遺構

確認された遺構は、石積及び石敷きであり、当初からの目的である真珠道跡の検出には至らなかった。石積は、さ—13及びし—13から検出されている。真珠道は南北方向に延びる道と考えられるが、検出した石敷きは東西方向へと延びている。また、検出された箇所は、東西方向に裂けた、琉球石灰岩の岩盤の間にあり、広い部分で約2.5m、狭い部分で約1mの制限されたところである。

石積は東西方向へ延びているが、西端として南北方向へ延びているのを確認できた。石積基礎は、締りのない軟らかい土壤から積み上げられており、調査中には崩壊の可能性もあった。土壤とは対照的に石積を構成する各石は面を丁寧に加工し、積み上げられており、土台となる土壤の性質とは明らかな差が感じられる。

石積と岩盤との間には裏込めとして拳大～人頭大の琉球石灰岩が詰められており、裏込め内から沖縄産陶器などの近世若しくは近代の遺物が検出されている。

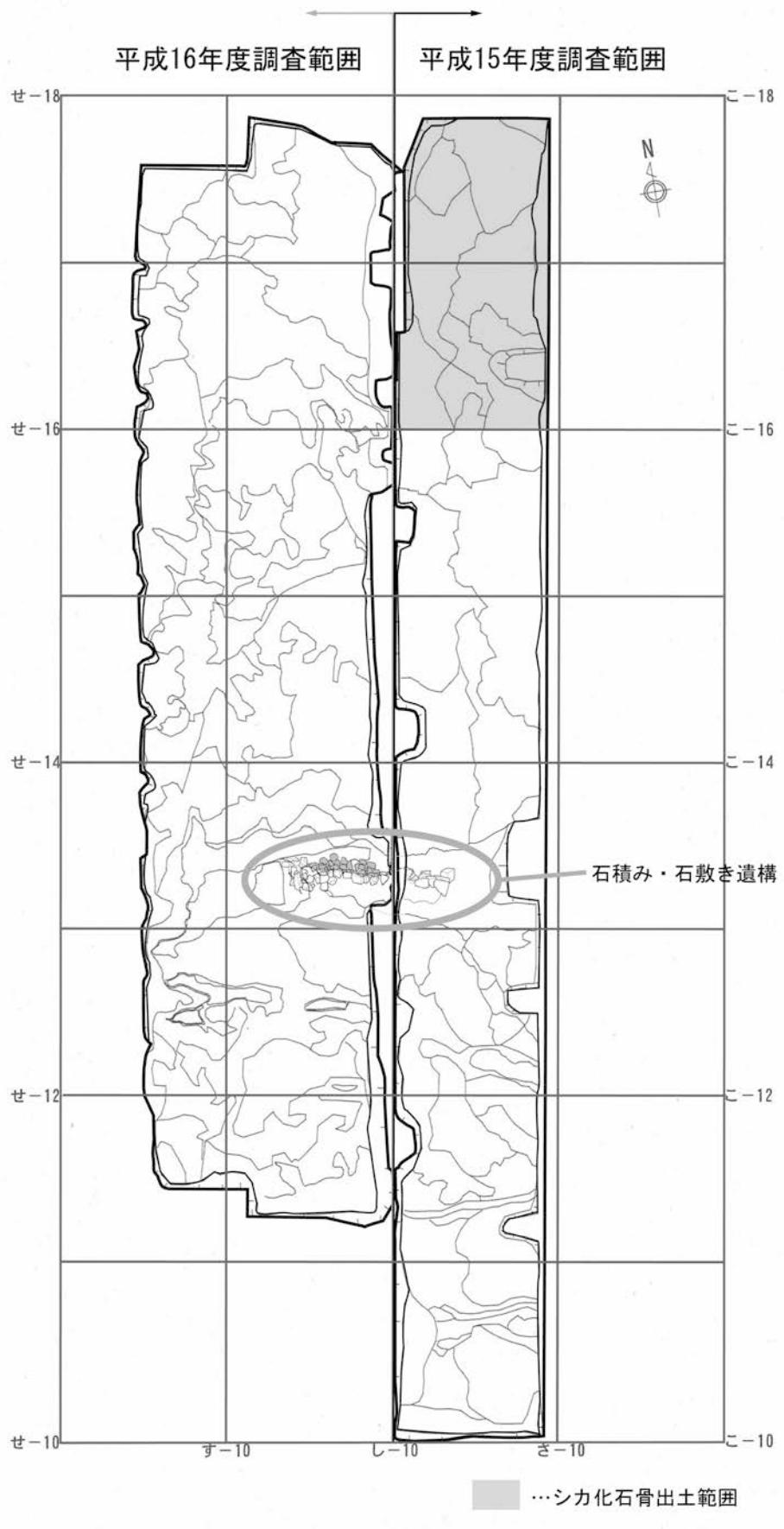
なお、東側の延長部分に関しては、那覇市道守礼門南側線に付随する街灯の基礎が設置されていること及び国指定史跡の範囲に入ることから調査を東側に進行せずに終了した。そのため石積の東端は確認できていない。

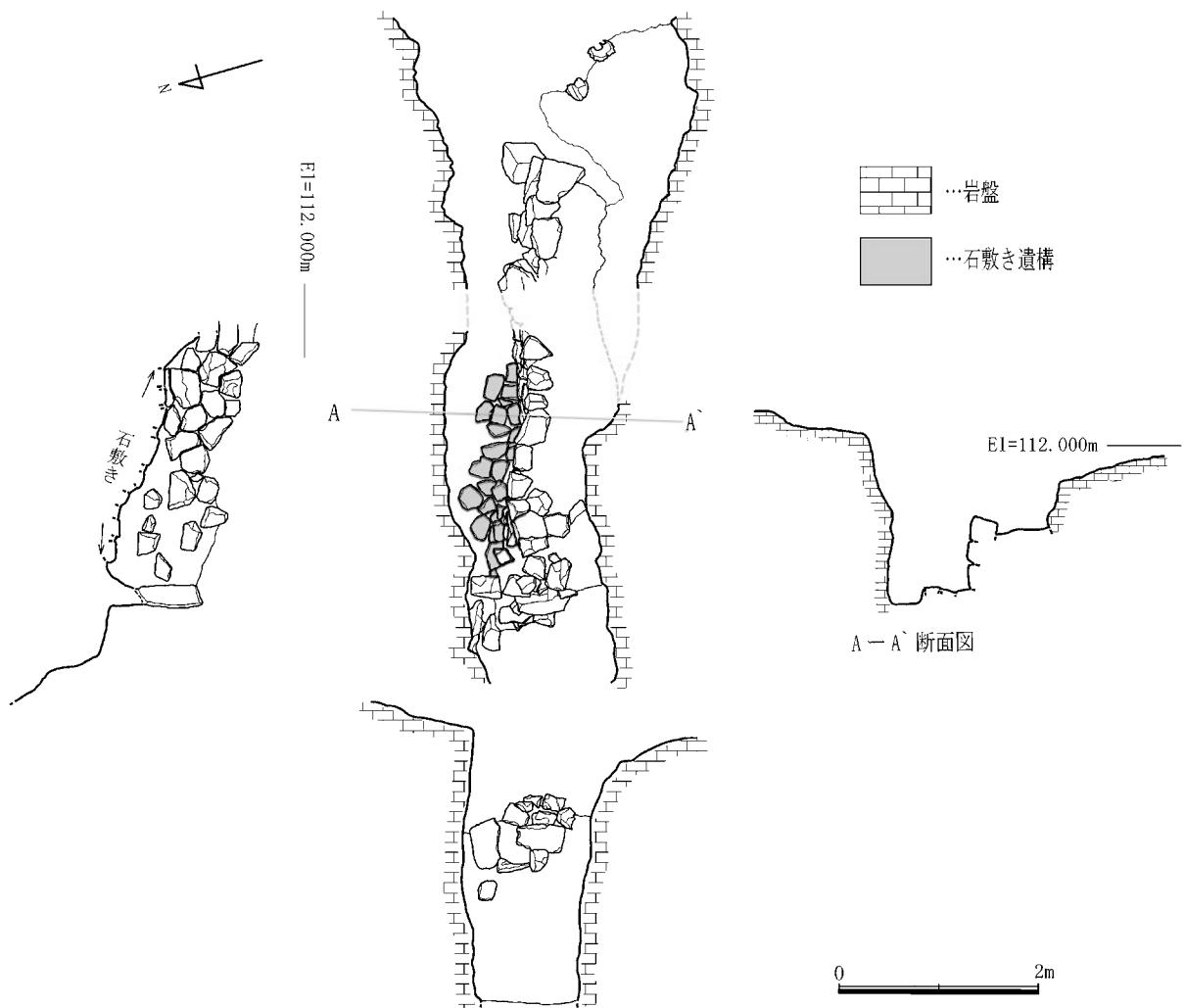
石敷きは、先述した石積の根石に垂直になるように構築されている。東西方向へ延びており、検出した部分において東側が高く、西側が低くなっているため、東と西では約50cmの高低差がある。石敷きを構成する各石は表面が滑らかになっているため、道などの様に長期的に表面が摩擦を受ける状況にあったことが窺える。先述の石積と同様に岩盤の裂け目に位置することから、北側の石は、裂け目に落ちたのか確認できなかった。また、石積の西端より西側においても確認できておらず、東側においては石積の崩壊の可能性があったため石敷きの検出できる下層までは確認作業も不可能であった。

これらの石積及び石敷きの性格は、本来の真珠道の下層に位置すること、岩盤の裂け目に位置すること及び石積を覆っていた土壤より約1mの琉球石灰岩の柱状のものが検出されたことから、真珠道を構築する際の簡易の基礎を考えることもできるが、石敷きがあることから推測の域を超えない。年代についても、遺構を覆っていた土壤は様々な時期の遺物を含むことから確定できない。

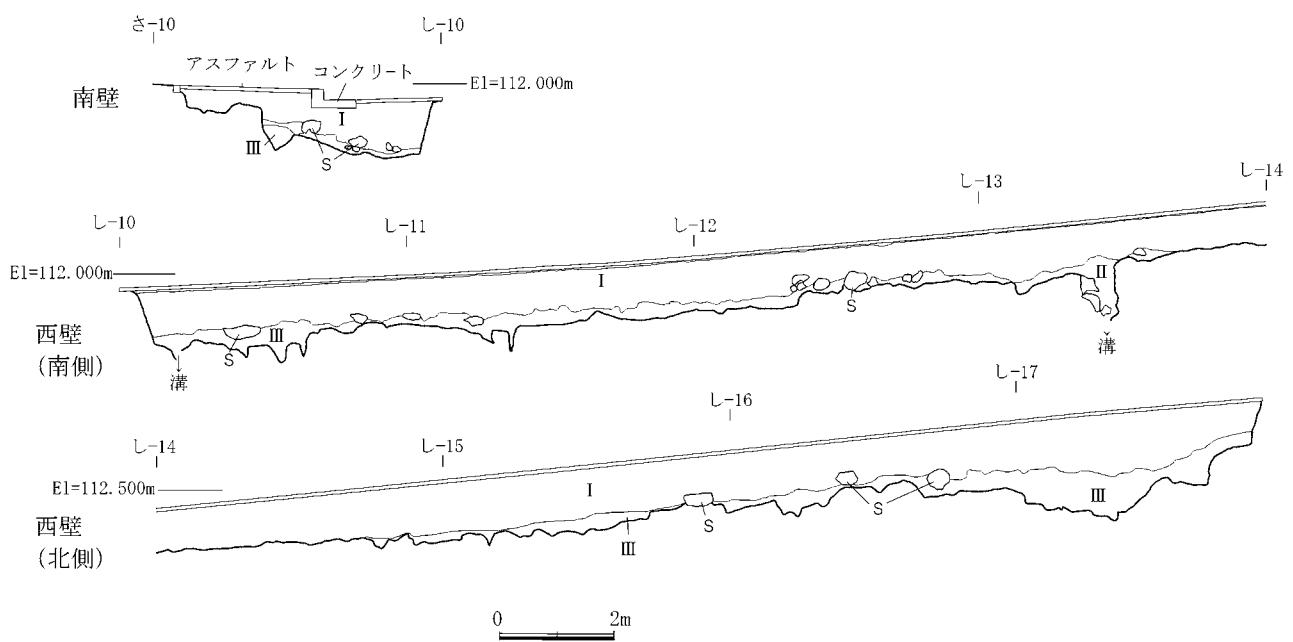
聞き取り調査によると、首里城からの排水が通る部分であったとの証言も得られている。

石積と石敷き以外にも、明確に遺構と判断することが困難なものとしてヤコウガイが集中して検出された部分があった。検出された部分はさ—13であり、先述石積の東側の岩盤に沿うように検出された。集中して検出されたが、層序では搅乱されている層であり、遺構としては判断できなかった。





第6図 石積み・石敷き遺構



第7図 層位断面図



### B 皿 (同図17～同図22)(図版3-17～22)

青磁皿は、口縁の形状や文様の有無などから便宜的に、口折皿、無文外反口縁皿、八角皿、玉縁口縁皿の4種類に分けた。皿の高台資料については、特に分類を行っていない。

#### 1. 口折皿 (同図17)

典型的な口折皿から時期が下るタイプで、鍔がルーズとなり外反口縁気味の皿であり、時期的に新しい。特徴として外面に片切彫りの弁先の空いた蓮弁文を描く。

#### 2. 無文外反口縁皿 (同図18)

厚手の無文外反口縁の皿を便宜的に仮称したものである(同図18)。

#### 3. 八角皿 (同図19)

類似資料が、首里城京の内の倉庫跡(註4)から出土している。同図19の口縁資料は、八角皿の文様展開から皿の角に近い部分にあたる。

#### 4. 玉縁口縁皿 (同図22)

口縁部に小さな玉縁を造る。他のタイプの皿と諸特徴などを比較した場合、新しい時期の皿(同図22)である。

### C 盤 (同図23～同図26)(図版3-23～26)

ここでは、青磁の大皿を「盤」とした。口縁形態などから直口口縁盤(同図23)と鍔縁盤(同図24・25)の二種類に分けた。鍔縁盤の中には古手の資料(同図24)も含まれている。

### D 大鉢 (同図27)(図版3-27)

大振りの鉢の高台破片が一点のみ得られている。

### E 壺 (同図28・29)(図版3-28,29)

いやゆる酒会壺で、蓋の身受け部分の細片(同図28)と壺の胴部片(同図29)が各々1点ずつ出土している。

### F 瓶 (同図30・31)(図版3-30,31)

瓶の胴部片が2点出土しているが、1点(同図30)は玉壺春瓶とみられるものである。残りの1点(同図31)は胴部を型成形で面取りした花瓶とみられるものである。

### G 茶碗 (同図32)(図版3-32)

18・19世紀に生産された茶碗として考えられ、口縁破片から推定された器形は竹筒形である(同図32)。

第2表-a 青磁観察一覧

単位:cm

挿図版番号	遺物番号	仮称・分類	器種・口径 高台径	器形・文様などの特徴	素地	釉色 貫入	施釉・窯・時代	出土地点 出土層
第8図 図版3	1	蓮弁文碗	碗 I a 15.6 -	口縁部に小さな玉縁状の肥厚を造る腰丸小振りの碗。外面には片切彫りで弁先の尖った蓮弁を雜に描いている。	灰白色の細粒子で劈開面に微細な気泡痕が僅かに観察できる。	淡緑色のやや透明な釉。貫入はない。	残存部分は両面と施釉。龍泉窯系の地方窯。14C後半～15C中頃。	こ-12 II層
	2		碗 I b -	線刻細蓮弁文碗。直口口縁タイプの碗で、外面に片切彫りの蓮弁を雜に描いている。弁先を連續して描いた為、弁軸と一致しない。	灰色の粗粒子で、微細な白色及び黒色の鉱物を多量に含む。	緑灰色の鮮明な透明釉。細かい貫入あり。	残存部分は両面と施釉。中国南部。15C後半～16C。	不明
	3		碗 I b -	線刻細蓮弁文碗で、口縁が直口する。外面に片切彫りの蓮弁を雜に描いているが、弁先を連續して描いた為に弁軸と一致しない。	淡灰色の粗粒子で、微細な白色及び黒色の鉱物を多量に含む。	淡緑灰色の鮮明な透明釉。細かい貫入あり。	残存部分は両面と施釉。中国南部。15C後半～16C。	す-12 I層
	4	蓮弁マ ラ式 文碗	碗 -	外反口縁タイプのラマ式蓮弁文碗。外面の胴上部に片切彫りで、ラマ式蓮弁文の弁先を描いている。	灰白色の微粒子で劈開面に微細な気泡痕が僅かに観察できる。	濃緑色のやや透明な釉。貫入はない。	残存部分は両面と施釉。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	こ-12 II層
	5	雷文 帶碗	碗 I a -	直口口縁タイプの雷文帶碗。口唇部は尖り気味である。外面の口縁部には片切彫りで雷文を描き、その直下には刻花文を描いている。内面には刻花文(牡丹花)を描いている。	灰白色の微粒子で劈開面に微細な気泡痕が僅かに観察できる。	濃緑色のやや透明な釉。貫入はない。	残存部分は両面と施釉。龍泉窯系。15C前半～15C中頃。	こ-12 II層
	6		碗 I a 底部 7.0	雷文帶碗の高台破片。外面に片切彫りで刻花文を描いている。内面の腰下部に刻花文を描き、見込みに型押しの印花文を施す。	淡灰色の微粒子。	濃緑色のやや透明な釉。貫入はない。	高台外底面のみ露胎。龍泉窯系。15C前半～15C中頃。	す-13 I層
	7		碗 I a -	同図5と同一タイプの雷文帶碗。口唇部は尖り気味である。外面の口縁部には片切彫りで雷文を描き、内面には刻花文を描いている。	灰白色の微粒子。	淡緑色の透明釉。貫入はない。	両面とも施釉。龍泉窯系。15C前半～15C中頃。	す-12 I層

第3表-b 青磁観察一覧

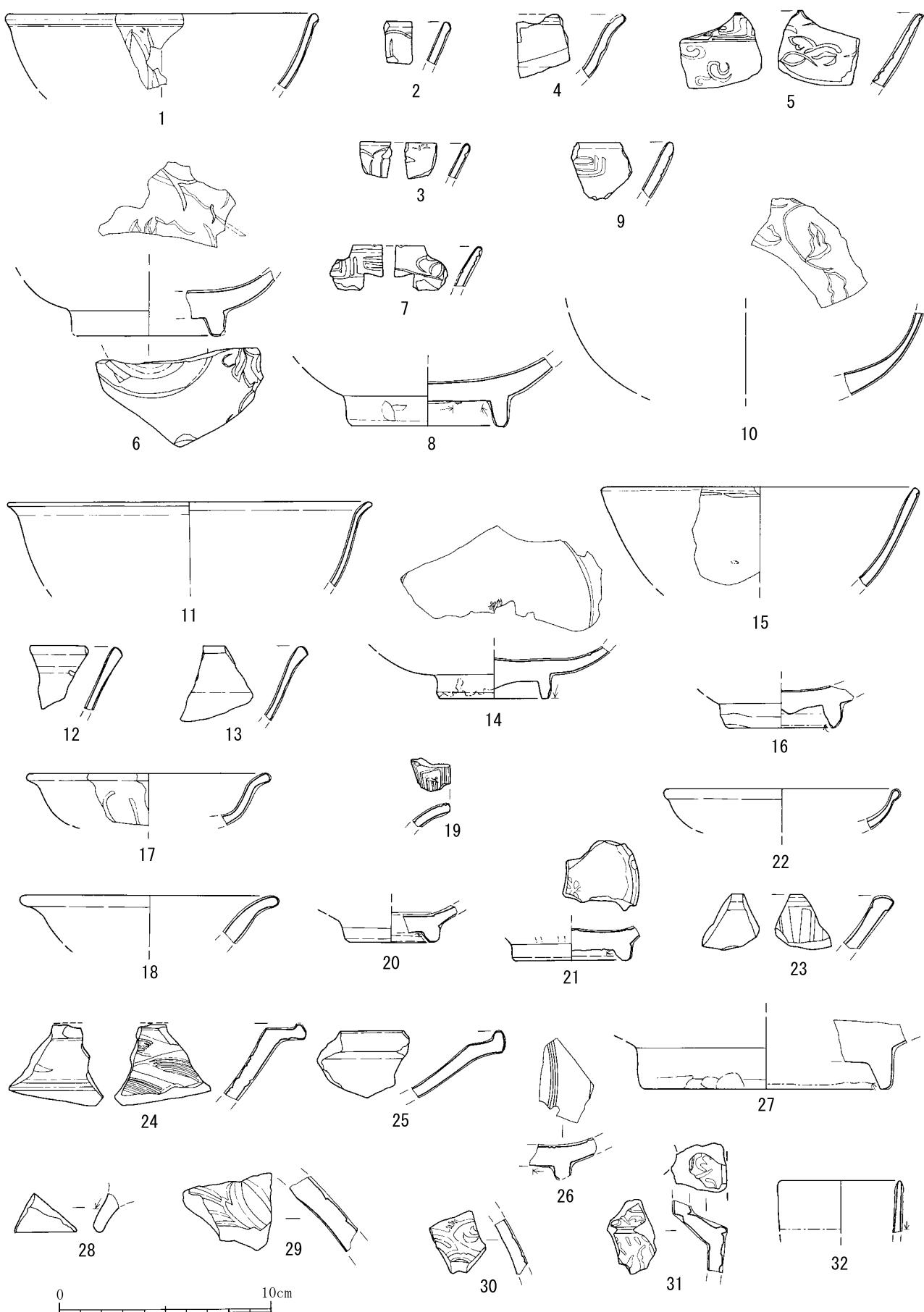
単位:cm

挿図 図版 番号	遺物 番号	仮 名 称	器 種 類	口径 器高 高台径	器形・文様などの特徴	素地	釉色 貫入	施釉・窯・時代	出土 地点 出土層
第8図 図版3	8	雷文 帶 碗	碗 I a 底 部	- - 7.7	雷文帶碗の高台破片。劈開面から外面に片切彫りで文様を描いているようであるが構図は釉薬が厚く、掛けられている為、不明。内面は釉薬が全体的に黄色に変色し、文様が観察できないが、劈開面からの観察では圓線、若しく片切彫りが予想される。見込みには型押しの印花文を施す。	淡灰色の微粒子で、微細な黒色鉱物が微弱に混入する。	淡緑色のやや透明釉。貫入はない。	高台外底面を蛇の目状に搔き取って露胎とする。龍泉窯系。15C前半～15C中頃。	こ-12 II層
	9			- - -	型起こしの雷文帶碗。器壁は他のタイプよりやや厚手である。雷文の文様は不鮮明である。	淡灰色の微粒子で微細な黒色鉱物を微量に含む。	淡青緑色の失透釉。貫入はない。	両面とも施釉。龍泉窯系の地方窯。15C前半～15C中頃。	さ-13 II層
	10		碗 I b 底 部	- - -	外面の文様は失透釉の為、判然としないが、劈開面の観察から表面の角が丸味を帯びた「V」の字状となっている状況から型起こしであることが判明した。内面に陽印花文(牡丹唐草文?)を施している。	淡灰色の細粒子で微細な(白色、灰色、黒色)鉱物を多く含む。	淡緑灰色の失透釉。貫入はない。	残存部分は両面と施釉。中国南部。15C後半～16C。	こ-12 II層
	11	無 文 碗	碗 a	12.2 - -	薄手の外反口縁碗。器壁は3.0mm～3.05mmと均一的に成形されている。	淡緑灰色の細粒子で微細な(白色、灰色、黒色)鉱物を多く含む。	淡緑灰色の透明釉。貫入はない。	残存部分は両面と施釉。中国南部(泉州窯系?)。15C前半～後半頃?。	さ-13 II層
	12		碗 b	- - -	直口口縁の無文碗で、口縁が大きく外側に外傾する逆「ハ」の字型のタイプである。口縁部に幅2.5mmの丸窓状の工具で圓線を施す。口唇部は器壁(器厚3.7mm)よりも厚く、5.8mmを測る。	淡灰白色の細粒子で、微細な白色鉱物が僅かに含まれている。劈開面の観察から微細な気泡痕が僅かにみられる。	淡灰緑色の透明釉。内面に部分的な貫入がある。	残存部分は両面と施釉。中国南部。15C後半～16C。	こ-12 II層
	13		碗 b	- - -	直口口縁の無文碗で、口縁が大きく外側に外傾する逆「ハ」の字型のタイプであるが若干、外側に緩やかに反っている。口唇部は器壁(器厚3.7mm)よりも厚く、6.3mmを測る。	淡灰色の細粒子で、微細な黒色鉱物が少量含まれている。	灰緑色の透明度の低い釉。貫入はない。	残存部分は両面と施釉。中国南部。15C後半～17C。	す-13 II層
	14	無 文 碗	碗 a 底 部	- - 5.2	同図11に示した薄手外反口縁碗と同一タイプの高台破片とみられるものである。内面見込みには圓線と印花文を施す。	淡灰色の細粒子で微細な(白色、灰色、黒色)鉱物を多く含む。	淡緑灰色の透明度の高い釉。貫入はない。	外面の釉は高台外表面途中まで施釉、疊付から外低面は露胎する。中国南部(泉州窯系?)。15C前半～後半頃?。	こ-13 II層
	15		碗 c	15.0 - -	残存部位から腰部がやや丸味を持った直口碗と推定される。外面の口縁端部に棒状工具(幅1mm)で圓線を一条施す。	淡灰色の細粒子で微細な(白色、灰色、黒色)鉱物を多く含む。	淡青緑色のやや透明釉。両面に粗い貫入がみられる。	残存部分は両面と施釉。中国南部。15C後半～16C。	こ-13 II層
	16	碗 c 底 台	- - 5.3	竹節状に面取された高台で、疊付の幅が1mm前後と狭い。高台内削りが難で、高台外底面が若干盛り上がっている。疊付の一部には胎土目の痕がみられる。	灰色の粗粒子で微細な(白色、灰色、黒色)鉱物を多く含む。	淡青緑色のやや透明釉。両面に粗い貫入がみられる。	外面の釉は疊付の内側上端まで施釉。疊付内側上端から外低面は露胎する。中国南部。15C後半～16C頃。	じ-13 II層	
17	口 折 皿	皿 a	-	11.5 - -	口縁の鋸折れがルーズとなりた口折皿。外面には片切彫りで弁先の空いた蓮弁文を描く。	淡灰色の粗粒子で微細な黒色鉱物を少量含む。	淡緑色の透明度の低い釉。両面に細かい貫入がみられる。	残存部分は施釉。中国南部。15C前半～中頃。	こ-12 II層
18	外 反 無 口 文 縁	皿 a	-	12.2 - -	厚手の外反口縁皿。	淡灰色の細粒子。	淡緑色の透明度の低い釉。貫入はない。	残存部分は施釉。龍泉窯系。15C前半～中頃。	こ-12 I層
19	八 角 皿	皿 b	- - -	-	内面の口縁部に片切彫りの雷文(雷文帶)と縦位の区画線を描いた八角皿。	淡灰白色の微粒子。	淡緑色のやや透明の釉。貫入はない。	残存部分は施釉。龍泉窯。15C前半～中頃。	こ-12 II層
20	皿	皿 底部	- - 4.5	内底面に片切彫りの圓線を施した皿の高台とみられる破片。高台脇には成形時のカンナが深く入った為、一見、片切彫りの圓線と見間違える。	淡灰白色の細粒子。劈開面から歪な気泡痕が多く観察される。	淡緑色のやや透明の釉。貫入はない。	外底面の中央付近が露胎。龍泉窯系。15C中頃。	す-13 II層	

第4表-c 青磁観察一覧

単位:cm

挿図 図版 番号	遺物 番号	仮称 名称	分類	器種 口径高 高台径	器形・文様などの特徴	素地	釉色 貫入	施釉・窯・時代	出土 地点 出土層
第8図 図版3	21	皿	皿 底部	- - 5.7	火熱を受けて釉が溶けた皿の破片。見込みには陽圏線と印花文花がみられる。破損後に破損面を砥石の代用品として使用し、その痕跡を示す砥面と金属が砥面全体に摩りついでいる。擦りつけられた金属は錫がないことと、光沢が銀色であることから推定して軟質の錫などが考えられる。	淡灰白色の微粒子。	淡緑色のやや透明の釉。貫入はない。	外底面が露胎。龍泉窯。15C前半～中頃。	こ-12 II層
	22	玉縁 口縁 皿	皿	11.2 - -	口縁部に小さな玉縁を造る小振りの皿。器壁も他と比較して若干、薄造りである。釉薬は外面が薄く、内面が厚く施釉されている。その為、外面は白磁の釉に近い。	淡灰白色の微粒子。	淡緑色のやや透明の釉。貫入はない。	残存部は施釉。龍泉窯。18C頃。	こ-13 I層
	23	直口 口縁 盤	盤	- - -	口縁を肥厚させた後に肥厚帶外面を工具で面を取つて成形する。文様は内面の口縁に丸彫りの圏線を施し、その直下に幅4.5mmの丸窓で蓮弁文を描いているが、窓の単位は不明。	淡灰白色の微粒子。	淡緑色のやや透明の釉。貫入はない。	残存部は施釉。龍泉窯。15C。	こ-13 I層
	24	鍔縁 盤	盤	- - -	鍔端部を上方に撮上げて成形。内面の鍔折れの部分に明瞭な稜が走る。その他鍔折れの外面に丸彫りの圏線を施す。外面には二条一組の界線、その上には片切彫りの文様を描いているが構図は不明。内面には、五本一組の櫛描と幅広の工具で青海波文を描く。	淡灰白色の微粒子。	淡緑色のやや透明釉。貫入はない。	残存部は施釉。龍泉窯。14C前半～中頃。	こ-12 II層
	25	鍔縁 盤	盤	- - -	鍔端部を上方に撮上げて成形する無文の盤とみられる。内面の鍔折れの部分はやや鮮明な稜が走る。	淡灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が少量混入する。	淡緑色のやや透明釉。粗い貫入が両面にみられる。	残存部は施釉。中国南部。15C。	こ-12・13 II層
	26	盤	盤 底部	- - -	高台付き盤の破片。見込みに陽圏線と二条一組の界線を施す。外底面は釉を搔き取っている。	淡灰白色の細粒子。	淡青緑色の透明釉。貫入はない。	外底面の一部が露胎、他は総釉。龍泉窯。14C後半～15C。	こ-13 II層
	27	大鉢	大鉢	- - 12.0	大鉢の内面を欠いた高台破片。釉薬は畠付けの内端まで施釉。	淡灰色の細粒子で微細な黒色鉱物が僅かに観察される。	淡青緑色の透明釉。貫入はない。	畠付け内端から外底面まで露胎。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	こ-13 II層
	28	壺	蓋	- - -	酒会壺の蓋で、鍔の下面に在る身受け部分の破片である。	淡灰白色の細粒子。	淡青緑色の透明釉。貫入はない。	内面の上方に施釉、他は露胎。龍泉窯系。14C後半～15C。	こ-12 II層
	29	壺	胴部	- - -	酒会壺胴部破片。外面に片切彫りの牡丹唐草文とみられる文様を施す。	淡灰白色の細粒子。劈開面から微細な気泡痕が観察される。	淡緑色の透明釉。両面に粗い貫入あり。	残存部は施釉。龍泉窯系。14C終末～15C。	こ-13 II層
	30	瓶	胴部	- - -	玉壺春瓶の胴部細片。表面には片切彫りによる緻密な唐草文、若しくは雑な青海波文とみられる文様を描いている。	淡灰白色の微粒子。	淡緑色の透明釉。貫入はない。	残存部は施釉。龍泉窯系。14C終末～15C。	こ-12 II層
	31	瓶	胴部	- - -	面取りされた瓶の胴部破片。花瓶などの用途が推定される。頸下部から胴部に施された陽刻文の文様構成は不明。頸部と胴部は胴継ぎがなされていることから型成形が考えられる。	淡灰白色の微粒子。	淡緑色の透明釉。貫入はない。	残存部は施釉。龍泉窯系。14C終末～15C。	さ-13 I層
	32	茶碗	茶碗	6.0 - -	器厚が3.9mmと薄く、素地、釉薬などから竹筒様の茶碗が考えられた。	淡灰色の細粒子で、微細な(黒色、灰色、白色)鉱物を多量に含む。	淡緑色の透明釉。両面に粗い貫入あり。	外側の胴下部は露胎、他は施釉。中国南部。18・19C。	す-13 II層



第8図 青磁

## 第2節 白磁

本遺跡出土の白磁の時期は、概ね15世紀後半～19世紀までの中国明朝～清朝に生産されたものであり、主体時期は18世紀を中心に前後する時期のものが主流である。白磁の分類・生産地・時代等については、湧田古窯跡<sup>(註1)</sup>、新垣力・瀬戸哲也の「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理 付. 14世紀～16世紀の青磁の様相整理メモ」<sup>(註2)</sup>などを参考にして分類等を試みた。出土した白磁の器種は、基本的に碗、皿、小碗、瓶の4器種であった。

器種構成を青磁(7器種)と比較した場合、白磁の器種は、青磁の器種の半分程度である。以下、碗、皿、小碗、瓶の順に分類の概略を記し、個々の特徴や窯名・時代などについては第6表に呈示した。

**第5表 白磁出土状況一覧**

器種・部位	出土地	平成15年度								小計	平成16年度						小計	合計			
		I層		II層			III層		不明		I層		II層			不明					
		こ-13	さ-13	こ-12	こ-12～13	こ-13	さ-13	さ-15			す-12	す-13	す-14	す-16	し-13	す-13					
白磁	碗	口					1			1					2		2	3			
	底						1			1					1		1	2			
	大皿	底		1						1								1			
	皿	口～底								0					1		1	1			
	口					1	1			2					1		1	3			
	胴		1							1								1			
	底									0		1		2	1		4	4			
	小皿	口～底								0					3		3	3			
	口									0		1		1	2		4	4			
	胴	2				1				3				2		2	5				
小碗	底	2								2				1		1	2	4			
	口～底									0					3		3	3			
	口		1			2				3	1	1		11	2	2	17	20			
	胴	1								1				1	2		3	4			
瓶	底	1				2				3				2	2		4	7			
	口			1						1							0	1			
	胴	1	1		1	2	1	1	7					1		1	8				
小計		7	1	4	2	2	9	1	1	1	1	1	2	1	30	10	3	48	76		
		8			18	1	1			28				5	40	3					

### A 碗 (第9図1～同図5) (図版4-1～5)

白磁碗は、外反タイプのみが口縁破片で確認されているが、高台資料から直口口縁タイプのものが一例確認(同図5)されているが分類から除外し、高台資料として報告した。ここでは、外反タイプの碗のみを器形、形態などから以下のように分類した。

#### 1. 碗 (第9図1～同図5)

白磁碗の口縁資料で、明確に確認されているのは外反口縁タイプのみであった。外反口縁碗の中には、15世紀後半の資料(同図3)が1点含まれている。この資料が白磁で最も古いものである。外反口縁碗の分類は、便宜的に、薄手碗(同図1, 2)、a種(同図3)、b種(同図4)の三種類に分けた。外反口縁碗 b種は、a種よりも器壁が薄く、薄手碗に近い厚さである。

#### B 皿 (第9図6～同図11) (図版4-6～11)

皿には、器のサイズが大・中・小とあるようであり、大皿の範疇にあるものは高台の破片資料(同図6)のみであった。中皿は、外反口縁の皿であり、器のサイズで口径が12.5cm～11.4cmの範囲内に収まるもの(同図7～9)とした。小皿については、口縁部の特徴として、口縁が微弱に直口するもと(同図10)と内彎するもの(同図11)の二種類が基本であった。

中皿と小皿についてのみ、諸特徴からa種・b種の二種類に分けた。

中皿a種…厚手の外反口縁皿(同図7・8)。

中皿 b種…薄手の外反口縁皿(同図9)。

小皿a種…口縁が微弱に直口するタイプの小皿(同図10)。

小皿 b種…口縁が内彎するタイプの小皿(同図11)。

#### C 小碗 (第9図12, 13) (図版4-12, 13)

小碗は、口縁の形態などから、口縁が僅かに外反するもをa種(同図12)、直口口縁をb種(同図13)として二つに分けた。

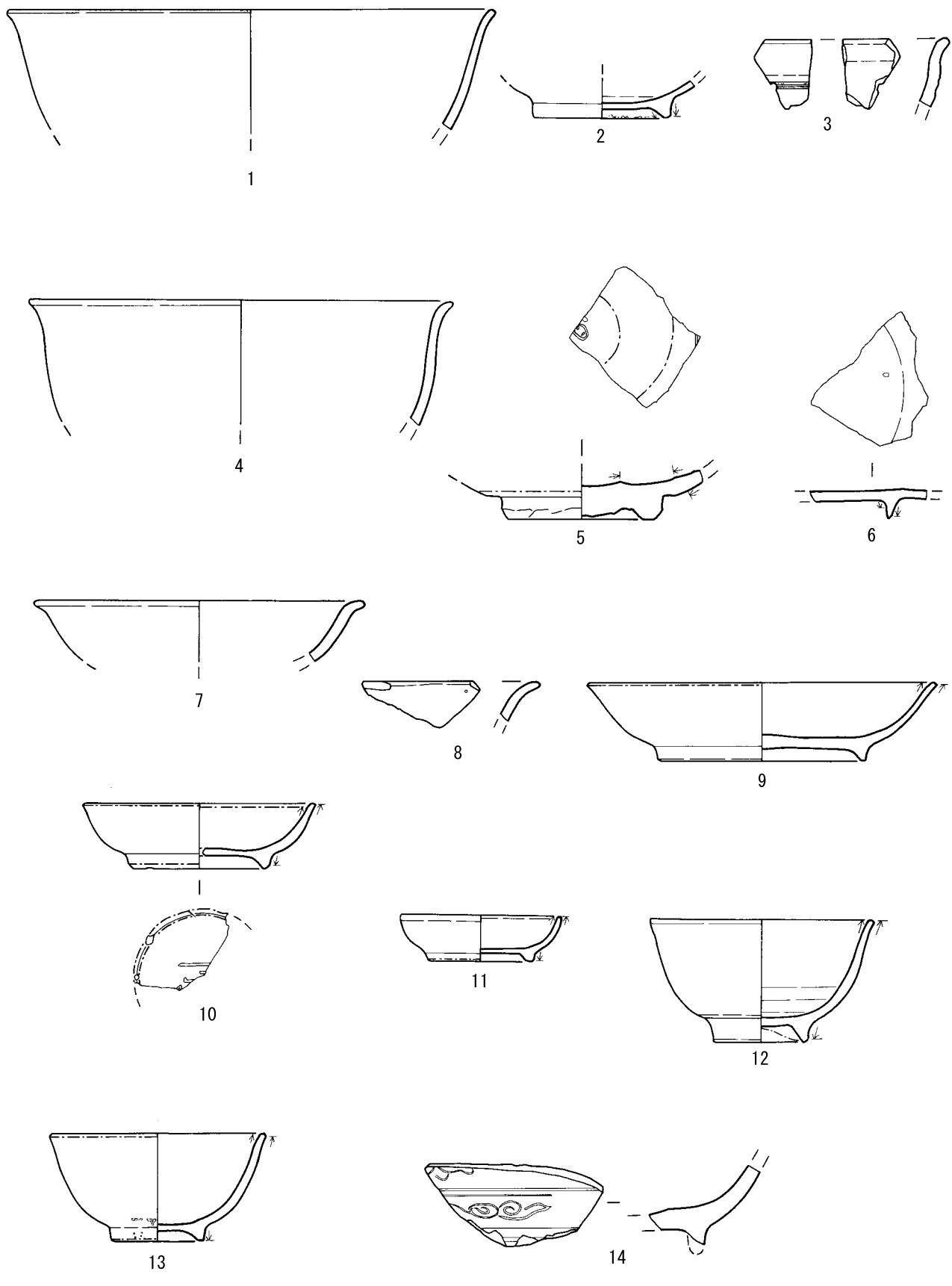
#### D 瓶 (第9図14) (図版4-14)

16世紀代の瓶胴部の破片が1点出土していたので、これを図化した。

第6表 白磁観察一覧

単位:cm

挿図 図版番号	遺物 番号	仮 名称	分 器種 類 ・ 高台径	口 径 高 台径	器形・文様などの特徴	素地	釉 色 貫 入	施釉・窯・時代	出土 地点 出土層
第9回 図版4	1	外 反 口 縁 碗	薄 手 碗	17.2 - -	緩やかな外反する碗。内外面に施された淡灰色の釉は、口唇部で釉薬が薄くなり、茶褐色を呈する。	淡灰白色の微細粒子。	淡灰白色の失透釉。貫入はない。	口唇部を除いて両面と施釉。景德鎮窯系。16C ~17C。	さ-13 II層
	2		薄 手 碗 底部	- - 4.9	薄手の碗の底部破片とみられるもので、型成形である。畳付のみ露胎し、畳付の内側縁辺に胎土目の目痕がみられる。	淡灰白色の微粒子。劈開面に菱形状の歪な気泡痕(2.5mm×1mm)がみられる。	淡青白色の失透釉。貫入はない。	畳付を除いて施釉。景德鎮窯系。18・19C。	じ-13 II層
	3		a	- - -	内外面に轆轤痕が明瞭な外反口縁の碗。	淡灰色の粗粒子で、微細な気泡痕が多くみられる。	灰白色の透明釉。貫入はない。	残存部は施釉。中国南部(福建・廣東系)。15C。	じ-13 II層
	4		b	15.1 - -	腰丸傾向の強い外反口縁碗。口縁で強く端反る。	淡灰白色の微粒子で、劈開面に微細な気泡痕が僅かに観察できる。	白色の失透釉。貫入はない。	残存部分は両面と施釉。景德鎮窯系。17・18C。	じ-13 II層
	5	碗 底部	- - 5.2	5.2	畳付が幅広となる高台で、見込みの釉を蛇の目状に釉を搔き取る。外面の釉は高台際まで施す。見込みに陽圈線がみられる。	淡灰白色の微粒子。	淡灰白色的釉。貫入はない。	見込み蛇の目釉剥ぎと外面高台際から下が露胎。景德鎮窯系。17・18C。	さ-13 II層
	6		- - -	-	畳付を尖らせて成形した大皿の破片資料。見込みに鉄錆状の目痕がみられる。	淡灰白色の微粒子。	白色の失透釉。貫入はない。	畳付と畳付内端から高台内側までが露胎。景德鎮窯系。16・17C。	さ-13 II層
	7	外 反 口 縁 皿	a	11.4 - -	厚手の皿で、口縁が強く端反る皿。	淡灰白色の細粒子で、微細な気泡痕が僅かに観察される。	淡灰白色的失透釉。貫入はない。	残存部は施釉。福建・廣東系。15C後半~16C。	す-13 II層
	8		a	- - -	薄手の皿で、口縁が緩やかに外反する。	灰白色の粗粒子で、微細な気泡痕が多く観察される。	灰白色的失透釉。貫入はない。	残存部は施釉。福建・廣東系。15C後半~16C。	さ-15 II層
	9		b	12.5 2.75 7.4	口縁端部で微弱に端反り、口唇部が尖る型成形の皿。	光沢のある白色の微粒子。	白色のやや透明釉。貫入はない。	外底面の一部が露胎。德化窯。18・19C。	じ-13 II層
	10	小 皿	a	8.3 2.85 4.6	型成形。口禿の小皿で、口縁端部で微弱に端反り、口唇部が尖る。外底面に陽印刻の印章を施すが判読できない。	白色の微粒子で、劈開面に微細な気泡痕が少量みられる。	白濁色の失透釉。貫入はない。	口唇部と外底面の一部が露胎。德化窯系。18・19C。	じ-13 II層
	11		b	5.7 1.65 3.65	轆轤成形。内彎型の口禿の小皿。	光沢のある淡灰白色の微粒子。	淡灰白色的失透釉。貫入はない。	口唇部と畳付から外底面までが露胎。景德鎮窯系。18・19C。	じ-13 II層
	12	小 碗	a	8.0 4.4 3.4	轆轤成形。口禿の小碗で、口縁が微弱に外反する。	光沢のある淡灰白色の微粒子。	白濁色の失透釉。貫入はない。	口唇部と外底面の一部が露胎。景德鎮窯系。18・19C。	じ-13 II層
	13		b	7.65 3.8 3.3	型成形。口禿の小碗で、口縁が直口する。畳付に微細な泡状の目痕が部分的にみられる。	光沢のある淡灰白色の微粒子。	淡青白色的透明釉。貫入はない。	口唇部と外底面の一部が露胎。德化窯系。18・19C。	じ-13 II層
	14	瓶	-	- - -	玉壺春瓶の高台破片。外面腰下部は界線を一条施しているが、ズレが発生している。この界線の上には細線で花文とみられる文様を描いている。高台際には雲文を細線で描いている。	淡白色の微粒子。	淡青白色的透明釉。貫入はない。	残存部は施釉。景德鎮。16C。	こ-12・ 13 II層



第9図 白磁

### 第3節 中国産染付

中国産染付の主体時期は18世紀～19世紀で、清朝(1662年～1911年)に生産されたものが大半を占めている。これらの染付で古手のものは、15世紀前半～中頃に位置づけられている明朝前半期の「雲堂手文」で描かれた瓶の破片であった。平成15・16年度で出土した染付の器種は、碗(小碗を含む)、小碗、皿(大皿・中皿・小皿の三種類を含む)、大鉢、小杯、蓮華、瓶の7種類であった。出土量は碗が主体であり、次に皿・小杯・大鉢・蓮華・瓶と減少する。以下、便宜的に碗(小碗を含む)、皿(大皿・中皿・小皿の三種類を含む)、大鉢、小杯、蓮華、瓶の順に分類の概略を記し、個々の特徴や窯名・時代などについては第8～11表に呈示した。

**第7表 染付出土状況一覧**

器種・部位	出土地	平成15年度								平成16年度								不明	小計						
		I層				II層				I層				II層											
		二-12	二-13	二-12	二-12～13	二-12	二-13	二-13	二-14	小計	レ-12	レ-13	レ-17	-13石縫内	テ-12	テ-12～13	テ-13	テ-14	テ-16	レ-13	テ-12	テ-13	テ-16		
染付	碗	口～底	3							3									5	4		9	12		
	碗	口	4	4			6	10	2	26					3		1	2	24	9	2	3	44	70	
	碗	胴	2	3			6			11		1			1				9	1		12	23		
	碗	底	1	4	3		3	8	1	1	21		5		3	1		24	1	2	1	1	2	40	61
	小碗	口～底								0									1			1	1		
	小碗	口		2						2								1	1	6	2		10	12	
	小碗	胴		1						2					3				4	1		5	8		
	小碗	底		1	1			3		5								7	1		8	13			
	皿	口～底	1				1		2									1	1		2	4			
	皿	口	1	2			1	1		5		1						5	5		11	16			
染付	皿	胴	1	1			1		3		2							2		1	5	8			
	皿	底	4	1	1	2	1	1	10	2	2	1		1		9	1	1	1	17	27				
	杯	口～底							0	1								1			2	2			
	杯	口							0	1							1	1	1	4	4				
	杯	胴							0	1							1		1	2	2				
	杯	底			1				1								1			1	2				
	大鉢底								0											1	1				
	董or瓶	胴	2						2	2										2	4				
	華蓮	受け皿						0				1					3	1		5	5				
	瓶	柄				1		1												0	1				
染付	瓶	口	2			2		4												1	1	5			
	蓋物							0									1			1	1				
	袋物							0	1											1	1				
	不明	口			1			1												0	1				
	不明	胴	5	2		1		9		17		3		4	5	1	3	12	10	1	27	44			
	不明	小計	1	33	18	1	14	1	44	3	2	117	2	18	3	4	5	1	3	119	1	39	5		
	不明		34						81											164	6	2	212	329	

#### A 碗 (第10図1～第11図32) (図版5-1 図版6-32)

上記の碗のは広義で小碗を含めてあるが、本項では狭義の概念で碗と小碗の二つに大別して取り扱った。以下に碗と小碗の分類を記す。

##### 1. 碗 (第10図1～第11図23)

碗については、器形・口縁形態・文様。素地などを考慮しながら I群～III群の三種類に分け、口縁形態や主体となる文様構成でなどから便宜的にa種、b種、などに細分をおこなった。

##### ① I群碗 (第10図1～6)

I群碗の口縁形態をみると外反型と内彎型の二種類が存在し、前者の外反型をa種、後者をb種と二つに分けた。I群碗の文様については、胴部の主体となる文様(主文)が「牡丹唐草文」、「蔓唐草文」、「花唐草文」などを描き、その直下に「蓮弁文」・「花文」を描いたものである。以下、胴部の主文となる文様から次のa種～c種までの三種類に細分し、a種を「牡丹唐草文」、b種が「蔓唐草文」、c種は「花唐草文」と分けた。

a種・第10図1に示した外反口縁の碗で、器形が大きく外側に大きく緩やかに開く、底の浅い碗である。胴部の主文は、「牡丹唐草文」で、主文直下に蓮弁をダミ技法で描き、蓮弁内に垂下三葉文を描く。この種の文様で構成された高台資料を二点図化(同図2・3)した。この二点の高台資料は、同図1と比較して胴下部が腰折れ気味となるタイプであり、器形が同図1と異なる「腰折タイプ」であることからすると時代が同図1より新しくなるものと判断される。

b種・同図4に図示した内彎口縁の碗で、胴部の主文「牡丹唐草文」を描く。この種の高台破片とみられるものが、同図6に示したものである。同図6の文様構成は「牡丹唐草文」と、間弁のある「蓮弁文」を線で縁取って描き、内面は圈線を挟んで、見込みに「草花文」を、外側の腰下部に「唐草文」を描いている。

c種・同図5の高台片は、胴部に主文の「花唐草文」と、「花文」を描く、見込みにダミ技法による「菊花文」を描いている。

##### ② II群碗 (第10図7～第11図21、第11図15～同図21)

II群碗の特徴は、概ね口縁形態が口縁端近くで僅かに折れ曲げて疑似肥厚とするものであり、肥厚も微弱なものを主体とし、高台の成形は高く仕上げ、外底面の内割りが深い。例外的に同図8のような直口口縁を一点含めてあるが、首里城管理用道路地区(註1)からも類似資料が出土していて、他のII群碗より18世紀前～中頃と若干時代幅が短いようである。これらのII群碗については、胴部に描かれた主文となる文様構成などから大きく、a種～c種までの三種類に分けた。

a種・・胴部に主文となる「如意雲」若しくは「宝物(巻物を表現)」を描いたもの(同図7)。

b種・・胴部に主文の「菊唐草文」を描いたもの(同図8～同図11)。

c種・・胴部の主文が区画毎に「梅花文」と「寿」字文の二種類を交互に展開するもの(同図13～同図14、第11図15～同図21)。

高台資料の同図12の類例は、湧田古窯跡(註2)、阿波根古島遺跡(註3)などから出土しているが、本遺跡からは口縁資料が未検出であった為、「II群碗」に含めた。同図12を除いた高台資料については、施釉手法、素地などから上記、a種～c種のいずれかに該当する種に含めた。

### ③Ⅲ群碗 (第11図22, 23)

Ⅲ群碗は2点のみ出土している。特徴として口縁部の内面が微弱に浅く窪むものや、或いは大きく浅く窪むものである。胴部に描かれた主文から以下のa種とb種の二種類に分けた。

a種・・胴部に主文の「梵字文」を描くもの(第11図22)。

b種・・胴部に主文となる同心円状の「丸文(花文?)」を描き、内面の文様は「ラマ式蓮弁文」と、縦位の区画帯文(「波文」、「垂下滴文」)を描くもの(同図23)。

### 2. 小碗 (第11図24～32)

小碗は、口縁形態が直口口縁タイプ(第11図24・26)と微弱に外反するタイプ(同図27～30)の二種類が存在し、ここでは胴部の主文となる文様構成などからa種～e種までの5種類に分類した。

a種・・外面口縁に「雷文」を廻らし、胴部に主文の「宝物若しくは(蕉葉)」を描き、その直下に「蓮弁文」を描くもの(同図24)。

b種・・口縁を欠いているが、胴部に主文の「唐草文」を描き、縁取りに「蔓唐草文」を描いたもの(同図25)。

c種・・外面に主文の「牡丹花」を配しその周辺に「唐草文」を描く、所謂「牡丹唐草文」を描いたもの(同図26・27)

d種・・主文に「花唐草文」を描き、周辺に葉の無い蔓草で持て区画帯とするもの(同図28～31)。

e種・・口縁を欠いているが、胴部に描かれた文様から「梵字文」を外面全体に描いたものと判断されたもの(同図32)。

## B 皿 (第12図33～39) (図版7-33～40)

皿は、口径、器高、高台径などから便宜的に大皿、中皿、小皿の三種類に分類した。

### 1. 大皿 (第12図33～36)

大皿として取り扱ったものは、器のサイズが口径20.8cm以上～25.9cm以下で、器高が4.6cm～10.4cm以下の範囲内に収まり、高台径が10.4cm以上～16.4cm以下のものである。

残存する大皿の口縁形態をみると直口口縁(同図33)、内彎口縁(同図35)の二種類が存在するが、頸部下部の形状から外反口縁(同図34)のタイプが存在することについては、間違はないようである。

大皿の内面に描かれた文様の主文は、「菊花花文」と「波濤文」を組み合わせたもの(同図33)、或いは見込みに山水画様の「岩山」、「草文」、「雲文」を描いたもの(同図34)、そして「半菊花」、「菊花」を主体として「靈芝雲文」若しくは「唐草文」を描いているもの(同図35)や見込みに「海草」、「如意雲」、「波文」を組み合わせて描いたもの(同図36)がある。

### 2. 中皿 (第12図37～39)

中皿は、3点が図化されている程度で、器のサイズから口径が14.8cm以上～15.4cm以下の範囲内に収まっている。器高は3.4cm以上～3.6cm以下、高台径が7.3cm以上～8.7cm以下の範囲内にある。器形は三点とも共通し、口縁端部で僅かに端反る外反タイプである。内面の胴部や見込みに描かれた主文となる文様をみると「菊花花文」(同図37)と「志在書中」図(同図38・39)がみられる。

### 3. 小皿 (第12図40)

小皿は1点のみ出土している。器形は直口口縁で、腰下部で丸味を持たせている。口唇部を斜位に成形し、口唇外端で尖らせて口禿とする。見込みの主文は、「菊唐草文」を描いている。

## C 大鉢 (第12図41) (図版7～41)

大鉢の高台破片が1点のみ得られている。高台の高い、所謂「高高台」のタイプである。

## D 小杯 (第12図42～45) (図版7-42～45)

小杯で図化できたのは僅か4点であった。いずれも型成形(型物)によるものである。口縁部の形状をみると基本的には、外反タイプであるが、口縁の外反が緩く口禿とするもの(同図42)、或いは口縁部をきつく折り曲げて口折れ様とするもの(同図43)、微弱に外反させて口禿とするもの(同図44)、と変化に富んでいる。

外面の主文となる文様は、「花唐草文」、「花卉(草花文)」、「梵字文」(同図44・45)を描いている。

## E 蓮華 (第12図46～48) (図版7-46～48)

蓮華の破片を3点図化した、受け皿と柄の内面に「半梅花」、梅の「折枝」、「梅花」、「蔓唐草文」を描く。

## F 瓶 (第12図49) (図版7～49)

一点のみ瓶の頸部破片が得られている。時期も今回の報告資料の中でも最も古く、明代前半(15世紀前半～中頃)に位置づけられる資料である。外面には所謂「雲堂手」による手法で描かれ、「折枝」、「雲文」がみられる。

第8表 中国産染付観察一覧

単位:cm

挿図 図版 番号	遺物 番号	器種 分類	仮称	部位	口径 高台径	観察事項・文様構成	吳須(藍色) の発色	釉色	施釉・素地・貫入・窯・時期	出土 地点 出土層
第10図 図版5	1	碗	I群 種	口 縁	14.9 — —	器形が全体的に大きく外傾し、口縁が緩やかに外反する。外面の口縁から腰上部までを牡丹唐草文を描き、その直下の蓮弁文をダミ技法と線描で組み合わせている。蓮弁の弁内には垂下三葉文を描く。内面の文様は、口縁に一条と二条の界線で区画帶とし、その内側に連続性のある丸文(花文か、蔓唐草文を省略した文様)繋ぎで描いている。腰下部に二条の界線を施す。	やや不鮮明。 吳須の一部 が透明釉ま で達し斑紋 様に浮遊す る。	淡 青 白 色	両面施釉。素地は白色の微粒子。 貫入はない。景德鎮系窯。16C後 ~17C前。	さ-13 II層
	2		I群 種	底 部	— — 5.2	上記、図4より薄手の碗。外面の腰部から高台脇までの蓮弁は、三本線による輪郭を描き、その内側を雑なダミで塗り潰すため、塗り忘れや吳須が掛からないところがある。高台脇から高台外面途中には、二条界線と一条の界線を施す。内面の腰下部には、圈線を施す。	やや鮮明。	淡 青 白 色	畠付のみ露胎し、他は絶釉。素地 は淡灰白色の細粒子。貫入はな い。景德鎮系の民窯。16C後~ 17C前。	す-12 II層
	3		I群 種	胴 部	— — —	腰下部の形状は、腰折れ気味。外面に蔓唐草文を描き、その直下には、蓮弁の弁先や輪郭を省略及び簡素化した三本界線(ダミ技法による)を施し、縦位を四本単位の線で区画で蓮弁一枚を表現し、区画内(弁内)には垂下三葉文と滴文(丸文)を描く。内面腰部に二条一組の圈線を施す。	やや不鮮明。	淡 青 白 色	両面施釉。素地は淡灰白色の細 粒子。貫入はない。景德鎮系の民 窯。16C後~17C前。	じ-13 II層
	4		I群 種	口 縁	— — —	内湾口縁。口縁部の両面に二条の界線を施す。外面の胴部に主文のダ ミ技法による花唐草文を描いている。	やや鮮明。	淡 青 白 色	両面に施釉。素地は淡灰白色の 微粒子。貫入はない。景德鎮系窯 系民窯。16C後~17C前。	す-13 II層
	5		I群 種	高 台	— — —	高台畠付を欠く。外面の腰部に花唐草文と界線を挟んで花文とみられる文様を描いている。見込みに菊花文を描く。外底面に圈線を二条を施す。	やや鮮明。	淡 青 白 色	両面に施釉。素地は淡灰白色の 微粒子。貫入はない。景德鎮窯系 民窯。16C後~17C前。	さ-13 II層
	6		I群 種	高台 近く	— — —	高台の大半を欠く。外面の腰部に唐草文と間弁の有る蓮弁文を描く。内 底面は二条の圈線を境に内側の草花文と外側の唐草文とみられる文様 をダミ技法で描く。	やや鮮明。	淡 青 白 色	両面に施釉。素地は淡灰白色の 微粒子。貫入はない。景德鎮窯 系。16C中~17C前。	す-13 I層
	7		II群 種	口 縁	13.6 — —	口縁端部で微弱に外反。外面に界線を口縁部に二条と腰下部及び高台 脇に各一条を施す。胴部の主文は「如意雲」若しくは「宝物(巻物を表 現)」とみられるものを描く。内面口縁部は吳須が透明釉に浮遊し、染み だしたために界線が帯となる。腰下部に二条の圈線を施す。	やや鮮明。	淡 青 白 色	両面に施釉。素地は灰白色の細 粒子。貫入はない。景德鎮窯系。 18C。	じ-13 II層
	8		II群 b種	口 縁	— — —	直口口縁でやや内側に内湾する。吳須の色合は淡灰緑色で、外面に 花心を渦巻文で表現した花唐草文を描いている。	やや鮮明。	淡 青 白 色	両面に施釉。素地は淡灰白色の 微粒子。貫入はない。景德鎮系。 18C前~中。	じ-13 II層
	9		II群 b種	口 縁	13.2 —	口縁端部で微弱に折れる碗。吳須の色合は非常に薄く、灰緑色のもの を用いている。外面の口頸部と腰下部に界線を施し、胴部に主文の簡素化 された花唐草文を描いている。内面口縁の界線は帯状となり掠れてい る。腰下部に二条の圈線を施している。	やや鮮明。	淡 灰 色	両面に施釉。素地は淡灰色の粗 粒子で、微細な黒色鉱物が混入 する。貫入はない。福建・広東系。 18C。	す-13 II層
	10		II群 b種	口 底	13.2 6.3~ 6.4 7.0	口縁端部近くで強く外反し、腰下部で丸味を帯びた高台の高い碗。吳須 の色合は淡灰緑色を使用して外面の口縁部と高台脇に界線を施し、 胴部に主文の花唐草文を描く。内面は口縁が帯状の界線で、腰下部が 二条の圈線を施す。見込みに花文を描く。	鮮明。	淡 灰 白 色	畠付のみ露胎。畠付けに重ね焼 の目痕(胎目)がみられる。素地 は淡灰白色の細粒子。貫入はな い。德化窯系の。18C。	じ-13 II層
	11		II群 b種	口 底	12.5 6.0 5.6	口縁端部で軽く外反する高台の高い碗。吳須の色合は非常に薄く、灰 緑色を使用して内外面の口縁と高台脇や腰部に界線を施す。胴部に花 唐草文を描く。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	畠付のみ露胎。素地は淡灰色の 粗粒子で、0.3mm前後の丸い黒色 の鉱物が僅かに混入する。貫入は ない。福建・広東系。18C。	こ-13 I層
	12		II群	高 台	— — 7.0	見込みの釉薬を「蛇ノ目」状に搔き取て露胎した碗の高台破片。見込み に重ね焼の目跡がみられる。残存する内外面に文様はみられない。高台 成形時に高台脇を強く削り出した際に生じた段差がみられ、この段差によ り腰下部と高台の境は明瞭となる。	—	透 明 釉	施釉の手法は、総釉後に見込み の釉を輪状に搔き取り、外面は、 高台外面途中から畠付までを露胎 としている。素地は淡灰色の細粒 子で、劈開面に微細な気泡痕や 黒色鉱物が多くみられる。福建・広 東系。17C後~18C。	じ-13 II層
	13		II群 c種	口 底	15.5 6.7~ 6.8 7.3	薄手の碗で、口縁端部で軽く折れる。吳須は鮮明さを欠いた淡い藍色を 使用し、外面に界線を口縁・高台脇に一条と二条を施す。胴部の主文は 二種類あり区画毎に「梅花文」と「寿」字文を交互に展開させる。この区画 帶の直下に上下区画界線の内側に省略された縦線の蓮弁を精密に描く。 外底面に圈線と「和美」を描く。内面口縁の界線は帯状となる腰下部 に二条の圈線、見込みに簡素化された渦巻きで花文を描く。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	畠付のみ露胎。素地は淡灰白色 の細粒子。貫入はない。福建省 (徳化窯系)。18C~19C。	じ-13 II層
	14		II群 c種	口 底	14.4 6.4 6.7	薄手の碗で、器高が同タイプのものと比較して若干低い。口縁部の外反 は比較的きつく折れ曲げて成形。畠付の幅は1~2mmと狭く、畠付の両端 から斜位に割りだして成形。吳須の色合は淡い藍色を使用。外面に界 線を口縁部と高台外面に施す。胴部の主文は区画毎に「梅花文」を二区 画と「寿」字文を二区画を交互に展開させている。この区画帶直下に界線 で区画した内側に斜位の線描の蓮弁を施す。内面の口縁には帯状の界 線と腰下部に圈線を施す。見込みには「王」?の文字を描く。高台内の文 字は「和美」の「美」の一文字のみを描く。	鮮明。	淡 灰 白 色	畠付のみ露胎。素地は淡灰色の 細粒子。貫入はない。福建省(徳 化窯系?)。18C~19C。	こ-13 I層

第9表 中国産染付観察一覧

単位:cm

挿図 図版 番号	遺物 番号	器種・ 分類・	仮称・ 名稱・	部位	口径 器高 高台径	観察事項・文様構成	呉須(藍色) の発色	釉色	施釉・素地・貫入・窯・時期	出土 地点 出土層
第11図 図版6	15	II群 c 種	口 底	14.0 6.6～ 6.8 7.1	この種のタイプでは、比較的に厚手に成形され、口縁部の器壁も厚く、焼成も堅緻である。豊付を尖らせて成形。呉須の色合いは淡い藍色を用いて外面に界線を口縁部と高台脇に施す。胴部の主文は区画毎に「梅花文」・「寿」字文を交互に展開する。主文の直下の文様は、上下を区画する界線の内側に縦位の線描による簡略化した蓮弁文を描く。内面口縁には帶状の界線と腰下部に圈線を施す。	鮮明。	淡 灰 白 色	豊付のみ露胎。素地は淡灰色の細粒子で劈開面に微細な気泡の痕跡と黒色鉱物がみられる。貫入はない。福建省(徳化窯系?)。18C～19C。	寸-13 II層	
	16					薄手の碗。腰下部で厚い器壁は口縁部で次第に薄くなり、口縁端部を軽く折り曲げて仕上げる。豊付は尖らせて成形する。呉須の色合いは濃淡のある藍色を用いて外面に界線を口縁に一條と高台脇に二条を施す。胴部の主文は二種類の区画内に「梅花文」と「寿」字文を交互に展開させる。主文の区画帯下には界線で上下に区画した内側に省略した蓮弁を線で描いている。内面の文様は界線(口縁部に一條)と圈線(腰下部に二条の圈線)のみが観察される。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	豊付のみ露胎。素地は淡灰色の細粒子で劈開面に微細な気泡の痕跡と黒色鉱物がみられる。貫入はない。福建省(徳化窯系?)。18C～19C。	寸-13 I層
	17	II群 c 種	口 底	13.0 5.8 5.0	口縁と胴部は直接、接合ができないが素地や文様、そして呉須の色合いから同一破片と判断し、文様の配置パターンから図上復元を試みた資料である。口縁の外反の度合いは他と比較して微弱である。高台豊付は尖らせて成形する。文様は外面の口縁と高台脇に界線を施し、胴部に区画帯の主文となる「梅花文」と「寿」字文を交互に描いている。その直下には、界線で上下区画を行った内側に簡素化された蓮弁文を描いている。高台内に「和美」の文字を描いている。内面には口縁部に帶状の界線、腰下部に二条の圈線を施している。見込みに判読不能な文字を描いている。	鮮明。	淡 灰 白 色	豊付のみ露胎。素地は淡灰色の細粒子で劈開面に微細な気泡の痕跡がある。貫入はない。福建省(徳化窯系)。18C～19C。	寸-13 II層	
	18					胴部に「梅花文」と「寿」を描いた碗の高台破片。呉須は淡い藍色を用いて内面腰下部に圈線を施し、見込みに「上」の文字を描き、高台内に「和美」の文字を描。外面の文様は、区画界線の内側に線描きの蓮弁文を施し、高台脇から高台外面上部に二条一組の界線を施す。	鮮明。	淡 灰 白 色	豊付のみ露胎。素地は淡灰色の細粒子。貫入はない。福建省(徳化窯系)。18C～19C。	寸-13 II層
	19	II群 c 種	高台	— — 5.8	胴部に「梅花文」を描いた高台片。高台から腰部へは丸味を持たせながら内方向に閉まり気味に移行することから小碗と判断できる。高台豊付の大半は丸味を持たせ成形するが、部分的に豊付の幅が1mmを測る。呉須の色合いは、灰色を帯びたもので胴部に「梅花文」を描く。高台際に区画帯となる界線の内側に簡略化した蓮弁文を描く。高台脇に二条の界線を施す。高台内には二条の圈線と判読不能の三つの文字を描く。内底面には二条圈線と「二」と見える文字?または、著しく「花文」を省略した文様を描く。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	豊付のみ露胎。素地は淡灰色の細粒子で劈開面に微細な気泡の痕跡がある。貫入はない。福建省(徳化窯系)。18C～19C。	寸-13 I層	
	20					他の碗と比較して器壁の薄い薄手の碗。口縁端部で微弱に外反する。高台豊付の成形は高台下端部の内外両面から削り出して尖らせて豊付を成形する。呉須は鮮明さを欠いた淡青色を使用して、外面に界線を口縁と高台脇に一条施す。胴部の主文は二種類あり、区画毎に「梅花文」と「寿」字文を交互に展開させている。この区画帯の直下には上下区画の内側に間隔の空いた省略の蓮弁を描いている。高台内に圈線と「和美」を描。内面の口唇には帶状の界線と腰下部に二条の圈線、見込みに簡素化された丸文で花文を表現する。	やや鮮明。	淡 青 白 色	豊付のみ露胎。素地は淡灰白色の細粒子。貫入はない。徳化窯系。18C～19C。	寸-13 II層
	21	II群 c 種	高台	— — 6.0	胴部に「梅花文」と「寿」を描いた碗で他と比較して高台が低い。高台脇から胴部への立ち上がりは丸味を帯びながら外側に開き気味に胴部へ移行するタイプとみられる。高台豊付は尖らせて成形する。また、内底面に浅い陰圈線と外底面中央が三角錐状に盛り上がっている点が他のタイプと異なっている。淡い藍色の呉須を用いて内面の腰下部に二条の圈線を施し、見込みに「花文」を描ぐが、花の花心は点で表現し、花弁が2枚とかなり簡素化された描き方である。外面の腰下部には簡素化された間隔の開いた蓮弁と界線、高台脇から高台脇に二条の界線を施す。高台内に「古」と判読できる文字を描く。	鮮明。	淡 灰 白 色	豊付のみ露胎。素地は淡灰色の細粒子で劈開面に微細な気泡の痕跡がある。貫入はない。福建省(?)州窯系)。18C～19C。	寸-13 II層	
	22	III群 a 種	口 縁	16.6 — —	口縁部は、微弱に外反しながら口縁端部近くで僅かに内傾する。その為、口縁内面が浅く窪むことから蓋受けを意識した成形とな、文様は、外面口縁に二条の界線と、その直下に梵文字を描く。内面の口縁部には上位に界線で区画し、界線の間を梵文で埋めている。	やや鮮明。呉須の一部が掠れる。	淡 灰 白 色	両面に施釉しているが、口唇の釉が使用により剥離して、素地が露胎する。淡灰白色的細粒子。貫入はない。福建省(徳化窯系)。18C。	寸-13 I層	
	23					外面は、口縁部で「く」の字状に折れて大きく外側に大きく開き、口縁内面が浅く窪むことから蓋受けを意識した成形となる。文様は、外面の口端近くに一条の圈線と、胴部に同心円状の丸文(花文)を描いている。内面の文様は、口縁に圈線を施し、この圈線から下方に伸びる縦位の区画界線が一本描かれている。これらの圈線や界線は文様の区画帶とみられ、縦位の区画帯を中心にして左右に巻き絞りの花文を描いている。内面文様の手法は、外面と異なり二条界線や文様の輪郭を描いた後で、薄い呉須で塗りつぶした所謂ダミ技法を用い、口縁の界線やラマ式蓮弁(弁内に花文)と縦位の区画帯(上位に波文、下位に垂下の滴文)を描く。	鮮明。ダミ技法により濃い呉須と淡い呉須を使い分けている。	淡 青 白 色	両面に施釉。口唇部は使用により釉薬が剥離し、素地が露胎する。白色の細粒子。貫入はない。景德鎮。17C頃。	寸-13 II層
24	小 碗	a 種	口 縁 高 台	9.5 4.9 3.9	直口口縁の小碗。口縁に雷文を廻らし、胴部に主文の「宝物若しくは(蕉葉)」を描き、その直下に蓮弁文を描いている。高台外底途中に界線を一条廻らしているが透明釉と混じてかすれている。外底面には方形枠内に落款を描くが判読できない。内面には文様が見当らない。	やや鮮明。	淡 青 白 色	高台豊付のみ露胎する。豊付は尖らせて仕上げている。素地は淡灰白色的微粒子で、劈開面には僅かに微細な茶褐色の鉱物がみられる。徳化窯。18C。	寸-13 II層	

第10表 中国産染付観察一覧

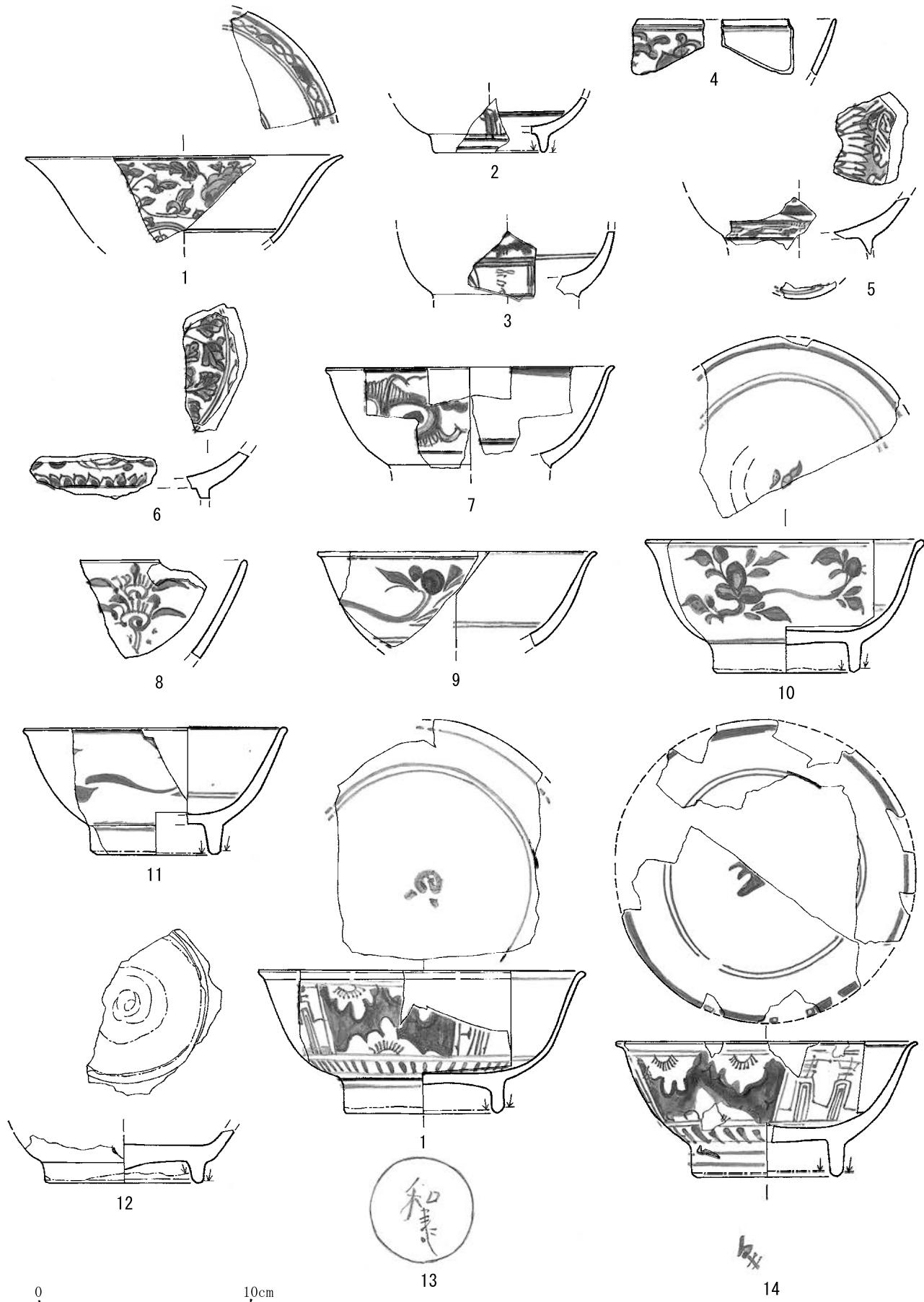
単位:cm

挿図 図版 番号	遺物 番号	分類・ 器種・ 名称・ 部位	口径 器高 高台径	観察事項・文様構成	吳須(藍色) の発色	釉色	施釉・素地・貫入・窯・時期	出土 地点 出土層
第11図 図版6	25	小 碗	b 種 高台 — — 3.7	文様は外面腰部の区画を蔓唐草文で縁取り、区画内に唐草文を描いている。高台脇には二条界線を施す。内面の腰下部にも圈線を二条施す。見込みに文様を施すが構図は不詳である。	鮮明。	淡 青 白 色	高台脇付のみ露胎する。素地は淡灰白色の細粒子で、劈開面には僅かに微細な気泡痕や灰色や黒色の鉱物がみられる。徳化窯系。18C~19C。	し-13 II層
	26		c 種 口 縁 10.5 — —	直口口縁の小碗。吳須は鮮明な青色の強いものを用いている。外面は口縁端部と腰下部に一条の界線で区画し、区画内に主文の牡丹花の配して、その周辺に唐草文を描いている。高台際に界線が一条施されている。内面の文様は、口縁に崩れた雷文を、腰下部には界線を施す。	鮮明。	淡 青 白 色	残存部分は総釉。素地は淡灰白色の微粒子である。徳化窯系。18C~19C。	し-13 II層
	27		c 種 口 縁 7.7 — —	厚手の小碗。口縁端部で僅かに外反する。外面の口縁端部に界線を一条施しているが大部分は吳須が透明釉に浮遊し、文様が掠れている。外面の文様の主文は簡素化された牡丹の花を中心配置し、その周辺に二重線で唐草文を描いた「牡丹唐草文」である。高台脇に僅かに界線が一条みられる。内面には文様がみられない。劈開面の觀察から釉薬が二次的な火熱を受て微細な気泡痕が多く観察され、この気泡痕の影響は器面全体におよび白色の斑文として無数に現れている。	やや鮮明。	淡 青 白 色	残存部分は総釉。素地は淡灰色の微粒子で、劈開面に微細な気泡痕がみられる。徳化窯系。18C~19C。	し-13 II層
	28		d 種 口 縁 9.7 — —	口縁部の外反は緩やかで微弱である。口唇部は帶状に吳須を施している。内外面には所謂「仙芝祝寿文」を描き、葉っぱのない蔓草を区画の縁取りとして、区画内に花唐草文を描いている。この区画と花唐草文を組合せを左右や下位に展開して胴部全体を埋める。	鮮明。	淡 灰 白 色	残存部分は総釉。素地は淡灰白色の微粒子である。徳化窯系。18C~19C。	す-13 II層
	29		d 種 口 縁 8.8 — —	口縁端部で比較的に強く外反する小碗。口唇部には帶状に吳須を施しているが、吳須は薄く、内面では滲み出ている。外面の文様は「仙芝祝寿文」、蔓草で区画をおこない、区画内に花唐草文を描いている。この区画と文様パターンを基本にして胴部に展開する。	鮮明。	淡 灰 白 色	残存部分は総釉。素地は淡灰色の粗粒子で、微細な気泡痕がみられる。徳化窯系。18C~19C。	す-13 I層
	30		d 種 口 縁 9.0 — —	口縁部の外反は非常に微弱で直口口縁気味である。口唇部は帶状に吳須を施しているが、吳須の色は震んでいる。外面には「仙芝祝寿文」で、葉っぱのない蔓草を区画の縁取りとして、区画内に花唐草文を描いて、胴部全体に展開している。内面の腰下部には界線を二条施す。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	残存部分は総釉。素地は淡灰色の粗粒子で、微細な気泡痕がみられる。徳化窯系。18C~19C。	し-13 II層
	31		d 種 高台 — — 3.9	外面の文様は「仙芝祝寿文」で、葉のない蔓草文を区画とし、区画内に花唐草文を描き、器面全体に展開している。高台際の吳須は大半が透明釉に流れ込んで滲んでいる部分や消えかかった箇所がみられる。外面部には僅かに圈線が一条みられる。内面腰下部には二条の圈線がみられる。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	高台脇付のみ露胎する。脇付は尖らせて仕上げている。素地は淡灰色の細粒子で、劈開面には僅かに微細な気泡痕や黒色の鉱物がみられる。徳化窯系。18C~19C。	こ-13 I層
	32		e 種 高台 — — 3.4	外面の胴部に梵文字、高台脇に界線を施す。外底面に二条の圈線と吉祥字とみられる四文字を記すが判読はできないが、上の二文字は「具」を下の二文字は「里」を書いているようにも見える。内面の見込みに「花」か「卷物」を組合せて「宝物」を描いている。	やや鮮明。	淡 青 白 色	脇付のみ釉薬を丁寧に搔き取つて露胎とする。素地は淡灰色の細粒子で劈開面に僅かに微細な気泡痕と黒色の鉱物とみられるものが観察できる。福建・広東系。18C。	し-13 II層
第12図 図版7	33	大 皿	— 口 縁 ＼ 高 台 20.8 4.65 11.6	内湾口縁型の皿。内底面の釉薬を輪状に素地と共に搔き取った為、浅く窪み凹地状の断面となる。外面の口縁部と高台際に二条の界線をそれぞれ施す。胴部の主文は不明であるが「靈芝雲文」或いは「唐草文」とみられる。内面の口縁と腰下部に二条の界線で区画をつり、区画内に「菊花花文」を四つ描き、その間を「波瀾文」で埋め尽くす。見込みには二重圈線と簡素化された「菊花花文」を描く。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	内底面の釉を蛇ノ目状に搔き取り露胎とし、高台脇付も露胎とする。脇付は幅広で丸味を持たせて仕上げている。素地は淡灰色の粗粒子で、微細な黒褐色の鉱物が多くみられる。劈開面に微細な気泡痕もみられる。?州窯系。18C。	す-13 II層
	34		— 高台 — — 10.4	口縁を僅かに欠いているが外反型の皿である。外面の文様は口縁近くと高台脇に界線を施し、口縁近くに「靈芝雲文」若しくは「唐草文」を描いている。外底面には二条の圈線を施す。内面の口縁近くには帶状の界線が僅かに残存し、腰下部には幅広の帶状の界線とそれを縁取るように帯びの内外に細い界線を施す。見込みには主文となる文様の構図は不詳であるが、「岩山」、「草」、「雲」とみられるものを描いている。	鮮明。	淡 灰 白 色	高台脇付のみ露胎する。脇付の内外端を削り取って面を造るため、脇付の幅は狭くなっている。素地は淡灰色の微粒子。徳化窯系。18C。	し-13 II層
	35		— 口 縁 ＼ 高 台 25.8 8.0 16.4	内湾口縁型の皿。吳須は濃青色で鮮明である。外面の口縁近くと高台脇に二条の界線を描き、腰下部に界線を一条施す。内面は二条一組の界線を口縁と腰下部に施して区画を作り、区画内に花弁に鎬を描いた「菊花」を主文として、周辺に「靈芝雲文」若しくは「唐草文」を描く。見込みには一条の圈線を描き、その内側に「半菊花」を描く。	鮮明。	淡 灰 白 色	脇付外端から外底面までは露胎となっている。素地は淡灰白色の微粒子である。景德鎮窯系。18C末~19C。	こ-13 I層
	36		— 高台 — — 12.3	外面の高台脇に界線が一条描かれているが、吳須は透明釉と混ざりあって不鮮明である。内面の見込みには「海草」、「如意雲」、「波文」とみられる文様を描いている。	やや鮮明。	淡 青 白 色	脇付のみ釉薬を丁寧に搔き取つて露胎とする。脇付の幅は狭く、脇付の両端を削り取つて面と成す。素地は淡灰色の微粒子である。徳化窯系。16C中~17C前。	不明

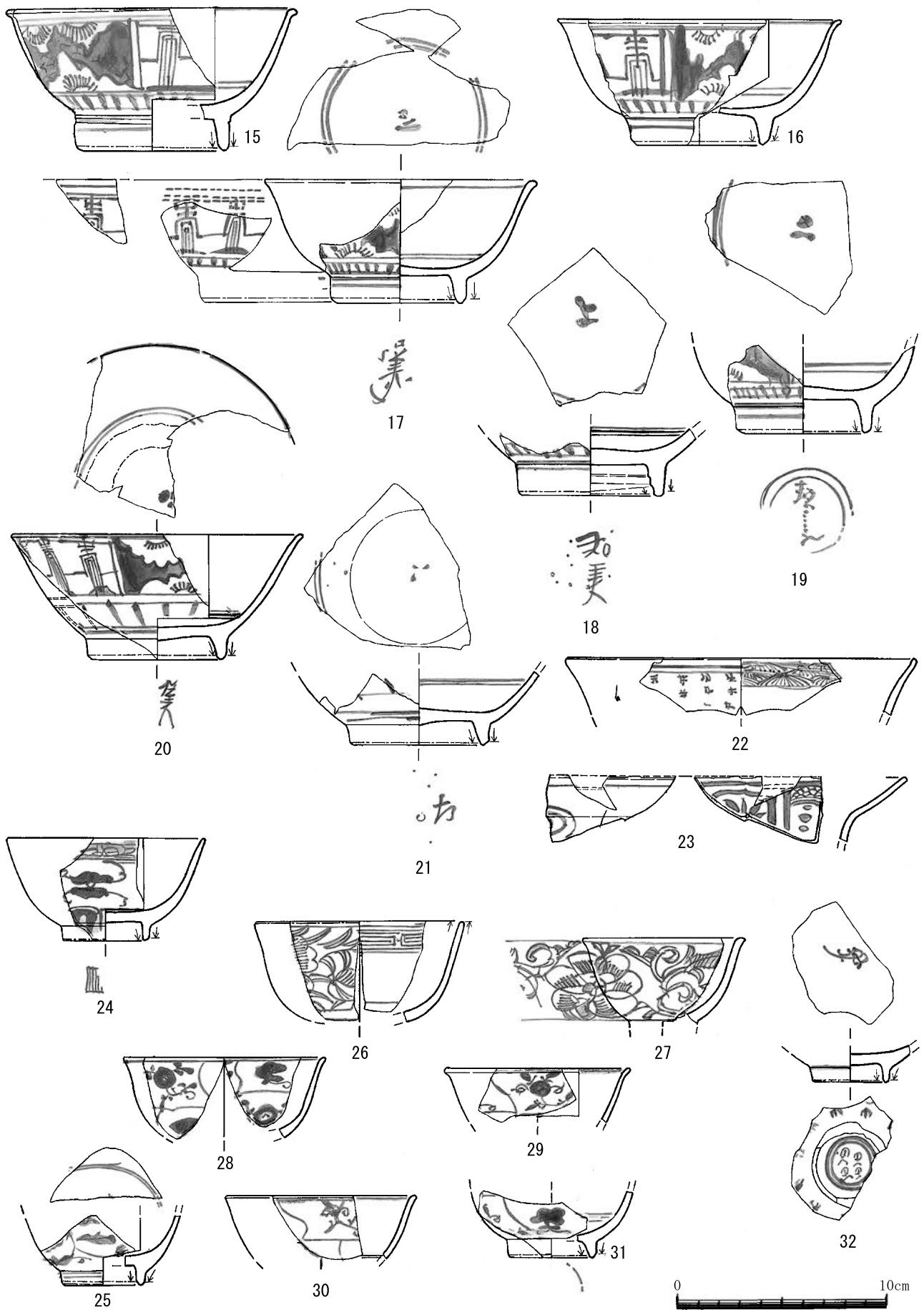
第11表 中国産染付観察一覧

単位:cm

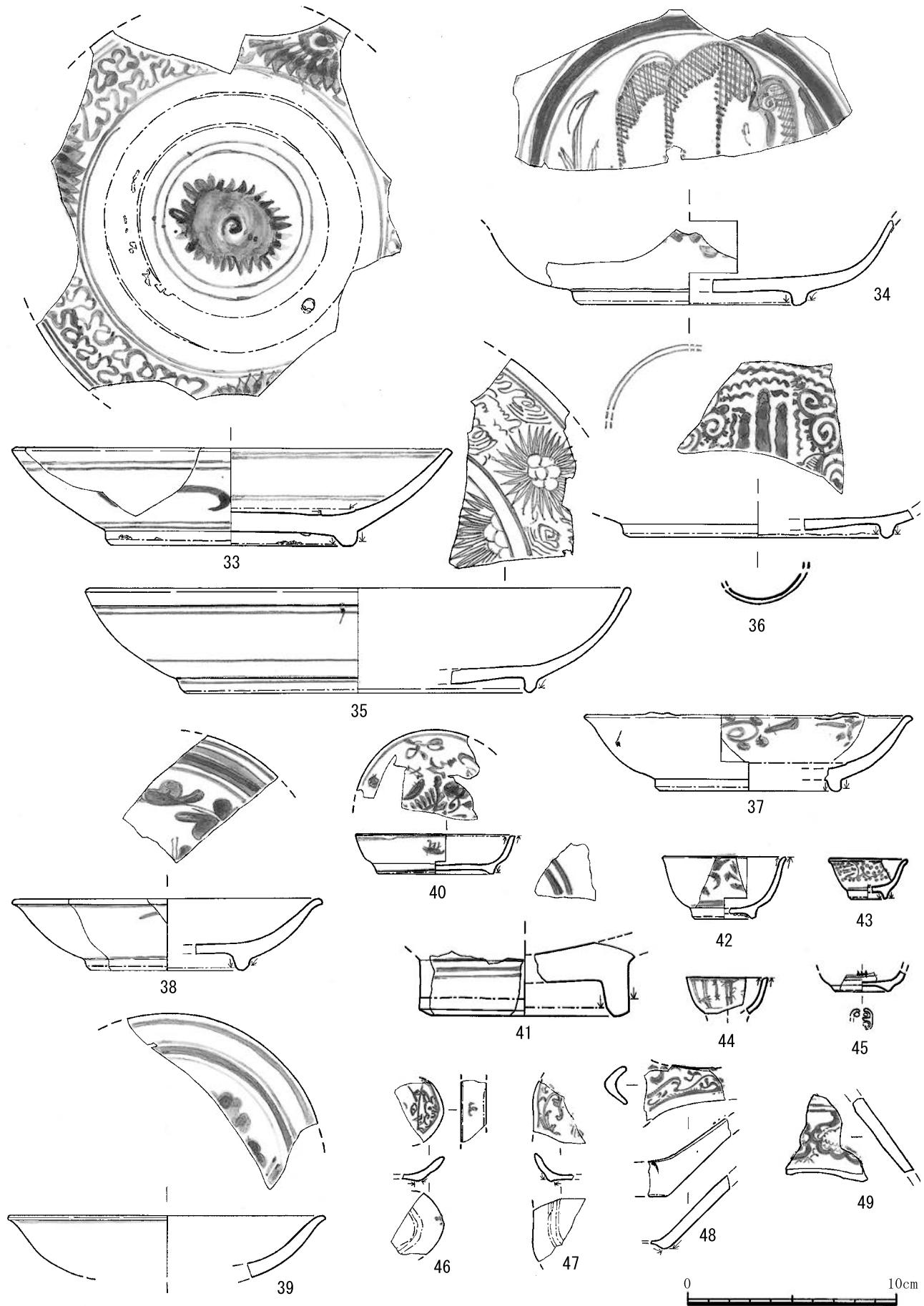
挿図 図版 番号	遺物 番号	器種・ 分類・	名称・ 仮称・	部位	口径 器高 高台径	観察事項・文様構成	吳須(藍色) の発色	釉色	施釉・素地・貫入・窯・時期	出土 地点 出土層
第12図 図版7	37	中皿	—	口 底	15.4 3.6 8.7	口縁を稜花状に成形した外反皿。文様は内面のみ残存し、「菊花花文」をかなり簡素化した形で描き、花芯を渦巻文で表現。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	施釉の手法は、総釉後に見込みの釉を搔き取って、高台畳付を露胎としている。素地は白色の微粒子で、比較的緻密な素地である。徳化窯。18C中頃。	J-13 II層
	38		—	口 底	14.8 3.4 7.3	口縁が僅かに外反の皿。外面の文様は口頸部と高台脇に帯状の界線を描き、胴部に主文とみられる文様を描いているが、短い曲線の為、構図については不明であるがあるが、湧田古窯出土の類似や他資料から類推すると「宝物(巻物か?)」が考えられる。内面の口縁に帯状の界線を描き、胴部には上下を帯状界線で区画し、その内側に幅広の界線を描いている。見込みに描かれた図柄は、湧田古窯跡出土の類似資料から類推すると「志在書中」図とみられる。	やや鮮明。	淡 灰 青 色	高台畳付のみ露胎する。畠付の内外端を削り取って面を造るため、畠付の幅は狭くなっている。素地は淡灰色の細粒子、劈開面に気泡痕が若干観察される。徳化窯系。18C。	J-13 II層
	39		—	口 縁	15.1 — —	同図38と同一タイプの中皿で、高台を欠いている。外面の文様は口頸部に帯状の界線を描いており、内面の口縁に帯状の界線を描き、胴部には上下を帯状界線で区画し、その内側に幅広の界線を描いている。見込みに描かれた図柄は、湧田古窯跡出土の類似資料から類推すると「志在書中」図とみられる。	やや鮮明。	透 明 釉	残存部分は総釉。素地は淡灰黄色の細粒子である。徳化窯系。18C。	J-13 II層
	40	小皿	—	口 底	7.6 2.9 5.4	内湾型で口禿の小皿(型物)。文様は外面の口縁と高台外面に帯状の界線を施し、胴部に主文の「半菊唐草文」とみられる文様を描くようである。内面は口縁に帯状の界線を施し、その直下から見込みに主文となる「菊唐草文」を描くが、その他に「中」の文字を描いている。	鮮明	白 濁 の 釉	口唇および畠付外端から外底面までが露胎。素地は淡灰白色の微粒子で、緻密である。?州窯系。18C後~19C。	さ-13 II層
	41	大鉢	—	大鉢 高台	— — 8.8	大鉢の高台。文様は高台脇に一条の界線、高台外面上部(高台脇寄り)に二条の界線を施す。見込みに幅広の圈線を二条施す。見込みに重ね焼の目痕があり、この部分は釉が凹凸となる。また、釉上には細い帯状の胎土目がみられる。	やや鮮明。	白 濁 の 釉	高台畠付のみ露胎する。畠付の内外端を削り取って面を造るため、畠付の幅は狭くなっている。素地は淡灰黄色の細粒子、劈開面に気泡痕が若干観察される。やや粗い貫入が全体的にみられる。福建・廣東系。17C~19C。	J-13 II層
	42	杯	—	口 底	5.9 6.0 2.9	口禿の小杯(型物)。内面に輪轤痕がみられる。口縁が僅かに外反する。畠付及び外底面の一部は釉薬が内側にアバタ状に垂れることから口縁部を下にして焼き上げたようである。文様は外面にのみ残存する。口縁部に細い一条の界線を施し、高台脇及び高台脇には帯状の大い界線を二条施している。胴部には主文となる「草花文(花唐草文)」を強調するかのように区画の界線より、濃い吳須で描く。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	口唇部のみ釉薬を搔き取って露胎とする。素地は淡灰白色の微粒子で、緻密である。福建・廣東系。18C~19C。	J-13 I層
	43		—	口 底	3.7 1.9 1.7	外反口縁の小杯で、素地や高台の成形などから型物成形が考えられる。吳須は濃い青色のものを用いて、外面にのみ文様を描いている。文様は口縁と高台脇に界線を施し、その内側に主文となる「花卉(草花文)」を描いているが、花弁や葉は、簡素化され花が三本の線、葉っぱが、丸文で表現されている。	やや鮮明。	淡 青 白 色	高台畠付のみ露胎する。素地は淡灰白色的微粒子で、緻密な素地である。徳化窯の民窯。18C~19C。	J-13 II層
	44		—	口 縁	3.8 — —	外反口縁の口禿小杯(型物)。口縁外端を尖ら気味に成形する。残存する文様は外面にのみ認められ、口縁および高台際に一条の界線を施して区画とする。その内側に「梵字」を描いているが、吳須の大半が透明釉に浮遊し、滲んでいる。	やや鮮明。	淡 青 白 色	口唇の釉薬が搔き取られ露胎となる。素地は淡灰白色的微粒子で、緻密である。福建・廣東系。18C。	J-13 II層
	45		—	底部	— — 2.6	同図44と同一タイプの小杯。外底面に型起こしによる陽印花の「花文」若しくは「吉祥文字」とみられるものを施している。型起こしの際に生じた指圧による浅い溝みが見込の部分で観察される。文様は外面にのみ残存し、腰下部に「梵字」を描き、高台脇に界線を施しているが、吳須が透明釉と混ざって腰下部付近まで広がっている。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	残存部分は総釉。素地は淡灰白色的微粒子で、緻密であるが劈開面には細い帯状の気泡痕が一部分で観察される。徳化窯。18C。	こ-13 I層
	46	蓮華	—	受け 皿	—	受け皿の先端部分の破片。外面の文様は皿の先端部分に簡素化された「蝶」或いは「虫」を描いているようである。内面の文様は縁沿いで界線を施し、その直下に「半梅花」と梅の「折枝」を描いている。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	底面部の縁沿いが露胎となる。素地は淡灰白色的微粒子。窯不明。18C~19C。	J-13 II層
	47		—	受け 皿	—	皿の残存状況から比較的大型の蓮華若しくは柄杓とみられる。外面には文様がない。内面には口縁に沿うように界線を描き、その下に「梅花」と「蔓唐草文」を描いている。	鮮明。	淡 青 白 色	皿の高台部分のみ露胎する。素地は淡灰白色的微粒子。劈開面の観察状況から器壁と平行する陶土の継ぎ目(継ぎ足しの陶土は、一回)がみられ、型入成形である。景德?。18C頃?。	J-13 II層
	48		—	柄	—	蓮華の残存部位は皿の根本と柄の一部である。外面の文様は皿の上部側面に「草文」又は「羽」とみられるものを描いている。内面の文様は縁に沿った界線を施し、その直下に「蔓唐草文」を描いている。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	皿の高台部分のみ露胎する。素地は淡灰白色的微粒子。横断面の劈開面に観察から器壁と平行する陶土の継ぎ目(継ぎ足しの陶土は、一回)がみられることから蓮華の製作方法が型入成形であることが判明した。窯不明。18C~19C。	さ-12 II層
	49	瓶	—	胴 部	—	瓶の頭下部から胴部の破片。文様は二条の界線を描き、その上に「梅枝」を描いているようである。胴部には雲堂手の手法で「雲文」を描いている。内面は輪轤痕と斜位の指ナデがみられる。その他に頭下部に胴継ぎがなされている。	やや鮮明。	淡 青 白 色	淡灰白色的微粒子。景德鎮系。15C前~中。	さ-13 II層



第10図 中国産染付 1



第11図 中国産染付 2



第12図 中国産染付 3

## 第4節 中国産色絵

中国産色絵の主体時期も染付と同様に18世紀～19世紀の清朝(1662年～1911年)に生産されたものが主流であった。中国産色絵で古手のものは、所謂「豆彩」<sup>(註1)</sup>の手法で描かれた「大清康熙年製」(1662年～1722年)の年号が入った薄手の碗と同時期に製作された蓋の二点であった。いずれも景德鎮で生産されたものであり、類似の碗が首里城跡東のアザナ地区から出土している<sup>(註2)</sup>。また、主体となる時期を特徴づけるものは、第13図3～6に図化した碗であり、18世紀に福建省で生産されている。類似資料は、首里城右掖門及び周辺地区<sup>(註3)</sup>や天界寺跡<sup>(註4)</sup>などで出土している。その他に小碗(第14図9, 10)や小皿(第14図13～15)については湧田古窯跡<sup>(註5)</sup>で出土している。

平成15・16年度で出土した色絵の器種は、蓋を除いて碗(小碗を含む)、皿(小皿・中皿の二種類を含む)、瓶、香炉の4器種であった。出土量は碗が主体であり、次に小皿・小碗の順に暫時減少する。

色絵の個々の特徴については観察項目を整理して第13～14表に呈示した。観察の記述は碗、小碗、小皿、皿、蓋、瓶、香炉の順に掲載(第13・14図)した。

第12表 色絵出土状況一覧

器種・部位	出土地	平成15年度					小計	平成16年度						不明	小計	合計				
		I層		II層				I層			II層									
		ニ-13	ニ-12	ニ-13	さ-12	さ-13		フ-12～13	フ-13	フ-す-13	す-13	フ-12～13	す-14～15							
色絵	碗	口～底							1	1	2	1			5	5				
		口	1		1	1	4	1	8	1	5		1		7	15				
		胴	1				1		2		3			1	1	5				
		底					1		1			1		1	2	3				
	小碗	口～底					1		1							1				
		口					2		2		2				2	4				
		胴	1	1			1		3							3				
	皿	口～底								6		1			7	7				
		口	2						2		1				1	3				
		胴								2					2	2				
	瓶									1					1	1				
		蓋物								1					1	1				
		香炉					1		1							1				
	小計			1	1	1	11		1	22	1	5	1	1	30	1	33			
			5			14		1	20	1							53			

第13表-a 中国産色絵観察一覧

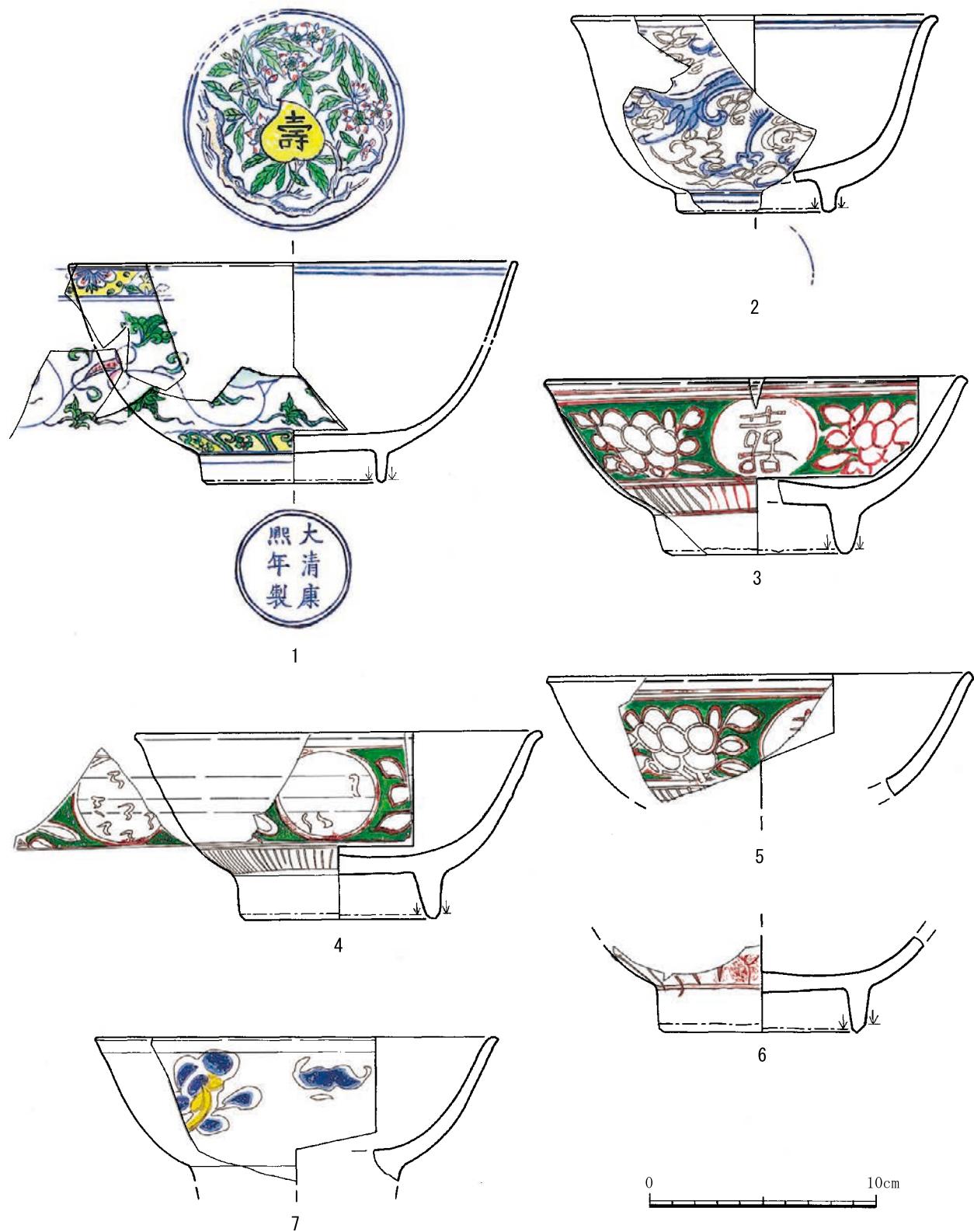
単位:cm

挿図版番号	遺物番号	器種	口径 高台径	観察事項・文様構成	呉須 (藍色) の発色	釉色	施釉・素地 貫入・窯・時代	出土地点 出土層
第13図 図版8	1	碗	15.6 7.6 6.3	薄手の直口口縁碗。所謂「豆彩」(淡い青花で文様を縁取りし、豆青を主とした彩釉で上絵を施した色絵付けの手法)で文様を描いている。色絵の種類は、淡緑色、黄色、桃色の三種類を使用。文様は外面口縁部の区画線内に「半梅花」と「梅の蕾」を描く、区画線は上位が一条、下位は二条。胴部主文は、吉祥文字(僅かに残存)を花弁として「唐草文」で繋いだ構図とみられる。高台脇は、蓮弁間を僅かに開けた間弁とラマ式蓮弁文を縁取りして描き、弁先を更に縁取っている。弁内には小さな丸文五個で花弁を表現。外面高台中央に一条の界線を施す。見込みに吉祥文字「寿」と「梅」を描いている。外底面は二重圈線に「大清康熙年製」(1662年～1722年)の銘款。	淡青色 やや 鮮明。	白色	豊付を除いて総釉。素地は、白色の微粒子。貫入はない。景德鎮。17C中～18C前。	す-13 II層
第13図 図版8	2	碗	12.6 6.9 5.2	腰部で丸味を帯びた厚手の外反口縁碗。型物成形。胴部に「三爪龍」を呉須で描き、その周辺に「雲文」を色絵で描くが、上絵が全て剥落している。界線は口縁部、高台脇、外底面に一條施し、高台際が二条一組の界線を施している。内面には二条一組の界線を施す。	淡青色 やや 不鮮明。	淡 灰 白色	豊付を除いて総釉。素地は、淡灰白色の微粒子。貫入はない。徳化窯系。17Cか18C頃。	す-13 II層
第13図 図版8	3	碗	14.5 6.2 6.1	外反口縁で饅頭心系統の碗。口縁の肥厚が微弱に外反。色絵は赤茶色(界線、窓枠、花文、蓮弁、吉祥の字「喜」に使用)、緑色(主文や花文を除く、空間を埋める際に使用)の二種類が残存する。	-	灰 白色	豊付を除いて総釉。素地は、灰白色の細粒子。劈開面に微細な空気の気泡痕が僅かに観察される。貫入はない。徳化窯系18C。	し-13 II層
第13図 図版8	4	碗	14.5 - -	口縁形態、文様の展開や筆使いなどから同図3と同一個体とみられる。	-	灰 白色	残存部位は総釉。素地、貫入の有無については、上と同じ。徳化窯系。18C。	し・す-13 II層
第13図 図版8	5	碗	14.0 6.5 6.9	口縁で僅かに外反する端反の碗。腰下部で丸味を持って立ち上がる。色絵は赤茶色(界線、窓枠、葉っぱの縁枠で使用)、黄緑色(主文や花文を除く、空間を埋める際に使用)の二種類が残存する。主文の文様は、「3」の字状の文様を描き構図不詳。高台脇の蓮弁文(界線と縦位線書き)は色絵が完全に剥げ落ちている。	-	綠 白色	豊付を除いて総釉。淡灰色の細粒子。貫入はない。徳化窯系。18C。	し-13 II層
第13図 図版8	6	碗	- - 7.1	色絵碗の高台破片。高台際から高台脇まで赤茶色の色絵で、弁先の丸い蓮弁文を一枚ずつ丁寧に描いている。	-	灰 白色	残存部は豊付を除いて総釉。淡灰白色の微粒子。貫入はない。徳化窯系。18C。	ニ-13 I層 II層 さ-12 II層

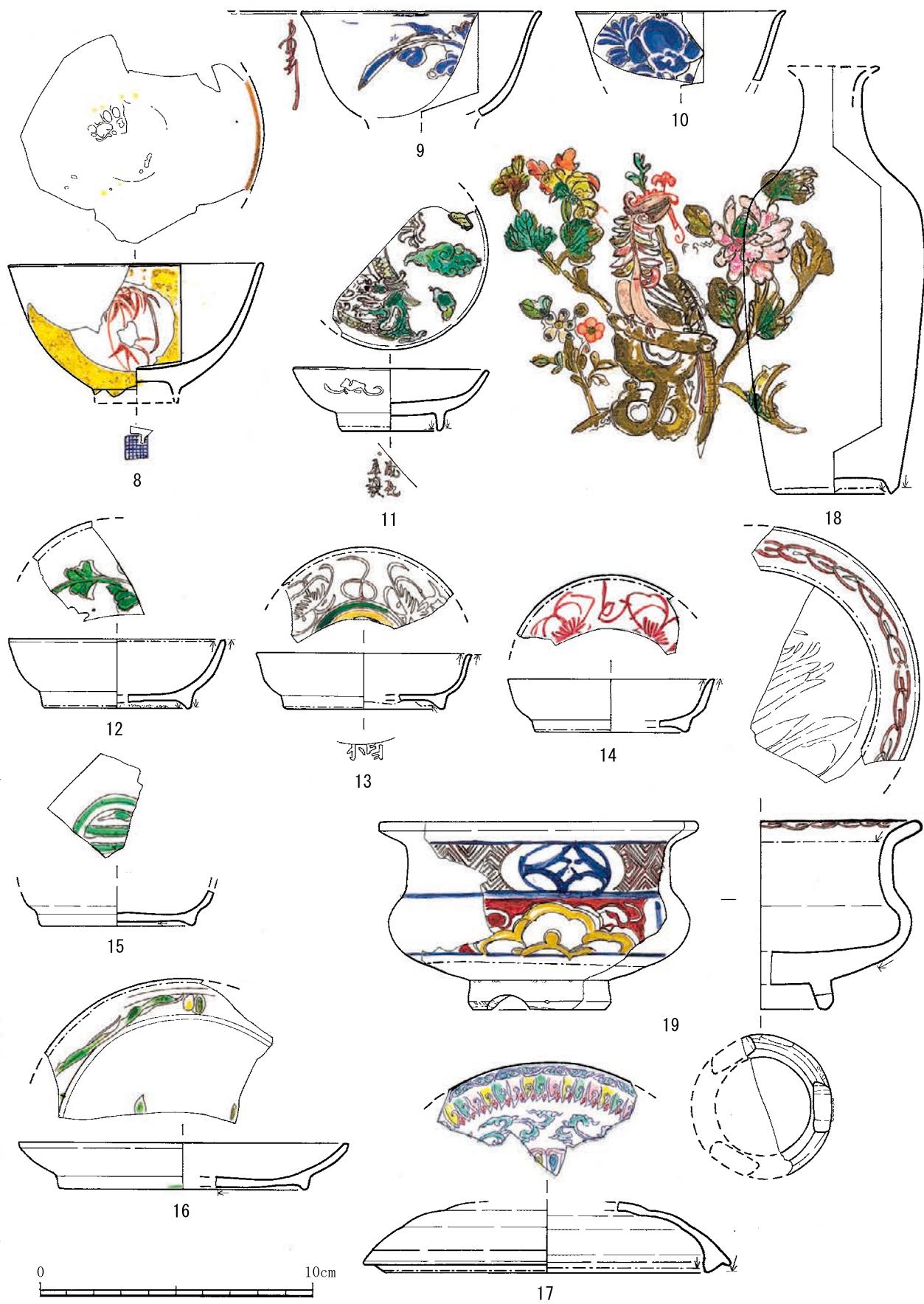
第14表-b 中国産色絵観察一覧

単位:cm

捕団 図版 番号	遺 物 番 号	器 種	口 径 器 高 高台径	観察事項・文様構成	呉須 (藍色) の発色	釉 色	施釉・素地 貫入・窯・時代	出土地点 出土層
第13図 図版8	7	碗	13.8 — —	口縁部が微弱に外反するタイプの碗。残存する色は青色(葉の部分と雲文に使用)と黄色(樹木の幹や枝)の二種類。	—	緑 白 色	残存部位は経釉。淡灰色の細粒子で、微細な空気の泡痕が多量に観察される。貫入はない。福建・広東。18C。	す-12 13 II 層
第14図 図版8	8	小 碗	9.3 (5.0) (3.0)	薄手の直口口縁碗で、口唇部は釉が掛かっていない所謂口禿。口禿の部分は茶褐色を帶びている。残存する色絵は赤茶色(主文の竹に使用)と黄色(主文のある窓枠を除く、全面に使用)の二色である。外底面に呉須で格子目状の文様を描いている。	濃青色 やや 不鮮明。	白色	口唇部を除いて経釉。白色の微粒子。貫入はない。景德鎮。18C~19C。	さ-13 II 層
第14図 図版8	9	小 碗	8.7 — —	薄手の外反口縁碗。残存する色絵は青色(主文の「草花」と口唇部に使用)と薄赤茶色(吉祥文字の「寿」に使用)の二色である。なお、口唇部の大半は青色の色絵が剥落し、その部分は釉を搔き取られ口禿となる。内面の釉下に刷毛目がみられる。	—	白 濁 色	残存部は口唇部を除いて経釉。淡灰色の微粒子。貫入はない。徳化窯。19C。	し-13 II 層
第14図 図版8	10	小 碗	7.6 — —	厚手の小碗。口縁は微弱に外反し、口唇が尖る。口唇部は色絵を塗布することを目的として口禿とする。残存する色絵は青色(主文の「草花」に使用)の一色のみであった。内面の釉下に刷毛目がみられる。内面の釉下に刷毛目がみられる。	—	白 濁 色	残存部は口唇部を除いて経釉。淡灰色の微粒子。貫入はない。徳化窯。19C。	さ-13 II 層
第14図 図版8	11	小 皿	7.1 2.2~2.3 3.8	内彎口縁の口禿小皿で、腰部の屈曲は緩やかである。轆轤引きで成形。残存する色絵は緑色(龍の身体部分と雲に使用)、薄赤茶色(龍の手首及び鉤爪に使用)、黒色(龍の輪郭、龍の目や鱗、雲に使用)の三色である。外面に「瑞雲」とみられる文様を描いていたようである。外底面に「成化年製」(1465年~1487年)の年号が確認される。	—	淡 灰 白 色	口唇部と畳付を除いて施釉。貫入はない。淡灰色の微粒子。景德鎮。15C中~後半。	し-13 II 層
第14図 図版8	12	小 皿	7.9 2.5 5.4	型成形。内彎の口禿小皿。残存する色絵は黄緑色(葉と茎に使用)と茶褐色(草花文の輪郭に使用)の二色である。畠付内端から高台内面下端部分に胎土と釉薬が癒着して帯状の目痕となる。	—	白 色	口唇部を除いて施釉。貫入はない。淡灰色の微粒子。景德鎮。18C前半~中頃。	し-13 II 層
第14図 図版8	13	小 皿	7.8 2 5.8	型成形、内彎の口禿小皿。残存する色絵は緑色(見込みの外側園線に使用)、黄色(見込みの内側園線に使用)、赤茶色(主文の菊花文に使用するが大半が剥落)の三種類である。外底面に陽印刻の字款を施しているが文字は判読できない。	—	灰 白 色	口唇部と外底面を除いて施釉。貫入はない。灰色の微粒子。徳化窯系?。18C後半~19C。	し-13 II 層
第14図 図版8	14	小 皿	7.4 1.9 5.6	型成形。内彎口縁の口禿小皿。残存する色は、赤褐色(菊花文の使用)のみであった。前記の同図13と主文となる「菊花文」は共通するが器厚や素地、そして灰白色の釉薬が釉上に浮遊し、白濁する点などで異なっている。	—	灰 白 色	口唇部、畠付、外底面が露胎。貫入はない。灰色の微粒子。徳化窯系。18C後半~19C。	す-13 II 層
第14図 図版8	15	小 皿	— — 5.6	型成形。内彎型の小皿高台破片。残存する色は、淡緑色(見込みの園線及び横線に使用)と淡赤色(見込みの園線や横線の輪郭線で使用するが大半が剥落)の二種類である。施釉は外底面の大半に掛かっている。灰白色的釉薬が釉上に浮遊し、白濁する。	—	灰 白 色	外底面の一部が露胎。貫入はない。灰色の微粒子。徳化窯系。18C後半~19C。	し-13 II 層
第14図 図版8	16	皿	11.9 1.7 9.0	型成形。内彎型の口禿皿。残存する色は、淡緑色と黄色の二種類である。内面胴部の文様は省略された「花唐草文」を描き、見込みに「花文」を描いているようである。外底面及び畠付にみられる釉薬の一部は焼成の際に微細なミズ腫れ状に釉が盛り上がっている(焼成後に製品を取りやすくなる際に敷いた藁灰などの剥離剤か?)。	—	淡 灰 白 色	口唇部と外底面を除いて施釉。貫入はない。灰白色的微粒子。?州窯系?。18C後半~19C。	す-13 II 層
第14図 図版8	17	蓋	外径 13.3 内径 11.8	袋物(壺類)の蓋。蓋の側面觀は三段に丸味を持たせて盛り上がっている。所謂「豆彩」で文様を描いている。色絵の種類は、淡緑色、黄色、桃色の三種類を使用し、文様の輪郭線の幅は非常に細く、淡青色の呉須を用いている。文様は蓋甲全面に描かれていて、蓋甲下周に「唐草文」と間弁のある弁先の尖った「半裁ラマ式蓮弁文」、その上には丁寧な「唐草文」を描いている。蓋甲上間に垂下のラマ式蓮弁文を描き、弁内に区画と垂下の渦巻き文を描いているようである。	淡青色 やや 鮮明。	淡 灰 白 色	身の口縁と接触する身受けのタガ部分のみ露胎。貫入はない。淡灰色の微粒子。景德鎮。17C中~18C前半。	し-13 I 層 II 層
第14図 図版8	18	瓶	(3.3) 15.6 4.6	口縁を欠いた瓶。残存する色絵は淡緑色(樹木の葉)、黄色(花弁)、桃色(鳳凰の顔・首・体、花弁)、茶色(幹や枝)、朱色(鳳凰の鶴冠・口、花弁)の五種類がみられる。文様の輪郭線は黒色を使用している。文様は、「鳳凰」を主文として「梅」・「椿」を描いている。	—	白 色	畠付のみ露胎。貫入はない。白色の微粒子。景德鎮。18C後半~19C。	し-13 II 層
第14図 図版8	19	香 炉	11.6 6.8 5.2	高台畠付を半円形に三方所挟りを入れた袴腰香炉。口縁部の外反は縦断面が「く」の字状に折れる。残存する色絵は赤茶色(多重方形区画文、内面口縁の蓮弁繋ぎ文、胴部空白部分)、黄色(半梅花)の二種類である。その他の文様は、呉須による界線と丸枠に「十字花」を描く。	淡青色 やや 鮮明。	白 色	施釉の範囲は内面口縁から高台脇まで。貫入はない。白色の微粒子。景德鎮。18C後半~19C。	さ-13 II 層



第13図 色絵 4



第14図 色絵 2

## 第5節 褐釉陶器

ここで取り扱った褐釉陶器は、中国産とタイ産の褐釉陶器であり、双方で確認された器種は、壺のみであった。

中国産褐釉陶器壺の中で、第15図全4・5のタイプは時代幅があり、初現は15世紀中頃の首里城京の内跡<sup>(註1)</sup>から、終末期は、17・18世紀の湧田古窯跡<sup>(註2)</sup>までの凡そ150年～250年間が考えられる。このタイプは、蔵骨器として転用され事例も多く、ヤッチのガマ・カンジン原古墓群<sup>(註3)</sup>などの近世古墓などから出土している。この種の壺は、口縁内面に蓋受けのタガがあることから酒壺としての用途が考えられるようである。産地については、中国南部地域が予想されるところである。

タイ産褐釉陶器の生産地は、今のところシーサッチャナライ窯群のコー・ノイ窯<sup>(註4)</sup>が考えられ、時期的には15世紀後半から16世紀頃が考えられるところである。

第15表 褐釉陶器出土状況一覧

器種 部位	出土地	平成15年度														平成16年度														合計	
		I層				II層				III層				不明	小計	I層				II層				不明	小計	合計					
		こ-10	こ-12	こ-13	さ-16	こ-12	こ-12-13	こ-13	さ-12	こ-12	さ-11	さ-12	さ-16			こ-12	こ-13	こ-13-14	こ-14	こ-12	こ-13	こ-13-14	こ-14								
褐釉陶器	中国産	口～底							1							1													1		
		口					2			2						4	1									1	1		3	7	
		胴	1	3	86	1	215	2	49	1	42	1	2	2	4	409	2	10	4	4	2	3	3	2	29	13	1	21	1	95	504
		底			1		1			1						3					1				1			2	5		
		小計	1	3	87	1	218	2	49	2	45	1	2	2	4	417	3	10	4	4	2	4	3	2	30	15	1	21	1	100	517
	タイ産	口			1	1				1						1	4												1	5	
		耳			2		1	1		1						5										1			1	6	
		胴	1	19	1	45		4	21							91		1	2	1	2		1		1	4	1	1	14	105	
		小計	1	22	2	45	1	5	22	1						1	100		1	2	1	2		1		1	5	1	1	15	116
	小計		1	4	109	3	263	3	54	2	67	1	1	2	2			3	10	1	6	1	6	2	5	4	2	1	35	16	1
					114		392			6	5	517													40		53	44	2	116	633

第16表 褐釉陶器観察一覧

単位:cm

挿図 図版 番号	番号	遺物 種類	産地	器 分類	口径 高台径	器形・釉色・文様などの特徴	素地	出土地点 出土層
第15図 図版9	1	褐釉陶器・ 中国産		壺 ・ 口 縁	-	口頸部の形状は、頸部から口縁は、ほぼ垂直に移行し、口縁で緩やかに外反する。口縁の肥厚は歪な台形状を呈する。外面は茶褐色の釉が丁寧に施されているが、内面は雑に横位置方向へ竪状に施されている。	淡橙色の細粒子で、細かい茶褐色や白色鉱物を多く含み、僅かに粗い石英(長石?)を含む。	こ-12 II層
	2			壺 ・ 口 縁 ・ 底部	17.3 31.2 14.5	図上復元を試みた壺で、口縁の肥厚は三角形状に成形する。肩部は明瞭な稜を形成する。肩部から脣部下部まで輻輳成形後にある程度規則性を持つ平行叩きが加えられている。内面の当て具は、不明であるが当て具痕の形状は長方形状で、斜め方向に規則的に当てられている。脣下部から底面は輻輳痕が顕著である。外底面は、雑で調整痕は部分的なナデや削りが観察できる程度である。茶紫色の釉は、内面が絞釉で、外面は脣下部まで施釉されている。肩部に朱書きで「作」とも判読できる文字を描いている。脣部中央には朱書きと墨書きで銘を記しているが、正式な鑑定ではないが最初に墨書きで文字を書いて、その後に朱書きで書いている。墨書きで書いた文字は一行目が「未無し月」、二行目は「中」、朱書きの部分は一行目「□祐口」、二行目「なる月」とも判読できるが判然としない。	橙色の細粒子で、微細な石英(長石?)を多量に含む。	さ-12・13 II層 こ-13 I層
	3			壺 ・ 口 縁	17.5 -	同図2と同一タイプの壺とみられる。口縁の肥厚部は、雑に成形した為、浅い横線状となっている。釉の代わりに茶紫色の化粧土を両面に施しているが、内面より外面が雑である。肩部には明瞭な稜線があり、肩部から脣部に平行叩きによる叩き痕がみられる。内面の当て具痕は、ナデ消されていて不明である。劈開面には部分的に黄白色や茶色の陶土が竪状とない。	橙色の細粒子で、粗粒な石英(長石?)と茶褐色の鉱物を多量に含む。	す-13 II層
	4			壺 ・ 口 縁	19.0 -	口縁部の肥厚部は断面が歪な隅丸方形で、内側口縁下端の突出した肥厚は蓋受けを兼ねたものとみられる。口唇部の厚みは2.7cmと幅広である。口縁部の成形は陶土の継ぎ足し、若しくは陶土の捻り返しによるものとの判断される。両面には茶褐色の釉を施すが、釉葉は火熱を受け微細な気泡痕となって器面全体に現れている。	淡茶紫色の細粒子で、微細な石英(長石?)を多量に含み、稀に粗い石英(長石?)が混入する。	こ 12・13 I・II層
	5			壺 ・ 口 縁	20.2 -	口縁部の肥厚部は断面が歪な隅丸方形で、内側口縁下端の突出した肥厚は上記4より肥大化し、明瞭な蓋受けを成形する。肥厚は陶土の捻り返しで作製されている。口唇部の幅は2.1cmを測る。茶褐色の釉は器面全体に施釉されている。釉には細かい貫入がみられる。	灰白色の細粒子で、微細な鉱物(灰色、白色、茶褐色)を多量に含み、稀に粗い石英(長石?)を含む。	さ-13 II層
	6			壺 ・ 底部	-	素地・釉色などから上記5の褐釉陶器壺の底部破片とみられる。外底面は平坦ではなく歪で雑な仕上げである。茶褐色の釉葉は両面に施されているが、内面の釉葉は火熱を受けて釉色が白濁色に変色し、微細な気泡痕が表面に現れている。	灰色の細粒子で、微細な鉱物(灰色、白色)を多量に含む。	こ-12 II層
第15図 図版9	7	褐釉陶器・ タイ産	壺 ・ 口 縁	18.8 -	口縁が外側に大きく外傾するタイプで、口唇部が肥大する。内面口縁には4mm幅の浅い「V」の状の圈線を施す。両面には淡茶色の化粧土が薄く塗布され、その上から茶褐色の釉を口縁の内外面に施す。	灰白色の細粒子で、微細な鉱物(白色、灰黒色)が多く混入する。	さ-13 II層	
	8		壺 ・ 把手	-	光沢のある緑褐色の釉を外面に施す。内面の釉は灰茶色を呈したものを施すが、施釉が及ばない部分は下地の茶褐色の化粧土が露出している。脣部には雑に成形された把手(横耳)を貼り付けているが、把手の粘土紐の部分と脣部の間に繩や紐などを通すことが可能なサイズ(縦7mm、横1.95mm)であり、機能的である。	淡茶紫色の細粒子で、微細な石英(長石?)を多量に含み、稀に粗い石英(長石?)が混入する。	す-14 I層	

## 第6節 その他の輸入陶磁器(中国産・タイ産土器)

その他の輸入陶磁器（第16図）として取り扱ったのは、中国産陶磁器類（青磁染付、瑠璃釉磁器、黒釉陶器、法花、緑釉陶器、無釉陶器、褐釉磁器、褐釉染付。以上、8種類）とタイ産半練土器の二種類である。中国産陶磁器類の中で無釉陶器は、宜興窯の茶道具（急須や瓶など）である。以下、輸入陶磁器の諸特徴については第18～19表に呈示したが、褐釉磁器（壺胴部の細片。景德鎮）と褐釉染付（外面の釉薬は茶褐色、内面が淡青灰色の釉を施した型物の小碗。景德鎮窯系）が各々1片ずつ出土しているが、図化を省略した。

第17表 その他輸入陶磁器出土状況一覧

器種・部位		青磁 染付	小碗	出土地				小計	平成15年度				不明	小計	合計				
				I層		II層			I層		II層								
				こ-13	こ-12	こ-12～13	さ-13		す-16	し-13	す-13	し・す-13							
その他輸入陶磁器	磁器	柿釉	口～底								1			1	1				
			口								2	1		3	3				
			底				1	1						1	1				
		瑠璃釉	小碗	口		1									1	1			
			小杯	口							1			1	1				
			大鉢	口							1			1	1				
			水注	胴	1						1			1	1				
			香炉	口～底									1	1	1				
			瓶	胴									1	1	1				
		褐釉	胴								1			1	1				
	陶器	黒釉	茶碗	口				1	1						1				
			胴				1	1						1	1				
		法花	口				1	1						1	1				
			水注	胴	1		1	1	3					3					
		緑釉	水滴	底			1	1						1	1				
			水盤	口								1		1	1				
			不明	胴					1	1				1	1				
		褐釉	胴				1	1	2		1			1	3				
	無釉	皿	底									1		1	1				
			口～底									1		1	1				
		急須	口				1	1						1	1				
			胴	2			1	3			4	2		6	9				
		急蓋須のつまみ	底								1			1	1				
			完形								1			1	1				
			縁～つまみ								1			1	1				
		瓶	胴								1			1	1				
	タイ産土器		蓋				1	1						1					
小計					2	2	10		1	18	1	16	5	1	22	1	24	42	

第18表-a その他の輸入陶磁器(中国産)観察一覧

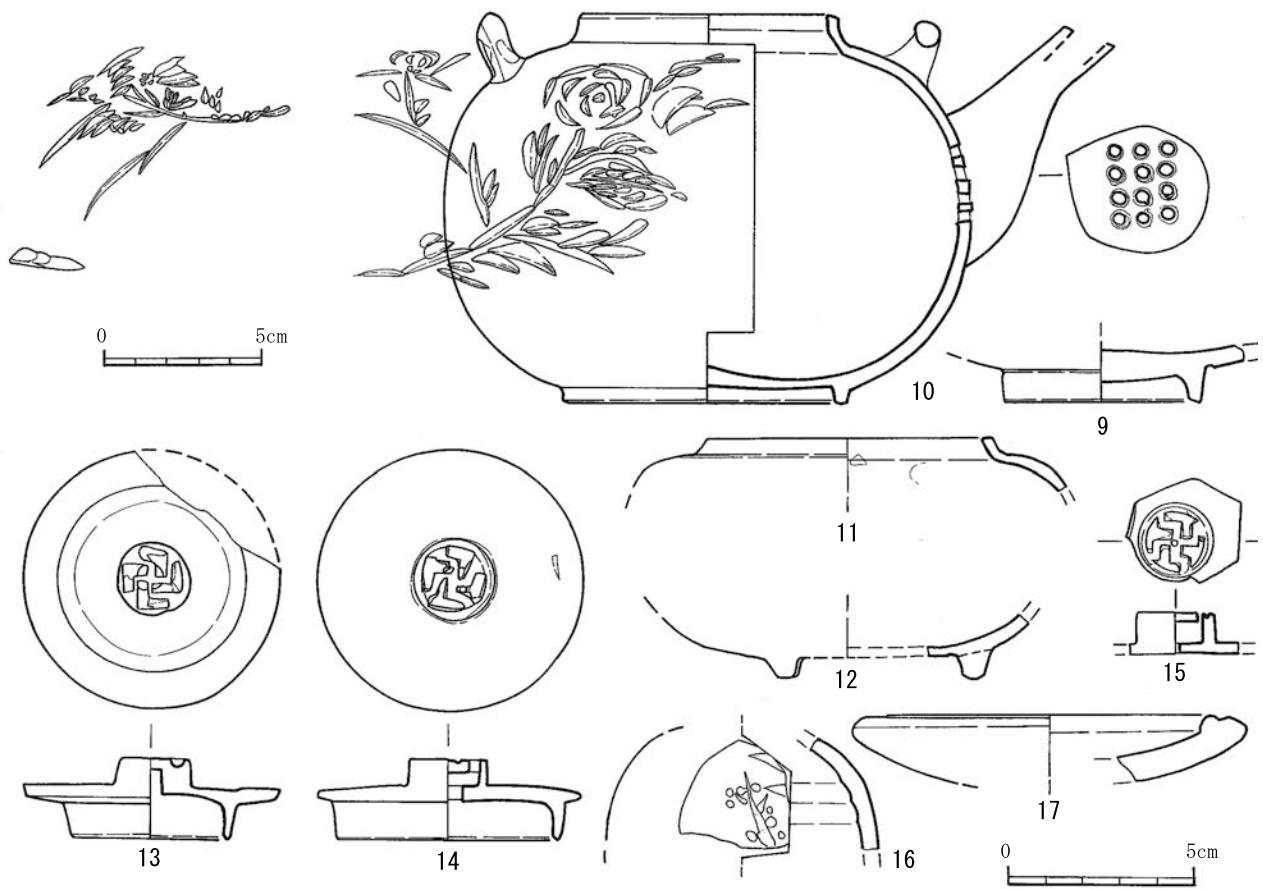
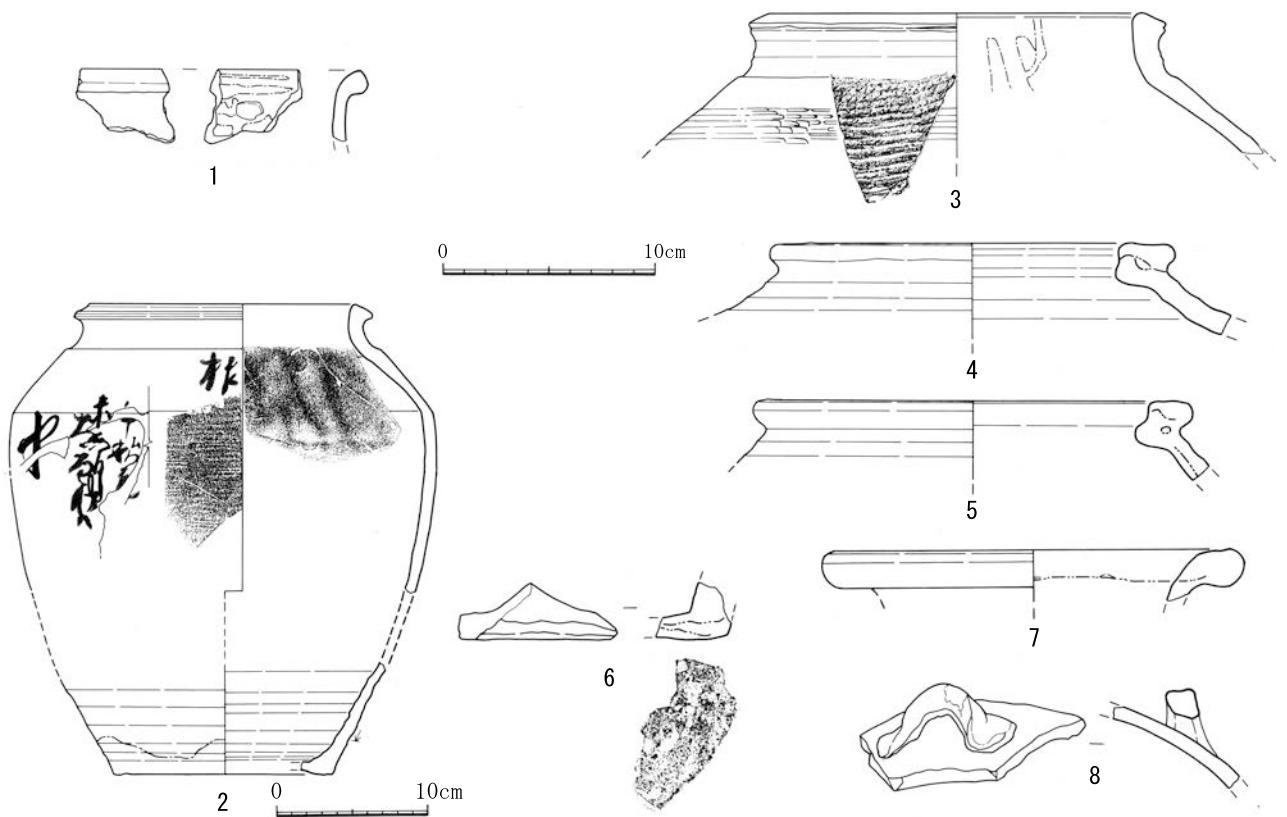
単位:cm

挿図 図版番号	遺物 番号	仮 名稱	分 類	器 種 高 台 径	観察事項・文様構成					施釉・素地・貫入・窯・時代			出 土 地 点 出 土 層
第16図 図版10	1	青磁染付	小碗	10.2 4.6 4.1	口縁が微弱に外反する小碗。釉色は外面が淡青緑色、内面及び高台の外底面が淡青白色を帶びている。呉須が滲みだして釉上に浮遊する。内面の文様は胴部に八卦文(乾の算木)を描き、見込みに花芯には太極図を描いたようであり、花弁を捻花で表現。高台外底面に字款の一部が残存。						疊付を除いて総釉。素地は淡灰白色の細粒子で、劈開面には微細な空気の泡痕が多く観察される。18C後～19C前。		し-13 II層
	2			8.3 - -	やや小振りの外反型の小碗で口縁の外反は微弱である。釉色は外面が淡青緑色、内面が淡青白色を帶びている。呉須はやや鮮明である。内面の文様は型を採用した可能性が高く、界線を口縁(幅広で途切れている)と胴下部(細線)に、胴部の主文は八卦文を描いている。						残存部分は総釉。素地は淡黄色白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が僅かに混入する。貫入はない。18C後～19C前。		し-13 II層
	3			- - -	外反型の小碗で口縁の外反は微弱である。釉色は外面が青緑色、内面が淡灰白色を帶びている。呉須は鮮明である。内面の文様は界線を口縁(二条一组)と胴下部(細線)を施す。胴下部の界線直下に捻花の一部が観察される。						残存部分は総釉。素地は白色の細粒子。貫入はない。18C後～19C前。		し-13 II層
	4			- (4.4)	小碗の高台破片。釉色は外面が淡青緑色、内面及び高台の外底面が淡青白色を帶びている。呉須はやや鮮明であるが、一部の呉須は滲みだして釉上に浮遊する。見込みの花芯には太極図を描き、花弁を捻花で表現。						残存部分は総釉。素地は淡灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物が僅かに観察される。貫入はない。18C後～19C前。		さ-13 II層
	5	瑠璃釉	香炉	16.6 10.3 8.0	口縁が内側にきつく内傾する内彎口縁型の三足香炉で、脚部は半円を三個貼り付けて香炉の足とする。口縁部はルーズな肥厚となっている。釉薬は外面が瑠璃釉で、内面が白色の釉を施している。見込みと外底面が円形状に露胎する。						見込みと外底面が露胎。素地は淡灰白色の微粒子。露胎は露胎。		し・す 13 II層
	6		大鉢	- - -	口縁から胴部に蓮花を表現した大鉢で、口縁部が緩やかに外傾する。釉薬は両面とも瑠璃釉を施している。						残存部分は総釉。素地は淡灰白色の微粒子。露胎は露胎。		し-13 II層
	7		水注	- - -	水注の頸部破片で、内面に注ぎ口の根元を貼り付ける目的で弧状に浅く抉っている。外面は瑠璃釉、内面が淡灰白色の釉薬を施している。						残存部分は総釉。素地は淡灰白色の微粒子。露胎は露胎。		こ-12 II層
	8	黒釉陶器	茶碗	12.8 - -	胴上部から口縁まで丸味を持たせながら立ち上がり、そのまま直口する。口唇部を舌状に尖らせている。口唇部のみ茶黒色の釉が下方に流れ、茶褐色の化粧土が露胎している。						口唇部の化粧土を除いて総釉。灰褐色の粗粒子で、微細な白色や黒色の鉱物を多量に含んでいる。露胎は露胎。		さ-13 II層

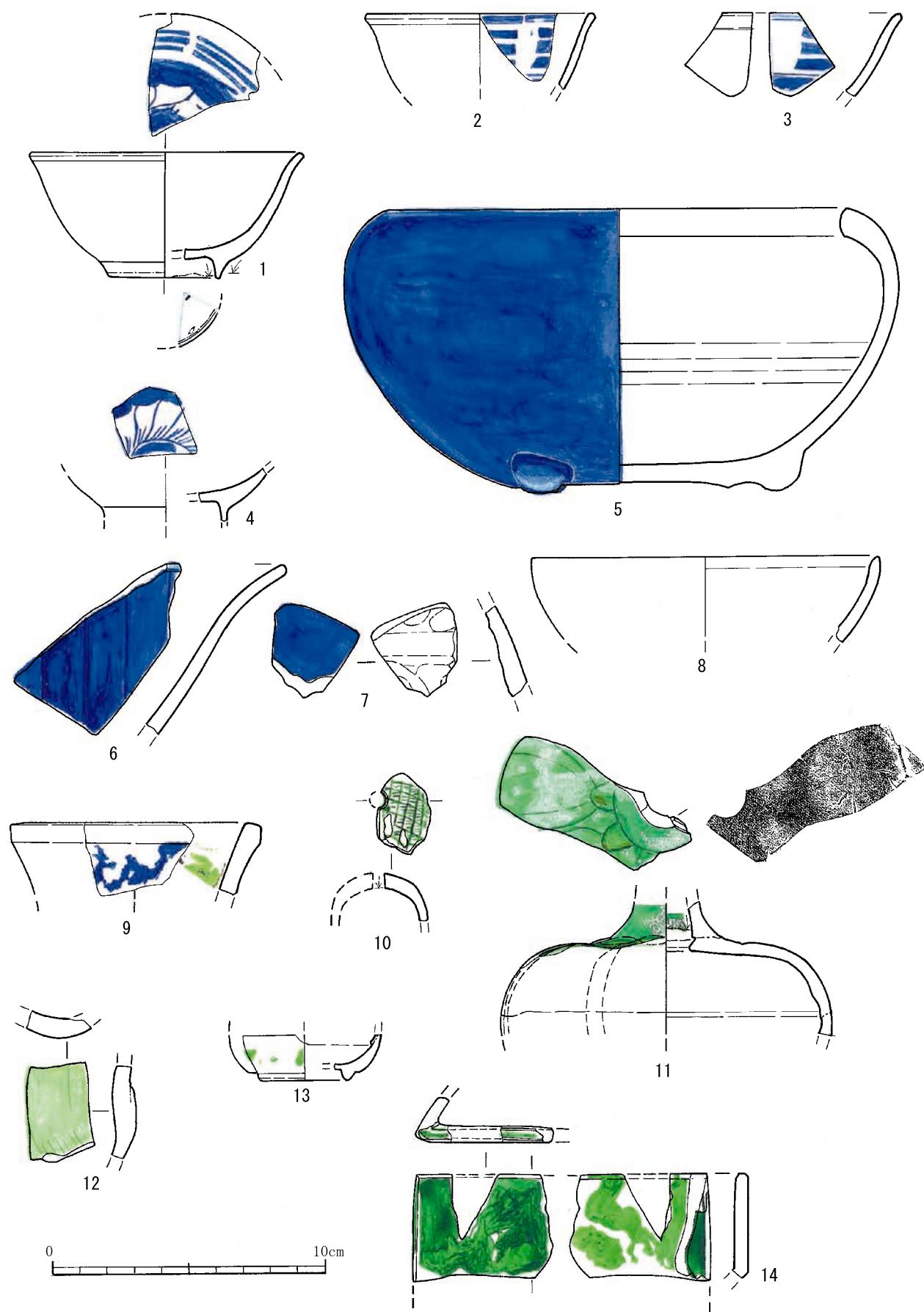
第19表-b その他の輸入陶磁器(中国産・タイ産)観察一覧

単位:cm

挿図 図版 番号	遺物 番号	仮 称	分類	器種 高台径	観察事項・文様構成	施釉・素地・貫入・窯・時代	出土 地点 出土層
第16図 図版10	9	法花	瓶	9.3 -	法花の瓶。瓶の口縁または、高台の破片とみられるが、口縁で図示した。口縁端部を面取を行って口を造る。口唇部は露胎のままである。外面には瑠璃釉を施しているが、大半は剥落する。内面の口縁途中から下に明るい緑色の釉が施されている。	残存部は口唇部を除いて総釉?。黄白色の細粒子。瑠璃釉にのみ細かい貫入がみられる。景德鎮。15C後半~16C。	さ-13 II層
	10	緑釉陶器	水注	- - -	鳥形水注の破片。型物で型同士の接合面から割れている。水注の空気抜きの小孔が鳥の背中に穿たれている。釉は、緑色の一色が使用されたみられる。空気孔の孔部まで施釉されている。内面の調整痕は、指紋まで明瞭に観察される指圧痕を主体として雑に施されている。僅かにナデがみられる。	内面は露胎。軟質(半磁胎)。淡橙白色の細粒子で、微細な黒色鉱物を多く含む。細かい貫入がみられる。福建省及び周辺地域の諸窯。15C後半~16C。	こ-12-13 II層
	11			- - -	型物の水注。鶴形水注の左側面部分で頸下部から肩部根元付近の破片。残存する釉薬は緑釉であるが、釉薬が薄く施されたことにより緑白色を呈している。その為、下地の白化粧土が部分的に露出している。内面の調整痕は主に指圧でなされていて、部分的に指ナデが僅かに施されている。	内面は露胎。軟質(半磁胎)。淡黄白色の細粒子で、微細な茶黒色の鉱物と粗い長石を少量含む。微細な貫入がみられる。福建省及び周辺地域の諸窯。15C後半~16C。	こ-13 I層
	12			- - 3.4	小物の水滴で、高台及び胴部下部は轆轤後に内外面に軽いナデを加えて仕上げている。胴部中央付近の成形は口縁様に平坦に仕上げて、その部分から胴継ぎをおこなっているようである。釉薬は外面及び高台外底面まで施されている。下地の白化粧土の上に淡緑色の釉薬で絵付けをおこなった後に透明釉(ガラス様)を薄く釉掛けして仕上げているようである。透明釉の一部は内面見込みでも観察される。外面には焼成時の自痕(淡橙色の磁胎)がみられる。	内面は基本的に露胎であるが、部分的に透明釉が流れ込んでいる。貫入はない。軟質(半磁胎)。淡黄白色の細粒子で、微細な黒色鉱物と茶褐色の鉱物が少量混入する。劈開面の観察から微細な気泡痕が多くみられる。福建省及び周辺の諸窯。15C後半~16C。	さ-13 II層
	13	緑釉陶器	水注	- - -	銅緑釉を外面に施した瓜型(カボチャ?)水注で、水注の注入口が貼り付けられた胴部片(瓜の身上部と額や茎の部分)。緑釉の一部が窯変し、全体的に白色を呈している。内面は型に陶土を押し込んで成形した際の指圧痕が僅かに観察される程度、指圧痕の大部分は丁寧にナデ消されている。胴下部には胴継ぎの痕跡がみられる。また、上部には注入の孔(推定直径1.6cm)が丁寧に抉られ、この孔の上から注入口となる筒状の陶土を貼り付けている。胴部での最大直径は推定で12.2cmを求める。	外面にのみ施釉。硬質(磁胎)黄白色の微粒子で、劈開面に歪で小さな気泡痕が多く観察される。貫入はない。福建省及び周辺諸窯。15C後半~16C。	さ-13 II層
	14			- - -	型成形の水盤。水盤の底面が欠落し、側面のみ残存する。緑色の釉を内外面に施釉。側面の口部分及び角の縁は両側端を面取や丸味を持たせて仕上げている。	残存する面は施釉。粗い貫入がみられる。軟質(半磁胎)黄白色の細粒子で、細かい長石や茶褐色の鉱物が多量に含まれている。福建省及び周辺諸窯。15C後半~16C。	し-13 II層
第15図 図版10	9   15	急須	皿	- - 5.3	轆轤成形。皿の高台破片。内面に白化粧土の上から瑠璃釉を施す。外面は高台際から外底面まで茶褐色の化粧土を施す。瑠璃釉の表面は微細な気泡痕が無数に観察される。	画面とも施釉。素地は茶褐色の細粒子で微細な白色鉱物を多量に含む。宜興窯。	す-13 II層
	10   16		急須	8.3 12.2 8.9	轆轤成形。高台付きの急須。外面に口縁部から高台脇まで淡茶色の化粧土(自然釉の可能性もある)を薄く施釉したようであり、露胎となっている素地部分との境目は高台外底面を除いて不明瞭である。胴部には主文となる「折枝椿」と「雀」を片切り彫りで描いている。内面の色調は明茶色を主体とし、部分的に白色の化粧土とみられるものが胴部中央で観察される。	外面に施釉?。茶褐色の細粒子で、微細な白色鉱物を多く含んでいる。劈開面に歪な小さな気泡痕が僅かに観察される。宜興窯。	す-13 II層
	11   17	口 縁	急須	7.8 - -	轆轤成形。急須の口縁から胴部上部まで残存する破片。外面には茶褐色の釉を薄く、施すが、釉の一部は内面の口頸部まで及んでいる。内面の色調は、赤茶色を呈している。	外面に施釉。赤茶色の細粒子で、微細な白色鉱物を多く含んでいる。宜興窯。	さ-13 II層
	12   18	底 部	急須	- - 7.8	轆轤成形。急須の底部に円筒状の突起を貼り付けた三足の急須。茶黒色の化粧土を外面に施す。内面の色調は茶褐色を帯びる。	外面に化粧土を施す。茶黒色の微粒子で、微細な白色鉱物を少量含む。宜興窯。	し-13 II層
	13   19	急 須 ・ 蓋	蓋縁 身受	7.0 4.2	撮み(直径2cm)上面は「冂」文を透かし彫り(最小幅2.5mmの箇状金具)で陶土を割り抜いたものを貼り付けている。蓋甲の縁近くから中央部分を浅く窪ませて成形し、蓋甲内面の中心部は轆轤の回転を利用して丁寧に穿孔する。孔の直径は7.5mmを測る。外面の色調は、茶黒色で、内面が茶褐色を呈している。	無釉。茶褐色の微粒子で、微細な白色や黒色の鉱物を微量含む。宜興窯。	し-13 II層
	14   20	急 須 ・ 蓋	蓋縁 身受	6.8 5.8	撮み(直径2.1cm)上面は「冂」文を透かし彫り(最小幅3.1mmの箇状金具)で陶土を割り抜いたものを貼り付けている。蓋甲内面の中心部は轆轤の回転を利用して歪な三角傾向のある梢円を穿孔する。孔の直径は7.0mmを測る。外面の色調は、茶褐色で、内面が茶褐色を呈している。	無釉。茶褐色の微粒子で、微細な白色や黒色の鉱物を微量含む。宜興窯。	し-13 II層
	15   21	撮 み	急 須	- - -	急須の撮み(直径20.6mm)破片。撮み上面には「圈線」のある「冂」文の型を使用して陶土を抜き取って蓋甲中央へ貼り付けている。内面中央には、丁寧な小孔(直径2mm)を穿っている。色調は両面とも淡茶色を呈する。	無釉。茶褐色の微粒子で、微細な白色鉱物が少量混入。劈開面から微細な気泡痕が僅かに観察される。宜興窯。	し-13 II層
	16   22	瓶		- - -	轆轤成形。瓶の胴部破片。胴部の最大直径は7.4cmと推算された。外面に茶褐色の化粧土を施す後に白色の釉薬、若しくは白化粧土を使用して筆書きの「梅枝」文を描いている。内面の色調は茶褐色を帯びている。	外面にのみ茶褐色の化粧土を施す。素地に微粒子な白色や灰色の鉱物を多量に含む。宜興窯。	し-13 II層
第15図 図版10	17   23	土 器 ・ タイ 産	蓋	- - -	タイ産の土製落とし蓋。蓋の復元による最大直径は推算で10.7cmと求められた。蓋縁内面には三角形状の凸帯が丁寧に貼り付けられている。蓋下面の外器面は、器壁の大半が剥落する。内面は逆に成形時の回転擦痕も明瞭に観察できる。	無釉。胎土は腰の強い粘質く、粒子も細かい。胎土には粗い白色や茶褐色の鉱物を多量に含む。タイ。15C~16-17C。	さ-13 II層



第15図 中国産・タイ産褐釉陶器 (1~8) その他の輸入陶磁器1 (9~17)



第16図 その他の輸入陶磁器 2

## 第7節 本土産陶磁器

今回の調査で得られた本土産磁器は総数 3180 点、本土産陶器は総数 313 点。図示した資料 93 点（第 17～25 図）。図示した遺物の釉・素地・出土地区は、観察表（第 20 表）にまとめて載せた。

### 1. 本土産磁器

① **染付**（第 17 図 1～13、第 18 図 15～20）**碗**（1）外面に二頭の馬と野原、見込みに宝の模様。**小碗**（2～8）薩摩産の染付。外面に円形の模様と草花文。見込みには舟（2）。外面に山水文（3）。外面に草花文（4～7）。外面に格子状の模様（8）。**皿**（9～13）内面全体に荒磯文（9）。口縁部形態が輪花形。外面に如意頭文唐草文、内面に菊文と唐草文（10）。小皿の資料で、口縁部の形態が稜花形。外面は如意頭文唐草文、内面は花唐草文、見込みには連続文を環状に廻らす（11）。大皿の資料で、見込みに草花文（12）。見込みに四文字の吉祥文字。「長寿富貴」か？外底面には「眉山国製」と読み取れるが、長崎県の眉山窯製品か？（13）。**鉢**（15、16）口縁部が外反する八角鉢。底部付近になると丸味を帯びる。外面に草花文、見込みに雲文？（15）。八角鉢で、外面に草花文、見込みにも草花文か？内面にも模様が描かれているが判然としない（16）。**瓶**（17、18）楕円形状の胴部を持つ。外面に草花文（17）。底部からそのまま丸味を持って立ち上がる。外面に草花文？（18）。**香炉**（19）円筒状の香炉で、外面に草花文。**蓋**（20）碗の蓋と思われる。蓋甲部に蛸唐草文、撮下に連続文。見込みに二本の圈線、松竹梅文が環状に廻る。② **白磁**（第 17 図 14）**皿**で、口縁部が菊花状に成形。肥前産と思われる。③ **色絵**（第 18 図 21～27）**碗**（21）外面に明緑色の上絵により草の模様が描かれている。**段重**（22）円筒形で、外面の楕円形状の窓に赤、黄、緑色を使った草花文が、窓外に赤色の上絵を塗った後白抜きの草花文と半円状の絵が描かれている。**皿**（23）長方形の角皿。外面に草花文、内面口縁部に網状の模様、内面胴部に上絵がされていたようで、円形状の模様が見られる。**猪口**（24）六角形状で、外面に明黄色、赤色の上絵が施されているが、模様が判然としない。**小壺**（25）胴部に絵付けがなされているが判然としない。**器種不明**（26）甲部は菊の形状に成形されていて、貫通しない孔が穿たれている。登頂部と鍔部は赤色の上絵が塗られていた跡がある。**蓋**（27）小壺の蓋と思われるもの。外面に片切り彫りの花文？と、緑色の絵付けがなされているが、判然としない。④ **薩摩磁器**（第 19 図 44）徳利で、釉が鮫肌状に浮き出ている。⑤ **印判染付**（第 21～25 図）今回出土した印判染付は、砥部産が中心である。**碗**（1～24）外面に煉瓦状斜線地に、円形の窓（中に鶴）、腰部に鋸歯状の連続文。内面口縁部には煉瓦模様の地に「福寿」の文字。見込みには松竹梅文と一本の圈線（1）。外面は斑点の地で、五弁花形の窓（中に鶴）、幾何学文の窓（中に吉祥文字）、これらを交互に配置。腰部に三角形状の連続文。内面口縁部に松竹梅文。見込みに鶴と一本の圈線（2）。外面は斜格子状地で、幾何学文の窓の中に、桐文と五弁花形の窓（中に桔梗文？）が交互に入る。内面口縁部と見込みに一本の圈線（3）。外面は点描文地に、菱形の窓（中には花文？）。内面口縁部には点描文の地で菱形の窓に花文？見込みに松竹梅文と一本の圈線（4）。外面は点描文地で、菱形の窓に菊花文と三角文を円形状に組み合わせた模様。腰部に三角状の連続文。内面口縁部に点描文の地に三角形の連続文。見込みに松竹梅文と一本の圈線（5）。外面は点描文地で、八弁花形の窓に菊花文と三角形を組み合わせた模様。内面口縁部には、横線の地に縦線の入る菱形状の模様。見込みには松竹梅文と一本の圈線（6）。外面全体に梅花文、腰部に蓮弁の連続文。内面口縁部に蛸唐草文の地に五弁花文。見込みに梅花文と一本の圈線（7）。外面は唐草文地に五弁花文、腰部に蓮弁の連続文。口縁部内面に逆三角形状の連続文、見込みに柘榴文と一本の圈線（8）。外面は唐草文地に菊花文、腰部に蓮弁の連続文。内面口縁部に逆三角形状の連続文。見込みに柘榴文と一本の圈線（9）。外面に唐草文地に菊花文、腰部に蓮弁の連続文。内面口縁部に五弁花文。見込みに竹文と二本の圈線（10）。外面は、桔梗（？）のような五弁花文地に牡丹文。内面口縁部には五弁花文が廻る。見込みに柘榴文と一本の圈線（11）。外面に唐草文地に牡丹文と亀甲文（中に菊花文）。内面口縁部に逆三角形状の模様に花のつぼみを付けたような連続文。見込みに柘榴文と一本の圈線（12）。外面に様々な花文と、腰部に蓮弁の連続文。口縁部内面に逆三角形状の連続文。見込みに柘榴文と一本の圈線（13）。外面全体に幾何学文地で、円形状の窓に菊花文、円形の窓に寿文、下部に三角形状の連続文。口縁部内面に幾何学文地に菊花文と寿文を交互に配置。見込みに五弁花文と一本の圈線（14）。外面は蛸唐草文地に「寿福」の組み合わせ。腰部に蓮弁の連続文。口縁部内面に蛸唐草文地に「寿」と「福」を交互に配置。見込みに麒麟文と一本の圈線（15）。外面に水仙文。口縁部内面に水仙の連続文。見込みに圈線が微かに見える（16）。外面胴部は点描地に縦長の窓（中に菊花草文）腰部に二本、高台に一本の圈線。口縁部内面に逆三角形状の文様。見込みに松竹梅文と一本の圈線（17）。外面は幾何学文地に卒塔婆状の窓（中は吉祥文字）。内面口縁部に二本の圈線と、見込みに一本の圈線（18）。外面は点描文地と青海波文地に挟まるように窓がある（中は円形？と雲？の模様が入る）。見込みには一本の圈線（19）。外面は馬蹄文、桜と牡丹文が入る窓、青海波文が交互に並ぶ。腰部に蓮弁の連続文。口縁部内面に逆三角形状の連続文。見込みに牡丹文と二本の圈線（20）。外面に「赤壁の戦い」についての詩と絵が描かれていると思われる（21）。

見込みに模様が入っていない。それ以外は 15 と同じ模様(22)。外面に鳳凰文。口縁に一本、腰部に二本、高台に一本の圈線。内面は口縁部と見込みにそれぞれ一本の圈線(23)。外面は点描文地に松。腰部に蓮弁の連續文。口縁部内面に逆三角形状の連續文(24)。**皿**(26~30)外面に菊唐草文、腰部と高台に圈線が一本ずつ入る。内面に馬蹄文地に笛・松。見込みに松竹梅文と檜垣文(26)。外面に蔓草文、腰部と高台に圈線が一本ずつ入る。内面は点描文地に三つの窓(それぞれ松、竹、梅の模様が入る)。見込みに松竹梅文と檜垣文(27)。外面に花唐草文、腰部に一本、高台に二本の圈線。内面は花文地に牡丹文と、幾何学文の窓。見込みには松竹梅文と鋸歯上の連續文(28)。内面は、点描地に歪みのある窓(中には菊唐草文?)。見込みには菊花文(29)。内面は全体的に仙芝文が、見込みには小振りな菊花文(30)。**鉢**(25、31~33)八角鉢で、外面胴部に模様が描かれているが判然としない。内面は、器の形状に合わせた模様毎の区画が二つ確認されており、一つは四方櫛文の枠で縁取られた窓内に、花文。隣の区画には桜文?見込みには判然としない模様と、一本の線が器の形状に沿って引かれている(25)。外面には菊花文。内面は花文地に大きい円形状の窓(中には菊花文と草花文)、小さい円形の窓(中は青海波文)(31)。外面胴部から内面胴部にかけて青海波文地に両面ともに円形の窓(中には水仙文)と、四方櫛文を交互に描くと思われる。外面腰部に模様が入るが、判然としない。見込みに一本の圈線(32)。外面に雲文?内面に亀甲文地(中に桜文)(33)。**香炉**(34)外面口縁部に亀甲文地(中に菊花文)と青海波文地が区分けされていて、交互に並ぶ。胴部に菊と竹。胴下部に蓮弁の連續文。**蓋**(35)撮部に二本の圈線。甲面に四方櫛文地に桜形の窓(中に菊花文?)。内面の蓋縁部に三角形状の連續文。見込みに松竹梅文と一本の圈線。**徳利**(36)外面口唇部に逆三角形状の連續文。胴部は雲と鳥が吹付けで絵付けされている。

## 2. 本土産陶器

① **珉平焼**(第 18 図 28~35)珉平焼は現在の兵庫県淡路島で製作されたもの。**緑釉**(28~32)4 点とも小型である。**角皿**(28~30)皿見込みに文様が陰刻されているが判然としない(28)。底部の資料。見込みに陽刻の花文が型押されている(29)。底部の資料。見込みに文様が陰刻されているが、判然としない(30)。**丸皿**(31、32)底部の資料。見込みに龍が陰刻されている(31)。底部の資料(32)。**黄釉**(33~35)**皿**(33、34)小判型で、底部の資料。見込みに龍が陰刻されている(33)。口縁部から底部にかけての資料で、多角形状の角皿と思われ、内面に蓮弁の窓が陽刻されている(34)。**小杯**(35)底部の資料。② **関西系陶器**(第 18 図 36、37、第 19 図 39、40、41)**碗**(36)内面に杉文の絵付けがされている。**瓶?**(37)底部資料か。**皿**(39)京焼風陶器で、底部資料。見込みに鉄絵で山水文。外底面中央に「柴」の文字が陰刻。**鉢**(40)見込みに積跡が見られる。**蓋**(41)甲部に三本の沈線が入る。③ **唐津焼?**(第 19 図 38)鉢で、見込みに鉄絵で千鳥文。内面の口唇部から胴部にかけて波を表現した模様。④ **薩摩焼**(第 19 図 42、43、45)**瓶**(43)釉が粗雑な鮫肌状に浮き出ている。**蓋**(45)見込みに「照喜名」の文字。釉が鮫肌状に浮き出している。**鉢**(42)釉が鮫肌状に浮き出ている。⑤ **薩摩褐釉**(第 19 図 46、第 20 図 47~57)**皿**(46)見込みに積跡が見られる。**壺**(47~57)口縁部の資料(47~50)。耳付きの資料(51、52)。外面に釉剥ぎによる草花文。口縁部外側に二本の沈線。口唇部が内側に細く突出(53)。底部を平坦に成形(54~56)。胴部に二つの突帯文。上部の突帯文には、右上から左下に向かっての切り込みが連続して廻る。(57)。

第20表 本土産陶磁器観察一覧

単位:cm

挿図番号 図版番号	遺物 番号	種類	器種・ 分類	部位	口径/ 撮径	器高	底径/ 外形	観察事項・出土地
第17図 図版11	1	本土 産 磁 器	染 付	碗	完	11	6.5	4.8 透明の釉。豊付けは釉剥ぎ。素地は白色。さ-13・II層。
第17図 図版11	2			完	8.9	4.8	3.7 僅かに白濁した釉。豊付けは釉剥ぎ。素地は黄橙色。す-13・II層。	
第17図 図版11	3			完	8	4.5	3.1 透明の釉。素地は白色。し-13・II層。	
第17図 図版11	4			小碗	8.9	4.8	3.2 僅かに青味を帯びた透明の釉。豊付けは釉剥ぎ。素地は白色。す-13・II層。	
第17図 図版11	5			口	9.1	-	- 透明の釉。素地は白色。し-13・II層。	
第17図 図版11	6			底	-	-	3.9 僅かに青味を帯びた透明の釉。豊付けは釉剥ぎ。素地は白色。さ-12・II層。	
第17図 図版11	7			口～底	8.8	-	2.8 僅かに青味を帯びた透明の釉。豊付けは釉剥ぎ。素地は白色。す-13・II層。	
第17図 図版11	8			口	6.4	-	- 透明の釉。素地は灰白色。し-13・II層。	
第17図 図版11	9		皿	完	12.5	-	7.2 僅かに青味を帯びた透明の釉。外底は蛇の目高台・蛇の目釉剥ぎ。素地は白色。す-13・II層。	
第17図 図版11	10			完	14.2	4.45	8.6 透明の釉。素地は灰白色。し-13・II層。	
第17図 図版11	11			完	10.4	2.7	6 僅かに青味を帯びた透明の釉。素地は白色。こ-13・II層。	
第17図 図版11	12			底	-	-	12.4 僅かに青味を帯びた透明の釉。豊付けは釉剥ぎ。素地は白色。し-13・II層。	
第17図 図版11	13			底	-	-	- 僅かに青味を帯びた透明の釉。素地は白色。さ-13・II層。	

第21表 本土産陶磁器観察一覧

単位:cm

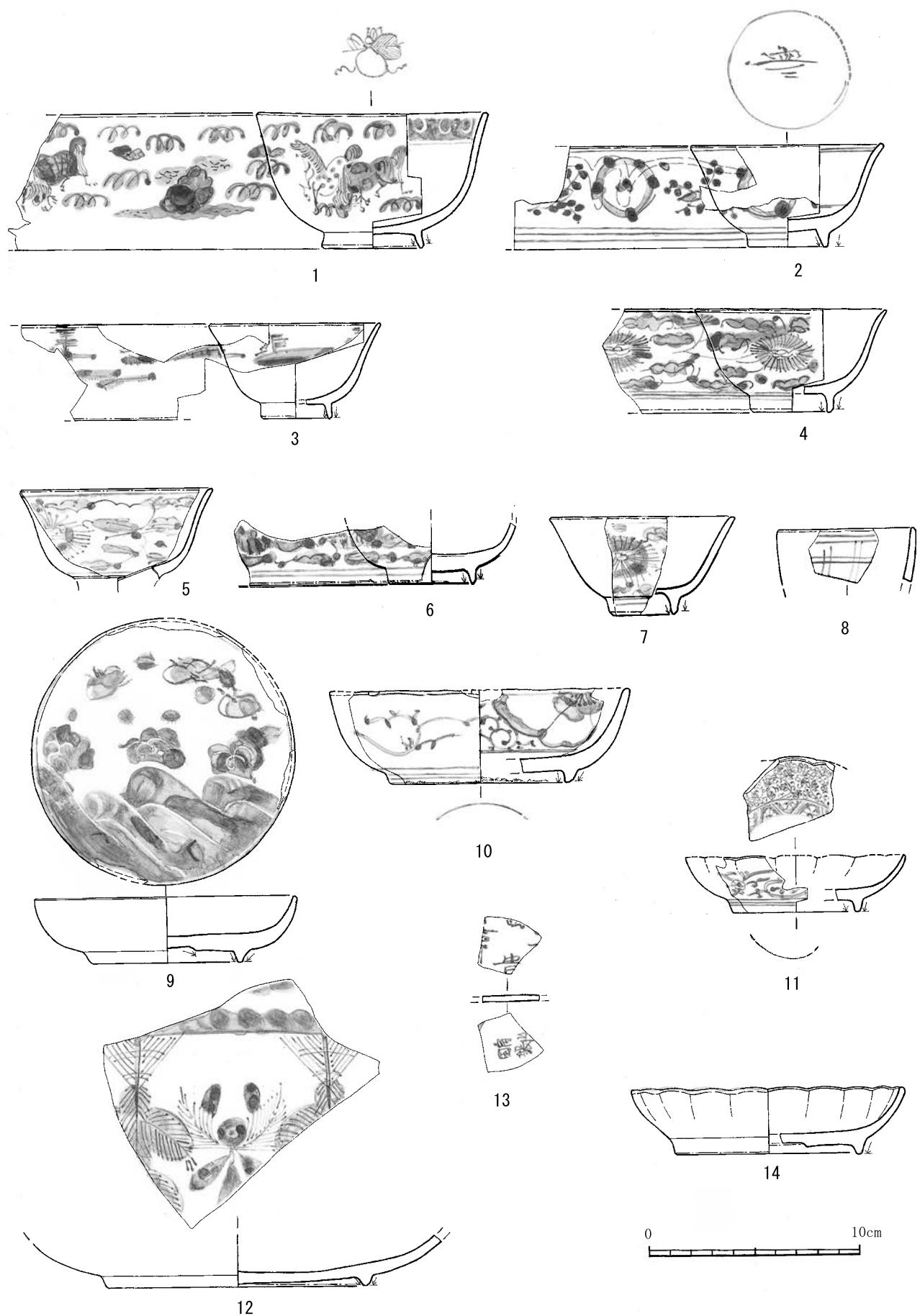
捕団番号 図版番号	遺物 番号	種類	器種・ 分類	部位	口径/ 撮径	器高	底径/ 外形	観察事項・出土地
第17図 図版11	14	染付	白磁	皿	口～底	13	3.2	8.8 白色の釉。外底は蛇の目高台・蛇の目釉剥ぎ。口唇部には鋲釉が掛かる。素地は灰白色。し-13・II層。
第18図 図版12	15			鉢	胴～底	-	-	6.9 僅かに青味を帯びた透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。こ-13・I層。
第18図 図版13	16			鉢	胴～底	-	-	8.1 僅かに青味を帯びた透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。し-13・II層。
第18図 図版14	17		瓶	胴～底	-	-	4.9	僅かに青味を帯びた透明の釉を外面のみ施す。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。こ-13・II層。
第18図 図版15	18			胴～底	-	-	4.6	僅かに白濁した釉を外面のみ施す。底部付近から外底まで釉剥ぎ。素地は白色。し-13・II層。
第18図 図版16	19		香炉	胴～底	-	-	8.8	透明の釉。内面胴部下から内底まで露胎。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。こ-13・II層。
第18図 図版17	20		蓋	撮	3.7	-	-	僅かに青味を帯びた透明の釉。撮上部は釉剥ぎ。素地は白色。さ-13・II層。
第18図 図版18	21	色絵	碗	口～胴	10.7	-	-	透明の釉。素地は白色。し-13・II層。
第18図 図版19	22		段重	口～底	15.4	-	-	僅かに青みを帯びた透明の釉を施すが、上部と下部は釉剥ぎ。素地は白色。し-13・II層。
第18図 図版20	23		皿	口～底	-	3.6	-	僅かに青味を帯びた透明の釉。素地は白色。す-13・II層。
第18図 図版21	24		猪口	完	3.2	2.4	2.1	白色の釉。外面腰部から外底にかけて釉剥ぎされている。素地は白色。す-13・II層。
第18図 図版22	25		小壺	口	5.1	-	-	僅かに白濁した透明の釉。素地は白色。さ-13・II層。
第18図 図版23	26		器種不明	不明	0.7	1.15	27.5	透明の釉。素地は灰白色。さ-13・II層。
第18図 図版24	27		蓋	甲～縁	-	-	12.2	蓋甲部では明緑色の釉、内面には僅かに白濁した透明な釉を施す。蓋と壺が接する部は釉剥ぎされている。素地は白色。こ-13・I層。
第18図 図版25	28	淡 珉路 平島 焼 /	皿	口～底	-	-	-	緑色の釉。素地は浅黄橙色。さ-13・II層。
第18図 図版26	29			-	-	-	-	緑色の釉。素地は浅黄橙色。し-13・II層。
第18図 図版27	30			-	-	-	-	緑色の釉。素地は浅黄橙色。さ-13・II層。
第18図 図版28	31			-	-	-	-	緑色の釉。素地は浅黄橙色。す-13・II層。
第18図 図版29	32			-	-	-	-	緑色の釉。素地は浅黄橙色。す-13・II層。
第18図 図版30	33			-	-	-	-	黄色の釉。素地は浅黄橙色。す-13・II層。
第18図 図版31	34			口～底	-	-	7.5	黄色の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は浅黄橙色。す-13・II層。
第18図 図版32	35		小杯	底	-	-	3.8	黄褐色の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は浅黄橙色。こ-13・I層。
第18図 図版33	36	関西	碗	胴～底	-	-	7.1	暗褐色の薄い釉。素地は褐色。さ-13・I層。
第18図 図版34	37		瓶?	底?	-	-	10.7	素地は褐色。し-13・II層。
第19図 図版13	38	本土 産陶器	唐津	鉢	口～底	12.4	5.2	5.1 全体に透明の釉が掛かるが、外面腰部から外底面にかけて釉剥ぎ。口唇部に鋲釉が掛かる。素地は口縁部から腰部にかけて灰色の粗粒子。腰部から外底面にかけて橙白色土。し-13・II層。
第19図 図版13	39		関西	皿	胴～底	-	-	2.6 透明の釉。高台脇から外底面まで釉剥ぎ。素地は橙色。さ-13・II層。
第19図 図版13	40			鉢	胴～底	-	-	8 透明の釉。高台脇から外底面にかけて露胎。素地黄橙色。す-13・II層。
第19図 図版13	41		薩摩	瓶	口～底	4.8	14.65	8.2 灰黄褐色の釉。口唇部と畠付けは釉剥ぎ。素地は浅黄橙色。し-13・II層。
第19図 図版13	42		薩摩磁器	徳利	底	-	-	- 白色の釉が外面のみ掛かる。素地は白色。し-13・II層。
第19図 図版13	43		薩摩	蓋	完	8.6	2.9	6.4 暗灰黃色の釉を甲部のみ施す。蓋置き部から内面にかけて露胎。素地は灰褐色。さ-13・II層。
第19図 図版13	44		関西	蓋	撮～縁	16.5	4.4	5.15 にぶい黄色の釉。撮上面、蓋口は釉剥ぎ。素地は淡黄色。す-13・II層。
第19図 図版13	45		薩摩	鉢	胴～底	-	-	12 にぶい黄褐色の釉。見込みと、畠付けから外底面は露胎。素地はにぶい黄橙色。し-13・II層。
第19図 図版13	46		薩 摩 褐 釉	皿	底	-	-	10.8 黒褐色の釉。腰部から高台脇まで釉剥ぎ。高台脇から外底面は露胎。素地は褐灰色。し-13・II層。
第19図 図版14	47			-	-	12.8	-	- 黄褐色の釉。口唇部は釉剥ぎ。素地はにぶい赤褐色。す-13・II層。
第19図 図版14	48			-	-	15	-	- 暗灰黃色の釉。口唇部は釉剥ぎ。素地は明赤褐色。す-13・II層。
第19図 図版14	49			-	-	15	-	- 黑褐色の釉。口唇部は釉剥ぎ。素地は褐灰色。さ-13・II層。
第19図 図版14	50			-	-	18.4	-	- 暗褐色の釉。素地は明赤褐色。し-13・II層。
第19図 図版14	51			口～胴	18.4	-	-	黒褐色の釉。口唇部は釉剥ぎ。内面は露胎。素地は褐色。す-13・II層。

第22表 本土産陶磁器観察一覧

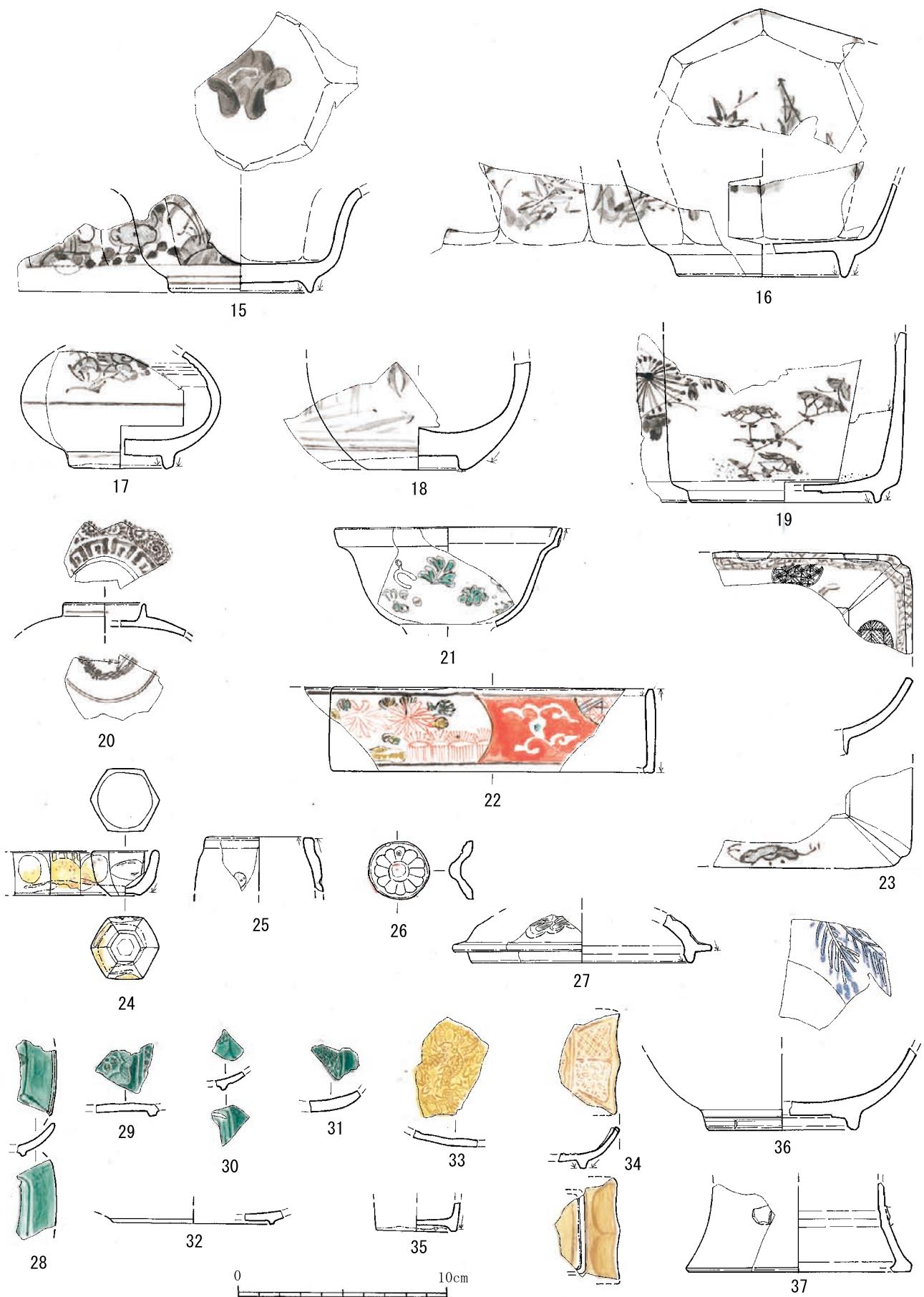
単位:cm

挿図番号 図版番号	遺物 番号	種類	器種・ 分類	部位	口径/ 縁径	器高	底径/ 撮径	観察事項		
第20図 図版14	52	本土 産 陶 器	薩摩 褐 釉	口～胴	19	—	—	黒褐色の釉。口唇部は釉剥ぎ。素地は橙色。し-13・II層。		
第20図 図版14	53				31	—	—	黒褐色の釉。口唇部は釉剥ぎ。素地は明赤褐色。す-13・II層。		
第20図 図版14	54				—	—	15	黒褐色の釉。外底面は露胎。素地は暗褐色。す-13・II層。		
第20図 図版14	55			底	—	—	16	黒褐色の釉。素地は褐色。さ-13・II層。		
第20図 図版14	56				—	—	14.4	黒褐色の釉。素地は暗赤灰色。さ-13・II層。		
第20図 図版14	57			胴	—	—	—	褐色の釉。内面は釉が落ちている。素地は明赤褐色。さ-13・II層。		
第21図	1	印 判 染 付	底部	碗	完	14.2	6	5.35 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は浅黄色。し・す-13・II層。		
第21図	2				口～底	12.3	5	4.4 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地白色。す-13・II層。		
第21図	3		瀬戸美濃	碗	口～底	11.6	4.7	4.4 透明の釉。見込み(蛇の目状)・畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。し-13・II層。		
第21図	4			碗	完	10.7	5.5	4.6 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は灰白色。し-13・II層。		
第21図	5				口～底	12.9	6.5	4.8 透明の釉。素地は灰白色。さ-13・II層。		
第21図	6				完	10.5	6.5	4.1 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は灰白色。し・す-13・II層。		
第22図	7				口～底	13.6	5.6	4.7 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。し・す-13・II層。		
第22図	8				完	14.5	6.2	5.7 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は浅黄色。さ-13・II層。		
第22図	9				口～底	13	5.8	5 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は灰白色。こ-12・I層・さ-13・II層。		
第22図	10				口～底	13.5	6.3	5 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。さ-13・II層。		
第22図	11			碗	瀬戸美濃	碗	口～底	13.8	6.2	4.8 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。さ-13・II層。
第22図	12				口～底	14.7	6.9	5.2 透明の釉。畳付け釉剥ぎ。素地は白色。さ-13・II層。		
第23図	13				完	13.7	6.4	4.8 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は灰白色。こ・さ-13・II層。		
第23図	14				完	13	5.6	4.9 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。出土地区不明。		
第23図	15				口～底	11.3	6.2	4.5 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。す-13・II層。		
第23図	16				口～胴	13.5	—	— 透明の釉。素地は白色。す-13・II層。		
第23図	17				口～底	11	5.8	4.4 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は灰白色。す-13・II層。		
第23図	18				口～底	11.7	5.9	4.7 透明の釉。見込み(蛇の目状)・畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。し-13・II層。		
第24図	19				口～底	11.5	5.2	4.2 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は灰白色。す-13・II層。		
第24図	20	瀬戸美濃	碗?	口～底	8.4	3.9	3.3 透明の釉。素地は灰白色。こ-13・I層・す-12・I層。			
第24図	21		碗	口～底	12.9	5.1	4.7 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。し-13・II層。			
第24図	22		碗	完	12	5.8	5 透明の釉。見込み(蛇の目状)・畳付けは釉剥ぎ。素地は灰白色。し-13・II層。			
第24図	23			口～底	11.5	5	4.6 透明の釉。見込みに砂目が付く。素地は灰色。さ-13・II層。			
第24図	24			口～底	11.5	4.9	3.8 透明の釉。素地は白色。こ-12・I層。			
第24図	25		鉢	底	—	—	— 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。こ-13・I層。			
第24図	26			皿	完	13	3.3	8.7 透明の釉。外底は蛇の目高台・蛇の目釉剥ぎ。素地は白色。し-13・II層。		
第24図	27				完	13.2	3.4	8.15 透明の釉。外底は蛇の目高台・蛇の目釉剥ぎ。素地は白色。さ-13・II層。		
第24図	28				完	14.6	4.1	8.6 透明の釉。蛇の目高台・蛇の目釉剥ぎ。素地は白色。さ-13・II層。		
第25図	29				口～底	14.5	1.6	6.7 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は灰色。さ-13・II層。		
第25図	30		鉢	口～底	10.8	2.9	6.4 透明の釉。畳付けは釉剥ぎ。素地は白色。し-13・II層。			
第25図	31			口～底	18.1	4.9	10.9 透明の釉。畳付けから外底面は釉剥ぎ。素地は浅黄色。し-13・II層。			
第25図	32			口	18.2	—	— 透明の釉。素地は灰色。さ-13・II層。			
第25図	33		香炉	口～底	22.3	—	— 透明の釉。素地は灰色。し-13・II層。			
第25図	34			口～底	11.2	9.3	11 透明の釉。内面・外底面は釉剥ぎ。素地は浅黄色。し-13・II層。			
第25図	35	蓋	撮～縁	撮～縁	8.1	2.1	3.8 透明の釉。撮上部は釉剥ぎ。素地は灰色。す-14・I層。			
第25図	36		德利	完	3	17.1	5.3 透明の釉。外底は無釉。素地は灰色。す-13・II層。			

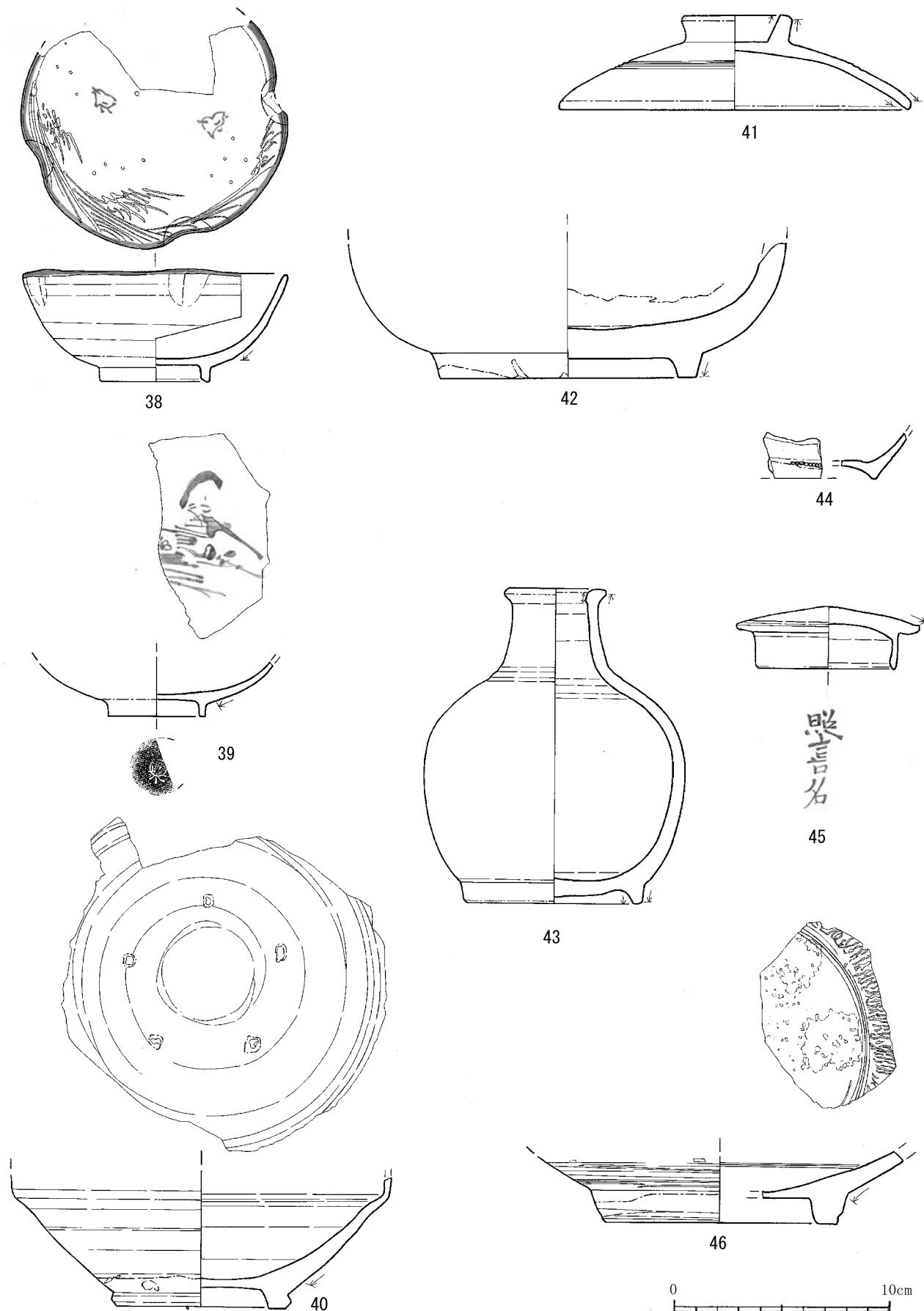




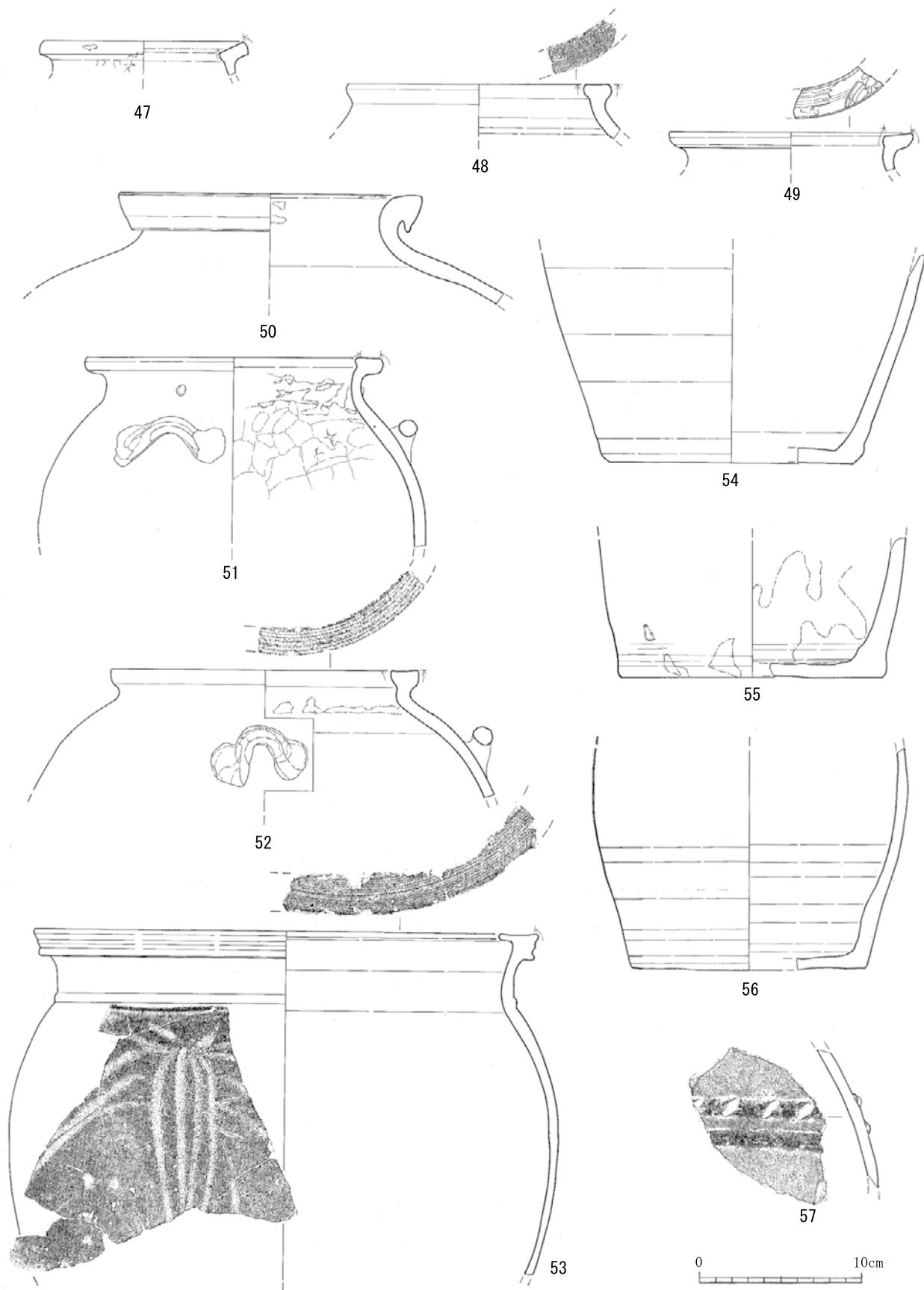
第17図 本土産陶磁器 1



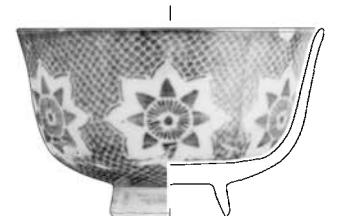
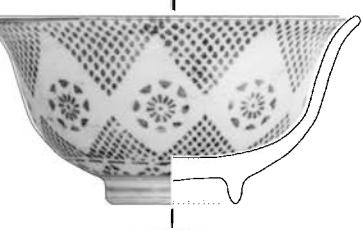
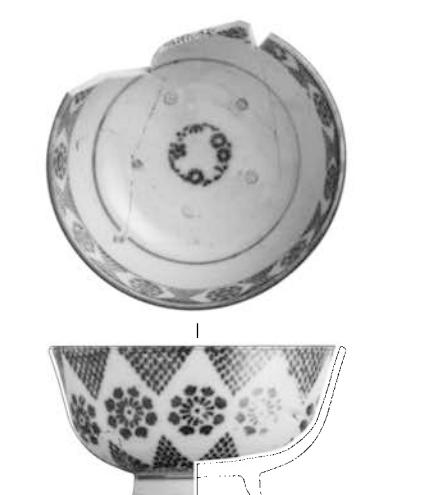
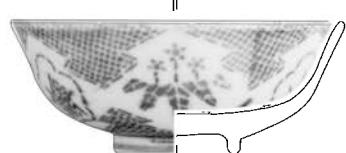
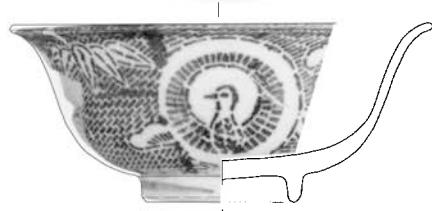
第18図 本土産陶磁器 2



第19図 本土産陶磁器 3



第20図 本土産陶磁器 4



4

5

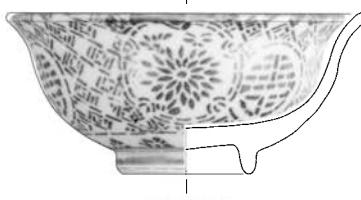
6



第21図 印判手 1



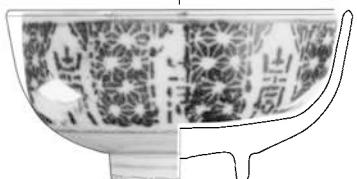
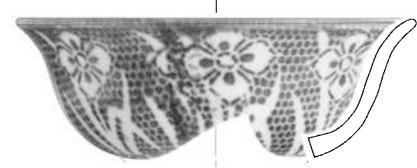
第22図 印判手2



13

14

15



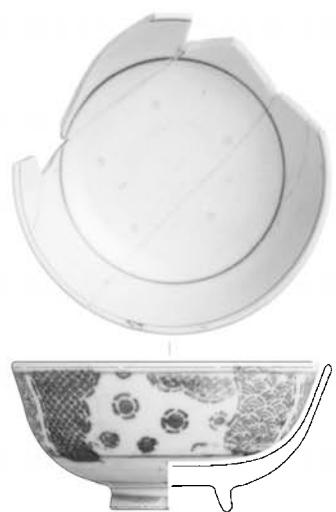
16

17

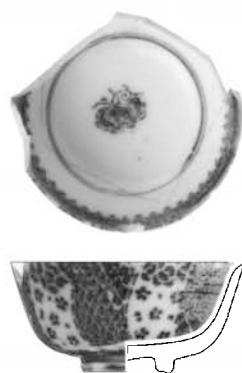
18



第23図 印判手3



19



20



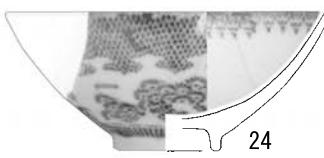
21



22



23



24



25



27



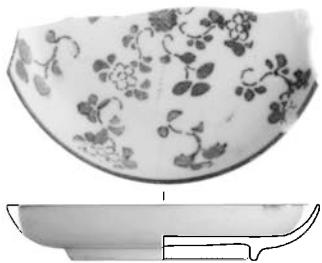
28

第24図 印判手4

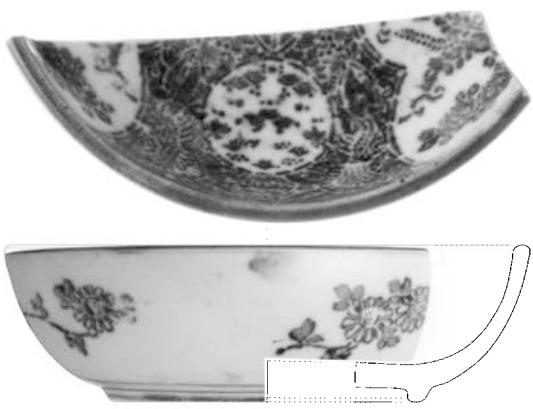
0 10cm



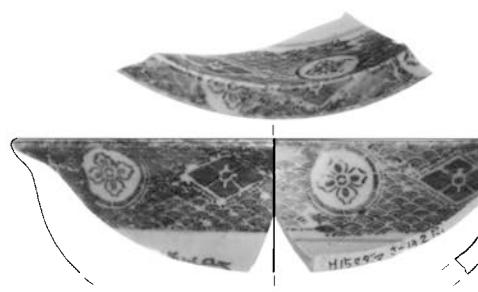
29



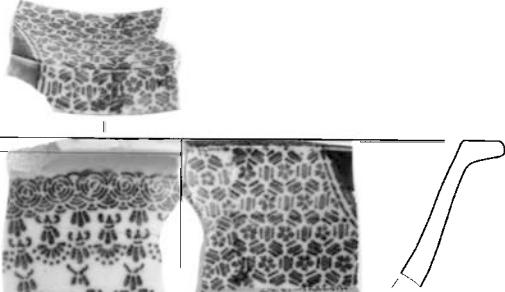
30



31



32



33



1



34



35



36

第25図 印判手5

## 第8節 沖縄産施釉陶器

方言で「上焼(ジョウヤチ)」と言われる、器面に釉薬を施す陶器である。本遺跡出土の遺物のなかで最も多い割合で出土しており、碗や皿などの日用雑器を中心として多種多様な器種が確認できる。施釉する釉薬は灰釉・鉄釉・透明釉・緑釉などで、なかには呉須などで上絵を施すものも見られる。本遺跡で確認された沖縄産施釉陶器には碗・皿・小杯・鉢・火取・火炉・香炉・鍋・急須・酒器・瓶・壺・灯明具・水滴がある。ここでは各器種ごとの分類概念を記し、個々の詳細な特徴については観察表に呈示する(第35~39表)。なお、集計に関しては個体数の確認に主眼を置くため胴部片についてはカウントしていない。

第34表 沖縄産施釉陶器出土状況一覧

器種・部位	出土地				器種・部位	出土地				器種・部位	出土地						
	複乱・表探 I層・不明	II層	III層	石積		複乱・表探 I層・不明	II層	III層	石積		複乱・表探 I層・不明	II層	III層	石積	小計		
碗	完形	1	4		5	火炉	口縁～底部	2	4		6	酒器	蓋	1	8	9	
	口縁～底部	19	176		3		口縁部	15	24		39		口縁～底部		1	1	
	口縁部	537	1162	5	5		取手		1		1		口縁部	1	10	11	
	底部	156	554		2		底部	1	7		8		注口	2	5	7	
小碗	完形		3		3	香炉	口縁～底部	1	4		5		底部	8	26	34	
	口縁～底部	13	128		141		口縁部	3	2		5		堀	口縁～底部	2	2	
	口縁部	55	251		2		底部	1	9		10		堀の蓋	堀の蓋	1	1	
	底部	33	94		2		口縁～底部		9		9	瓶	縁部～つまみ				
筒形碗	口縁～底部	1			1	鍋	口縁部	3	35	1	39		口縁～底部		1	1	
	口縁～底部		3		3		底部	2	23		1		口縁部	3	12	15	
	口縁部		1		1		縁部～つまみ	1	4		5		耳	1		1	
小皿	完形		1		1		縁部	4	27		31		底部	10	41	51	
	口縁～底部	1	4		5		口縁～底部	2	14		16		口縁～底部		4	4	
	口縁部	6	36		1		口縁部	27	101		128		口縁部	3	27	1	31
皿	口縁～底部	36	105		2	急須	耳	4	17		21	壺	耳	3	16	21	
	口縁部		6		43		注口	14	32		46		底部	15	26	41	
	底部	7	30		37		取手	5	16		21		童の蓋	縁部～つまみ	1	1	
鉢	口縁～底部	90	358	2	1		底部	22	111	1	135		縁部	6	8	14	
	口縁部		38		88		完形	6	12		18		袋物	口縁部	1	2	3
	底部		2		2		急須の蓋	縁部～つまみ	4	17		21	口縁～底部	1	2	3	
片口鉢	口縁～底部		1		6		縁部	2	30		23	灯明具	底部	3		3	
	口縁部		8		63		蓋		1		1	小計	55	196	3	254	
	底部		9		28		縁部～つまみ					合計	1191	3835	10	25	5061
	小計	1017	3139	8	20	4184	小計	119	500	2	2	614					

### 1. 碗(第26図1~8)(図版15-1~15)

I類 灰釉单掛けの碗。高台脇からやや丸みを持って口縁部まで開きながら立ち上がる。

I類-Aa 浸し掛けによって胴下半部まで灰釉を施す。(第26図1)

〃-Ab 浸し掛けによって灰釉を施し、内底部に丸文を施す。

〃-B 器面全体に施釉後、畳付と内底部の釉薬を蛇の目状に剥ぎ取る。

II類 鉄釉を施す。鉄釉单掛けのものと、掛け分けを行うものがある。(第26図2)(図版15-2~5)

II類-Aa 浸し掛けによって胴下半部まで鉄釉を施し、内底部に丸文を施す。(第26図2)

〃-Ab 浸し掛けによって胴下半部まで鉄釉を施す。

II類-B 器面全体に施釉後、畳付と内底部の釉薬を蛇の目状に剥ぎ取る。

〃-Ba 外面には鉄釉を施し、内面には透明釉か灰釉を施す。(図版15-3・4)

〃-Bb 内・外両面に鉄釉を施す。

II類-c 器面に白土を塗布し、その上に鉄釉を施す。(図版15-5)

III類 器面に白土を塗布し(いわゆる白化粧)、その上に透明釉を施釉する。畳付と内底部の釉薬を蛇の目状に剥ぎ取る。(第26図3~5)(図版15-6~11)

III類-Aa 無文。胴部はやや丸みをもち、口縁部まで開きながら立ち上がる。口縁部は外反する。

〃-Ab 無文で、内底面は蛇の目釉剥ぎを施さない。腰部で丸みをもち、口縁部までほぼ直線的に立ち上がる。口縁部はやや厚く、玉縁状になる。(第26図3)

III類-b 吳須等で絵付けを施す。(第26図4)

III類-c 篓状の工具や飛び鉋などで線刻を施す。(図版15-10)

III類-d 赤・黄色などの絵の具で上絵を施す。(第26図5)

その他 I~III類に属しない、本遺跡出土のなかで特殊なものはここに記す。

・腰部で丸みをもち、口縁部へ直線的に立ち上がる。胴部最大径と口径がほぼ等しい、筒碗に近いタイプ。(図版15-12)

・高台から口縁部まで斜めにストレートに立ち上がる。底径が口径に比して小さい。(第26図6)

・口縁部に段を有する。小鉢と思われるが、やや深いタイプのため碗に含めた。(第26図7)

・筒状の碗で、素地は微細できめ細かい。(第26図8)

## 2. 小碗(第26図9・10)(図版16-16-26)

I類 鉄釉を施す。高台脇から口縁部までやや丸みをもって開きながら立ち上がる。口縁部は外反する。

I類-a 鉄釉を浸し掛けによって施釉する。

I類-b 外面は鉄釉、内面は透明釉または灰釉の掛け分けを行う。(図版16-16・17)

II類 白土を塗布後、透明釉を施す。高台脇から口縁部までやや丸みをもって開きながら立ち上がる。口縁部は外反する。

II類-Aa 無文。(図版16-18)

II类-ab 無文。外面は亀甲状に面取りを施す。上絵を施すものもある。(第26図9)

II类-b 外面に絵付けを施す。呉須で絵付けを施すタイプと、彩色によって上絵を施すタイプがある。(図版16-21・22)

III類 腰部から口縁部までほぼ径が等しい、筒状のタイプ。

II类-a 口径が小さく、器高が深いタイプ。腰部で強く屈曲する。全面に鉄釉を施す。(図版16-23)

II类-b 口径が大きく、外面に線刻等を施す。(図版16-24)

その他 I～III類に含められないものをここに記す。

・口縁部がくの字状に折れるタイプ。(第26図10)

・胴部から丸みをもって開き、口縁部下でややすぼまる。口縁部は玉縁状。(図版16-26)

## 3. 小皿(第26図11～13)(図版16-27～29)

高台脇から口縁部までやや丸みをもって開き、口縁部は外反するタイプ(11・12)と、高台脇から口縁部まで径がほぼ等しい筒状のタイプ(13)がある。無文のものが多いが、外面に絵付けを施すものもある。

## 4. 小皿(第26図14～16)(図版16-30～35)

I類 高台脇から口縁部へ外側に開きながらストレートに立ち上がる。(第26図14)

II類 腰部で丸みを持ち、外側に開きながら立ち上がって口縁部で逆L字上に屈曲する口折れの皿。

II類-a 掛け分けを行う。(図版16-31)

II类-b 透明釉を全体に施す。(図版16-32)

III類 口縁部が波状に整形された輪花皿。

III類-a 鉄釉を施す。(第26図15)

III类-b 透明釉を施す。呉須などで絵付けを施すものも見られる。(図版16-34)

III类-c 透明釉を施す。内面に印花文を規則的に配し、口唇部に釉薬を塗布する。(第26図16)

## 5. 皿(第26, 27図17～21)(図版17-36～43)

I類 腰部で丸みを持ち、口縁部まで開きながらストレートに立ち上がる。(図版17-36)

II類 腰部で丸みを持ち、斜めに立ち上がって口縁部で逆L字状に屈曲する口折れの皿。(第26図17・18)

III類 腰部で丸みを持ち、口縁部まで外側に開きながら斜めに立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。(第27図19)

IV類 口縁部を何箇所かつまんで整形しており、平面観が八角形状になる皿。(第27図20)

V類 口縁部が波状に整形された輪花皿。(第27図21)

## 6. 鉢(第27, 28図22～30)(図版18, 19-44～60)

I類 高台脇から口縁部まで丸みをもって外側に開くタイプ。

I類-a 鉄釉を浸し掛けによって施釉し、内底面には丸文を施す。(第27図22)

I类-b 掛け分けを行う。鉄釉+灰釉、鉄釉+透明釉のタイプがある。(第27, 28図23, 24)

I类-c 器面全体に透明釉を施す。(図版18-48)

II類 高台脇から丸みをもって外側に開き、胴部から口縁部にかけて内側に傾き内彎するタイプ。

II類-a 内彎が顕著なタイプ。(第28図25)

II類-b 内彎が弱いタイプ。ほぼ直口に近い。(第28図26)

III類 サイズが小さい一群をIII類とした。すべて逆ハの字状の器形を呈するタイプで、口縁部が外反する。(第28図27)輪花状に口縁部が整形されるもの(図版19-53)や外面を6面、面取りを行う六角鉢も出土している。(第28図28)

IV類 器高が低い浅鉢のタイプ。(第28図29)

また、外面の1箇所に注口が付く片口鉢も出土している。(第28図30)

・その他 小破片のため鉢と特定できないものや、全形が復元できないものはI～V類に含めず、その他として観察表詳細を記す。

## **7. 火取**(第28図31～33)(図版20-61～64)

内彎口縁と直口口縁に分けられる。外面に籠状の工具で線刻を施すもの(第28図31)と象嵌に白土を嵌め込むいわゆる三島手のもの(図版20-64)、口唇部に呉須を施すもの(第28図33)がある。

## **8. 火炉**(第29図34～36)(図版20-65～70)

直口口縁で筒状のタイプ(34・35)と、内彎口縁で深鉢状のタイプ(36)がある。また、底部に墨書が書かれたもの(図版20-67)が1点のみ、確認できた。

## **9. 香炉**(第29図37・38)(図版20-71～73)

すべて外面にのみ釉薬を施す。口縁部が逆L字状のもの(37・38)が一般的だが、胴部径が約30cmの大の大型のもの(図版20-73)があり、口縁部に1箇所、切込みを入れているため火炉の可能性もあると思われる。

## **10. 鍋**(第29,30図39～42)(図版21-74～78)

I類 口縁部横に耳がつくタイプ。(39)

IIa類 口縁部の上部に耳がつくタイプ。比較的小型のものも見られる。(40・41)

鍋の蓋も出土している。(42)

## **11. アンビン**(第30図43)(図版21-79・80)

大型の急須。本体(第30図43)と把手部分(図版21-79)が残る。すべて、黒釉を施す。

## **12. 急須**(第30図44～47)(図版22-81～87)

I類 黒釉を施す。

I類-a 正面観が橢円形を呈する。(第30図44)

//-b 胴部で外側に張り出し、強く屈曲する算盤状のタイプ。(図版22-82)

II類 透明釉を施す。無文のもの(a)(図版22-83)と、外面に線刻や呉須で絵付けを施すもの(b)(第30図45)がある。

III類 底部から肩部までストレートに立ち上がり、口縁部が内彎する。(第30図47)

その他として、瑠璃釉を施すもの(図版22-85)が1点と、化粧土を薄く外面に塗布するもの(第30図46)が1点確認できたが、どちらも全形が不明のため分類には含めていない。

## **13. 蓋**(第30図48～50)(図版23-88～92)

蓋には、急須の蓋(49)とアンビンの蓋(50)、また不明器種の蓋(48)が確認できた。

## **14. 酒器**(第30図51～53)(図版23-93～96)

I類 胴部最大径が20cmを超える大型のタイプ。(51)

II類 胴部が張り、丸みをもつタイプ。鉄釉と、透明釉+呉須絵のタイプがある。(52)

III類 胴部で強く屈曲する、算盤型のタイプ。(図版23-95)

IV類 胴部最大径と底径が等しい、四角型のタイプ。(53)

## **15. 油壺**(第31図54～56)(図版24-97～99)

すべて黒釉を施す四耳壺。胴部が強く張る小型のタイプ(55)と大型のタイプ(54)がある。蓋は撮みが高台状(56)。

## **16. 瓶**(第31図57～59)(図版24-100～103)

瓶は対瓶(瓶子)、嘉瓶(58)、花瓶(59)が出土している。対瓶はハの字状の高台を持つタイプ(57)と、長頸で双耳が付くタイプ(図版24-101)がある。

## **17. 小型壺**(第31図60・61)(図版24-104～107)

I類 底部から肩部まで垂直に立ち上がり、屈曲して頸部ですぼまる。四角型のタイプ。(60)

II類 胴中央部が張り、底部に向かってすぼまる算盤型。(61)

III類 長頸で胴部が張る、器高が高いタイプ。(図版24-107)

## **18. 灯明具**(第31図62・63)(図版24-108・109)

「ウドンモー」といわれる器内に灯心を持つ秉燭が出土している。直口口縁タイプ(62)と、内彎口縁タイプ(63)がある。

## **19. 水滴**(第31図64)(図版24-110)

壺型で、高台を持つ水滴と思われるものが1点出土している。

第35表 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

図・図版番号	器種	分類	釉薬	部位	口径 底径 器高	素地	観察事項	出土地点 出土層
第26図1 図版15-1	碗	I Aa 類	灰釉	口～底	13.3 6.5 6.2	灰褐色	高台脇から丸みもって、口縁部までストレートに開く器形。浸し掛によって口縁部から胴下半部まで施釉する。畠付に砂付着。	す-13 II層
第26図2 図版15-2		II Aa 類	鉄釉	口～底	13.1 6.4 5.9	灰色	浸し掛によって口縁部から胴下半部まで施釉し、内底面に丸く鉄釉を施す。	し-13 II層
図版15-3		II Ba 類	透明釉 鉄釉	口～底	13.4 6.2 6.1	灰黄色	外面は鉄釉を浸し掛、内面は透明釉を施し、内底面と畠付の釉薬を蛇の目状に剥ぎ取る。内面口縁部は鉄釉がにじみ、流し掛けの様相を呈している。	す-13 II層
図版15-4		II Ba 類	灰釉 鉄釉	口～底	12.8 6.6 6.4	浅黄 橙色	外面は浸し掛によって高台脇まで鉄釉を施し、内面は灰釉を施釉後、内底面に蛇の目釉剥ぎを行う。内面に鉄釉で圈線を描き、見込みに丸文を描く。	す-13 II層
図版15-5		II c 類	鉄釉	口～胴	13.8 — —	にぶい 橙色	素地に白土を塗り、その上から鉄釉を浸し掛する。内外面に線彫りによって圈線を施し、施釉部分が搔き取られる。	し・す-13 II層
第26図3 図版15-6		III Ab 類	透明釉	口～底	12.0 5.4 6.1	灰白色	器面全体に施釉後、畠付のみ釉薬を剥ぎ取る。畠付に白土付着。口縁部が厚く、玉縁状になる。	す-13 II層
第26図4 図版15-7		III b 類	透明釉	口～底	12.5 5.8 6.1	明黄 白色	内底面は蛇の目釉剥ぎを行う。畠付および外面高台内は露胎。内外面に呉須で花文を描く。	さ-13 II層
図版15-8		III b 類	透明釉	口～底	13.0 5.9 6.1	にぶい 黄橙色	内外面に呉須で絵付けを施す。外面は口縁部と高台脇に圈線を描き、胴部に扇形状の草花文等を施す。内面は胴部に圈線を描き、口縁部に簡略化した巴文様を描く。	さ-13 II層
図版15-9		III b 類	透明釉	口～底	13.8 6.4 6.6	灰色	器面全体に施釉後、畠付の釉を剥ぎ取る。外面に黄褐色の釉と呉須によって印花文を配す。	不明
図版15-10		III c 類	透明釉	口～底	14.2 6.4 6.6	黄灰色	器面全体に施釉後、蛇の目釉剥ぎを行う。外面胴部に線刻によって雲？や渦巻き文等の文様を施す。	し・す-13 II層
第26図5 図版15-11		III d 類	透明釉	口～底	14.4 6.8 6.8	黄灰色	外面に赤色の彩色で圈線を描き、波状文、斜め格子文、腰部に連弁様の文様を施す。内底部は蛇の目釉剥ぎ、畠付は露胎。高台内に白土を丸く施す。	し-13 II層
図版15-12			黒釉	口～底	12.6 6.0 6.1	にぶい 橙色	高台を除いて全体に施釉。胴径と口径がほぼ変わらない、筒状の直口タイプの碗。	さ-13 II層
第26図6 図版15-13			透明釉	口～底	11.9 4.7 5.7	灰褐色	外面は素地に直接、透明釉。内面は白土の上に透明釉を施す。内面は口縁部から胴部まで鉄釉と緑釉によってまだら状の絵付けを施す。畠付は露胎。	し-13 II層
第26図7 図版15-14			透明釉	口～底	11.9 5.9 6.5	黄白色	高台脇から開きながら立ち上がり、屈曲してさらに口縁部が外側に開く。内面は呉須で圈線を描いて縦位に籠状の工具で丸彫りを施す。外面は線彫りを施し、その上に呉須を塗布する。畠付のみ露胎。	す-13 II層
第26図8 図版15-15			鉄釉	口～底	11.6 5.6 6.6	乳白色	腰部で丸みをもって口縁部までストレートに立ち上がる筒状タイプ。畠付のみ露胎。高台脇に「琉球」と判が押される。	す-13 I層
図版16-16	小碗	I b 類	鉄釉 灰釉	口～底	— 3.5 4.3	灰白色	掛け分けを行う。外面は鉄釉の浸し掛、内面は灰釉を総釉後、内底面に蛇の目釉剥ぎを行う。畠付に白土が付着する。	し-13 II層
図版16-17		I b 類	鉄釉 透明釉	口～底	8.8 4.0 4.6	灰色	掛け分けを行う。外面は鉄釉、内面は透明釉を総釉後、内底面と畠付の釉剥ぎを行う。畠付に白土が付着する。	す-13 II層
図版16-18		II Aa 類	透明釉	口～底	8.4 3.7 4.3	灰黄色	総釉後、内底面と畠付、高台脇の釉を剥ぎ取る。内底面に指頭大の鉄釉が付着しているが、意図的であるかどうかは不明。	し・す-13 II層
図版16-19		II Ab 類	透明釉	口～底	8.2 3.9 4.1	黄灰色	総釉後、内底面と畠付の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。外面は面取りを施す。	し-13 II層
第26図9 図版16-20		II Ab 類	透明釉	口～底	8.8 4.1 4.8	淡黄色	総釉後、内底面と畠付を蛇の目状に剥ぎ取る。外面は2段に面取りを施す亀甲状タイプ。	す-13 II層
図版16-21		II b 類	透明釉	口～底	8.8 4.1 4.6	にぶい 黄橙色	総釉後、内底面と畠付を蛇の目状に剥ぎ取る。外面に赤・緑・黄色の彩色で上絵付けを施す。口唇部に列点文、胴部に縦位の直線や四角を描く。	不明
図版16-22		II b 類	透明釉	口～底	— 3.6 3.9	浅黄 橙色	透明釉を総釉後、畠付と内底面に蛇の目釉剥ぎを行う。口縁部に呉須で流し掛け様の文様を施し、内底面の釉剥ぎ部分を覆うように丸く絵付けを施す。	す-13 II層
図版16-23		III a 類	鉄釉	口～底	— 5.9 4.3	黄灰色	高台脇から口縁部までストレートに立ち上がる筒型碗。鉄釉を総釉掛けする。高台は浅く削り出すため、断面形が斜めになっている。	し-13 II層

第36表 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

図・図版番号	器種	分類	釉薬	部位	口径 底径 器高	素地	観察事項	出土地点 出土層
図版16-24	小碗	III b 類	透明釉	口～底	8.7 4.7 5.4	淡黄色	透明釉を総釉後、畠付と内底面に蛇の目釉剥ぎを行う。外面に線彫りで文様を施し、その上に黄・青色の彩色を施す。口唇部は平たく整形し、釉剥ぎを行ったため、蓋付の碗と思われる。	さ-13 II層
第26図10 図版16-25			透明釉	口～底	9.9 4.8 5.1	灰黄色	内底面は蛇の目釉剥ぎ、畠付も露胎。口唇部のみ、淡い緑釉を施す。	し-13 II層
図版16-26			鉄釉	口～底	10.2 — —	灰黄色	口縁部は厚く玉縁状になる。高台脇に別固体の溶着痕あり。	さ-13 II層
第26図11 図版16-27	小杯		透明釉	口～底	3.3 1.6 1.8	灰白色	透明釉を全体に施釉後、外面は底部から高台脇まで露胎とする。	す-13 II層
第26図12 図版16-28			透明釉	口～底	3.4 1.6 1.9	灰白色	透明釉を全体に施釉後、青灰色の釉で高台脇に列点文を施す。高台は露胎となる。	さ-13 II層
第26図13 図版16-29			透明釉	口～底	4.7 2.2 2.7	灰白色	透明釉を全体に施釉。外面に一箇所、有孔の耳を貼付ける。	し-13 II層
第26図14 図版16-30	小皿	I 類	鉄釉	口～底	10.3 4.8 3.1	褐灰色	外面は口縁部のみ施釉、内面は総釉後、蛇の目釉剥ぎを行う。外面胴部に難に鉄釉が付着するが、意図的なものではないと思われる。	す-13 II層
図版16-31		II a 類	鉄釉 透明釉	口～底	12.8 6.6 3.3	明褐色 灰色	外面は暗オリーブ色の釉、内面は透明釉を施す。内底に茶色・緑灰色の2色の巴文を交互に重ねて描く。内面胴部には銀杏の葉の形状を呈する文様を等間隔に配す。	不明
図版16-32		II b 類	透明釉	口～底	13.2 6.5 4.2	浅黄 橙色	透明釉を全体に施釉後、内底と畠付の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。内面に呉須で花文等の絵付けを施す。	し-13 II層
第26図15 図版16-33		III a 類	鉄釉 透明釉	口～底	13.6 6.8 4.0	にぶい 黄橙色	口唇部は輪花状。外面及び口唇部は鉄釉、内面は透明釉を施し、蛇の目釉剥ぎを行う。内底及び内面胴部に圈線を施し、その部分は白土が搔き取られる。口縁部は鉄釉がにじみ、流し掛けの様相を呈する。	し-13 II層
図版16-34		III b 類	透明釉	口～底	9.4 4.4 2.9	淡黄色	口唇部は輪花状。畠付及び内底に蛇の目釉剥ぎを行う。内面に呉須で下向きの花弁文帯、内底に渦巻き文を施す。	さ-13 こ-12 II層
第26図16 図版16-35		III c 類	透明釉	口～底	13.5 7.6 3.9	黄灰色	口唇部は輪花状。内面に線彫りによる圈線・印花による菊花、不明文様をほぼ等間隔に配し、その上に灰緑色の釉を塗布する。口唇部は鉄釉を塗布する。外底部は露胎だが別固体の釉薬が溶着する。	す-13 II層
図版17-36	皿	I 類	灰白色	口～底	— 9.0 6.1	浅黄橙	浸し掛によって施釉する。内面に鉄釉で「井」の字状の絵付けを施す。形状から、鍋の蓋の可能性もあるが、内面に文様を施すことから皿に含めた。	さ-13 II層
第26図17 図版17-37		II 類	灰釉	口～底	21.4 — 6.3	にぶい 橙色	浸し掛によって施釉する。内面に鉄釉で花文を描き、等間隔に配する。	し-13 II層
図版17-38		II 類	鉄釉 灰釉	口～底	20.6 8.5 6.1	灰黄色	外面は高台脇まで鉄釉、内面は灰釉を総釉後、底面は蛇の目釉剥ぎを行い、さらに白色の丸文を施す。	す-13 II層
第26図18 図版17-39		II 類	鉄釉	口～底	21.1 9.7 7.1	浅黄橙	浸し掛によって施釉する。内底に鉄釉によって丸文を施す。内底に別固体の溶着が見られる。高台に1カ所、径0.6cmの孔を穿つ。高台内に鉄釉を粗雑に塗布する。	す-13 II層
図版17-40		III 類	透明釉	口～底	24.8 8.2 5.3	浅黄橙	透明釉を全体に施釉後、内底と畠付の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。内面に呉須で草花文を施す。	し-13 II層
第27図19 図版17-41		III 類	透明釉	口～底	23.8 6.7 9.5	黄灰色	透明釉を全体に施釉後、内底と畠付の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。内面に呉須と黄釉による草花文を施す。外面胴部に別固体が溶着している。	す-13 II層
第27図20 図版17-42		IV 類	灰釉	口～底	18.8 — —	灰黄色	八角皿か。口唇部は平坦である。断面形は緩やかに段を有する。	す-13 II層
第27図21 図版17-43		V 類	透明釉	口～底	15.0 8.2 5.1	灰白色	白土を塗布せずに透明釉を総釉後、外底部のみ釉薬を剥ぎ取る。口唇部は鉄釉を塗布する。内底に松・梅・竹を細い線で描き、底周囲に圈線を描いて印花文を等間隔に配す。外面に蛸唐草文を描き、高台内には「中」と書く。	す-13 II層
第27図22 図版18-44	鉢	I a	鉄釉	口～底	26.3 10.2 12.2	浅黄色	鉄釉を浸し掛によって施釉する。口縁部は断面三角形。内面底部に鉄釉で丸文を施す。	し-13 II層
図版18-45		I a	鉄釉	口～底	16.0 10.5 11.4	灰白色	鉄釉を浸し掛によって施釉する。口縁部は逆L字状で下方に傾く。内面底部に鉄釉で丸文を施す。高台内は粗雑に鉄釉を塗布する。	し-13 II層

第37表 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

図・図版番号	器種	分類	釉薬	部位	口径 底径 器高	素地	観察事項	出土地点 出土層
第27図23 図版18-46	鉢	I b	鉄釉 透明釉	口～底	29.4 10.4 13.8	灰白色	外面に鉄釉、内面に透明釉の掛け分けを行う。内底部および畠付の釉薬を蛇の目状に剥ぎ取る。内底面に別の器物の溶着が見られる。	さ-13 こ-12 I・II層
第28図24 図版18-47		I b	鉄釉 透明釉	口～底	26.6 13.4 10.9	淡黄色	外面は鉄釉、内面は透明釉の掛け分けを行う。口唇部が輪花状。外面は高台まで浸し掛を行い、高台内部は粗雑に鉄釉を塗布する。内面は総釉後、内底部に蛇の目釉剥ぎを行う。高台に1箇所、孔を穿つ。	す-13 II層
図版18-48		I c	透明釉	口～胴	— —	浅黄色	全面に透明釉を施す。口縁部は逆L字状で下方に傾く。内面に呉須・黄釉によって花文を施す。全形は不明。	し-13 II層
図版18-49		II a	鉄釉 灰釉	口～底	23.0 10.6 10.9	淡黄色	外面が鉄釉、内面が灰釉の掛け分けを行う。口縁部が内彎するタイプ。外面は浸し掛けを行い、内面は総釉後、内底部に蛇の目釉剥ぎを行う。	す-13 II層
第28図25 図版18-50		II a	鉄釉 透明釉	口～底	28.8 12.1 11.5	浅黄色	外面が鉄釉、内面が透明釉の掛け分けを行う。高台が幅広で、畠付の釉薬は剥ぎ取る。高台内に窯詰めの際の胎土目が残る。内面は釉剥ぎを行わない。	し-13 II層
第28図26 図版18-51		II b	緑色釉 透明釉	口～胴	24.8 — —	黄灰色	外面は鉄釉、内面は緑色釉の掛け分けを行う。口縁部はほぼ直口するが、上端で微弱に内彎する。胴部は張らず、口縁部が最大径。内底部に蛇の目釉剥ぎを施すと思われるが、欠損が著しいため不明。	さ-13 II層
第28図27 図版19-52		III	鉄釉 透明釉	口～底	17.6 7.4 7.8	浅黄色	外面は鉄釉、内面は透明釉の掛け分けを行う。口縁部は緩やかな逆L字状。内面に黄釉・呉須を交互に幅広で縦位に施す。内底面は蛇の目釉剥ぎを施す。	不明
図版19-53		III	緑釉 透明釉	口～底	— 8.8 9.3	灰白色	外面は緑釉、内面は透明釉の掛け分けを行う。口唇部は輪花状。内底および畠付の釉を蛇の目状に剥ぎ取る。外底部は白土を塗布しない。	さ-13 II層
図版19-54		III	透明釉	口～底	— 8.9 11.5	黄灰色	透明釉を総釉後、内底と畠付に蛇の目釉剥ぎを施す。外面に緑釉・鉄釉で絵付けを施すが滲みが著しく、文様は不明。口縁部が輪花状になると思われる。	し-13 II層
第28図28 図版19-55		III	透明釉	口～底	16.1 7.5 7.5	灰黄色	六角鉢。透明釉を総釉後、内底と畠付に蛇の目釉剥ぎを施す。外面に花文を線描きし、その上に灰オーラー色の釉薬を塗布する。	こ-13 II層
第28図29 図版19-56		IV	透明釉	口～底	16.2 6.8 6.4	にぶい 黄橙色	透明釉を総釉後、内底と畠付に蛇の目釉剥ぎを施す。内面に呉須で圈線、草花文を描く。	さ-13 II層
図版19-57		透明釉	口縁部	— — —	— — —	灰色	内面の口縁部下に線彫りで圈線を施し、その下に丸彫り及び線彫りで魚鱗状の文様を施す。口唇部のみ呉須を塗布する。全形は不明だが、有頸状の浅鉢と判断し、鉢に含めた。	さ-16 II層
図版19-58		透明釉	口縁部	— —	— —	浅黄色	輪花状口縁タイプ。胴部からやや内弯しながら立ち上がり、口縁部でさらに外側に開く、有段状を呈する。全形は不明だが深鉢と判断し、鉢に含めた。	し-13 II層
図版19-59		灰釉 透明釉	底部	— —	8.5 —	浅黄色	外面は灰釉、内面透明釉の掛け分けを行う。内外面とも施釉方法は浸し掛。外面、胴下半部に丸彫りの圈線を3本施す。内面は胴部及び内底部に鉄釉で円を描き、同心円状に点線で円を描いた文様を巡らせる。	し-13 II層
第28図30 図版19-60	片口鉢	鉄釉	口～底	— — —	18.3 9.0 12.0	淡黄色	内外面ともに鉄釉を施す。口唇部の釉薬は拭き取る。	す-13 II層
第28図31 図版20-61	火取	鉄釉	口～底	— — —	10.3 7.1 8.5	淡黄色	円筒形で高台を持つ。外面に丸彫りによる圈線と縦沈線を施す。外面は腰部まで、内面は口縁部のみ施釉する。	し・す-13・II層
第28図32 図版20-62		鉄釉	底部	— —	8.2 —	灰白色	高台は浅く、断面が三角形に近く斜位に削り出される。底部のみの資料のため、施釉範囲は不明。残存部の内面は露胎。	し-13 II層
第28図33 図版20-63		透明釉	口～底	— — —	9.7 7.2 8.7	灰色	口縁部が内弯するタイプ。円筒形で高台を持つ。外面口唇部のみ呉須を流し掛ける。口唇部は剥落が著しい。内面および高台は施釉せず、白土のみを塗布する。	し-13 II層
図版20-64		灰釉	底部	— —	— —	淡黄色	全形は不明。高台を有する。外面に線彫りの縦沈線を施し、白土で象嵌する、いわゆる三島手。内面は露胎。	さ-14 II層
第29図34 図版20-65		鉄釉	口～底	— — —	14.2 10.2 8.8	淡黄色	円筒状を呈する。外面に線彫りの圈線を7条施す。有孔の獅子面把手を貼り付ける。	さ-13 II層
第29図35 図版20-66	火炉	鉄釉	口縁部	— —	17.4 —	淡灰色	器物受は口縁部を一周めぐる。外面に幅広の丸彫り沈線を縦位に施す。全形は不明。	し・す-13・II層
図版20-67		鉄釉	底部	— —	10.8 —	灰黄色	円筒形を呈すると思われる。外面に圈線を施す。底部に墨書で「〇百文 同治…」と記す。	し-13 II層

第38表 沖縄産施釉陶器観察一覧

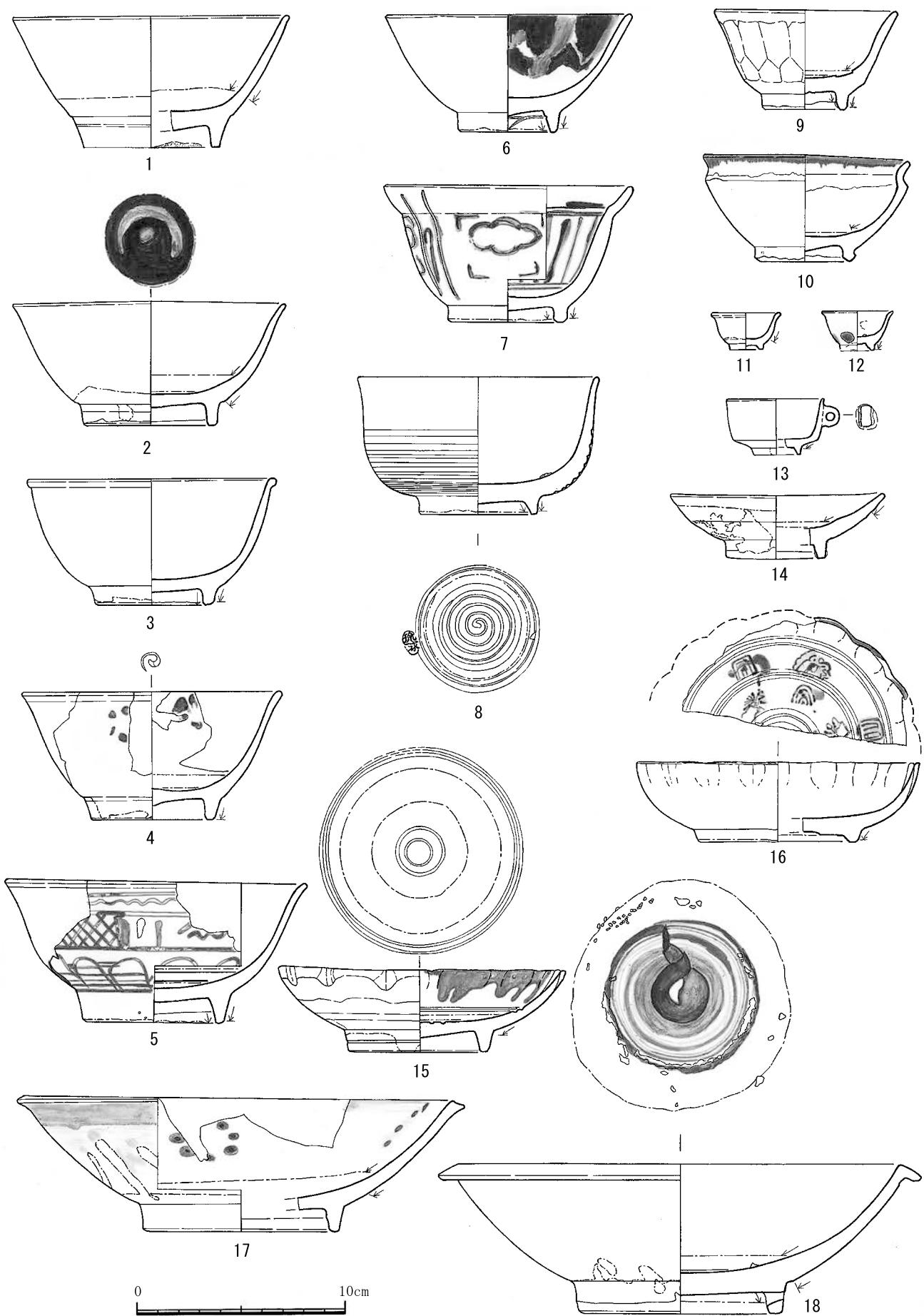
単位:cm

図・図版番号	器種	分類	釉薬	部位	口径 底径 器高	素地	観察事項	出土地点 出土層
図版20-68	火炉		鉄釉	口縁部	— — —	灰白色	口縁部が逆L字状を呈する。器物受けは三角形で大型。	し-13 II層
第29図36 図版20-69			黒釉	口～胴部	15.0 — —	灰黄色	胴部が丸みを帯びた器形で、口縁部が内弯する。有孔の獅子面把手を貼り付ける。	し-13 II層
図版20-70			灰釉	把手	— — —	灰色	有孔の獅子面把手部分。胴部はやや丸みを帯びるため、口縁部が内弯するタイプと思われる。灰釉はこの1点のみである。	す-13 II層
第29図37 図版20-71	香炉		鉄釉	口～底	12.1 6.4 6.4	明黄橙色	口唇部内面から外面の足接合部まで施釉。外底部と内面の一部に煤付着。	し-13 II層
第29図38 図版20-72			透明釉・緑釉	口～底	21.4 12.6 —	灰色	口唇部のみ、緑釉を施す。内面は無釉。上半部と下半部を分けて白土を塗つており、境界部が確認できる。外底部は釉剥ぎ。脚は欠損。	し-13 II層
図版20-73			緑釉	口～底	27.4 15.0 15.8	にぶい 黄橙色	比較的大型のタイプ。口縁部に切り込みが見られるため、火炉の可能性もある。外面は白土を塗布後に緑釉を施し、内面は白土のみを塗布する。断面が台形の脚が3つ付く。	し・す-13 II層
第29図39 図版21-74	鍋	I	鉄釉	口～底	14.8 — 10.8	黄白色	口縁部がくの字に折れ、口縁部横に水平に把手を貼り付ける。底部に煤付着。内面は鉄釉を薄く塗布する。	し-13 II層
第29図40 図版21-75		II	鉄釉	口～底	18.3 — 13.1	黄白色	口縁部は直線的なくの字状。口縁上部に把手を貼り付ける。外底部に煤付着。内面の鉄釉は薄く塗布する。	し-13 II層
第30図41 図版21-76		II	透明釉 灰緑色釉	口～底	15.8 8.7 8.2	黄白色	口縁部がくの字に折れ、口縁上部に把手を貼り付ける。外面は灰緑色釉、内面は透明釉の掛け分けを行う。内底面は蛇の目釉剥ぎを行う。	す-13 II層
図版21-77			透明釉 黒釉	口～底部	13.8 8.2 8.2	明橙色	口縁部がくの字に折れ、さらに下方に湾曲する。外面は鉄釉、内面は透明釉の掛け分けを行う。内底部は蛇の目釉剥ぎを行う。外底部に煤付着。	し・す-13 II層
第30図42 図版21-78	鍋(蓋)		鉄釉	口～底	13.8 6.0 3.8	明灰黃色	撮みは高台状。施釉は縁のみ。	し-13 II層
図版21-79	アンビン	把手	黒釉	—	— — —	灰黄色	全面に黒釉を施釉する。	し?13 I・II層
第30図43 図版21-80			黒釉	口～底	12.0 11.4 18.0	灰黄色	器面全体に黒釉を施釉。外面は流し掛けのため高台は露胎となる。把手部分は欠損。高台に2箇所、幅約0.8cmの切込みを入れる。高台内は粗雑に黒釉を塗布する。	さ-13 II層
第30図44 図版22-81	急須	I a	黒釉	口～底	6.1 — —	灰色	内面口縁部および外面に黒釉を施し、口唇部の釉薬は拭き取る。内面は露胎。胴部は外側に張り出す。	し-13 II層
図版22-82		I b	黒釉	口～底	— — —	灰色	外面に黒釉を施す。内面は露胎。胴下部で外側に反り、強く屈曲して底部に向かって丸みをもつてぼまる。	し-13 II層
図版22-83		II a	透明釉	口～胴	5.3 — —	淡黄色	内外面に透明釉を施す。口唇部の釉は拭き取る。器形は I A類と同じ。	す-13 II層
第30図45 図版22-84		II b	透明釉	口～底	7.4 7.8 10.1	浅黄色	外面肩部には圈線を施し、その上に型押しの花文を等間隔に配し、圈線下には線彫りの縦沈線・斜め格子文を施す。内底面に別固体の口縁部が溶着している。	こ-13 I層
図版22-85			瑠璃釉 透明釉	口～胴	— — —	灰色	比較的大型の急須。外面は瑠璃釉、内面は透明釉の掛け分けを行う。瑠璃釉を粗雑に流し掛ける。胴部破片のみの資料のため、全形は不明。	す-13 14 I層
第30図46 図版22-86			透明釉	口～胴	6.3 — —	にぶい 褐色	比較的薄手の急須。全形は不明。外面に薄めの泥漿を塗布し、白土で文様を描く。内面は露胎。	し-13 II層
第30図47 図版22-87		III	透明釉	口～底	6.2 8.9 9.9	浅黄 橙色	内外面に透明釉を施釉する。底部から肩部までストレートに立ち上がり、口縁部が内弯する。注口の接合部に緑釉を流し掛ける。胴部に呉須で巴文のような文様を施す。	し-13 II層
第30図48 図版23-88	蓋		飴釉	完形	5.9 4.3 1.9	灰黄色	落し蓋。撮みの断面は半楕円形。直径0.4cmの孔を穿つ。内面は露胎。	こ-13 II層
図版23-89			鉄釉	完形	6.0 4.5 2.9	灰褐色	急須の蓋。宝珠状の撮みを持つ。径0.5cmの孔を穿つ。内面は露胎。	す-13 II層

第39表 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

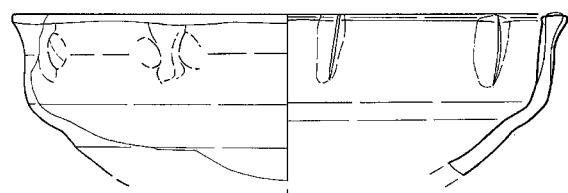
図・図版番号	器種	分類	釉薬	部位	口径 底径 器高	素地	観察事項	出土地点 出土層
第30図49 図版23-90	蓋	透明釉	完形	7.9 5.7 3.5	黄灰色	急須の蓋。外面に線彫りによる縦沈線・斜め格子文を施す。撮みは宝珠状。径3mmの孔を穿つ。	c-13 I層	
第30図50 図版23-91		黒釉	完形	11.4 8.1 4.0	浅黄色	アンビンの蓋と思われる。外面に黒釉を施し、内面は露胎となる。撮みは宝珠状。	し-13 II層	
図版23-92		瑠璃釉	完形	9.8 7.2 3.8	にぶい 黄橙色	急須の蓋。外面に瑠璃釉を施し、内面は白土のみ。径0.4cmの孔を穿つ。	c? 13 I層	
第30図51 図版23-93	酒器	I類 黒釉	口～底	5.2 11.6 14.3	にぶい 黄橙色	大型のタイプ。黒釉を胴部まで施釉する。外面に圈線を施し、丸彫りによる文様を二段に分けて施す。	c-13 II層	
第30図52 図版23-94		II類 透明釉	口～底	— 6.7	褐灰色	透明釉を全体に施釉する。外面に線彫りによって圈線・縦沈線を施し、呉須を塗布する。口縁部に呉須を流し掛ける。	し-13 II層	
図版23-95		III類 鮎釉	口～底	— 7.6	褐灰色	胴中央部で外側に張り、強く屈曲して底部に向かってすぼまる算盤型の器形。外面に鮎釉を浸し掛けによって高台脇まで施釉する。胴上部に丸彫りにより縦位に沈線をめぐらせる。	す-13 II層	
第30図53 図版23-96		IV類 透明釉	口～底	— 7.3	にぶい 黄橙色	底部からやや外側に開きながら肩部まで立ち上がり、強く屈曲して頸部ですぼまる。外面全体に透明釉を施す。頸部？肩部に線彫りによって圈線・斜め格子文等を施し、呉須・黄釉を塗布する。	し-13 II層	
第31図54 図版24-97	油甕	黒釉	完形	13.4 12.8 23.3	にぶい 黄橙色	胴部は微弱に張る四耳壺。黒釉を外面に施釉し、内面には薄く塗布する。口唇部の釉薬は拭き取る。高台に半円形の切り込みを入れる。	す? 12・ 13 I・II層	
第31図55 図版24-98		黒釉	完形	7.8 7.3 13.5	にぶい 黄橙色	胴部が張り、頸部ですぼまって直線的に内傾しながら口縁部に立ち上がる。四耳壺。内外面に黒釉を施す。口唇部の釉薬は拭き取る。	さ? 13 II層	
第31図56 図版24-99	油甕(蓋)	黒釉	完形	12.3 6.7 4.1	灰黄色	撮み～底部分まで黒釉を施し、胴部中央のみ釉を蛇の目状に剥ぎ取る。内面は露胎。	す-13 II層	
第31図57 図版24-100	瓶	対瓶 透明釉	頸? 底	— 7.6 —	灰黄色	全体に透明釉を施す。ハの字状に開く高台を持つ。外面に線彫りによる梅樹文を施し、その上に呉須を塗布する。高台内は鉄釉を施す。	し? 13 II層	
図版24-101		対瓶 透明釉	完形	6.7 6.8 12.9	淡黄色	双耳で長頸の瓶。ハの字状に開く高台を持つ。外面に圈線を施し、その上に呉須と黄釉で交互に圈線を描く。内面口唇部に呉須を塗布する。疊付のみ釉薬を拭き取る。	し-13 II層	
第31図58 図版24-102		嘉瓶 緑釉	頸? 底	— 9.8 —	にぶい 黄橙色	瓢箪形で、長頸の嘉瓶。外面に内外面に白土を塗布した後に緑釉を流し掛ける。高台内にも緑釉を粗雑に塗布する。	し? 13 II層	
第31図59 図版24-103		花瓶 黒釉	頸? 底	— 7.2 —	灰白色	双耳で長頸の瓶。胴部は強く張り、球形を呈する。高台脇まで黒釉を施釉する。高台内に窯詰めの際の砂が残る。	す-13 II層	
第31図60 図版24-104	小型壺	I 鉄釉	頸? 底	— 5.7 6.2	淡黄色	内外面に鉄釉を施釉する。外底部は上げ底状となり、内部に鉄釉を粗雑に塗布する。口縁部は欠損。	さ-12 II層	
図版24-105		I 鉄釉	完形	— — 2.8	灰黄色	内面口縁部および外面高台脇まで鉄釉を施釉する。浅い高台を持つ。胴部最大径が4.0cm前後と非常に小型のため、フチュクルビンとして製作された可能性が高い。	し-13 II層	
第31図61 図版24-106		II 黒釉	完形	2.2 3.6 4.9	灰黄色	胴部が強く張り出し、屈曲して口縁部と底部に向けてすぼまる算盤型の器形。口縁部は外反する。底部は中央部がくぼみ、ドーム型になる。内面口縁部から外面底部脇まで黒釉を施釉する。外底部に窯詰めの際の石灰岩が溶着している。	し-13 II層	
図版24-107		III 褐色釉	口? 胴	2.7 — —	黄灰色	やや長頸の細首の壺。口縁部内部から外面に褐色釉を施釉する。口縁部が厚く、玉縁状となる。肩部が張る器形だが、全形は不明。	さ-13 II層	
第31図62 図版24-108	灯明具	秉燭 灰綠色釉	完形	4.9 3.1 4.2	灰白色	脚台付の直口口縁の秉燭。切り込みのある円筒状の灯心を持つ。底部の中心部に径0.3mmの孔を穿ち、糸切り痕が残る。底部は露胎。	す-13 II層	
第31図63 図版24-109		秉燭 鉄釉	完形	5.1 4.0 5.2	浅黄色	脚台付の内彎口縁の秉燭。切り込みのある円筒状の灯心を持つ。底部の中心部に径0.5mmの孔を穿ち、糸切り痕が残る。底部は露胎。	し-13 II層	
第31図64 図版24-110	水滴	壺 灰綠色釉	頸? 底	— 4.1 —	灰白色	注口を持つ小型の壺型。高台脇まで灰綠色釉を施釉し、外面に白土でまだら状の文様を描く。口縁部は欠損。浅く削りだした高台を持つ。	す-13 II層	



第26図 沖縄産施釉陶器 1



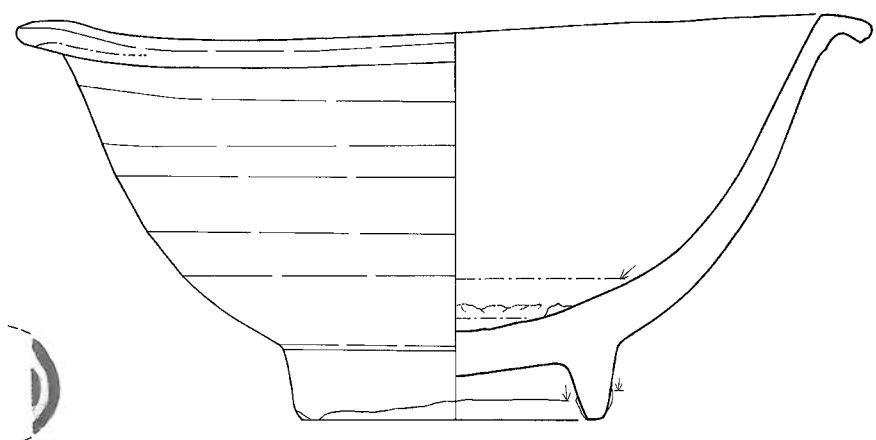
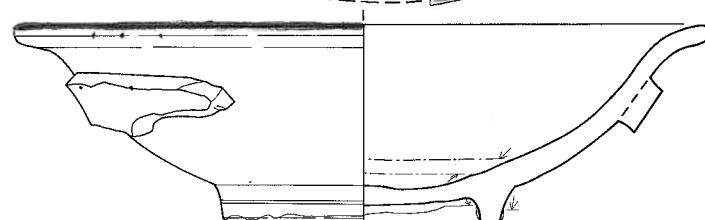
19



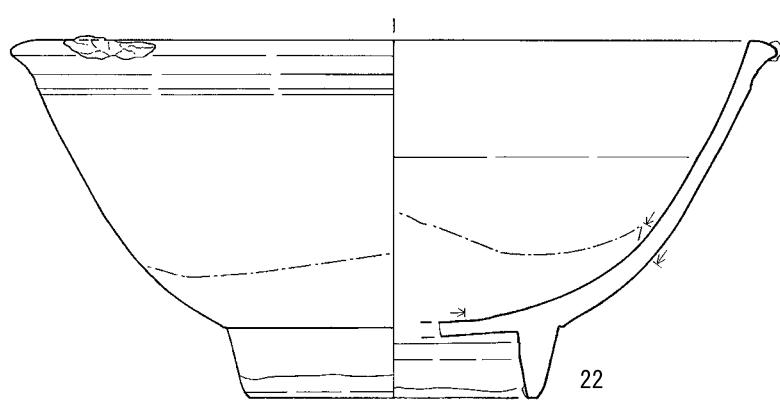
20



21



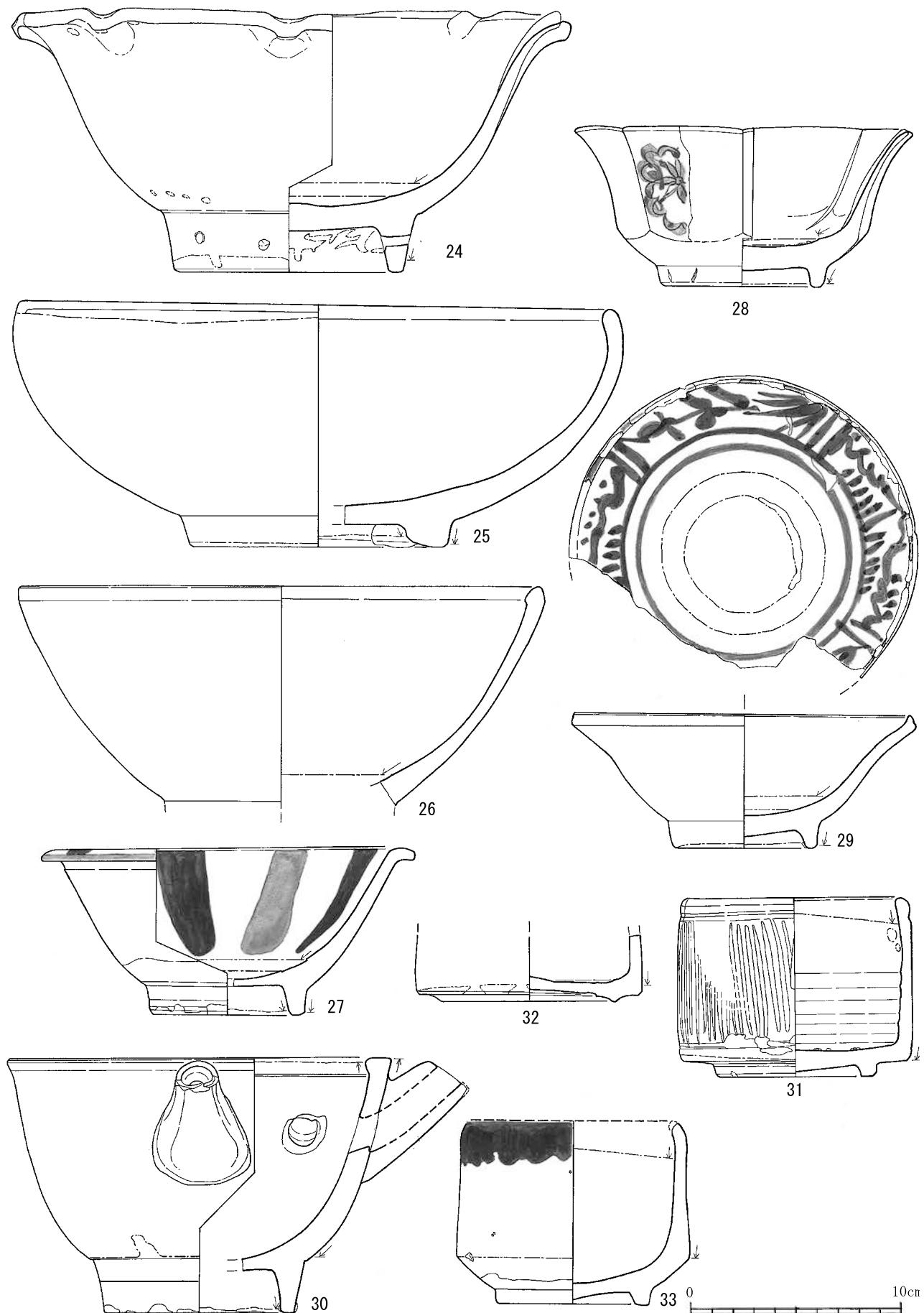
23



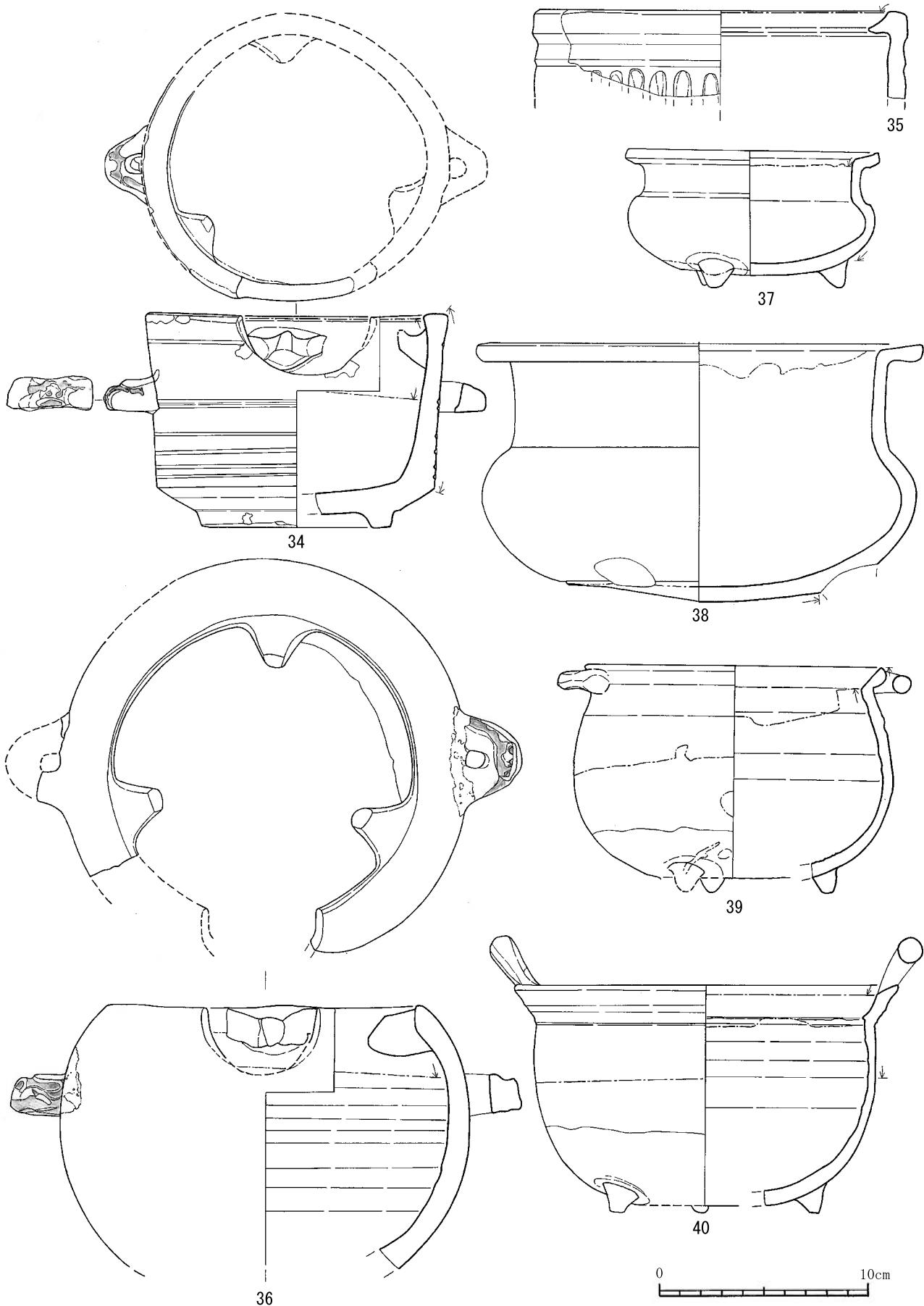
22



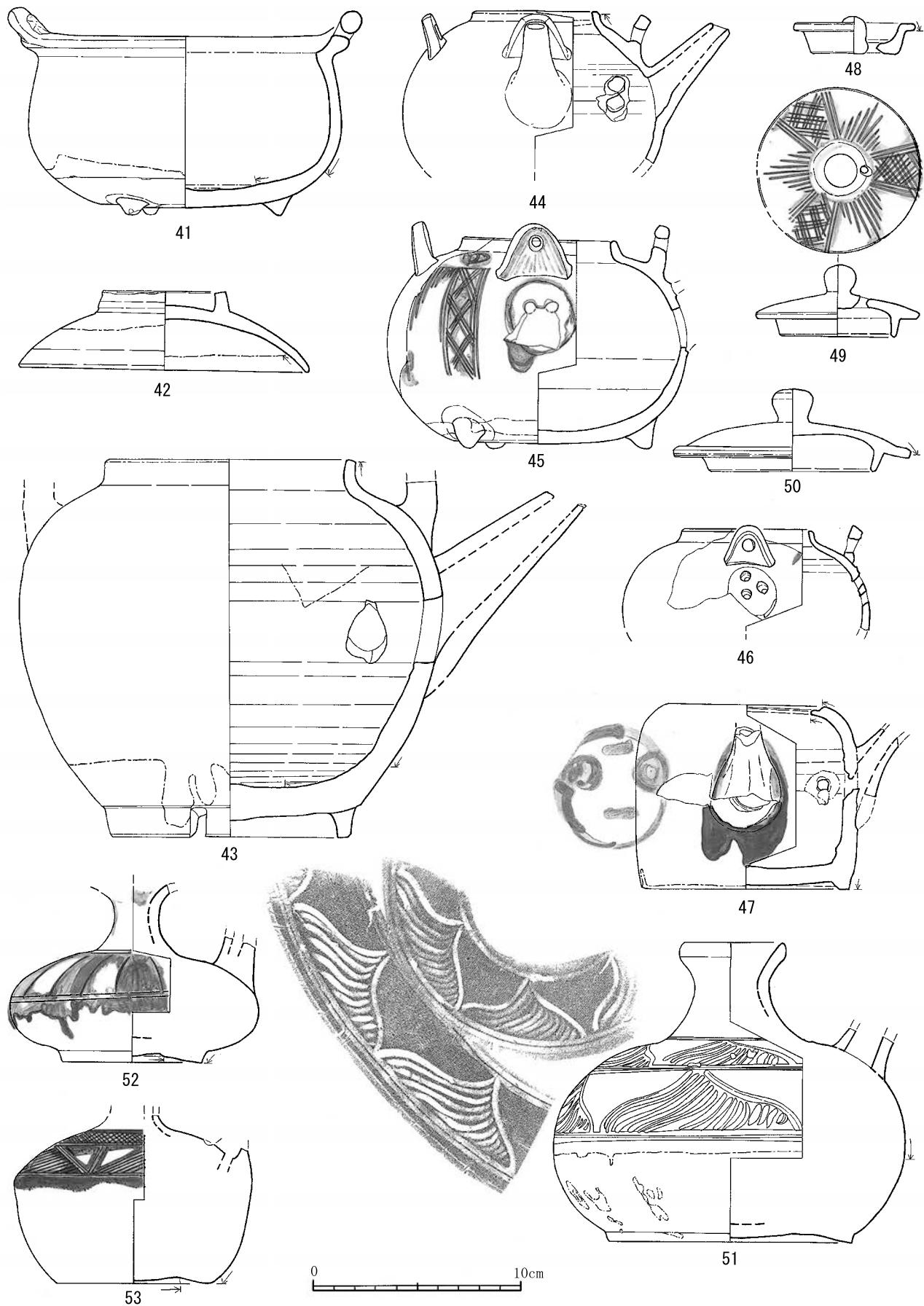
第27図 沖縄産施釉陶器 2



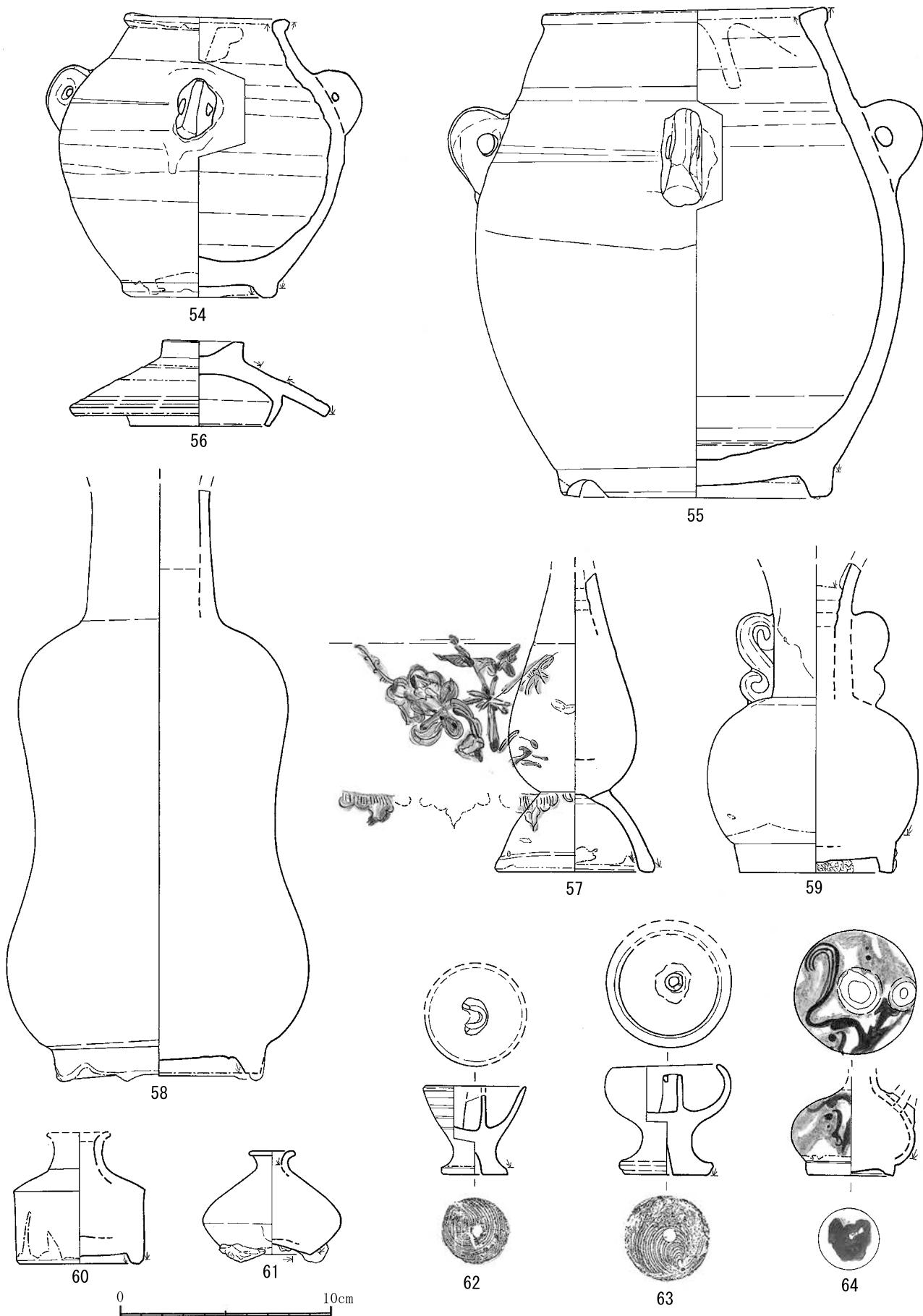
第28図 沖縄産施釉陶器 3



第29図 沖縄産施釉陶器 4



第30図 沖縄産施釉陶器 5



第31図 沖縄産施釉陶器 6

## 第9節 沖縄産無釉陶器

「荒焼(アラヤチ)」といわれる、釉薬を施さない焼き締め陶器。本遺跡では日用雑器が中心となっており、皿・鉢・水鉢・擂鉢・植木鉢・徳利・瓶・壺・甕・窯道具・急須などの器種が確認できた。特に鉢や甕は全形が復元できる良好な資料が大量に得られている。

ここでは各器種ごとの分類概念を記し、個々の詳細な特徴については観察表に呈示する(第41~42表)。なお、集計に関しては個体数の確認に主眼を置くため、胴部片や器種不明の小片についてはカウントしてない。

第40表 沖縄産無釉陶器出土状況一覧

器種・部位	出土地	平成15年度			平成16年度			小計	合計	器種・部位	出土地	平成15年度			小計	平成16年度			小計	合計
		撹乱・表採・I層・不明		II層	III層	撹乱・表採・I層・不明		II層	石積			撹乱・表採・I層・不明		II層	III層	撹乱・表採・I層・不明		II層		
碗	口縁部		2		2			0	2	蓋	縁部～つまみ		1		1				0	1
	底部		1		1		1	1	2		縁部		2		2		1		1	3
皿	口縁～底部					6		6	6	甕	つまみ		1		1				0	1
	口縁部		3		3		6	6	9		口縁～底部				0		1		1	1
	底部	2	4		6		5	5	11		口縁部		7	19		26	3	17	20	46
鉢	口縁～底部	2	6		8		127		127	厨子甕	底部				0		2		2	2
	口縁部	89	138		227	87	329	5	421		口縁部		1		1			0	1	
	底部	20	40		60	12	72		84		口縁～底部				0		2		2	2
擂鉢	完形					1		1	1	瓶	口縁部		2		2		8		8	10
	口縁～底部				2	20	2	24	24		底部		4	7		11		9	9	20
	口縁部	22	46	1	69	16	108	1	125		完形				0		1		1	1
植木鉢	底部	15	16	1	32	14	48	2	64	96	口縁部				0		1		1	1
	口縁～底部					2		2	2	甕	口縁部		13	14		27	1	17	18	46
火炉	口縁部					1		1	1		底部		3		3		1	6	7	10
	底部										瓶か甕	底部	7	10		17	4	28	1	33
	口縁部		2		2			0	2		甕か甕	底部	22	39	1	62	5	55	1	61
急須	底部	1		1				0	1	合計	器種不明	口縁部	3	30	1	34		89	89	123
	口縁部		1		1			0	1		小計		64	121	2	187	14	237	2	253
	注口		1		1		1		1				219	385	4	608	148	989	12	1139
	小計		155	264	2	421	134	742	10										1747	

総計:3054

### 1. 皿(第32図1~2)(図版25-1・2)

皿は全形が復元できる資料が2点確認できた。ベタ底のタイプ(1)と高台があるタイプ(2)がある。ベタ底のタイプは、口縁部に煤が付着しているため、灯明皿の用途が考えられる。

### 2. 鉢(第32図3)(図版25-3・4)

口縁部が逆L字状になる。なかには、口縁部外面下部を波状に整形するもの(図版25-4)も見られる。

### 3. 水鉢(第32図4・5)(図版25-5~9)

「ミジクブサー」といわれる、洗濯用などに使用したと推定される鉢である。口縁部形態で3類に分けられる。

I類 底部から肩部まで斜めに丸みをもって立ち上がり、口縁部が内彎する。大型のもの(a)(第32図4)と比較的小型のもの(b)(図版-6・7)がある。

II類 肩部から口縁部にむけて内彎し、口縁部を外側に折り曲げ、S字状になる。全形の窺える資料は出土していない。(図版25-8)

III類 胴部が張り、頸部ですぼまって口縁部へ垂直に立ち上がる。口縁部は逆L字状。(第32図5)

### 4. 擾鉢(第32図6~8)(図版25-10~13)

I類 底部から口縁部までストレートに開き、口縁部がやや斜め上に立ち上がる。口縁部下がくぼみを持ち、くの字状を呈するタイプ(a)(第32図7)とくぼみがないタイプ(図版25-12)(b)がある。

II類 底部から口縁部までやや丸みをもって立ち上がり、口縁部は幅広に整形される。(6)

III類 底部から口縁部まで丸みをもって立ち上がり、口縁部が逆L字状になる。(8)

### 5. 植木鉢(第32図9・第33図10)(図版26-14・15)

底部中心に穴をあける一群を植木鉢とした。いずれも口縁部が逆L字状になる。胴部で丸みをもつもの(9)と、底部から口縁部までストレートに立ち上がるもの(10)がある。

### 6. 瓶(第33図11~14)(図版26-16~19)

徳利と思われる器種と、用途不明の器種に分けられる。

I類 砲弾形を呈し、胴長の器形。全形が窺える資料は出土していない。いわゆる「ターワカサー」「鬼の手」と呼ばれるものと思われる。(11)

II類 底部で最大径を有し、頸部がしまる器形。いわゆる「一合マス」と呼ばれるものと思われる。(12)

III類 胴部で最大径を有し、頸部がしまる器形。いわゆる「チュワカサー」「ヒラチビ」と呼ばれるものである。(13)

用途不明としたものは、胴部で最大径を有し、頸部がしまる。全形が窺える資料は出土していないが、外面に線彫りで「中山演技場落成記念」と書かれており、実用性があまりないものと思われる。何点か得られているため、大量生産されたものではないだろうか。(14)

### 7. 壺(第33図15・16)(図版26-20~23)

I類 頸部がなく、肩部からすぼまって口縁部がつくタイプ。口径と胴径の幅が大きいものと思われる。全形が復元できる資料は出土していない。(図版26-20)

II類 肩部で最大径を有し、頸部でしまって口縁部へ垂直に立ち上がる。口縁部が玉縁状となる。頸部下に耳を貼り付ける。(第33図15)(図版26-21)

III類 肩部で最大径を有し、頸部でしまって口縁部が外反する。(16)

### 8. 瓢(第34図17~19)(図版27-24~28)

I類 肩部で最大径を有し、頸部で垂直に立ち上がって口縁部が逆L字状になる。(17)

II類 肩部で最大径を有し、頸部へゆるやかにしまって口縁部が逆L字状になる。大型のタイプ(18)と小型のタイプ(図版27-26)がある。

III類 肩部から頸部へゆるやかにしまって口縁部へ垂直に立ち上がる。(図版27-27)

IV類 肩部から頸部へゆるやかに内傾して口縁部がやや外側に開く。(19)

### 9. 厨子甕(図版27-29)

厨子甕の肩部と思われる資料が1点、確認できた。

### 10. 急須(第34図20)(図版27-30)

全形が窺える資料は出土していない。

### 11. 窯道具(第34図21)(図版27-31)

焼成の際に重ね焼きするために、器物の上部に覆わせてその上に器物をのせる。大型製品の焼成時に使用する。壺屋古窯群で出土している。側面および上面に孔を穿ち、上面には葉脈状に溝を彫る。

第41表 沖縄産無釉陶器観察一覧

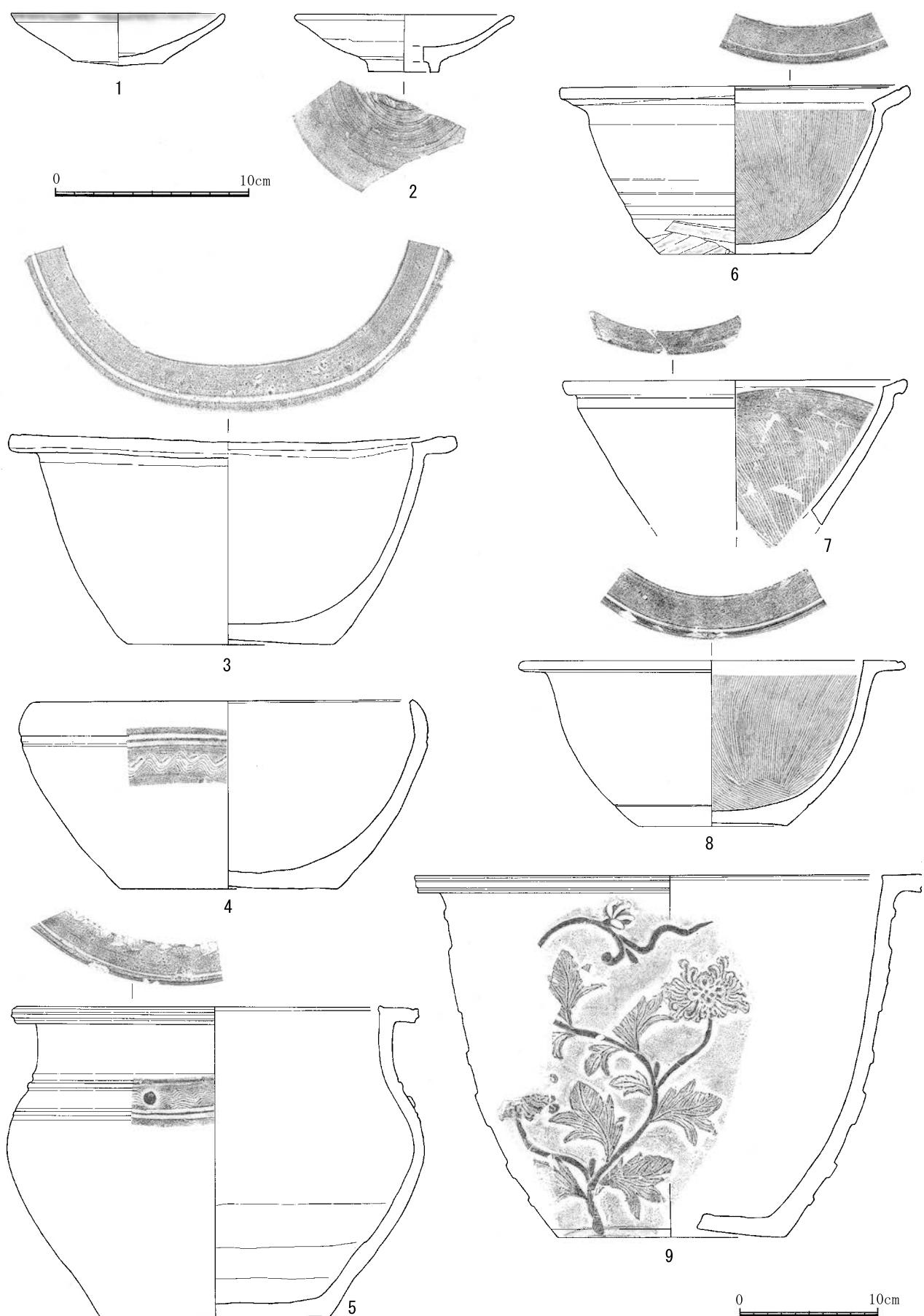
単位:cm

図・図版番号	器種	分類	部位	口径底径器高	素地	観察事項	出土地点 出土層
第32図1 図版25-1	皿		口～底	11.0 4.6 2.6	にぶい 橙色	底部から口縁部にかけて直線的に開く器形。底部はやや膨らみがある。口縁部に煤が付着している。	し-13 II層
第32図2 図版25-2	皿		口～底	11.3 3.6 3.0	明赤褐色	底部から口縁部にかけて直線的に開く器形。高台に糸切り痕が残る。	し-13 III層
第32図3 図版25-3	鉢		口～底	32.2 14.8 14.7	にぶい 赤褐色	口唇部に1条の圏線を丸彫りによって施す。	さ-13 II層
図版25-4	鉢		口～胴	— — —	橙色	口縁部下を波状に整形する。大型の鉢と思われるが、破損が著しいため全形は不明。	こ-13 I層
第32図4 図版25-5	水鉢	I a	口～底	27.3 15.7 13.7	にぶい 赤褐色	外面に2条の圏線をめぐらせ、5条の波状沈線を施す。	す-13 II層
図版25-6	水鉢	I b	口～底	22.4 9.6 10.4	橙色	外面に5条の波状沈線を施し、上下端をナデ消す。外底面に糸切り痕が残る。	し-13 II層
図版25-7	水鉢	I b	口～底	22.0 10.7 9.5	明赤褐色	外面に2条の圏線を施し、その下に粗雑に1条の波状沈線を廻らせる。	さ-13 II層
図版25-8	水鉢	II	口縁部	— — —	にぶい 赤褐色	外面肩部に4～5条の波状沈線を廻らせる。小破片のため、全形は不明。	し-13 II層
第32図5 図版25-9	水鉢	III	口～底	29.4 22.3 16.7	明赤褐色	口唇部上面に1条の圏線を丸彫りによって廻らせる。胴上部に圏線、5条の波状沈線を廻らせ、円形の貼付文を等間隔で貼り付ける。	こ-13 I層 さ-13 II層
第32図6 図版25-10	擂鉢	II	口～底	25.3 11.1 12.1	にぶい 赤褐色	底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部がくの字状に屈曲する。口唇部上面に1条の圏線を廻らせる。底部にケズリ痕が顕著に残る。	し-13 II層
第32図7 図版25-11	擂鉢	I a	口～胴	25.0 — —	灰褐色	口縁部は断面四角形で、口縁下部で内側に凹ませるため、くの字状を呈する。櫛目の単位は13～14本。	さ-13 II層

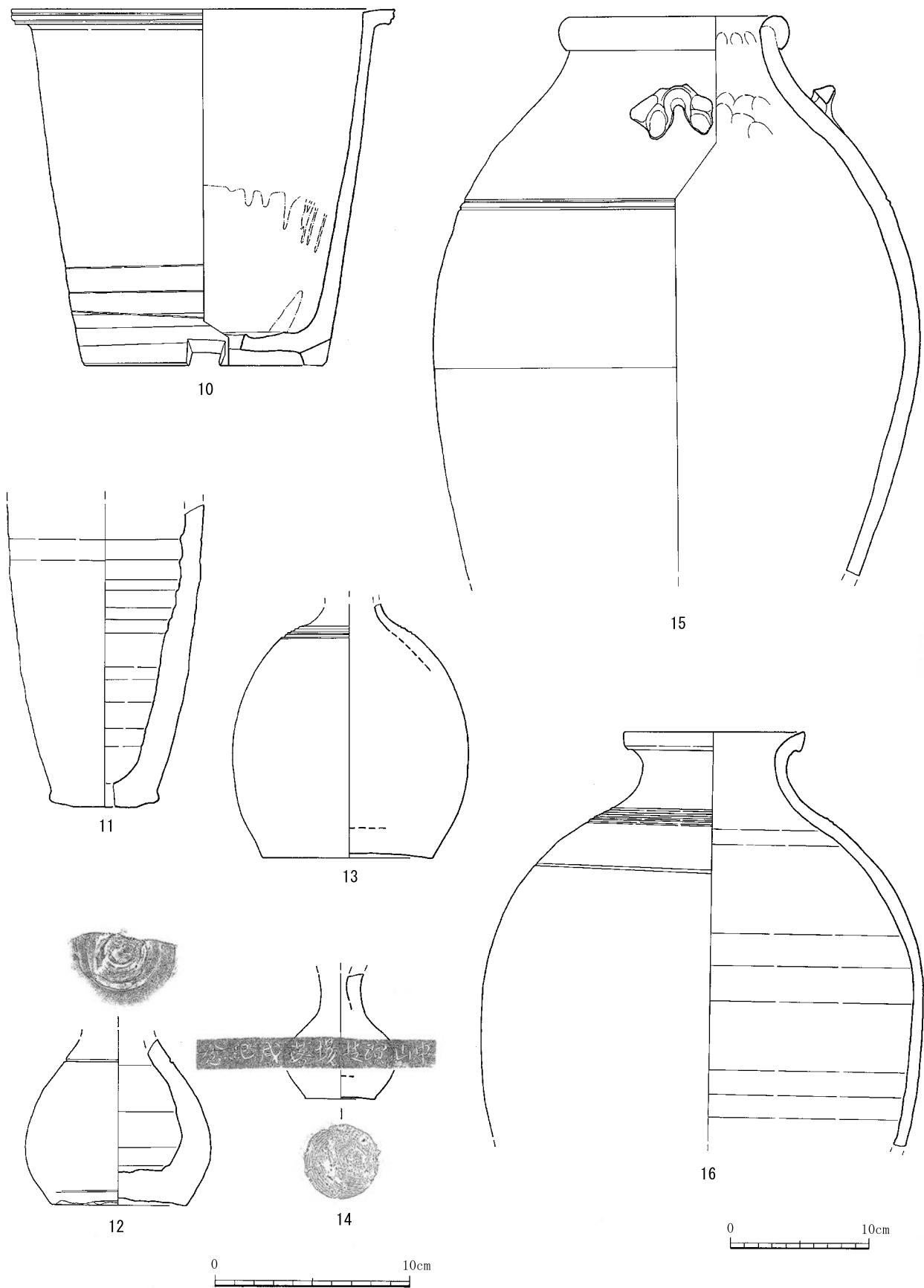
第42表 沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

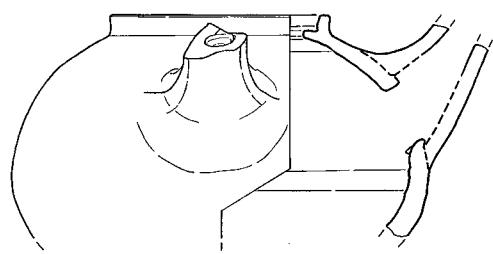
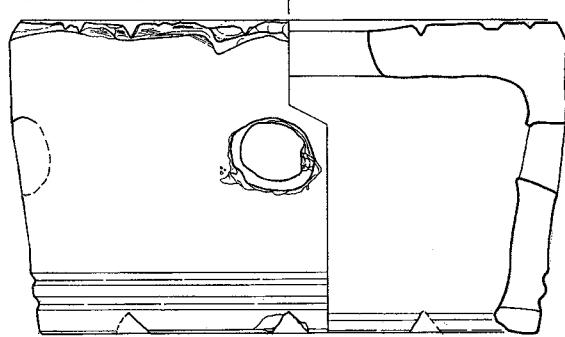
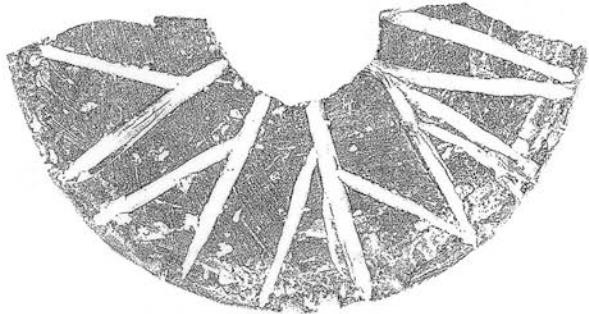
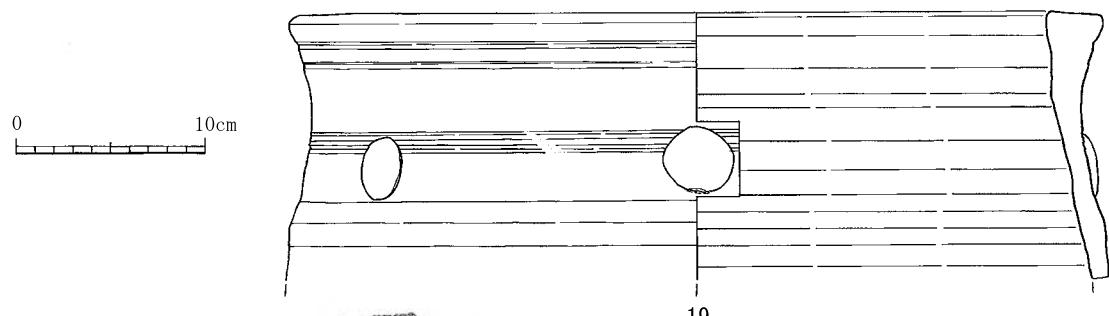
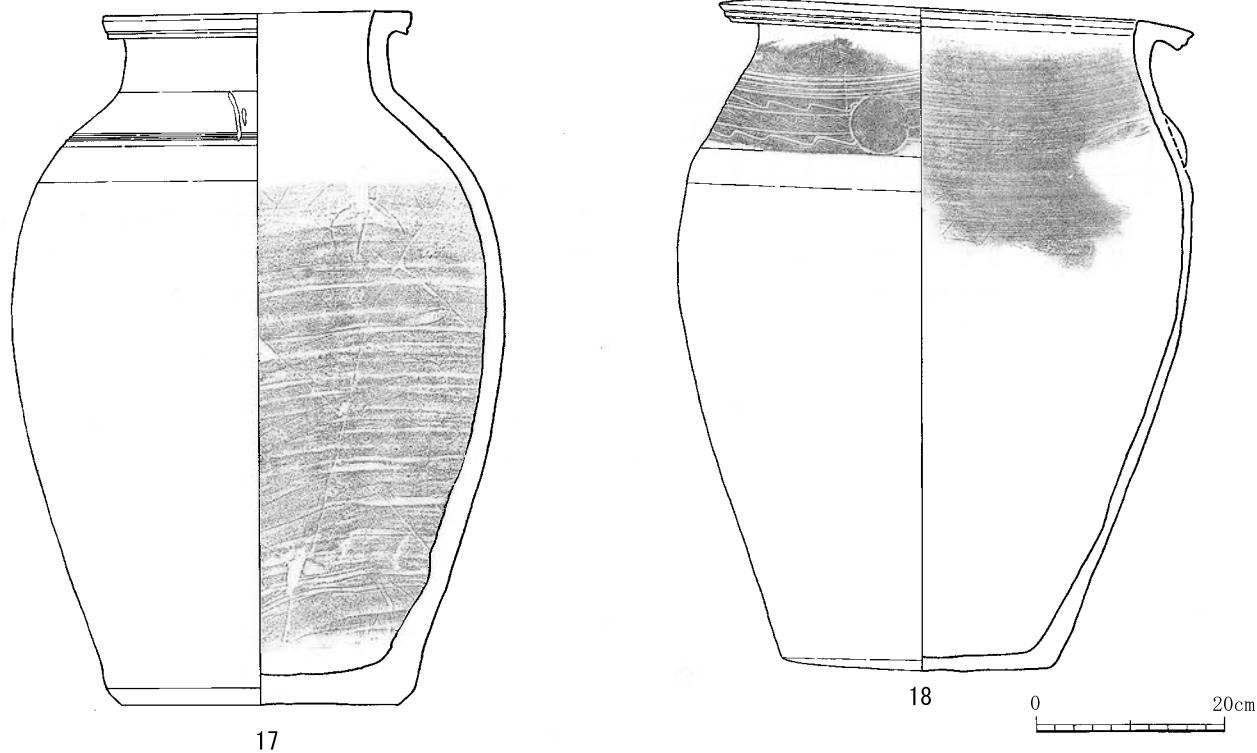
図・図版番号	器種	分類	部位	口径底径器高	素地	観察事項	出土地点 出土層
図版25-12	擂鉢	I b	口縁部	— —	にぶい 赤褐色	口縁部は断面三角形に肥厚し、斜め上方に立ち上がる。櫛目は単位は不明。	さ-14 II層
第32図8 図版25-13	擂鉢	III	完形	28.0 10.6 12.1	橙色	口唇部上面に1条の圈線を廻らせる。櫛目は密に施すため、単位は不明。	す-13 II層
第32図9 図版26-14	植木鉢		口～底	36.7 16.4 26.2	橙色	口縁部側面に2条の圈線を廻らせ、胴部には牡丹文を貼付ける。底部中央に径4.5cmの穴をあける。	し-13 II層
第33図10 図版26-15	植木鉢		口～底	27.4 18.3 25.2	にぶい 橙色	口縁部側面に2条の圈線を廻らせる。外面に約1mm幅の圈線を5条廻らせる。外面～内面中央部まで、化粧土を塗布するため赤色を呈する。底部中央に径6.0cmの穴をあけ、底部側面には2.7cm幅の切り込みを入れる。底部は上げ底となる。	し-13 II層
第33図11 図版26-16	瓶(徳利)	I	胴～底	— 5.5 —	にぶい 赤褐色	胴長で、ほぼ砲弾形を呈する。全形は不明。	さ-13 II層
第33図12 図版26-17	瓶(徳利)	II	頸～底	— 6.9 —	にぶい 赤褐色	ナデ肩で、厚手の瓶。胴上部に圈線を1条廻らせる。	す-13 II層
第33図13 図版26-18	瓶(徳利)	III	頸～底	— 8.7 —	にぶい 赤褐色	頸部下に4～5条の圈線を廻らせる。	不明
第33図14 図版26-19	瓶		頸～底	— 3.6 —	にぶい 黄橙色	頸部がしまり、胴中央部が最大径となる。底部はベタ底。胴部に「中山演技場落成記念」と線書きする。	こ-13 I層
図版26-20	壺	I	口～肩	15.8 — —	にぶい 赤褐色	肩部から口縁部にむけてほぼストレートに内傾する。口縁部は楕円状に肥厚する。	さ-13 II層
図版26-21	壺	II	口～胴	— — —	にぶい 赤褐色	肩部に耳を貼り付ける。頸部下に「十六」と銘が書かれている。	こ-13 I、II層
第33図15 図版26-22	壺	II	口～胴	15.4 — —	にぶい 赤褐色	肩部に耳を貼付ける。頸部から口縁部に向けてやや内傾している。肩部に2条の沈線を廻らせる。	し-13 II層
第33図16 図版26-23	壺	III	口～胴	12.9 — —	にぶい 赤褐色	頸部下に浅く平たい沈線を3条、肩部に1条施す。	し・す-13 I、II層
第34図17 図版27-24	甕	I	完形	16.2 14.6 36.4	明赤褐色	胴上部に最大径をもち、頸部は垂直に立ち上がって口縁部が逆L字状になる。肩部に「二」を縦に書いたような銘?が見られる。肩部に2条の圈線を廻らせる。	す-13 II層
第34図18 図版27-25	甕	II a	口～底	50.0 29.2 69.4	橙色	口縁部外面に細沈線を2条施す。肩部には4～5条の圈線、細めの4条波状沈線、太めで大柄の1条波状沈線を施し、径6.0cm前後の丸文を等間隔に貼り付ける。	し-13 II層
図版27-26	甕	II b	口～胴	22.2 — —	橙色	頸部および肩部に浅い沈線を5～6条めぐらせ、2条の波状沈線を施す。径1.0cm前後の丸文を等間隔に貼り付ける。	す-13 II層
図版27-27	甕	III	口～肩	— — —	にぶい 橙色	口縁部外面に2条の丸彫り圈線、肩部に平たい圈線を3条施す。	さ-13 I層
第34図19 図版27-28	甕	IV	口縁部	43.0 — —	赤褐色	胴径と口径があまり変化しない広口のタイプ。口縁部外面に2条の丸彫り圈線、頸部に平たい圈線を2条施し、径3.5cm前後の円文を等間隔に貼り付ける。	し-13 II層
図版27-29	厨子甕		肩部	— — —	にぶい 赤褐色	マンガンを塗布するため、外面は褐色を呈する。外面に下向きの花弁文を細沈線で描く。小破片のため、全形は不明。	こ-13 I層
第34図20 図版27-30	急須		口～胴	8.3 — —	明赤褐色	内部に蓋受けを有する。胴部で最大径を有し、口縁部に向けてすぼまる。全形は不明。	さ-13 II層
第34図21 図版27-31	窯道具		口～底	28.4 16.5 26.2	明赤褐色	上面に断面三角形状の溝を中心部から葉脈状に刻む。上面中央の孔は径8.4cm。胴上部に丸彫りの圈線を2条施す。胴部中央には径4.0cm前後の穴を等間隔で配する。底部に三角形状の切込みを等間隔で配する。	す-13 II層



第32図 沖縄産無釉陶器 1



第33図 沖縄産無釉陶器 2



第34図 沖縄産無釉陶器 3

## 第10節 陶質土器

総数 3995 点が出土した。器種別の内訳は皿、鉢、擂鉢、植木鉢、鍋、鍋の蓋、土瓶、土瓶の蓋、火炉、壺の蓋など多種多様な雑器が出土し、特に火炉の出土量は圧倒的であった。

図版 28-1 は平底の灯明皿で胴に僅かな丸味を持ち外にやや開きながら立ち上がる。底径 6.5 cm、口径 10.2 cm、器高 2.7 cm、し-13 II 層出土。

図版 28-2 は平底の丸碗状の底部資料である。底径 6.5 cm、し-13 II 層出土。

第 35 図 1.2 図版 28-3~6 は口縁が内彎する小振りの平底鉢である。3 は内彎する口縁の上部を僅かに上向きに引き上げ口唇を扁平に整えている。外体面に櫛描きによる三条の波文を横位に巡らしている。口径 15.3 cm、し-13 II 層出土。図版 28-4 は 3 の同一個体と考えられる底部資料であり、外底面は明瞭な糸切痕が認められる。底径 9.3 cm、し-13 II 層出土。図版 28-5、6 は底部からシャープな立ち上がりをみせ口縁は胴上部から内彎する。口唇は肥厚気味な舌状を呈する。外底面に糸切り痕、内外体面共に轆轤痕が顕著であり仕上げは雑である。5 は幅広横線文、6 は櫛描きの波文をそれぞれ口縁に施文している。5 底径 7.5 cm、口径 14 cm、器高 7.5 cm、し-13 II 層出土。6 底径 10.9 cm、口径 19.8 cm、器高 10.8 cm、し-13 II 層出土。

図版 28-7 は口縁が鍔縁を成す円筒状の植木鉢である。鍔縁の外面に二条の沈線文を施し、底部は高台に抉り込みを施し底面中央に円孔を穿つ。口径 26 cm、器高 17 cm、底径 16 cm、さ-13 II 層出土。

図版 28-8 は口縁が逆八の字状に開く鍔縁の擂鉢である。内面に放射状の櫛描を認める。口径 32.2 cm、し-13 II 層出土。

図版 28-9 は胴部の立ち上がりが直線的な短頸の小壺である。口縁は直に立ち、口唇は丸い。底部は平底である。口径 5.8 cm、器高 6 cm、底径 4.2 cm、し-13 II 層出土。

図版 28-10 は 9 と同様の小壺の底部と考えられる。底径 5 cm、す-13 II 層出土。

図版 28-12 は胴が丸く頸部で緩やかに伸び口縁に移行する。口縁は縁部を外側に折曲げた鍔縁を成す広口瓶である。胴上部に二条、頸部直下に一条の横線文を施す。図版 28-11 の底部は 12 と同一固体と考えられる。高台内割りは外側に開くよに削り出されている。底径 6.5 cm、し-13 II 層出土。

図版 28-13 は上面が円盤状をなし裏面は筒状にのびる栓を有する。壺の蓋である。縁径 16.2 cm、器高 3.3 cm、こ-13 I 層出土。

図版 29-14 は胴の丸いやや長めの首を有する瓶が考えられる。底部は低めの高台を削り出す。底径 10 cm、し-13 II 層出土。

図版 29-15~18 は土瓶である。15 は胴部の形態が球状を示すもので口縁は僅かに玉縁状を成す。口径 7.75 cm、す-13 II 層出土。

16、17 は胴部の形態が釣り鐘状の様相を呈し、胴部の断面形が菱状を成す。口縁は短く垂直に立ち上がる。胴上部の両脇に方形の取っ手を取り付け、片方の取っ手の下部に筒状の注ぎ口を上向きに取り付けている。第 35 図 6 図版 29-17 は胴部中央と下部に二条の横線文を巡らしている。底部はいずれも丸底である。16 底径 18 cm、口径 7.5 cm、し-13 II 層出土。17 口径 8.4 cm、H16 マダマし-13 I 層出土。

図版 29-19~22 は甲部が笠状の土瓶の蓋である。19 はボタン状、20 は宝珠状、21 は紐状の摘みを有する。19 摘み径 1.5 cm、縁径 8.5 cm、器高 2 cm、さ-13 II 層出土。20 摘み径 2.2 cm、縁径 9.0 cm、器高 3.7 cm、す-13 II 層出土。21 こ-13 I 層出土。22 し-13 II 層出土。23 は筒状の取っ手である。し-13 II 層出土。

第 35 図 4 図版 29-24 は浅鉢状の容器である。逆U字状の取っ手が付き取っ手中央に円孔を穿つ。取っ手は短いがフライパン状鍋である可能性もある。口径 27.8 cm、し-13 II 層出土。

図版 30-25~29 は行平形鍋である。丸みのある胴部に口縁は断面形が「く」の字状に外側に折り開く。底部は丸底、紐状の取っ手を口縁の外面両端に貼付するものである。25 口径 17.4 cm、器高 9.6 cm、底径約 14 cm、し-13 II 層出土。第 35 図 9 図版-26 口径 21 cm、器高 10.6 cm、H16 し・す-13 II 層出土。27 口径 17.8 cm、器高 8.8 cm、底径約 9.8 cm、す-13 II 層出土。28 口径 15.6 cm、さ-13 II 層出土。29 口径 13.8 cm、し-13 II 層出土。

図版 30-30~32 は笠状の鍋の蓋である。甲中央に環状の摘みを削り出す。30, 31 は縁部に向かい直線的に開き甲表面に轆轤痕が顕著である。30 摘み径 6.4 cm、縁径 20.4 cm、器高 4.6 cm、し-13 II 層出土。第 35 図 8 図版-31 摘み径 6 cm、縁径 18.15 cm、器高 5.3 cm、し-13 II 層出土。32 摘み径 4.9 cm、縁径 13.8 cm、器高 3.5 cm、し-13 II 層出土。

図版 30-33 は口縁が筒状をなし胴部に外側に張り出す鍔を有する。類例資料から羽釜の可能性がある。H15 マダマさ-13 II 層出土。

図版 31-34~49 は火炉である。第 35 図 10 図版-34 は底部から口縁までが丸碗状に内彎する火炉である。口縁

部の一部にU字状の抉りを入れ、口唇は肥厚気味の舌状を呈する。両サイドに隅丸方形状の把手を持ち把手中央に円孔を有する。底部は低めの高台を削り出すものである。外体面に白土を塗布後、7 mm～5 mmの横縞状に搔きとる。口径 15.15 cm、器高 11 cm、底径 8.5 cm、H16 マダマレ-13 II 層出土。

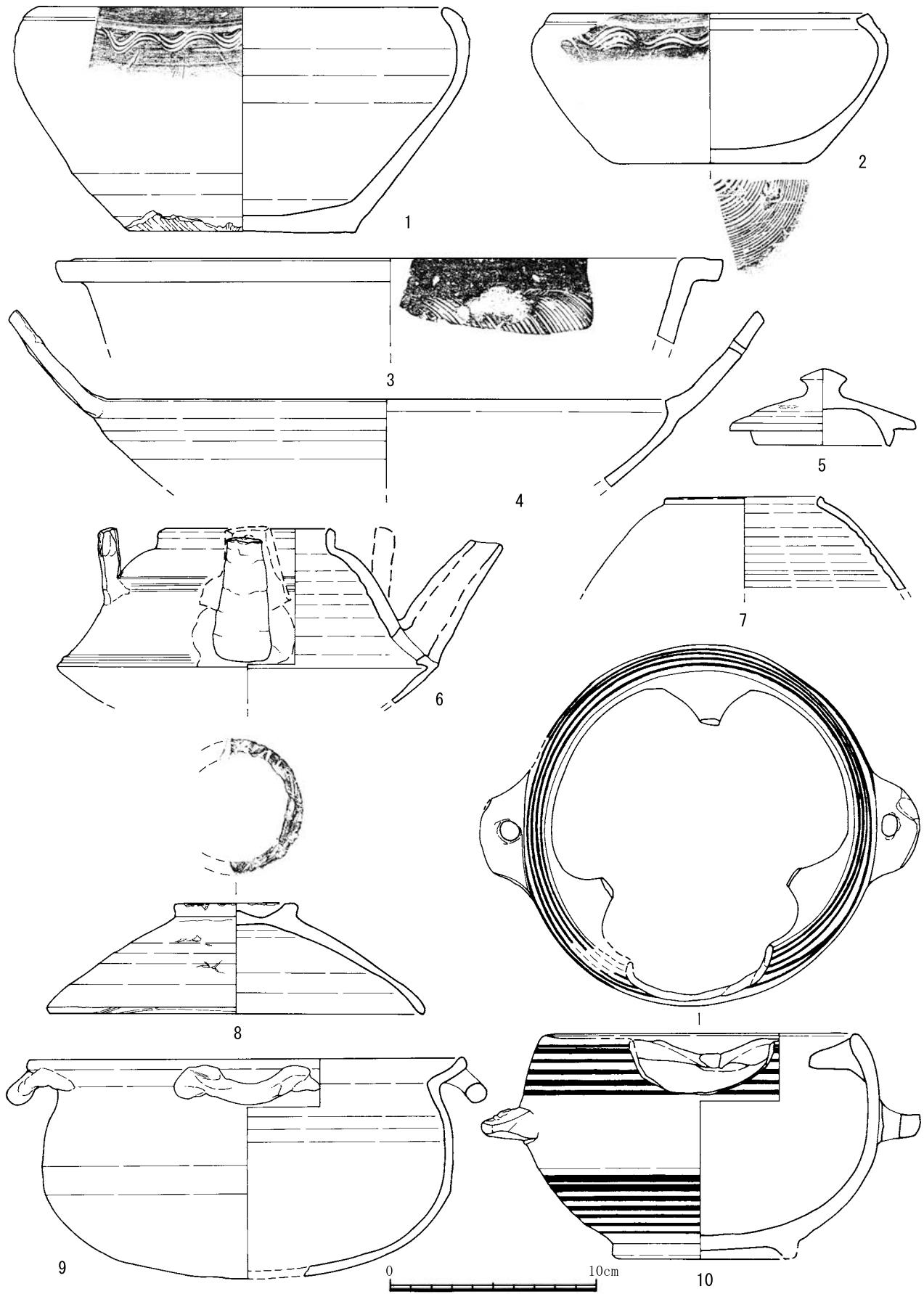
35、37 は内彎の火炉の破片資料である。35 口径 19.8 cm、す-13 II 層出土。37 さ-13 II 層出土。36 は口唇を水平に切り取た様に整え胴上部で緩やかに「く」の字状に屈曲させている。口径 15.4 cm、H16 マダマレ-13 II 層出土。38 は横位に小孔を数ヶ所穿孔する口縁である。口径 11.2 cm、レ-13 II 層出土。39 は火炉の落とし蓋が考えられる。甲部三ヶ所に円孔を穿孔。口径 8.8 cm、さ-13 II 層出土。40 は胴部が底部から僅かに開きながら立ち上がり口縁で「く」の字状に内側に屈曲させるものである。口縁直下の両側に方形の取っ手を貼付し中央に円孔を穿っている。口縁の外面に三条の沈線文を施す。底部は平底雑な作りである。口径 11.3 cm、器高 12 cm、底径 10.5 cm、さ-13 II 層出土。41 は小振りの火炉で口縁内面に平面形が三角になる突起（五徳）有する。口縁に三条の幅広沈線と菊花文を施す。口径 15.2 cm、レ-13 II 層出土。42 は口縁を内側に折曲げ上面は環状の平坦面を作る。口縁上面から胴部にかけ白土を塗布後縞状に搔き取り文様にする。筒状の火炉が考えられるがサイズがやや大きいことから焜炉の可能性がある。口径 19.2 cm、レ-13 II 層出土。43～45 は筒型の火炉の底部である。43 こ-13 I 層出土。44 底径 20 cm、こ-13 I 層出土。45 底径 14 cm、さ-13 II 層出土。

図版31-46～48 はいずれも玉縁口縁の火炉であり、胴部は一様に球状に膨らむが一旦頸部で窄み頸部が直に立ち口縁に移行するものと頸部が緩やかに広がり口縁に移行するものがある。胴部両サイドに獅子形の把手を持つもの46、47 と隅丸形の把手を持つもの48 とある。いずれも把手中央に円孔が穿たれる。高台は外割りのものとやや内割りがある。46 口径 15.1 cm、器高 10.9 cm、さ-13 II 層出土。47 口径 20.4 cm、器高 15.7 cm、底径 14.4 cm、す-13 II 層出土。48 底径 10 cm、す-13 II 層出土。

図版31-49 は口縁の断面形が方形に肥厚し胴部は球状に膨らむことが推察されるものである。口縁内に平面形が三角になる突起（五徳）有する。口径 14.6 cm、レ-13 II 層出土。

第43表 陶質土器火炉分類表

図版番号	器形	口縁	分類	断面形	観察事項
図版31-34	内湾	A	1		胴上部から口縁まで内湾状の器態を成すものである。口唇はやや先の尖った舌状を示しめすが、口縁の一部に抉りをいれ通気口を設けている。口縁内側に鍋などを設置するための突起が三個みられる。底部は高台付きである。胴部に白土を塗布、更に横縞状に削り出すことにより文様を施す。
図版31-35			2		口唇をやや平らに整える。
図版31-36			3		口唇は水平に切り取った様に平坦整えている。
図版31-37			4		口唇は舌状を成す。
図版31-38			5		器形は内湾状を示し、口唇は蓋受けのための段を有す。胴上部に円孔を口縁と平行に数個穿つ。
図版31-40	深鉢形	くの字状 内向	D		口縁の断面形が「く」の字状を成す深鉢形の火炉である。底部は平底である。
図版31-41	筒型	直口 肥厚	2		口縁部は直口、口唇は内側に肥厚し断面形が三角状を成す。深鉢形の火炉である。口縁から胴部に幅広沈線や印花文を施している。底部は抉りのある高台やや外割りの高台がある。
図版31-42			3		やや内向ぎみの筒型火炉である。口唇は先端がやや斜めの方形を成す。大き目の火炉がほとんどである。胴部に白土による横位の線文や波文を縞状に施すことがある。
図版31-46	頸部付	肥厚 外反	1		口縁は玉縁状に肥厚するものから断面形が丸みを帯びた三角状までみられる。頸部はやや長め胴部は丸く膨らむ底部は低めの高台を持つことが多い。
図版31-49			2		口縁は断面形が三角状に肥厚する。頸部は短頸といえる。胴部は丸く膨らむ底部は不明。



第35図 陶質土器

## 第11節 瓦質土器

総数 278 点が出土し、器種は瓶、鉢、香炉、火炉、器種不明がある。図版 32-1 は口縁部が玉縁状に肥厚し外側に開く短頸形の瓶である。口径 5.3 cm H15 マダマコ-13 I 層出土。図版 32-2、3 は底部のみの資料であり胴部より上は判然としないが同様な底部を持つ花活けの報告例があることから花活けの可能性がある。2、底径 13.6 cm H16 す-13 II 層出土。3、底径 10.8 cm H16 マダマレ-13 II 層出土。図版 32-4 は胴上部までは真っ直ぐ立ち上がり口縁でやや内彎気味に立ち上がる鉢で、口唇は内側に斜傾した平坦面を持ち内側に断面形が三角状に肥厚させている。H16 マダマす-13 II 層出土。図版 32-11 は胴上部に波状の帶文を廻らした鉢である。H16 マダマす-13 II 層出土。図版 32-6 は内彎形の火鉢である。口縁は内彎、口唇を肥厚させ先端は平たく整えている。器表を丁寧に研磨し胴上部に型押しの雷文を廻している。口径 27.8 cm 器高 23.8 cm 底径 18.6 cm H16 マダマす-13 II 層出土。図版 32-7、8 は丸形の胴部を持ち口縁に向かい胴上部で一旦内側に窄み外に開く口唇は玉縁状に肥厚する。7、H16 マダマレ-13 II 層出土。8、は鍋を乗せる突起の附いた口縁資料である。H15 マダマさ-13 II 層出土。図版 32-9 は獸形の紐通しで内彎する容器の胴部に貼付されるものである。H15 マダマさ-13 II 層出土。図版 32-10 は獸形の製品で、胴部に四本の足の様な突起を取り付け、器表に毛状の線刻が施されている。部分的な資料であり、全形を窺えないが獸形の蚊取り線香立ての様な香炉と推察できる。器高 14.7 cm H16 マダマレ-13 II 層出土。図版 31-5、12 は共に口縁部が逆 L 字状の鍔縁の火炉が考えられる。5、口径 30.2 cm H16 マダマレ-13 II 層出土。12、H16 マダマレ-13 II 層出土。図版 33-17 は箱型の七輪である。孔径 16 cm 高さ 22 cm 幅 21 cm H16 マダマす-13 II 層出土。図版 33-14~16 は前方に方形の張り出しを持つ馬蹄形の火炉である。16、縦長 57.6 cm 横長 22.2 cm 高さ 17.7 cm H16 マダマレ-13 II 層出土。15、H16 マダマレ-13 II 層出土。14、口径約 25 cm H16 マダマレ-13 II 層出土。図版 32-13 は用途が不明の製品であるが容器内面に丸みを持ち更に縁部に煤が付着していることから七輪・火炉などが考えられる。H16 マダマす-13 II 層出土。

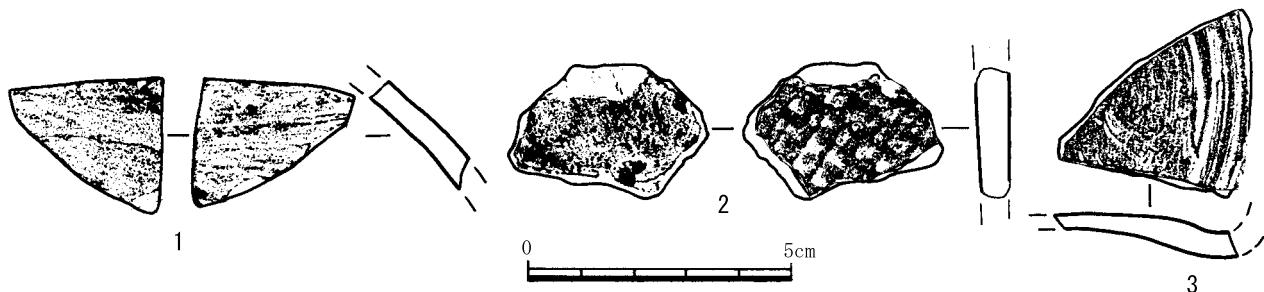
## 第12節 カムイヤキ須恵器

鹿児島県徳之島カムイヤキ須恵器の胴部及び底部の破片が、三点出土していたので下記に特徴などを記す。

第36図1・図版33-1は薄手で小型壺の胴部破片とみられるものである。器壁は4.2mm~4.6mmと均一である。器面調整は、外面に平行叩きを施した後で、指ナデによってナデ消しをおこなっているが、叩きは消えきっていない。内面は形状不詳(格子目?)の当て具痕を回転擦痕でナデ消しを実施しているが徹底していない。器色は外面が青灰色、内面は外面より若干、暗い青灰色を呈している。焼成は堅緻である。素地は細かく、混入物として石灰質の微砂粒を多く含む。稀に微細な石英と大粒の砂岩片(長軸4.3mm×短軸1.8mm)が含まれている。レ-13第II層出土。

同図2・図版33-2も壺の胴部破片であるが、上記1よりも器壁が6.3mm~6.7mmと2mm程度厚い。器面の調整は、外面が平行叩きが交差して格子目状となっている。内面の当て具の痕跡は、雑なナデで消えきっている。器色は外面が灰褐色を呈し、内面は灰茶色を帶びている。焼成は良好で硬い。素地はやや粗く、混入物として1mm前後の粗い石英を多く含んでいる。レ-12第II層出土。

同図3・図版33-3は薄作り(器壁は3mm~5mm)の壺などの底面破片である。底面が盛り上がっているようである。底面から立ち上がり部分が欠落する。外底面はナデ仕上げか、内底面にはヘラ様の回転擦痕が雑に施されている。器色は外底面が灰褐色を帶び、内底面が明灰色を呈している。焼成は良好で硬い。素地は微細子で、微細な石英を多量に含む。出土地区及び出土層位は、さ-13第II層出土。



第36図 カムイヤキ須恵器

## 第13節 土器(グスク土器・宮古式土器・中森式土器)

本遺跡からグスク土器とグスク時代相当期に先島諸島の遺跡から出土する宮古式土器、中森式土器が出土している。グスク土器と総称したものは、フェンサ上層式土器<sup>(註1)</sup>の範疇に入る土器群で、グスク土器<sup>(註2)</sup>の名称を冠して使用する。グスク土器で図化できたものは、8点であった。次に宮古式土器<sup>(註3)</sup>は、宮古諸島で13世紀～近世まで使用された土器型式で、その範疇にある壺の底部破片と、八重山諸島の14世紀中頃～17世紀頃まで使用されていた中森式土器<sup>(註4)</sup>と類似する鍋形土器の底部破片が各々一点ずつ出土している。以下、グスク土器、宮古式土器、中森式土器の順に個々の特徴を記す。

**第44表 土器出土状況一覧**

種・部位	出土地	平成15年度						小計	平成16年度			不明	小計	合計			
		I層		II層			不明	I層		II層							
		こ-13	さ-13	こ-12	こ-12～13	こ-13	さ-13	し-15	す-14	す-13							
グスク土器	口	2		1	2		1	6			1		1	7			
	胴	32	12	6	38	44	54	1	187	1	1	7	9	196			
	底	1		1	2	1		5			1	2	3	8			
小計		35	12	8	42	45	55	1	198	1	1	9	2	211			

### 1) グスク土器 (第37図1～同図8) (図版33-4～11)

本遺跡から出土したグスク土器は全て破片であったが、稻福遺跡<sup>(註5)</sup>、我謝遺跡<sup>(註6)</sup>、糸数城跡<sup>(註7)</sup>の報告を参考に分類した結果、明確なものは鍋形・鉢形の二器種が確認された。その他に小型壺、若しくは碗とみられるものが出土している。

#### ① 鍋形土器 (同図1, 2) (図版33-4, 5)

1は滑石製石鍋を模倣した土器であるが、口縁に貼付けられた方形状の把手や歪な半円形状、或いは瘤状の把手は欠落している。口縁の形状は緩やかに湾曲し、内傾する鍋形土器の破片である。外面の器面調整は、雑な指圧を加えた後で指ナデ(ナデは主に横位方向で左から右へに実施)を施して仕上げている。内面も同様な手法と順序(横位方向のナデは左から右へに実施)で調整を行っているが、外面と比較して丁寧に仕上げている。口唇部の調整や成形は、内外両面より丁寧である。器面の色合いは外面が淡橙色を主体とし、部分的に淡褐色を帯びている。内面は黄茶色を主体として、部分的に淡灰色を呈している。器厚は6.6mm～8mmを測る。焼成は悪く、脆い。胎土は泥質の粘土で細かいが、粗い貝殻片を多く含んでいる。こ-12・13第II層より出土。

2の鍋形は鉄鍋の影響を受けて登場した模倣土器として考えられる資料である。口縁が逆さ「ハ」の字状に開くタイプで、内面は口縁に稜を意識して形成して、稜を境にして口唇部方向に器壁が次第に薄くなる。この稜から口唇部の間は、ナデ消しが徹底しないまま指圧が多く残っている。器面の調整は、口縁の形状を意識したため、外面の口縁部に指圧痕が集中し、胴上部付近に横方向のナデ消しが僅かに観察される程度である。内面口縁部は稜を境にして、稜より下(胴部)は若干の指圧を施した後に横位方向のナデ調整で仕上げる。稜より上は上記したとおりである。口唇部は舌状に雑に成形する。器色は外面が淡黄茶色、内面が淡橙色を帯びている。器面がアバタ状を呈する。焼成や良好で、硬い。胎土は泥質の粘土で細かいが、微細なガラス質の鉱物(石英)や砂粒が微量ながら含まれていて、粗い茶褐色の鉱物やサンゴの細片が少量含まれている。器壁は、胴部で6mm～8.5mmを測る。す-13第II層出土。

#### ② 鉢形土器 (同図3～5) (図版33-6～8)

3は鉢形土器の口縁破片で、口縁は胎土を折り返して指圧とナデを加えて雑に仕上げている。側面観は丁度、口縁を小さく「く」の字状に屈曲させた形状となる。外面の器面調整は口頸部に指圧痕が集中するが消えきっていない。肩部は箝削り後に指でナデ消している。内面は箝削り後にナデを加えて仕上げている。器色は外面が淡橙色、内面は黄白色を呈している。焼成は良好で、硬い。胎土は泥質で、細かい。微細なガラス質の鉱物と石灰質の砂粒を少量含んでいる。器壁は4.3mm～6.2mmと薄い。さ-13グリットの第I層からの出土である。

4・5は、いづれも口縁部の屈曲がルーズで、口唇部の尖る鉢形である。全体的に成形が雑である。4は外面の口縁部に指圧を押し引いた指ナデを雑に加えている。内面は外面よりやや丁寧に指圧痕とナデを施す。器面の色合いは両面とも淡黄色を主体とするが、外面は焼成時の黒斑が灰褐色となって現れている。5は内外面に箝削りと指圧を加えた後に指ナデを施す。器色は、両面とも淡黄色を呈するが、内面がやや明るい色調となっている。胎土は二点とも泥質で、細かい。焼成は堅緻である。混入物は、4が石灰質の微砂粒と細かい淡茶色の粘土塊が少量含まれる。逆に5には石灰質の粗い砂粒と粗い淡茶色の粘土塊が少量含まれている。器壁は4が4.5mm～5mm、5が5mm～6.2mmを測る。4は、さ-13第II層、5がこ-12第II層出土である。

#### ③ 鉢形土器の底部破片 (同図6, 7) (図版33-9, 10)

6は鉢形土器の底部破片。底面からの立ち上がりの部分のみ横位(左から右方向へ)の箝削りを加えていて、胴部から底面方向へは上から下方向への箝削りを主に加えている。部分的に磨面様の丁寧なナデがみられる。外底面は平坦であるが雑な面となっていて調整手法は不明。内面は底面から胴部方向へ延びる指ナデが斜位方向に走っている。内底面は雑な指圧やナデがみられる。器面の色合いは外面及び外底面が暗褐色で、内面が淡黄色を帶びている。焼成は良好で硬い。胎土は砂質の粘土で細かい。胎土に微細な黒色鉱物・石英を多量に含み、稀に粗い茶褐色の粘土塊が混入している。器壁は、底面が8mm、胴部は5.5mmと均一的である。こ-13第Ⅱ層の出土である。

7も鉢形土器の底部片である。器面の保持は悪いが、外面及び底面は箝削りが考えられる。内面ナデ仕上げとみられる。器面の色合いは外面が暗褐色で、内面が黄白色を呈している。焼成は堅緻である。胎土及び粘土の質は、6と同質である。胎土への混入物は、細かい石英・茶褐色の鉱物を多量に含み、稀に微細な黒色鉱物・石英の他に粗い淡茶色の粘土塊を僅かに含んでいる。器壁は底面が4.8mmを測り、胴部は4.7mmと均一的に仕上げている。す-13第Ⅱ層の出土である。

#### ④ 小型壺若しくは碗形土器の底部破片 (同図8) (図版33-11)

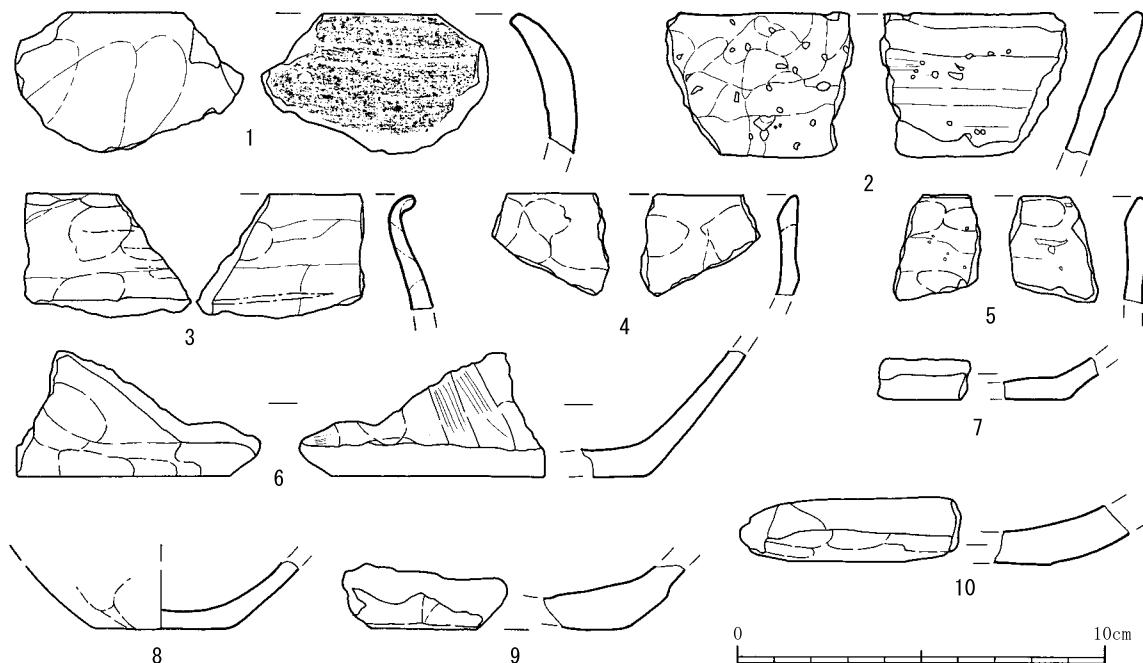
8は小振りの壺若しくは碗形土器の底部破片とみられる。底径の推算を試みたところ直径3.6cmと求められた。器面の保持は若干剥落する箇所もあるが、外面は箝削り後にナデを丁寧に加えて消している。外底面の器面はナデを加えたようであるが、使用による剥離面が多いようである。その為、粗雑な器面となっている。内面は器面が摩耗しているがナデ仕上げかと考えられる。色調は外面が淡褐色、外底面は灰褐色を帶びている。内面は淡茶色を呈している。焼成は良好であり、硬い。胎土は泥質で細かい。混入物として細かい石灰質の砂粒を多く含んでいる。稀に細かい茶褐色の粘土塊がみられる。器壁は薄く5mm前後で均一的である。こ-12第Ⅱ層出土。

#### 2 ) 宮古式土器 (同図9) (図版33-12)

9は壺の底部破片である。外底面の大半は剥落するが縁辺部にナデが残っている。外面は箝削りであるが、削りの面が滑らかであることから箝ナデの可能性もある。内面はナデ仕上げである。器面の色合いは、淡橙色を呈し、内面が淡黄色である。焼成は良好で、硬質である。胎土は泥質の細かく、粗い茶褐色の粘土塊を多く含み、少量ながら粗い貝殻片が混入する。器壁は胴部(9mm)が薄く、底面(1.1cm)で厚い。こ-12・13グリットの第Ⅱ層から出土している。

#### 3 ) 中森式土器 (同図10) (図版33-13)

10は石垣市カンドウ原遺跡<sup>(註8)</sup>・西表島上村遺跡<sup>(註9)</sup>など例から鍋形土器の底部破片があることが判断できる。底面からの形状から大きく外側に傾くタイプ鉄鍋の模倣若しくは、その影響を強く受けた土器である。外面及び底面は器面の保持が悪いが、箝削りを難に施していたようである。内面はナデ仕上げである。その他、外底面の縁辺には煤跡が帶状となっている。器面の色調は外面が淡褐色で、内面は明橙色を帶びている。胎土は細かく、泥質である。粗い貝殻片を多量に含む。僅かに微細な石灰質の砂粒と粗い暗褐色の粘土塊を含んでいる。こ-12・13第Ⅱ層から出土。



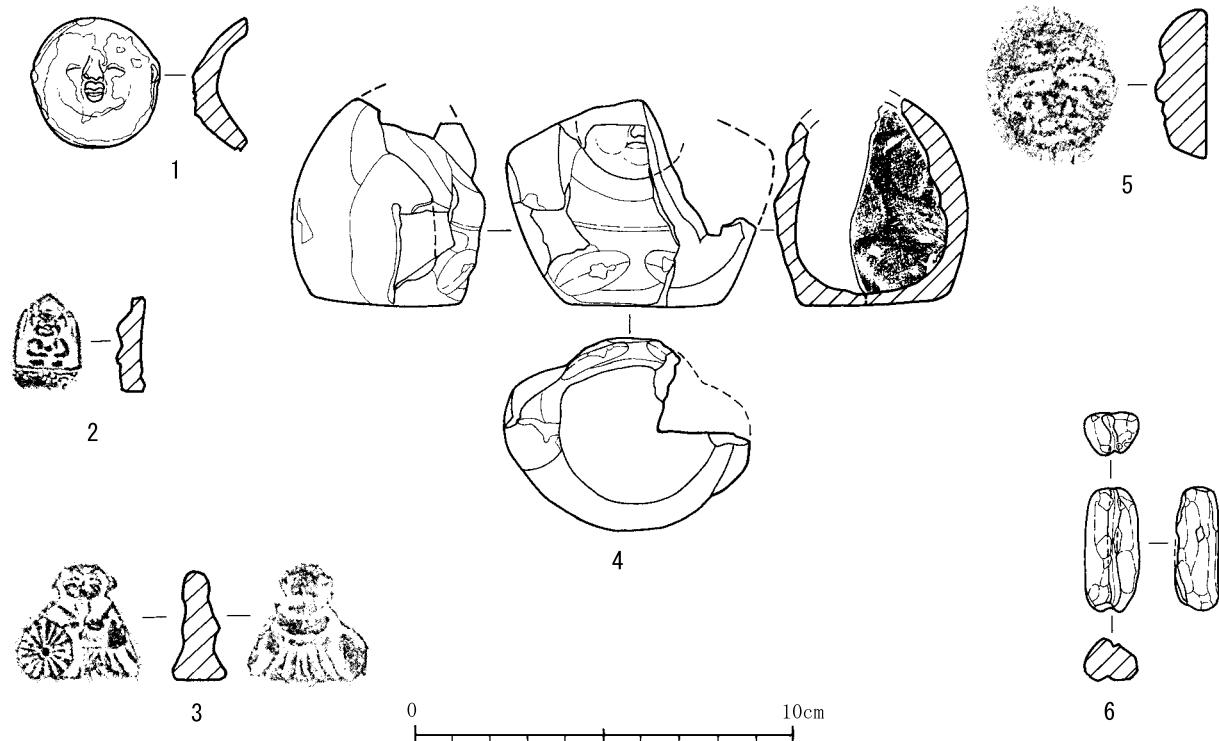
第37図 土器

## 第14節 土製品

土製品は泥面子、人形、錘が検出されている。第38図1、図版34-1は泥面子で、芥子面と称される人物の面型を作った物である。本来は、表面は滑らかになるように丁寧に調整されていたと考えられるが、後の風化により滑らかな部分は剥落している部分が多い。裏面は窪み、指頭による調整が認められる。全体に雲母?がみられるが、裏面が多い。浅黄橙色。高さ3.5cm、幅3.5cm、重量10.1g。し-13 II層出土。同図2、図版34-2は小型な札状の人形である。明赤褐色。高さ2.6cm、幅1.6cm、重量0.6g。し-13 II層出土。同図3・図版34-3は小型の人形で、西行をモチーフにしたと考えられる。成形は2枚の型を合わせたもので、人形の中は詰まっている。浅黄橙色。高さ2.9cm、幅3.0cm、重量6.5g。す-13 II層出土。同図4・図版34-4は人形で、福助をモチーフにしたと考えられる。成形は2枚の型を合わせたもので、中は空洞となっている。表面は滑らかに調整されており、裏面には纖維痕が認められることから、布のようなものをあててから指頭による調整を行ったと考えられる。浅黄橙色であり、一部緑色による彩色がみられる。残存長5.5cm、推定幅6.5cm。さ-13 II層出土。同図5・図版34-5は泥面子の芥子面である。人物の面をモチーフにしている。にぶい黄橙色。高さ4.0cm、幅2.8cm、重量11.8g。出土地不明。同図6・図版34-6は土錘で、中央に抉りが認められる。長軸3.3cm、短軸1.4cm、重量5.8g。こ-13 II層出土。

第45表 土製品出土状況一覧

種類	出土地	平成15年度				小計	平成16年度			不明	小計	合計				
		I層		II層			I層		II層							
		し-13	こ-13	さ-13	さ-14		す-13	し-13	す-13							
土製品	泥面子							1		1	2	2				
	人形	2		1	1	4	1	7	2		10	14				
	土錘		1			1						1				
	小計	2	1	1	1	5	1	8	2	1	12	17				
	合計	2		3		5	1		10	1	12	17				



第38図 土製器

## 第15節 瓦・塼 (図版35-1~13・図版36-14~23)

今回の調査では、瓦は高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦が確認されている。

### 1 高麗系瓦 (図版35-1~4)

高麗系瓦は、平瓦のみ確認されている。1は凸面に羽状文の叩き文様が施されており、凹面には布目痕及び糸切り痕が残る。色調は浅黄色。厚さは2.7cm。こ-12 II層出土。2は凸面に羽状文の叩き文様、凹面には布目痕及び糸切り痕が残る。色調は灰黄色。厚さは1.9cm。こ-12 II層出土。3は凸面に羽状文の叩き文様、凹面には布目痕及び糸切り痕が残る。色調は灰黄色。厚さは1.9cm。こ-12 II層出土。4は巴文を描く。色調は黄橙色。こ-13 I層出土。

### 2 大和系瓦 (図版35-6~9)

大和系瓦は、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦が確認されている。

#### 軒丸瓦

6は瓦当表面中心に巴文を配し、その周囲に珠文を密に配置する。色調は暗灰色。厚さは2.9cm。し-13 II層出土。

#### 丸瓦

5は凸面に羽状の叩き文が施される。凹面は布目痕が残る。色調は灰色。厚さは2.6cm。さ-13 II層出土。

#### 軒平瓦

7は瓦当表面に凸線の唐草文を描くと考えられる。色調は暗灰色。厚さは瓦当部で3.3cm。し-13 II層出土。

#### 平瓦

8は凸面、凹面ともに平滑に調整されている。色調は浅黄色。厚さは1.9cm。さ-13 II層出土。9は凸面に8本を一纏めとする刷毛目が施される。色調は暗灰色。厚さは1.8cm。し-13 II層出土。

### 3 明朝系瓦 (図版35-36-10~21)

明朝系瓦は、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、鬼瓦が確認されている。

#### 軒丸瓦

10は瓦当表面に牡丹文が配されており、外縁は欠失している。色調は黄橙色。す-13 II層出土。11は瓦当表面中心に牡丹文、その周囲に珠文を配置する。さ-13 II層出土。12は瓦当表面に牡丹、その周囲に珠文を配置する。珠文の作りは雑である。し-13 II層出土。

#### 丸瓦

13は凸面に文字及びスタンプが押されているが、破片であるため読みとることはできない。色調は赤褐色。さ-13 II層出土。14は凹面に布目痕が残り、狭端に漆喰が残る。本来は橙色であるが、凸面には黒褐色が塗られる。し-13 II層出土。

#### 軒平瓦

15は瓦当表面に花文を施すもので裏面に漆喰が残る。色調は赤褐色。す-13 II層出土。16は瓦当表面に花文を施すもので、裏面はナデ調整されている。色調は赤褐色。こ-13 II層出土。

#### 平瓦

17は凹面に布目痕を残し、凸面に漆喰を残す。色調は橙色。す-13 II層出土。

#### 鬼瓦

18~21の4点を載せた。いずれも一部の破片であるため、全体を窺うことはできないが、龍若しくは獅子の一部分と考えられる。色調は18・19の2点は本来は橙色であるが、表面に黒褐色が塗られており、20・21は橙色である。18・19はす-13 II層出土、20はさ-13 II層、21はし-13 II層出土。

### 4 塼 (図版36-22)

22は塼である。表面は丁寧に調整されているが、裏面は雑である。色調は黄橙色。厚さは3.5cm。し-13 II層出土。

### 5 その他 (図版36-23)

23は瓦若しくは塼を二次的に使用したもので、中央に印を施す。色調は赤褐色。し-13 II層出土。

## 第16節 窯道具 (第39図1,2) (図版34-1,2)

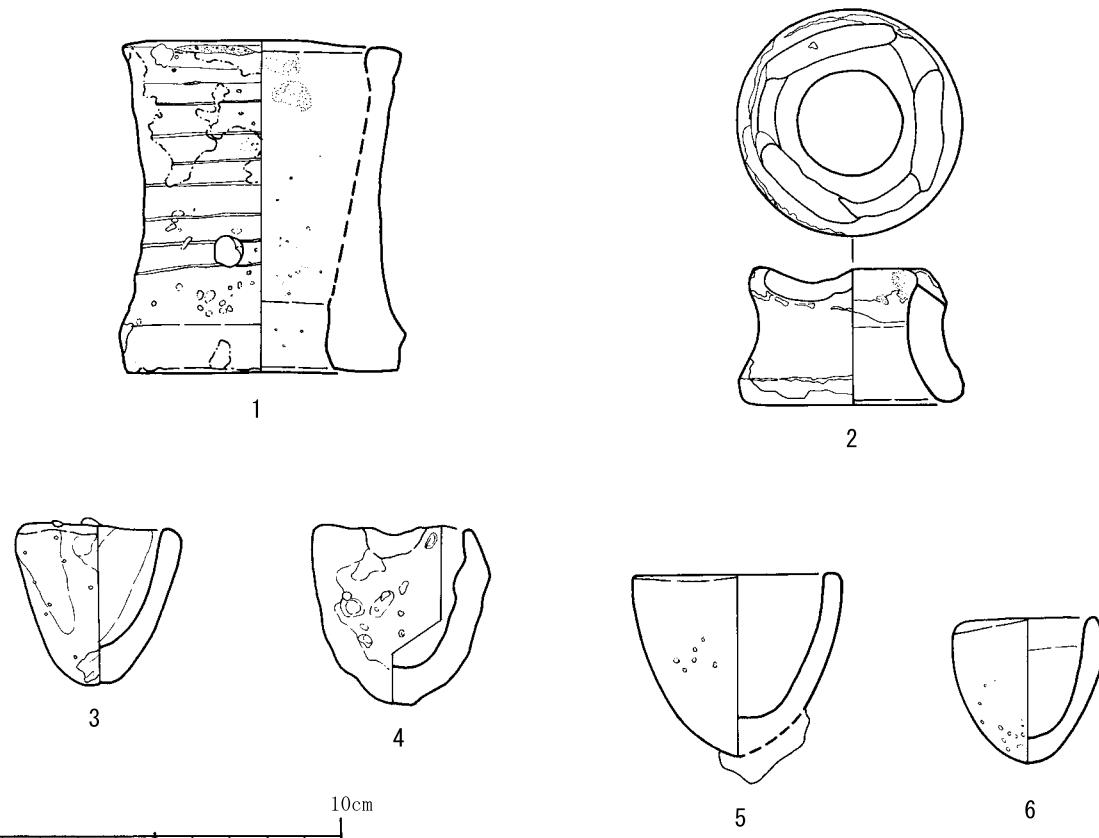
窯道具はトチンが6点、ハマが1点の7点検出されている。1はトチンである。外面に9本の浅い溝を巡らし、中央より僅かに下位に穿孔している。外面に灰釉を施す。器高8.8cm、口径7.3cm、底径7.3cm。さ-13 II層出土。2は上部3ヶ所に抉りのあるトチンである。外面は褐色釉を施し、口縁部から内面、底部は白色釉を施す。器高3.6cm、口径5.1cm、底径6.0cm。し-13 II層出土。

## 第17節 坩堝 (第39図3~6・図版34-3~6)

坩堝は111点検出されており、残存状態の良好な4点を図示した。3~5は口縁部は直線的に、6は僅かに内湾する。3は内容物が流れた部分が熱を受けて熔けた痕が残る。口縁部内部に青銅?が付着する。口径長軸4.3cm、口径短軸3.7cm、器高4.3cm。し-13 II層出土。4は外面全体が熱を受けて熔けた痕が残る。内面全体には青銅?が付着する。口径長軸3.4cm、口径短軸2.3cm、器高4.7cm。し-13 II層出土。5は内容物が流れた熔けた部分に石が付着している。推定口径5.5cm、器高4.9cm。し-13 II層出土。6は全体的に熱を受けている。口径長軸3.5cm、口径短軸3.1cm、器高3.9cm。し-13 II層出土。

第46表 坩堝出土状況一覧

種・部位	出土地	平成15年度					小計	平成16年度		小計	合計		
		I層		II層		III層		II層					
		こ-13	こ-13	き-13	き-16	さ-12		し-13	す-13				
坩堝	口～底							5	1		6		
	口	2	1	4		1	1	9	26	5	32		
	胴	2		8			1	11	24		24		
	底	3		6	2			11	15	3	18		
小計			1	18	2	1		70	9				
		7				22	2	31		79	1		
										80	111		



第39図 窯道具・坩堝

## 第18節 金属製品

出土遺物ならびに出土点数は鉄釘 129 点、鉄鉗 1 点、鎌 1 点、鉄鏃 1 点、鉄製刀子 1 点、小札 9 点、簪 6 点、飾り金具 28 点、覆輪 1 点、鳩目 1 点、銅鉗 6 点、毛抜き 1 点、鉛筆けずり 1 点、板状銅製品 1 点、銅製品 40 点、箱型の製品 1 点となっている。

**第40図1・図版37-1** 第40図2・図版37-2と同様の銅版製の飾り金具。全体の約7割が欠損しており、鋳化も著しい。正面及び側面に表された文様のモチーフも2とほぼ同一である。縦 16.8cm、横 6.6cm、幅 2.4cm、重量 43.1 g。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図2・図版37-2** 銅版製の飾り金具。大振りの牡丹文と唐草文が線彫りで描かれており、その隙間に魚々子がまばらに充填打ちする。線刻は毛彫りか蹴彫りかの判別は付き難い。唐草の葉は先端が火焰様に尖っており、輪郭の彫りも深い。ほぼ中央にはハート形の透かし彫りが、また鉢を留めるためのものと思われる円形の孔が表面に5箇所、側面には5箇所見られる。側面には列点唐草文が見られる。円覚寺跡から同様の製品が出土しており、一部欠損しているものの全形を窺うことのできる良好な飾り金具資料と言える。文様形態から16世紀頃まで遡る可能性がある。縦 16.4cm、横 14cm、幅 1.9cm、重量 89.2 g。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図3・図版37-3** 板状製品。中央に円形の孔が見られ、端部は円弧と剣頭状の形を互い違いに縁取っている。円弧の部分には二重円と放射状に広がる沈線が規則的に彫られている。重量 19.3 g。出土地：H16 マダマレ-12・13 I層。

**第40図4・図版37-4** 銅製の環状製品。端部は丸みを持たせ、両面に松竹梅が陽刻で描かれている。型作りで類例史料が円覚寺跡から出土している。(沖埋文化 2002) 幅 4.5 mm、厚さ 1.7 mm。出土地：H15 マダマレ-13 I層。

**第40図5・図版37-5** 4と類似資料。完形品であるが用途は不明。直径 4.4 cm、幅 5 mm、厚さ 1.7 mm、重量 6.8 g。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図6・図版37-6** 銅製の環と環座。菊形に象った環座に環が付属する留具が中央の孔に入れられている。調度品、武具資料の一部か。殆ど鋳は見られない。環の径 1.6 cm、環座の径 2 cm。出土地：H16 マダマレ-13 I層。

**第40図7・図版37-7** 銅製の環座。中央に円形の孔が見られ、外縁は5カ所に得繰りが入る。孔を中心にして盛り上がりが5カ所見られる。梅花を象った環座で建物若しくは調度品の一部か。厚さ 0.8 cm、重量 5.1 g。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図8・図版37-8** 銅製の環座か。外縁は鋸歯状の切り込みが入り、中央に梢円形の孔が明けられる。一部、欠損しているが鋳化は殆ど進行していない。厚さ 0.5 mm。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図9・図版37-9** 銅製の把手と環座。小振りな把手で端部は反り、「V」字状の切り込みが見られる。断面形は梢円形状となる。環座は無文で直径 2.5 cm。簾筈等の調度品の一部か。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図10・図版37-10** 銅製の環。鋳化が著しい。環は梢円形状となる。調度品、若しくは武具資料の一部か。出土地：H15 マダマレ-13 II層。

**第40図11・図版37-11** 銅製の釘隠し。平面形は梢円形状を呈し、中央には梢円形の孔が見られる。またこの孔とは別に小孔が1カ所確認できる。一部、欠損しているが鋳化は殆ど進行していない。長さ 4.6 cm、幅 1.5 cm、厚さ 0.8 mm。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図12・図版37-12** 銅製の板状製品。表面には縦筋が見られ、中央には三巴文が見られる。型作りか。両端は欠損している。厚さ 0.6 mm。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図13・図版37-14** 銅製品であるが用途については不明。型作りで表面には三巴文が中央にその周辺には筈を結んで周囲に配した文様が見られる。時期は近代以降か。径 3.2 cm、厚さ 0.3 mm、重量 2.0 g。出土地：H15 マダマレ-13 II層。

**第40図14・図版37-15** 銅製の香炉か。雷文、雲文が陽刻され、やや厚みを有する製品であるが、小片のため詳細は不明。端部は内側に折れ曲げているため箱状の製品になると思われる。中国製で時期は明代か。重量 29.2 g。出土地：H15 マダマレ-12・13 II層。

**第40図15・図版37-16** 銅製の小型の鐘。上部には紐が付き、外面には突線が3カ所見られる。下端は外側に折れる。全体的にやや厚みを有する。高さ 4.2 cm、最大径 4.48 cm。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図16・図版37-17** 銅製の指輪。繋ぎ目が見られる無文の指輪で径 2.2 cm、幅 1.15 cm、厚さ 2 mm。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図17・図版37-18** 銅製の円盤状製品。中央部分のみ鋳化があまり進行していない部分がみられることから、円形状のものを置いていた可能性が指摘できる。径 6.03 cm、厚さ 1.2 mm。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第40図18・図版37-19** アルミ製の簪。匙の部分は丸みを有し、竿の面形は六角形状となる。先端部は尖る。一部、二次的に火を受けた痕が見られる。長さ 10.3 cm、重量 2.7 g。出土地：H16 マダマレ-13 II層。

**第41図19・図版37-20** 銅製の簪。匙の部分は耳搔き状となる。竿の面形は六角形状となるが先端部は欠損している。出土地：H16マダマレ-13Ⅱ層。

**第41図20・図版38-22** 銅製品で用途は不明。端部は末広がり状に肥厚し、上面は平坦面を有する。銅製の鍋か、厚さ1cm。出土地：H15マダマニ-13Ⅰ層。

**第41図21・図版38-23** 小杯状の製品、口縁部は外側に反り、底部は孔が見られる。燭台の一部か。口径4.65cm、高さ2.2cm、重量0.1g。出土地：H15マダマニ-13Ⅱ層。

**第41図22・図版38-24** 銅製の洋服の釦か。一部欠損している。径1.7cm、高さ1cm、重量3.9g。出土地：H16マダマレ-13Ⅱ層。

**第41図23・図版38-25** 銅製のベルト等に付く留め具か。孔入れのための銅製棒も付属する。重量2.2g。出土地：H16マダマレ-13Ⅱ層。

**第41図24・図版38-26** 銅製の蓋か。円形の小孔が密に開けられており、3カ所に留め具が付属する。径6.5cm。出土地：H16マダマレ-13Ⅱ層。

**第41図25・図版38-30** 銅製の飾り金具。型作りで表面は松林を象っている。長さ3.84cm、最大幅9.3cm、厚さ約0.4mm。出土地：H16マダマレ-13Ⅱ層。

**第41図26・図版38-31** アルミ製の棒状製品で用途は不明。断面形は四角形となり、先端部に向けて漸次、細くなる。出土地：H16マダマニ-13Ⅱ層。

**第41図27・図版38-32** 捻れた環を繋ぎ合わせた鎖状製品。先端部分には分銅状の金具が附されておりそれを繋ぐ部分の鎖は橢円形状の環を繋ぎ合わせている。ネックレスの一部か。長さ24.8cm、幅5mm、重量12.1g。出土地：H16マダマレ-13Ⅱ層。

**第41図28・図版38-33** 鞘。紡錘形状で中央に紐通しのための円孔が2つ見られる。鋳化が著しい。長さ2.896cm、最大幅9.9mm、厚さ4mm、重量3.6g。出土地：H15マダマニ-12Ⅱ層。

**第41図29・図版38-34** 鉄製の小札。孔は2列で両端は欠損している。幅2.233cm。出土地：H15マダマニ-13Ⅰ層。

**第41図30・図版38-35** 鉄製の小札。孔が2列の小札が2枚重なり鋲により付着している。おそらく使用時のまま埋蔵されたモノと考えられる。2枚共、両端は欠損している。厚さ3.26mm、幅3.125cm。出土地：H15マダマニ-12Ⅱ層。

**第41図31・図版38-36** 鉄製の小札。幅広で孔が2列の小札で札尻は平坦である。札頭は欠損しており形状は不明である。厚さ4.62mm、幅2.659cm。出土地：H15マダマニ-13Ⅰ層。

**第41図32・図版38-37** 鉄製の小札。孔は2列で札尻は平坦である。やや長めの小札で札頭は欠損している。厚さ4.12mm、幅1.861cm。出土地：H15マダマニ-12・13Ⅱ層。

**第41図33・図版38-39** 刀子。残存長89.5mm、幅65mm、刃部厚2.1mm、重量13.5g。出土地H16マダマニ-13Ⅱ層出土。

**第41図37・図版38-40** 鉄鏃。先端部は幅広で茎の断面形は方形で欠損する。鋲膨れが多く見られる。残存長6.75cm、最大幅1.256cm、重量15.2g。出土地：H16マダマレ-13Ⅱ層。

**第41図44・図版39-50** 鉄製の鎌。断面形は長方形状である。片方の打ち込み部は欠損している。鋳化が著しい。残存長17.1cm、最大幅1.466cm、重量161.2cm。出土地：H15マダマニ-13Ⅱ層。

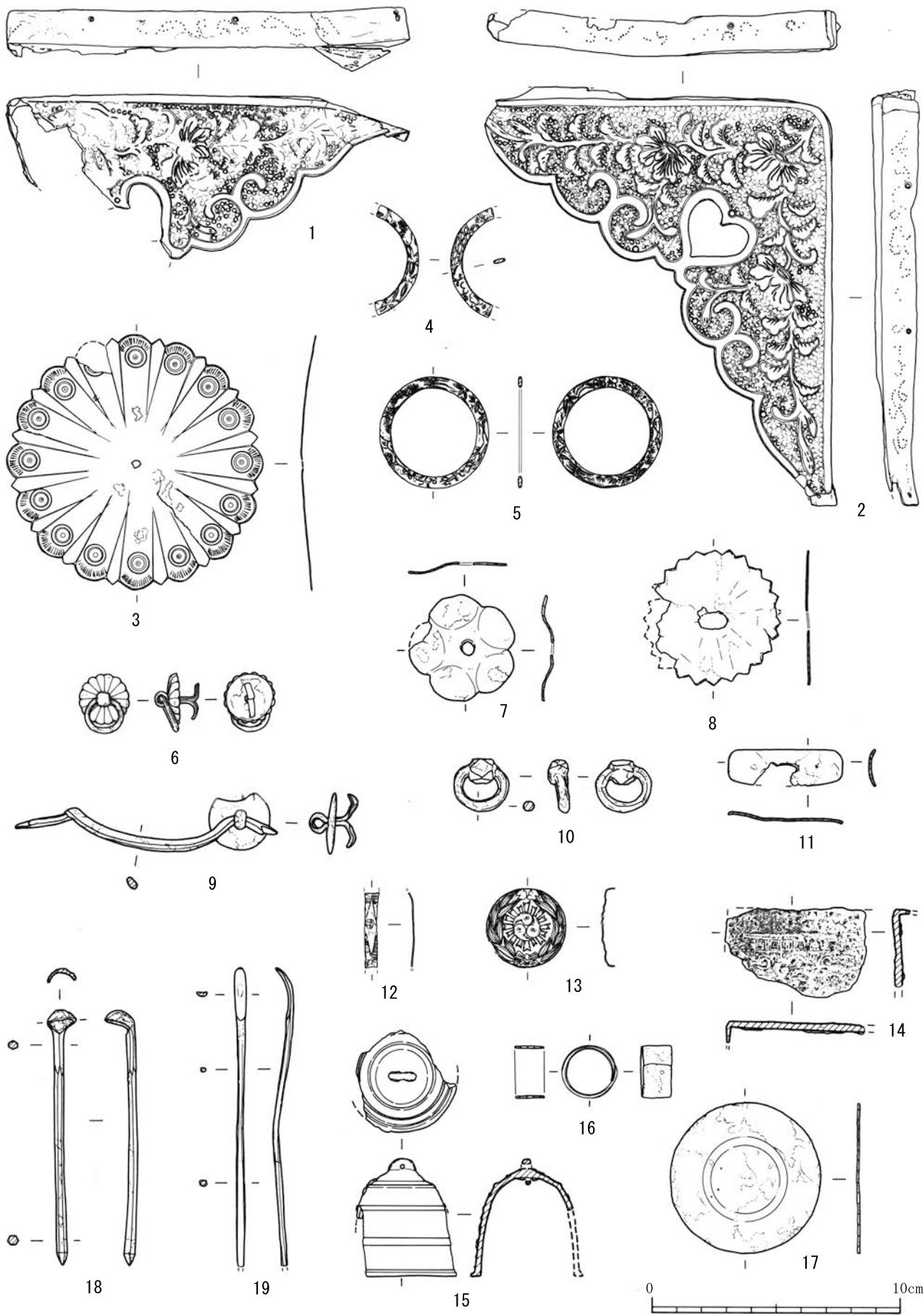
#### 鉄釘

鉄釘は小片が大半を占め、全形を窺うことができる9点をここで報告する。何れの資料も大量の鋲が付着しており、詳細な形状を窺うことができない。丸釘、角釘ともに出土しているが前者は攪乱層のみからの出土である。全体的には角釘が大半を占めており頭頂部の形態は多様である。頭部は折れるもの（第41図42, 43・図版39-48, 49）と笠が付くもの（第41図39, 41・図版39-45, 47）があり、断面形は何れも正方形に近い。第41図42, 43のように10cm以上のものも見られる。以下、観察表に記す。

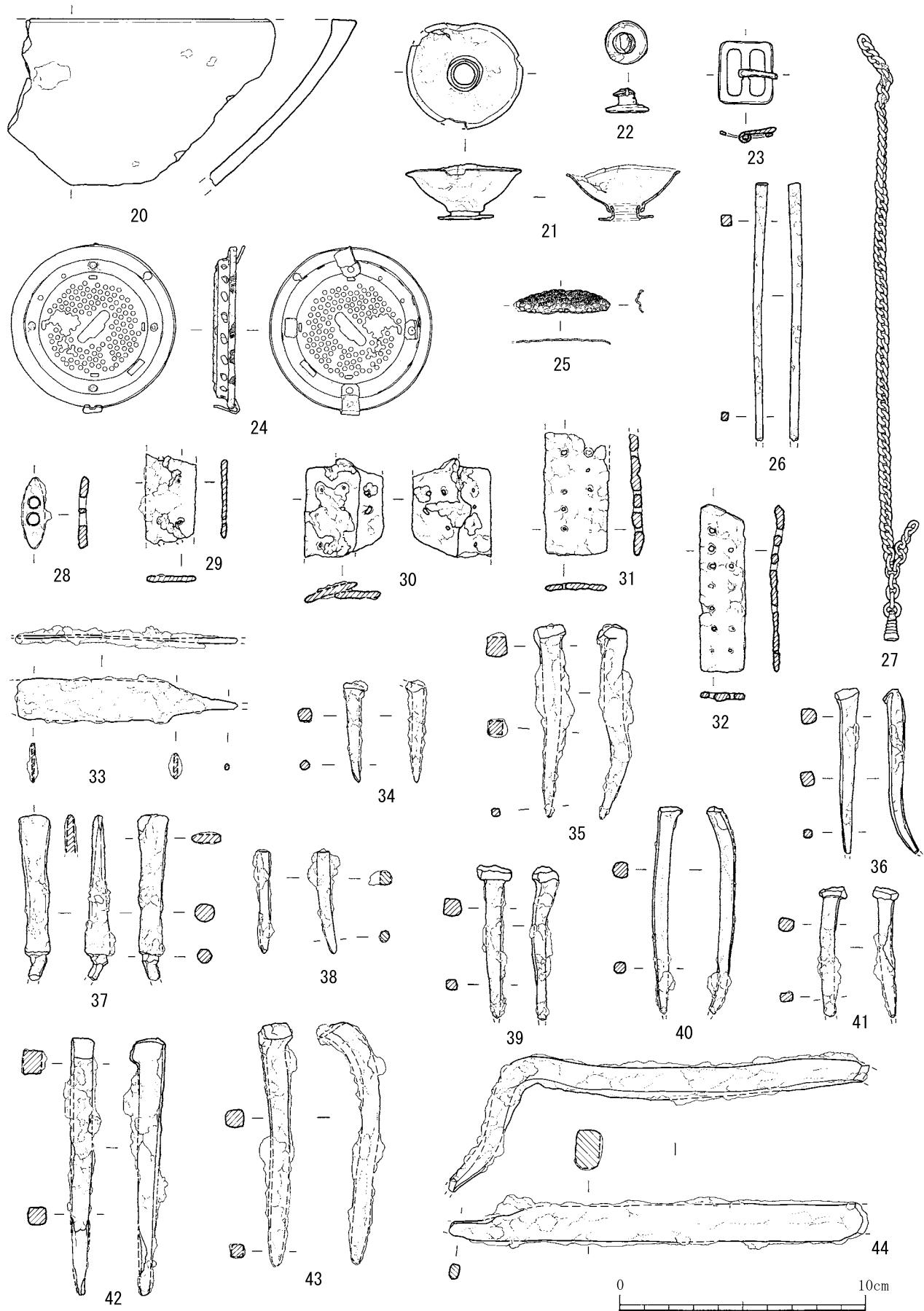
第47表 鉄釘観察一覧

単位:cm.g

図・図版番号	頭部の形状	残存長	最大幅	重量	出土地点 出土層
第41図34 図版39-41	折れる	4.11	0.536	4.5	H15ニ-12Ⅱ層
第41図35 図版39-42	—	7.84	0.895	22.7	H16レ・す-17Ⅰ層
第41図36 図版39-43	折れる	6.79	0.68	9.4	H15ニ-13Ⅰ層
第41図38 図版39-44	—	4.3	0.573	4.2	H16レ-13Ⅱ層
第41図39 図版39-45	—	6.2	0.7	11.1	H15ニ-13Ⅰ層
第41図40 図版39-46	笠状	8.4	0.062	11.2	H16す-13Ⅰ層
第41図41 図版39-47	—	5.27	0.645	9	H15ニ-13Ⅱ層
第41図42 図版39-48	笠状	10.44	0.88	35.6	H15ニ-13Ⅱ層
第41図43 図版39-49	折れる	9.9	0.784	28.9	H15ニ-13Ⅱ層



第40図 金属製品 1



第41図 金属製品2

## 第19節 錢貨

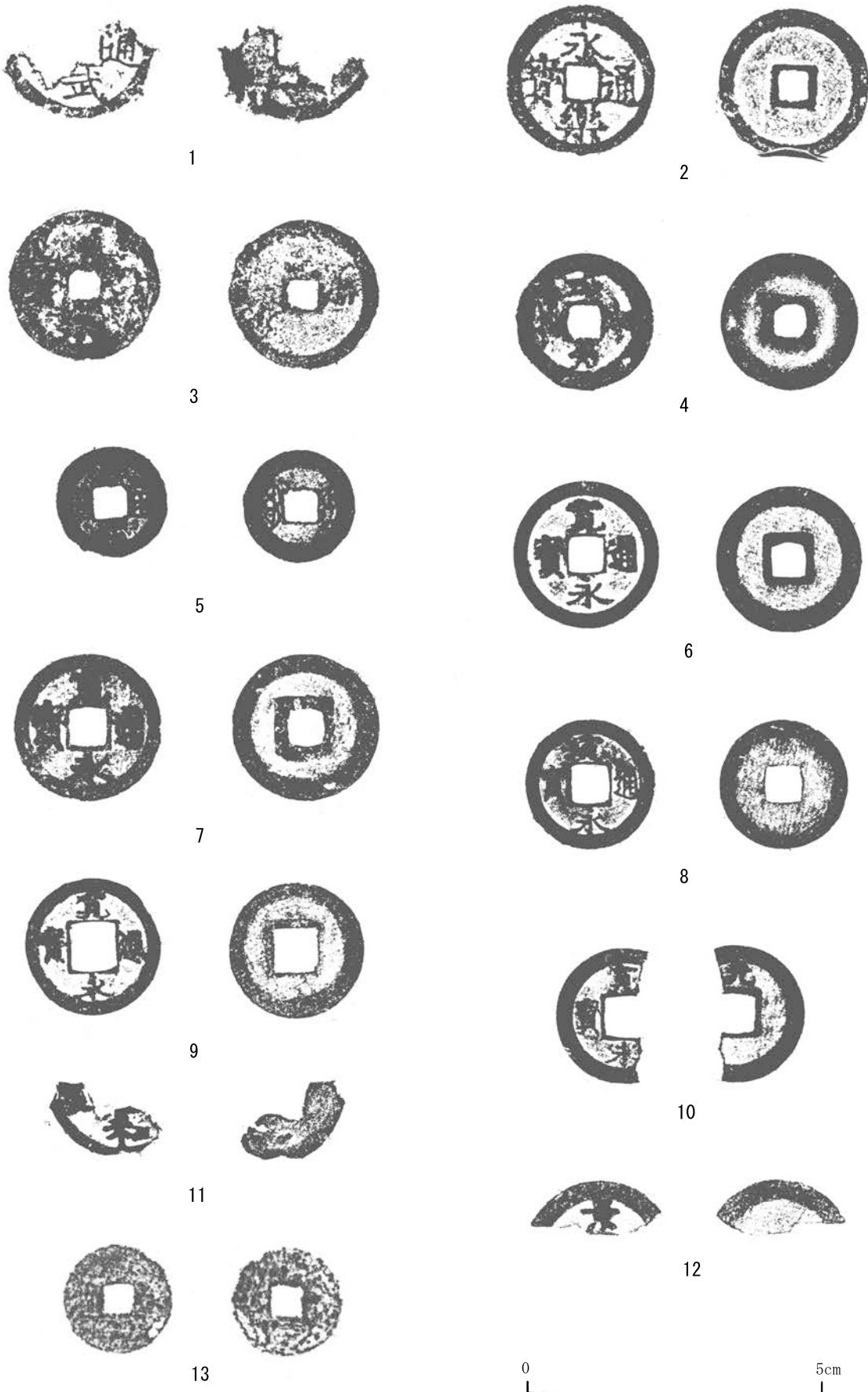
今調査で得られた錢貨は、有文銭46点と輪銭を含む無文銭5点の総計51点で、前者の有文銭は中国銭と日本銭などが確認された。その内訳は、中国銭が皇宋元寶1点、洪武通寶1点、永樂通寶2点、嘉慶通寶1点で、日本銭は寛永通寶17点をはじめ、近代の一錢が5点、二錢、五錢、十錢、鑄造国不明の錢貨が各1点ずつ認められ、錢種不明が15点であった。また、本調査区で出土した錢貨は、破損品に比べて完形品の方が多く得られており、加工された資料は見受けられなかった。なお、輪銭については図版のみで報告する。

第48表 錢貨観察一覧

単位:mm.g

図・図版番号	銭文	書体	初鋳年	外径	内径	孔幅		最大 錢厚	残存 重量	備考	出土点 出土層
						縦	横				
第42図 図版40 1	□武通□	楷書	1368	—	—	—	—	1.57	1.6	両面闊縁。錢文はほぼ潰れてい るが洪武通寶と推察できる。	こ-13 I層・17
第42図 図版40 2	永樂通寶	楷書	1408	25.26	19.82	4.95	5.05	1.89	6.0	肉厚で、錢文も明瞭。	こ-12 II層
第42図 図版40 3	○樂○寶	楷書	1408	25.30	19.85	4.60	4.90	1.44	3.9	鋸により判読が困難だが、「樂」 の字から永樂通寶と判明。	こ-12 II層
第42図 図版40 4	皇宋元寶	楷書	1253	23.33	16.57	5.28	5.34	0.83	2.1	肉薄で浅彫り。特に背は闊縁が 著しい。	さ-13 II層
第42図 図版40 5	嘉慶通寶	楷書	1796	18.78	13.76	5.09	5.39	0.67	1.2	肉薄で闊縁。両面とも浅彫で凹 凸感が無い。背には満州文字。	こ-13 I層
第42図 図版40 6	寛永通寶	楷書	1636	24.79	19.64	5.86	5.82	1.07	3.4	背の輪が闊縁。「古寛永」と称さ れるI期の寛永通寶。	さ-13 II層
第42図 図版40 7	寛永通寶	楷書	1697	24.90	19.39	6.01	5.92	1.19	3.1	背の孔郭が闊縁。III期の寛永 通寶(新寛永)。	し-13 II層
第42図 図版40 8	寛永通寶	楷書	1697	21.84	17.03	6.09	6.17	0.91	2.2	肉薄。背は浅彫でほぼ平坦。III 期の寛永通寶。	し-13 II層
第42図 図版40 9	寛永通寶	楷書	1697	23.06	18.16	7.42	7.24	0.99	2.1	気泡跡が確認できる。孔が大き いため錢文が小さい。III期の寛 永通寶。	こ-13 I層
第42図 図版40 10	寛永□寶	楷書	1697	22.95	17.26	6.32	—	1.01	1.4	背上に「元」の字。III期の寛永 通寶。	し-13 II層
第42図 図版40 11	□和□寶	楷書	不明	—	—	—	—	1.08	1.0	背の輪が不明瞭。至和、政和、 宣和いずれかの通寶か?	こ-12 I層
第42図 図版40 12	景□□□	楷書	不明	—	—	—	—	1.08	0.9	両面闊縁。	こ-12 II層
第42図 図版40 13	無文銭	—	—	18.44	—	4.88	4.95	0.89	1.1	両面に不明瞭な輪が確認でき る。	し-13 II層
図版40 14	輪銭	—	—	10.56	—	8.07	—	0.59	0.1	鑄造の際のバリが残る。	さ-13 I層
図版40 15	輪銭	—	—	11.20	—	8.35	—	1.56	0.3	鋸が全体的に目立つ。	し-13 II層
図版40 16	輪銭	—	—	9.86	—	5.30	—	2.18	0.3	全体的に鋸が付着する。	こ-12 II層

□:欠損 ○:判読不明



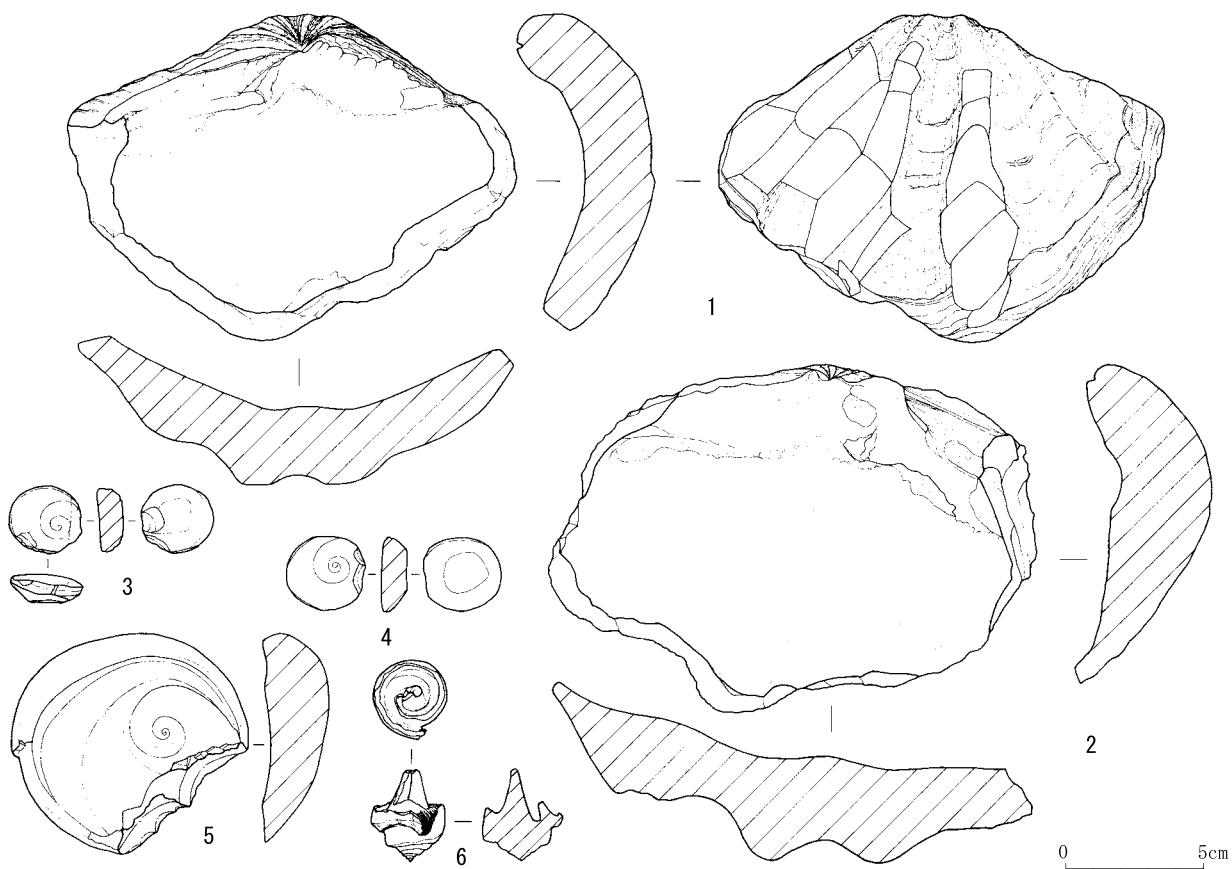
第42図 錢貨

## 第20節 貝製品（第43図1～6・図版41-1～8, 42-1～6）

貝製品は5種51点の出土があった。第43図1、2はシャコガイ科の貝に軽微な加工を加えた皿状容器である。1はシャゴウ製で縁部を敲打剥離し、殻表の放射肋の一部を研磨により表面の凹凸を整えている。殻長11.8cm、殻幅16.1cm、重量840g し-13 II層出土。2はシラナミ製の貝皿で加工は縁部の敲打のみである。殻長12.6cm、殻幅17.6cm、重量980g し-13 II層出土。3～5は螺蓋製品であり、一般的に螺蓋製品は敲打器とされるものが主であるが。3はチョウセンサザエの蓋の縁部に敲打と研磨により先端をノミ状に尖らしたものである。殻表に扁平な研磨面を作る。殻長2.45cm、殻幅2.6cm、重量8.5g さ-12 II層出土。又4は縁部に僅かに敲打剥離が認められるが蓋表には扁平な研磨面を作る。殻長2.65cm、殻幅2.8cm、重量10.8g し-13、2層出土。5、図版41-4はヤコウガイの蓋で縁部の薄い方に蓋外から内側に向かい敲打剥離が認められる。5、殻長7.9cm、殻幅8.5cm、重量197g す-13、2層出土。図版41-4 殻長7.5cm、殻幅5.1cm、重量103g し-13 II層出土。6、図版41-6はマガキの殻表を取り除き殻軸と殻頂部分を残した製品である民俗事例から独楽と考えられている。6は殻長3.3cm、殻幅2.7cm、重量15.4g さ-132層出土。図版41-6は殻長2.5cm、殻幅2.0cm、重量8.9g さ-13、2層出土。図版40-3～8はヤコウガイの殻を主に利用する螺鈿細工や匙状製品などの成品や材料を取り終え残った殻である。7は帯状に材料を切り取ったことが窺える。

第49表 ヤコウガイ出土状況一覧

種類	出土地	平成15年度								小計	平成16年度			不明	小計	合計				
		I層			II層						不 明	I層		II層						
		こ-12	こ-13	さ-16	こ-12	こ-12～13	さ-12	さ-13	さ-14		す-13	し-13	す-13							
未成品							1	2		3		2	4		6	9				
材 料	取り終えたもの	1	17	1	6	1	74	61	10	6	177	2	41	81	1	125	302			
	未使用						3		1	4		1	2		3	7				
小 計		1	17	1	6	1	78	63	11	6	184	2	44	87		134	318			
				19			159							133	1					



第43図 貝製品

## 第21節 骨製品 (第44図・図版43)

骨製品は70点得られている。そのうち29点を図化した。出土地区は、19が「さ-16」で、その他の資料は全て「さ-13」～「す-13」の範囲に収まる。出土層位は、15がI層、20が不明で、その他の資料は全てII層である。

当地区における骨製品の組成は、歯ブラシ・ボタン・箇状製品・棒状製品などである。特に歯ブラシの出土数は多く、骨製品全体の7割を占める。また、比較的保存状態の良い資料が多く、様々な形態の製品が得られたため、整理・分類を行った。歯ブラシの形態は、主にブラシ部と柄部にそれぞれ共通の特徴があるため、この点において第50表のように分類し、所見は第51表にまとめた。

骨製歯ブラシは、明治初期から主に大阪で製造されており、明治末期に量産された製品が、いわゆる奇留商人によって沖縄に移入されたと思われる。なお、発売時期が推定できる9は、大正期に製造された製品だが、掛け具にプラスチックを使用する資料はさらに新しくなると考えられる。

12・13は箇状製品である。12は、先端部が破損しているが、裁縫用と思われる。13は、柄の一部のみが残存している資料であるが、形状から箇と思われる資料である。色調は灰黄褐色を呈し、他の資料と異質に感じられるが、角類を加工した製品である。14～17はボタンである。14・15は縁部に稜をつくるもので、16・17は縁部に丸味を持たせるものである。18～20は棒状製品で、箸と思われる資料である。21～29は用途不明の製品である。23～29は他の製品の付属品と考えられるものである。27～29は、中央に孔を穿った偏平円形の製品である。

第50表 歯ブラシ分類表

部位		分類	分類基準
ブラシ部	頂部	I	頂部を平坦にするもの
		II	頂部に丸味を持たせるもの
柄部	横位	A	腹面が張るもの
	断面	B	腹面が平坦なもの
	尻部	a	舌状に丸味を持たせるもの
		b	三角状に尖るもの
		c	a・b以外の形状のもの

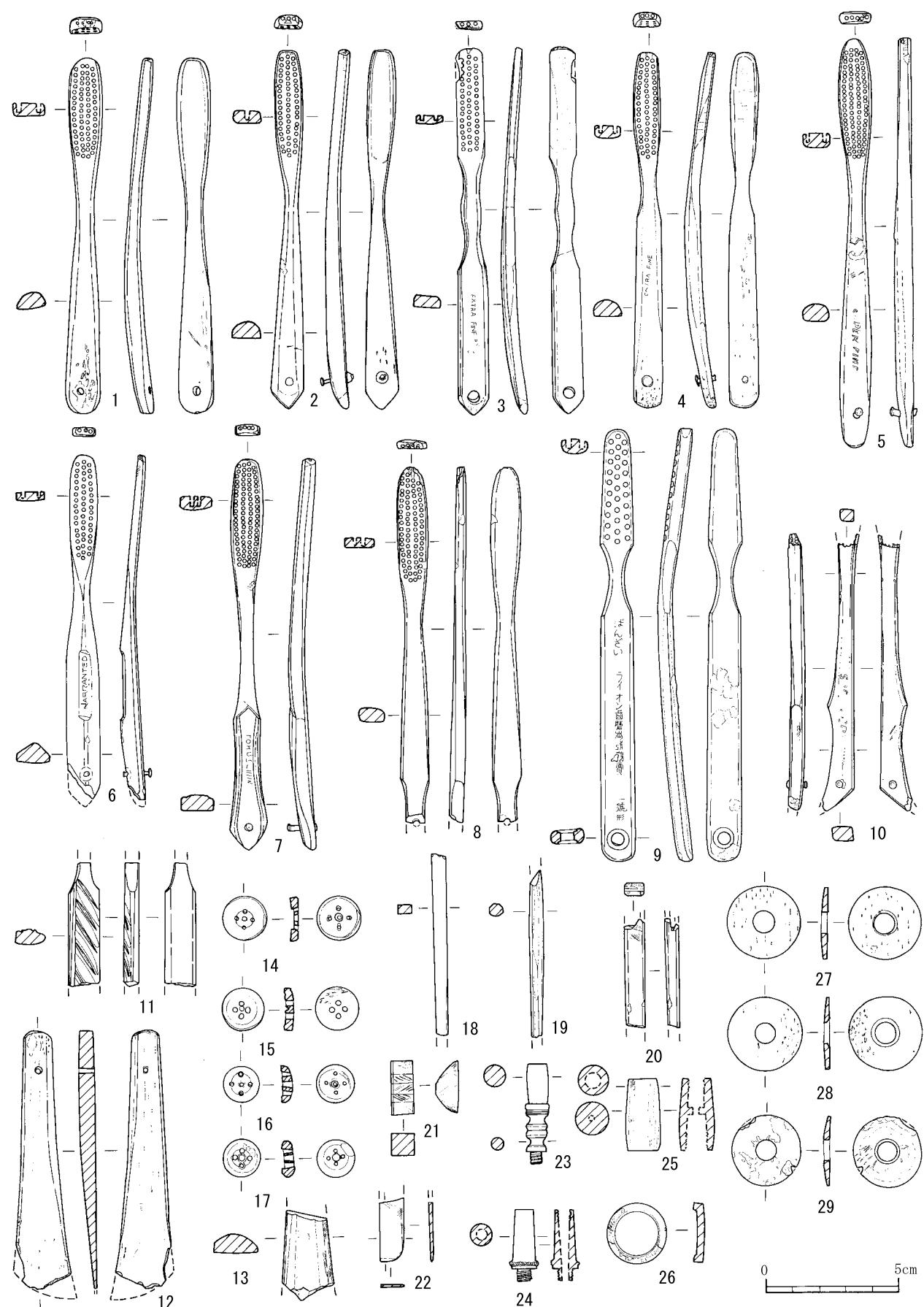
第51表 歯ブラシ観察表

単位：cm、g

図・図版・遺物番号	分類	植毛孔	全長	重量	掛け具	備考
第44図 図版43 1	I - A a	4列	13.2	8.1	ナシ	
第44図 図版43 2	I - A b	3列	13.3	7.7	青銅	
第44図 図版43 3	I - B b	3列	13.6	7.6	ナシ	「EXTRA FINE」の印刻。頸部はコブ状。
第44図 図版43 4	II - A a	3列	13.2	7.2	青銅	「CAIRAFINE」の印刻。
第44図 図版43 5	II - A a	4列	15.2	11.6	プラスチック	「□ □ PER FINE」の印刻。
第44図 図版43 6	II - A b	3列	12.8	7.3	青銅	「NARRANTED」の印刻。
第44図 図版43 7	II - B b	4列	14.5	10.2	プラスチック	「TOKU □ □ □ N」の印刻※1。
第44図 図版43 8	II - B c	4列	12.2	6.6	ナシ	柄部先端の形状不明。
第44図 図版43 9	II - B a	3列	16.1	14	ナシ	「ばんざい」「ライオン歯磨□□□賣」「一號形」の印刻。1914～18年のいずれかに発売されたと思われる※2。
第44図 図版43 10	B c	4列	不明	5.4	プラスチック	「S □ □ □ □ P □ …」の印刻。 柄部は親指腹部に合うよう加工。
第44図 図版43 11	A	不明	不明	3.3	ナシ	角彫りと丸彫りの縦・斜位凹線を施す。

※1. 繼世門周辺地区からは、「TOKUYOHIN」の印刻が施された資料が出土している。

※2. 第44図9は、ライオン株式会社に保管がないことなので、発売年は推定であり、終了年は不明である。また、印刻は「ライオン歯磨本舗發賣」と思われる。但し、「發」は旧字が用いられると考えられる。なお、以上における当資料の情報は、渡辺治雄氏（ライオン株式会社お客様相談室）のご教示による。



第44図 骨製品

## 第22節 煙管 (第45図1~11・図版42-1~11)

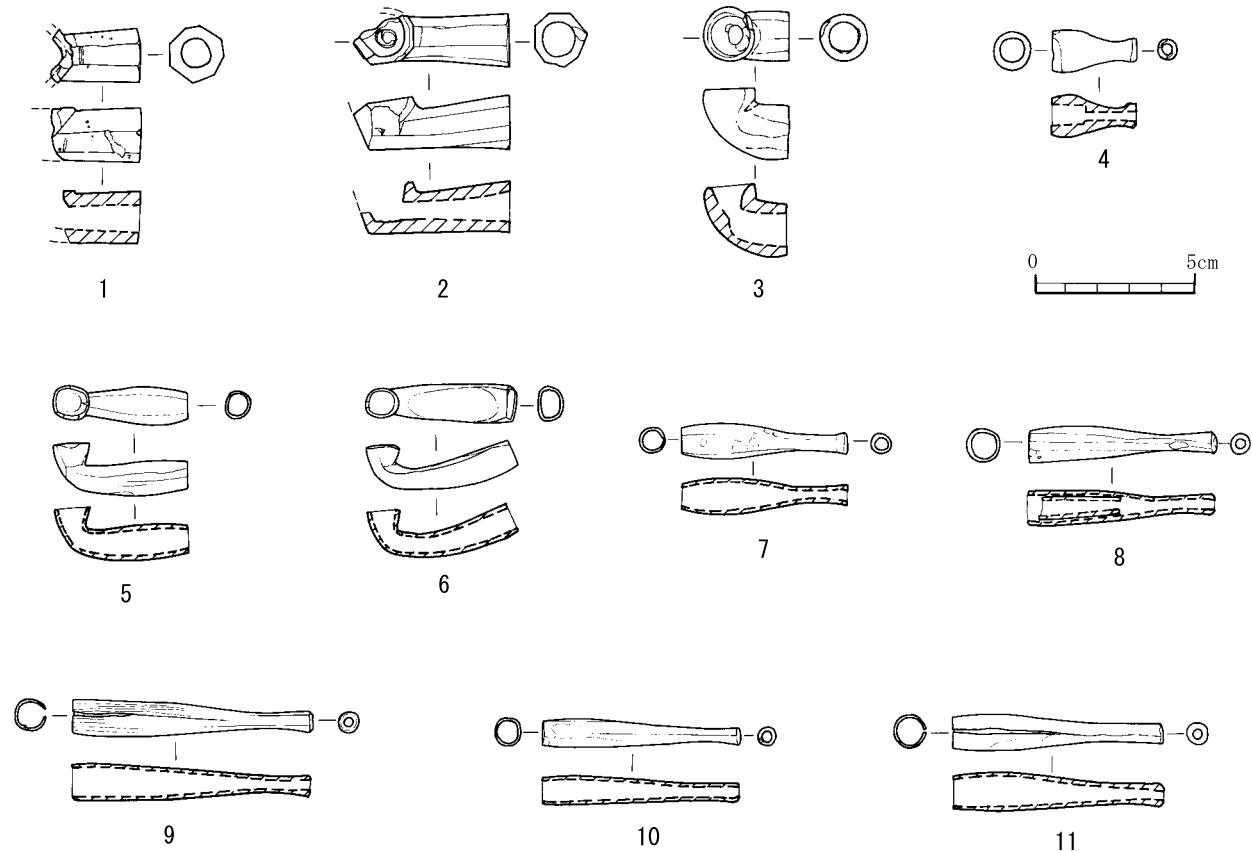
煙管は金属製14点(雁首5、吸口9点)、陶製7点(雁首6、吸口1点)の21点が得られた。金属製の煙管は真鍮製と不明金属製(真鍮か銅)が見られた。煙管の断面形は肉眼では観察できないため、軟エックス線透過撮影(撮影装置・SOFTEX製M-150特)を行ない確認した。

1は断面が八角形に面取りされた雁首。無釉だが、まだらに自然釉が見られる。2も同じく断面八角形の雁首。3は灰白色の素地に透明釉を施す。4は灰白色の素地に透明釉を施す吸口。内面は接続部側から径0.7cm、吸口側から径0.3cmの工具で穴を開けているため、中央部で段がある。5は真鍮製の雁首。比較的保存状態がよく、緑錆の下に真鍮がわずかに確認できる。6は銅か真鍮製の雁首。上面が使用のためか、平たくつぶれている。7は真鍮製の吸口。中央部が張り、接続部と吸口ですばまる。8は真鍮製の吸口で、内部に羅字が残っている。9は銅か真鍮製の吸口。表面に銀めつきを施す。10は銅か真鍮製の吸口。出土した煙管の中では最も細い。11は真鍮製の吸口。割れが生じている。

第52表 煙管計測表

単位:cm

挿図 図版 番号		材質	部位	火皿径 吸口径	接続 部径	長さ	出土地点 出土層	挿図 図版 番号		材質	部位	火皿径 吸口径	接続 部径	長さ	出土地点 出土層	
第45図 図版42	1		雁首	—	1.7	2.8	さ-13 II層	第45図 図版42	7		吸口	0.6	0.8	5.2	さ-13 II層	
第45図 図版42	2	陶製	雁首	—	1.7	4.8	し-13 II層	第45図 図版42	8		吸口	0.7	1.1	6.9	し-13 I層	
第45図 図版42	3		雁首	1.7	1.5	2.7	し-13 II層	第45図 図版42	9		不明金属製	吸口	0.8	1	7.5	す-13 I層
第45図 図版42	4		吸口	0.7	1.2	2.8	し-13 II層	第45図 図版42	10		不明金属製	吸口	0.6	0.9	6.2	し-13 II層
第45図 図版42	5		真鍮製	雁首	1.1	0.9	4.2	さ-13 II層	第45図 図版42	11	真鍮製	吸口	0.7	1.1	6.6	し-13 II層
第45図 図版42	6		不明金属製	雁首	1	1.1	4.7	さ-13 II層								



第45図 煙管

## 第23節 玉類

玉類は3点出土しており第46図1から3に図化している。2は臼形で表面はアバタ状が確認でき、所々に緑色の釉が残っている。長さ0.9cm幅0.9cm孔表面0.03cm裏面0.25cm重さ0.6g H15c-12II層出土。1は長方形に近い形で表面は黄褐色を呈す、孔は見られず石のほぼ中央部に見られる窪みに紐を括りつけて使用したと思われる。長さ1.1cm幅1cm厚さ0.6cm重さ0.9g H15c-12II層出土。3は白色で螺旋状を呈しており、管玉と思われる。長さ0.28cm幅0.28cm孔0.12cm H15c-12II層出土。

## 第24節 石器・石製品・石造製品

今回の調査で石製品では石球、硯、砥石、石板、石筆や調度品の一部、石造製品では浮き彫りが施されたニービ(砂岩)や珊瑚を板状に加工した資料が見られる。

石球は2点出土した。第46図6は珊瑚石を加工した物であるが形状は楕円形で一部平らに削られている。加工は器全体に敲打がみられ粗いながらも研磨が施されている。一方第46図5はニービ(砂岩)を加工したもので楕円形を呈し、敲打、研磨が丁寧で球体に近いが一部平らに削られている。第46図4は完全な球体となっており、研磨が非常に丁寧で表面が滑らかである。

硯は18点出土したがここでは図化している4点について触れる。第47図11は硯面のみであるが裏面は「長州赤間関 藤原正清～(以下破損の為判読不能)」と線刻されている。第47図12の形状は細長い長方形を呈し、硯縁の破損が著しく、特に墨堂では硯縁が見られない。硯面から墨堂にかけて僅かな窪みが見られる事から使用頻度が高かったと思われる。第46図9は硯面と墨堂が残っており厚手で形態は長方形を成すと推定でき、硯面と墨堂が平坦で窪みが見られない事からあまり使用されていない物と思われる。裏面には長方形の浅い窪みが見られる。第46図10は赤色頁岩を材料としており、形状は細長い長方形で墨池が深く掘り込まれている。墨堂に僅かな窪みが見られる事から第47図12同様に使用頻度が高かったと思われる。また裏面には浅い楕円形の窪みが掘り込まれており、裏面全体に引っかいたと思われる傷痕が見られる。

砥石は2点出土した。第47図13は赤色頁岩を材料としたもので長方形を呈する。表裏両面、側面とも研磨が十分に施されているが使用の際にいたと思われ、特に裏面は線状の深い溝や窪みが数個見られる。側面にも多数の線状の傷痕が見られる。表面には裏面の様な目立った傷痕は見られないものの細かい傷痕が多数確認できた。第47図14は棒状の砥石であるが両端部が破損している為全体の長さなどは推測できない。所々にサビが付着している。

第47図16は石板で、頁岩を薄い板状に加工したもので図化している資料以外にも数点出土しているが、同一個体であった可能性も捨てきれない。右側に直線に切られた痕が見られる事から石板の縁の部分であったと思われる。第47図17～19は石筆で第47図16の石板に文字を書く際に使用したと思われる。3点出土したが内2点は尖っている部分が見られる。第47図17はサビが付着している。

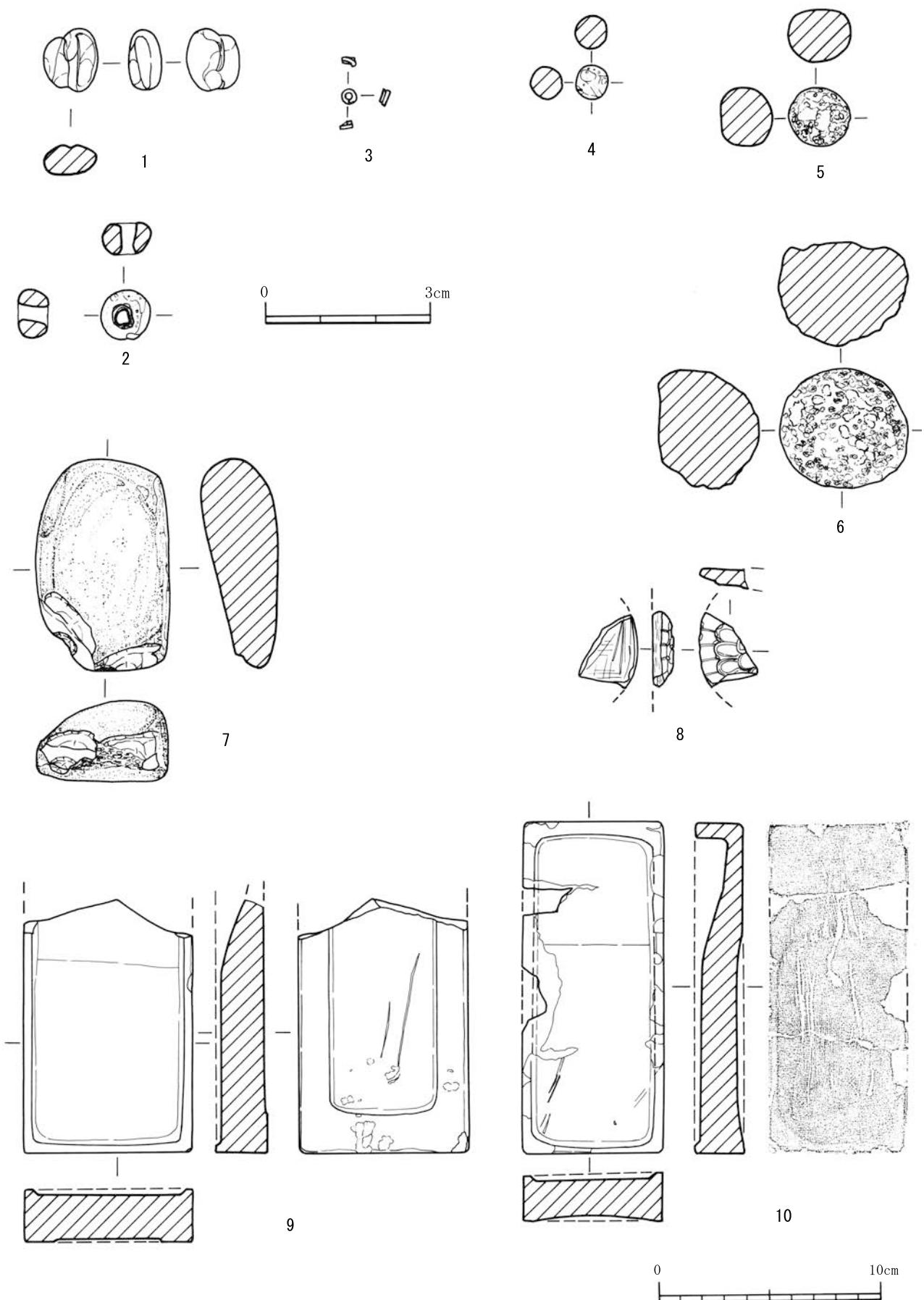
冒頭で触れた第46図8の調度品であるが表面のみに鱗状の彫刻が見られ底面は平坦である事から底の部分であると思われるが一部分だけなので全体の形状を窺い知る事は困難である。また図版45-20,21は珊瑚石を板状に加工した資料でその性格は不明である。

第47図15は石造製品でニービ(砂岩)の表面に帶状の浮き彫りを施しており、石碑若しくは彫刻の一部と思われる。

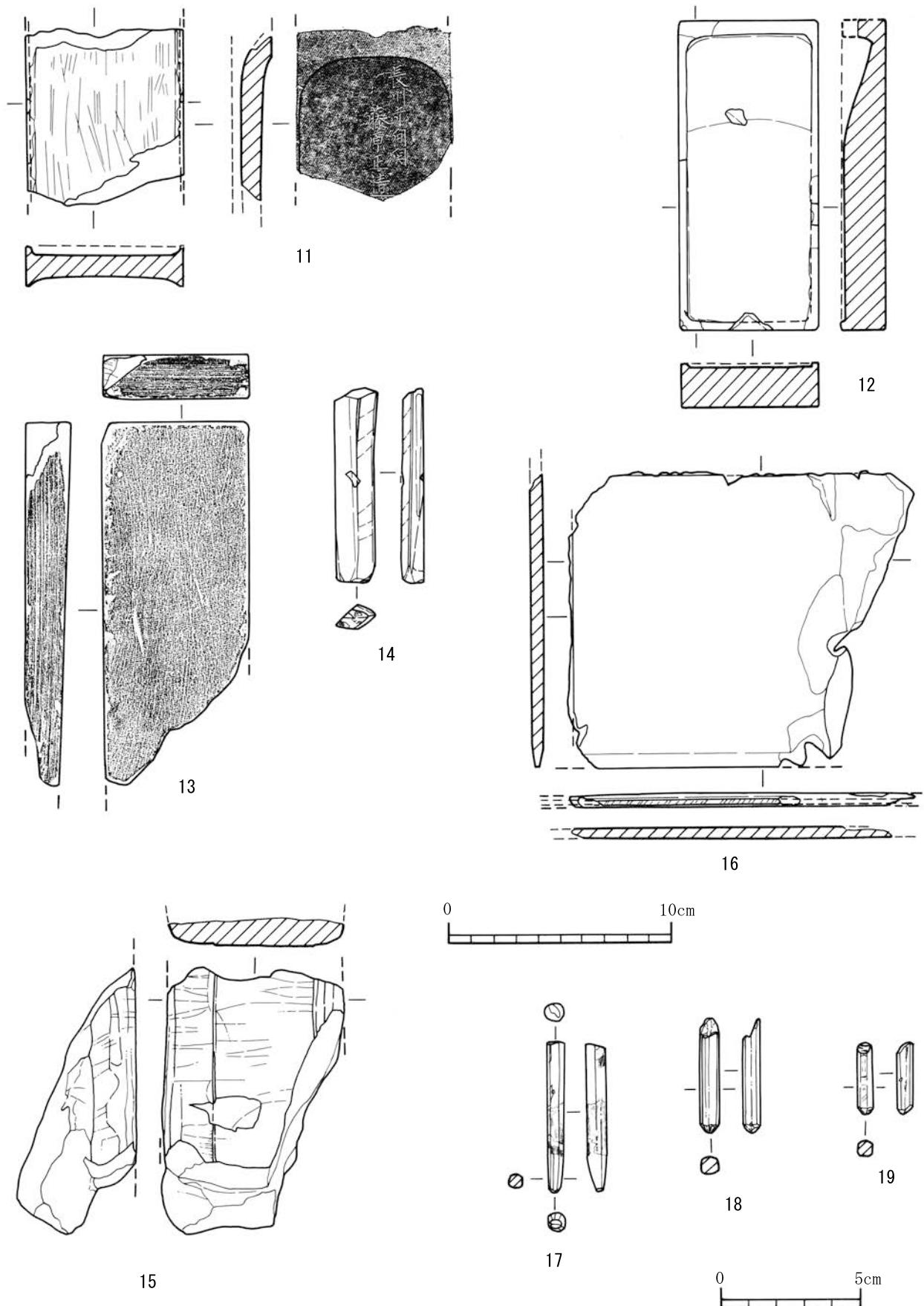
第53表 石器・石製品・石造製品

単位:cm.g

挿図番号 図版番号		器種	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地	挿図番号 図版番号		器種	長さ	幅	厚さ	重さ	出土地
第46図 図版44	4	石球	1.5	1.5	1.5	4.1	H15c-13I層	第47図 図版44	12	硯	13.9	6.3	2.0	385	H16s-13II層
第46図 図版44	5	石球	2.7	2.8	2.4	22	H15s-13II層	第47図 図版45	13	砥石	16.3	6.5	2.1	340	H16s-13II層
第46図 図版44	6	石球	5.4	5.8	4.5	134	H16s-13II層	第47図 図版45	14	砥石	8.5	1.9	1.0	313	H16s-13II層
第46図 図版44	7	石造製品	9.6	6.0	3.2	333	H15s-13II層	第47図 図版45	15	石造製品	12	7.9	5.3	490	H16s-13II層
第46図 図版44	8	調度品	3.3	2.6	0.95	11	H16s-13II層	第47図 図版44	16	石板	14.8	13.2	0.6	209	H16s-12+13I層
第46図 図版44	9	硯	11.4	7.6	2.4	369	H16s-13II層	第47図 図版44	17	石筆	5.4	0.7	0.8	4.5	H16s-13II層
第46図 図版44	10	硯	15.0	6.4	2.2	352	H16s-13II層	第47図 図版44	18	石筆	4.15	0.7	0.65	3.5	H16s-13II層
第47図 図版44	11	硯	7.6	7.1	1.8	134	H16s-13II層	第47図 図版44	19	石筆	3.6	0.6	0.6	1.7	H16s-13II層



第46図 玉・石器・石製品 1



第47図 石器・石製品2

## 第25節 円盤状製品

今回得られた円盤状製品は総数366点あり、その多くが陶磁器や屋根瓦などの素材を加工した二次製品であった。出土資料は、円盤状にするために周縁を打ち欠いただけのものが目立つが、中には孔を穿ったものや穿孔途中の資料も見受けられる。

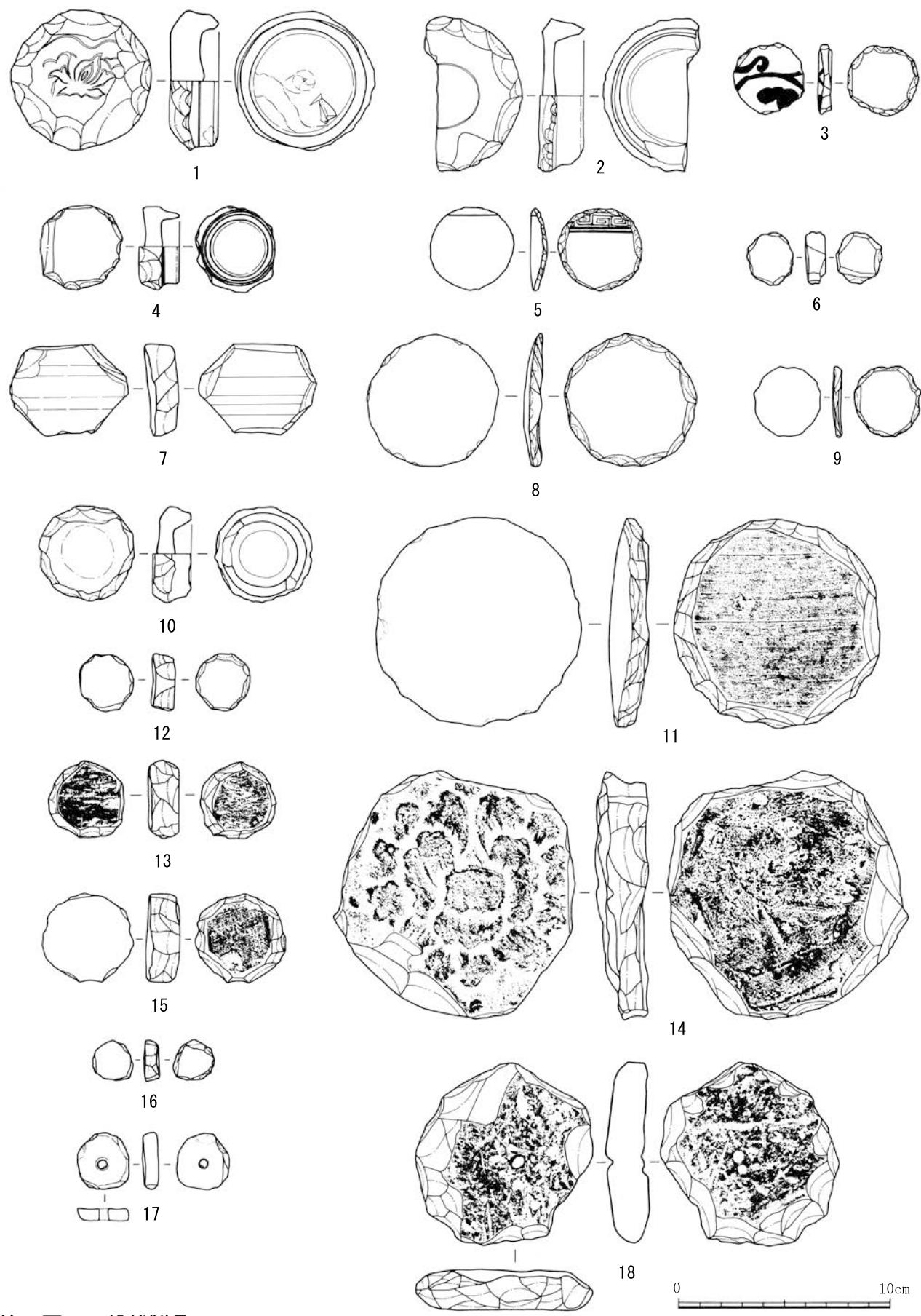
製品の素材においては沖縄産陶器が最も多く、屋根瓦がそれに次ぐ。その他に褐釉陶器、染付、瓦質土器、陶質土器なども見られ、器類の使用部位も胴部と底部からなる。

また、大きさは1.26cm～10.98cmとサイズ幅が広いことも特徴的である。

第54表 円盤状製品観察一覧

単位:cm

図・図版番号	素材	長径	短径	厚さ	重量	観察事項	出土点 出土層
第48図 図版46 1	青磁	6.6	6.6	2.3	190.3	底部を利用。高台を残し、外面から打割。	す-14 I層
第48図 図版46 2	染付	7.3	—	2.2	47.3	底部を利用。高台を残し、外面から打割。	し-13 II層
第48図 図版46 3	染付	3.3	3.3	0.7	7.2	胴部を利用。外面からの打割。	し-13 II層
第48図 図版46 4	染付	4.0	3.8	1.9	25.6	底部を利用。ほとんど外面より打割を行うが、一部内面からの打割も見られる。	し-13 I層
第48図 図版45 5	染付	4.0	3.9	0.3	7.8	胴部を利用。外面から細かく打割調整する。	こ-13 II層
第48図 図版45 6	褐釉陶器	2.5	2.1	0.9	6.1	胴部を利用。両面から打割を行って調整する。	し-13 II層
第48図 図版45 7	褐釉陶器	5.5	4.4	1.5	41.4	胴部を利用。ほぼ内面から打割する。	こ-12 II層
第48図 図版45 8	陶質土器	6.3	6.3	0.9	30.5	胴部を利用。外面からの細かい打割によって調整する。	し-13 II層
第48図 図版45 9	陶質土器	3.4	3.2	0.4	4.1	胴部を利用。外面から打割調整。	し-13 II層
第48図 図版45 10	沖縄産施釉陶器	4.5	4.5	1.8	27.0	底部を利用。高台を残して、外面より打割を行う。	さ-13 II層
第48図 図版45 11	沖縄産無釉陶器	9.8	9.7	1.1	153.8	胴部を利用。外面より打割の調整をする。	し-13 II層
第48図 図版45 12	沖縄産無釉陶器	2.7	2.5	1.1	10.7	胴部を利用。内外面から打割をして調整する。	し-13 II層
第48図 図版45 13	瓦質土器	3.7	3.6	1.5	20.3	胴部を利用。内面から打割を行うが、一部外面からも打割する。	さ-13 II層
第48図 図版45 14	瓦	10.7	11.4	2.5	272.5	瓦当部分を利用。ほとんど瓦当側からの打割だが、瓦当の裏からの打割も見られる。	し-13 II層
第48図 図版45 15	瓦	4.2	4.2	1.6	27.4	瓦を利用。凹面および凸面の両面から打割による調整を行う。	さ-13 II層
第48図 図版45 16	沖縄産施釉陶器	1.9	1.9	0.7	2.8	胴部を利用。主に外面から打割をするが、内面からも打ち欠く。	し-13 II層
第48図 図版45 17	沖縄産無釉陶器	2.7	2.5	0.7	5.3	胴部を利用。外面からの打割。中央に幅3mm程度の孔を穿つ。	し-13 II層
第48図 図版45 18	瓦質土器	8.7	8.4	2.0	137.2	両面から打割調整を行う。片面のほぼ中央に約4mm幅の孔を1つ穿ち、もう一方の面に幅3～4mm程度の孔を2つ穿つが、いずれの孔も貫通できていない。	す-14 I層



第48図 円盤状製品





## 第27節 脊椎動物遺存体

本遺跡では、主にⅡ層から脊椎動物遺存体が出土している。類別に概観すると、魚類がメジロザメ科・コチ科・ハタ科・イトヒキアジ・フエダイ・クロダイ・ハマフエフキ・コブダイ・ナンヨウブダイ・ナガブダイ・メカジキ科・サバ科・フグ科・ハリセンボン科の13種である。獣類は・リクガメ科・ヘビ亜目・ニワトリ・モグラ科・ネズミ科・イヌ・ネコ・ブタ・ウシ・ヤギの12種で、すべて部位ごとの点数に明らかな偏りはないため、種ごとの個体数は多くないと思われる。コウイカ属の一種に関しては本来貝類に含めるべきであるが紙面の都合上本節に記載した。以下に種名リストと出土一覧を示した。

脊椎動物遺存体種名表

軟体動物門 Phylum Arthropoda	フグ目 Order Tetraodontiformes
頭足綱 Cephalopoda	フグ科 Family Tetraodontidae
二鰓亜綱 Coleoidea	属・種不明 Gen. et sp. indet.
コウイカ目 Sepioida	ハリセンボン科 Family Diodontidae
コウイカ属の一種 <i>Sepia (Acanthosepion) sp.</i>	ハリセンボン <i>Diodon holocanthus</i>
脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA	爬虫綱 Class Reptilia
軟骨魚綱 Class Chondrichthyes	カメ目 Order Chelonia
メジロザメ目 Order Carcharhiniformes	リクガメ科 Family Testudinidae
メジロザメ科 Family Carcharhinidae	属・種不明 Gen. et sp. indet.
属・種不明 Gen. et sp. indet.	有鱗目(ヘビ亜目) Order Ophidia
硬骨魚綱 Class Osteichthyes	属・種不明 Gen. et sp. indet.
カサゴ目 Order Scorpaeniformes	鳥綱 Class Aves
コチ科 Family Platyccephalidae	キジ目 Order Galliformes
属・種不明 Gen. et sp. indet.	キジ科 Family Phasianidae
スズキ目 Order Perciformes	ニワトリ <i>Gallus gallus var. domesticus</i>
ハタ科 Family Serranidae	属・種不明 Gen. et sp. indet.
属・種不明 Gen. et sp. indet.	哺乳綱 Class Mammalia
アジ科 Family Carangidae	食虫目 Order Insectivora
イトヒキアジ <i>Alectis ciliaris</i>	モグラ科 Family Talpidae
属・種不明 Gen. et sp. indet.	属・種不明 Gen. et sp. indet.
フエダイ科 Family Lutjanidae	齧歯目 Order Rodentia
フエダイ <i>Lutjanus stellatus Akazaki</i>	ネズミ科 Family Murida
タイ科 Family Sparidae	属・種不明 Gen. et sp. indet.
クロダイ <i>Acanthopagrus schlegelii</i> .	食肉目 Order Carnivora
エフキダイ科 Family Lethrinidae	イヌ科 Family Canidae
ハマフエフキ <i>Lethrinus nebulosus</i>	イヌ <i>Canis familiaris</i>
ベラ科 Family Labridae	ネコ科 Family Felidae
コブダイ <i>Semicossyphus reticulatus</i>	ネコ <i>Felis catus</i>
属・種不明 Gen. et sp. indet.	偶蹄目 Order Artiodactyla
ブダイ科 Family Scaridae	イノシシ科 Family Suidae
ナンヨウブダイ <i>Scarus gibbus</i>	ブタ <i>Sus scrofa var. domesticus</i>
ナガブダイ <i>Scarus rubroviolaceus</i>	ウシ科 Family Bovidae
属・種不明 Gen. et sp. indet.	ウシ <i>Bos taurus</i>
メカジキ科 Family Xiphiidae	ヤギ <i>Capra hircus</i>
属・種不明 Gen. et sp. indet.	
サバ科 Family Scombridae	
属・種不明 Gen. et sp. indet.	







## 補記 真珠道出土化石骨の保存処理

### 1. 出土状況

平成15年度の調査時に、し-16～18グリッドより大量のシカ化石骨が発見された。周囲には三角錐状の鍾乳石も見られたため、洞穴であった場所と思われる。四肢骨の関節がつながっている様子で出土したものもあり、ほぼ原位置を保っていることが確認できた。しかし化石骨の一部は石灰岩に溶着し、またほとんどが土圧でつぶれた状態で崩壊は免れない状況にあった。

化石骨の種同定や個体数の確認のためには遺物の強化と土砂の除去が必要であると判断し、保存処理を行った。

### 2. 保存処理前状況

- ① 土ごとブロックで取り上げている。→いくつもの骨が重なり合い、それらには無数の亀裂が見られるため不用意に持ち上げると崩れる。その状態の遺物は周辺の土ごとブロック体として現場から持ち込まれた。コンテナに収納されているが、移動中にもいくつかの破片が落下し、すでに検出時の状態を保っていない。土の厚みも20～30cmはあるため内部が確認できず、遺物量は現時点では不明である。
- ② 現場で樹脂塗布を行っている。→応急処置として現場で遺物表面に樹脂塗布を行い、ある程度遺物を強化してから取り上げを行っている。
- ③ そのまま取り上げ、ユニパックに保管している。→比較的丈夫な遺物で、手に持つことができる。しかし遺物の内部に入り込んだ土によって形状を保っており、亀裂も無数に確認できた。なかには乾燥すると崩れるものもある。上記のように遺物の状態は一様でないため、1点ずつ状態を確認し、それぞれに適した保存処理方法を検討する必要がある。以下に詳細な工程を記す。

### 3. 保存処理工程

- ① 写真撮影・・・保存処理前状況をデジタルカメラで記録した。ユニパックに入っている遺物のなかには崩壊するものもあるため袋ごと撮影した。土のブロック体は移動が困難なため、コンテナごと撮影を行った。
- ② 洗浄・・・土砂の除去、また遺物内部の脱水もかねて100%エタノールで洗浄を行った。比較的丈夫な遺物は竹串や筆などで土を落としたが、ほとんどの遺物は風化によって空洞化し、土で形状を維持しているため内部の土を崩さないように努め、エタノールを表面に塗布して土については樹脂で強化後に除去することとした。
- ③ 樹脂塗布（2回）・・・脆弱化した遺物の強化と、亀裂の接合をかねてパラロイドB-72（Rohm&Hass社製）・15%キシレン溶液を塗布した。洗浄が万全に行えなかった遺物は、1度目の樹脂塗布後、強化度合いを確認して土の除去を行った。その後1～3日間自然乾燥させ、2度目の樹脂塗布を行った。

今回出土した遺物のなかには資料整理作業に充分耐えうる強度を有する一群もあった。そのような遺物はクリーニングのみにとどめ、強化処理（樹脂塗布）を行わなかった。

③ 取り上げ・・・土のブロック体にある遺物は樹脂塗布後、取り上げを行った。土内部にはまだ遺物があると思われたため、水で湿らせながら竹串でブロック体を崩していく。遺物取り上げ後の土は水洗しながら篩いにかけて微細な遺物も検出するように努めた。

- ④ 接合・・・保存処理前に撮影した写真を参考にしながら接合を行った。接合面が小さい遺物は、エポキシ系接着剤アラルダイトラピッド（昭和高分子株式会社）にシラスマイクロバルーンを混合したものを補填し接合に耐えうる強度を保った。接合作業中に崩れる遺物がいくつかあり、再度樹脂塗布を行った。

土圧でつぶれ、かろうじて原型を維持している遺物については、原型を復元しようと試みると膨大な時間を費やすえに、逆に破片が散逸して原型がわからなくなる恐れがあり、現段階ではつぶれたままの形状を維持した。

### 4. まとめ

今回保存処理を行った遺物は、未だ詳細な資料整理を行なっていない。保存処理工程のなかで得られた情報を概観すると、動物種については、リュウキュウジカ（*Cervidae Cervus astyloden*）とリュウキュウムカシキヨン（*Cervidae Muntjacinae, gen. et sp. indent.*）が確認できた。両種とも現在は絶滅しているが、沖縄諸島や先島諸島で数多くの発見例があり、その骨格もほぼ全形が復元されている。部位では枝角が総数のなかで大半を占める。これはそのまま個体数に反映されるわけではなく、生前のシカの落角によるものと想定される<sup>(註1)</sup>。頭蓋骨は小片が多く、全形が窺える資料は無い。下顎骨のほとんどは、歯骨が良好な状態で残存している。四肢骨についてもほぼすべての部位が得られており、サイズなどから見て比較的若年齢の、子供のシカもいるようであった。

これらのシカ化石骨は真珠道や首里城など、遺跡に直接関連する遺物ではない。しかし大量に良好な化石資料が出土したことは特筆すべきことである。今後の資料整理によって、より詳細なデータが得られるであろう。

註1). 金子浩昌氏（東京国立博物館研究員）の御教示による。

## 第6章 結語

前章までに平成15・16年度に実施した首里城公園内の真珠道跡発掘調査についての成果を報告した。この章では、それらの成果を整理し、結語としたい。

今回の調査は、県営首里城公園の真珠道整備の事前調査であり、目的は首里城跡に隣接し、1522年に築造された真珠道跡の検出であった。現在は「那覇市道守礼門南側線」として使用されていることから、自動車の通行を考慮し、2ヶ年に分割して調査を実施した。

アスファルト、路盤材及び造成土を除去すると、調査区は第二次世界大戦及び戦後の造成により岩盤である琉球石灰岩まで掘削され、真珠道跡は破壊されていたことが判明した。しかし、一部、掘削されていない部分も確認でき、その部分には明褐色土及びシカ化石が堆積しており、また、石灰岩の表面には石筍が形成されていた。そのことから、真珠道跡一帯は本来、首里城から連なる琉球石灰岩の洞穴部分があり、首里城を築造する際若しくは真珠道を築造する際に天井部分が削り取られたものと推測される。

このように本来の目的である真珠道跡の検出には至らなかったが、石積み及び石畳遺構を検出することができた。両遺構は真珠道跡の存在が想定されていた標高よりも下層から、また、岩盤の裂け目から検出されている。石積み遺構は、東西方向に延び、北に面をつくる。西端は確認できたが、東端は確認できていない。石質は琉球石灰岩製であり、作りは丁寧な「あいかた積み」である。石積みを支える土壌は、軟らかく、石積みを支えるには不十分な土質である。石積みと岩盤の間には拳大～人頭大の琉球石灰岩を裏込め石として詰め、或いは補強しているが、肝心な土盤が不安定なため崩壊の可能性もある部分があった。

石敷き部分については、先述の石積み根石から始まるように設置されている。石積みと岩盤裂け目北側の間に位置し、東側が高く、西側が低い。北側で岩盤と接する部分については、裂け目の下層奥深くに落下した可能性が高く、確認できていない。石敷きを構成する石は、表面は滑らかであり、石積みの角をもつものとは明確に異なり、長期間の摩擦を受けた結果、滑らかになったものと推測される。

石積み及び石敷の性格、構築の目的は、明確ではないが、岩盤の裂け目上にも設置する必要のあった真珠道を補強するための基礎であったと考えることもできる。

石積み及び石敷以外に、石積みの南東側よりヤコウガイの殻が集中して検出された部分があったが、明確な遺構としての証拠を確認できなかった。これらヤコウガイには、特徴があり、大部分の個体の殻口付近に約1cmで穿かれた孔がある。この孔は、ヤコウガイの養殖の際に縄又は紐を通して海でも見失わないよう、また、必要な場合には効率良く回収するための方法で考案された「ンナチカネー」<sup>(註1)</sup>とのことである。

なお、今回検出した遺構を覆っていたのは、沖縄産陶器、中国産陶磁器をはじめとする多種多様の遺物を多く含む土層であった。地表下約4mでもなお続いているが、安全上、掘下げるのをとめた。

検出した遺構については、土のう袋若しくは白砂により養生し、埋め戻しを行った。

出土遺物は中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器をはじめ様々な種類が出土しており、数量では本土産陶磁器、沖縄産陶器、陶質土器が主となっている。遺物の製作された時期としては、18～19世紀代のものが中心となるが、青磁に関しては15～16世紀代のものが主となるようである。大部分の遺物は石積み及び石敷き遺構の確認された部分から出土していることから、II層が形成されたのは18世紀以降となると考えられる。

なお、少数ではあるが埴輪が確認されたこと及びヤコウガイの殻口近くに粗孔を穿ったものが多く確認されたことから現在の那覇市立城西小学校にあったとされる御細工所跡<sup>(註2)</sup>との関連が考えられる。

## 参考文献

下地 馨 「宮古蔵元」『沖縄大百科事典』下巻 沖縄タイムス社 1983年

新城 剛 「パナリ焼」『沖縄大百科事典』下巻 沖縄タイムス社 1983年

### 参考報告書

沖縄県教育委員会 1994 「カイジ浜貝塚」『竹富島一週道路建設工事に伴う緊急発掘報告書』

沖縄県教育委員会 1995 「北原貝塚」『沖縄県文化財調査報告書』123集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 「天界寺跡(Ⅰ) - 首里杜館地下駐車場入り口に伴う緊急発掘調査 - 」

『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 「首里城跡 - 下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書」

『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第3集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 「円覚寺跡」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第10集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 「天界寺Ⅱ」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第8集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 「首里城跡 - 繼世門周辺地区発掘調査報告書 - 」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第9集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 「首里城跡 - 東のアザナ地区発掘調査報告書 - 」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第20集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 「ナカンダカリヤマの古墓群」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第26集

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 「首里城跡 - 書院・鎖之間地区発掘調査報告書 - 」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第28集

### 一 註 一

#### 第5章 第1節 青磁

1. 金武正紀・宮里末廣ほか 『今帰仁城跡発掘調査報告(Ⅰ)』今帰仁教育委員会 1983年

2. 金城亀信 「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁器研究』第20号 日本貿易陶磁器研究会2000年9月

3. 亀井明徳ほか 『具志川城跡発掘調査報告書Ⅰ - 史跡具志川城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告 - 』

久米島町教育委員会 2005年3月

4. 金城亀信・上原靜・城間 肇ほか 『首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ) - 』沖縄県教育委員会1998年3月

#### 第2節 白磁

1 - a.沖縄県教育委員会 『湧田古窯(Ⅰ) - 県庁舎行政棟建設に係る発掘調査 - 』1993年3月

b.沖縄県教育委員会 『湧田古窯(Ⅱ) - 県庁舎議会棟建設に係る発掘調査 - 』1995年3月

2. 新垣力・瀬戸徹也 「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理 付14世紀～16世紀の青磁の様相整理メモ」

『紀要 沖縄埋文研究 3』沖縄県立埋蔵文化財センター 2005年3月

#### 第3節 中国色絵

1. 加藤唐九郎 『原色陶器大辞典』株式会社淡交社 初版発行 昭和49年(1974)10月25日 24版発行 平成5年(1993)1月27日

2. 沖縄県立埋蔵文化財センター 『首里城跡 - 東のアザナ地区発掘調査報告書 - 』2004年3月

3. 沖縄県立埋蔵文化財センター 『首里城跡 - 右掖門及び周辺地区発掘調査報告書 - 』2003年3月

4. 沖縄県立埋蔵文化財センター 『天界寺跡(Ⅰ)』2001年3月

5 - a. 沖縄県教育委員会 『湧田古窯(Ⅰ) - 県庁舎行政棟建設に係る発掘調査 - 』1993年3月

b. 沖縄県教育委員会 『湧田古窯(Ⅱ) - 県庁舎議会棟建設に係る発掘調査 - 』1995年3月

#### 第13節 土器(グスク土器・先島系土器)

1. 友寄英一郎・嵩元政秀 「フェンサ城貝塚調査概要」『琉球大学法文学部紀要』社会篇 13号 琉球大学 法文学部 1969年

2. 金城亀信 「グスク土器の出現」『月刊 考古学ジャーナル』6月号No.320(通巻)ニュー・サイエンス社 1990年

3. 嵩元政秀 『宮古式土器』『沖縄大百科事典』下巻 沖縄タイムス社 1983年

4. 高宮廣衛 「編年試案の一部修正について」『南島考古』第7号 沖縄考古学会 1981年

5. 當眞嗣一・金城亀信ほか 『稲福遺跡』沖縄県教育委員会 1983年

6. 大城 慧・金城亀信ほか 『我謝遺跡』西原町教育委員会 1983年

7. 金城亀信ほか 『国指定史跡 糸教城跡 - 発掘調査報告書Ⅰ - 』玉城村教育委員会 1991年

8. 大城 慧・金城亀信ほか 『カンドウ原遺跡』沖縄県教育委員会 1984年

9. 大城 慧・金城亀信ほか 『西表島 上村遺跡 - 重要遺跡確認調査報告 - 』沖縄県教育委員会 1991年

10. 西銘 章・城間 肇ほか 『ヤッチのガマ カンジン原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター2001年3月

11. 金武正紀・城間千栄子 『ヒヤジョー毛遺跡 - 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書Ⅰ - 』

那覇市教育委員会 1994年

12. 金城亀信ほか 『阿波根古島遺跡 - 県庁舎行政棟建設に係る発掘調査 - 』沖縄県教育委員会 1990年

13. 大城 慧・金城亀信ほか 『湧田古窯跡 - 県庁舎行政棟建設に係る発掘調査 - 』沖縄県教育委員会1993年

## 第6章 結 語

1. 上原 静 (特集 貝の交流 (シェルロード)) 「首里城跡出土の貝殻」『月間考古学ジャーナル』

臨時増刊号No311 ニュー・サイエンス社 1989年。

2. 島袋春美ほか「御細工所跡」『那覇市文化財調査報告書第18号』那覇市教育委員会 1991年3月





# 図 版





1



2



3



4



5



6



7

- 1 調査前（北より）
- 2 石筈検出状況（西より）
- 3 石積検出状況（北東より）
- 4 石積検出状況2（北東より）
- 5 遺物検出状況（北より）
- 6 ヤコウガイ検出状況（北より）
- 7 石積及び石敷き遺構検出状況（北より）

図版1 遺構検出状況1



8



9



10



11



12



13



14

8 石積及び石敷き遺構検出状況2(南より)

9 せ-13 東壁

10 石積西端検出状況(西より)

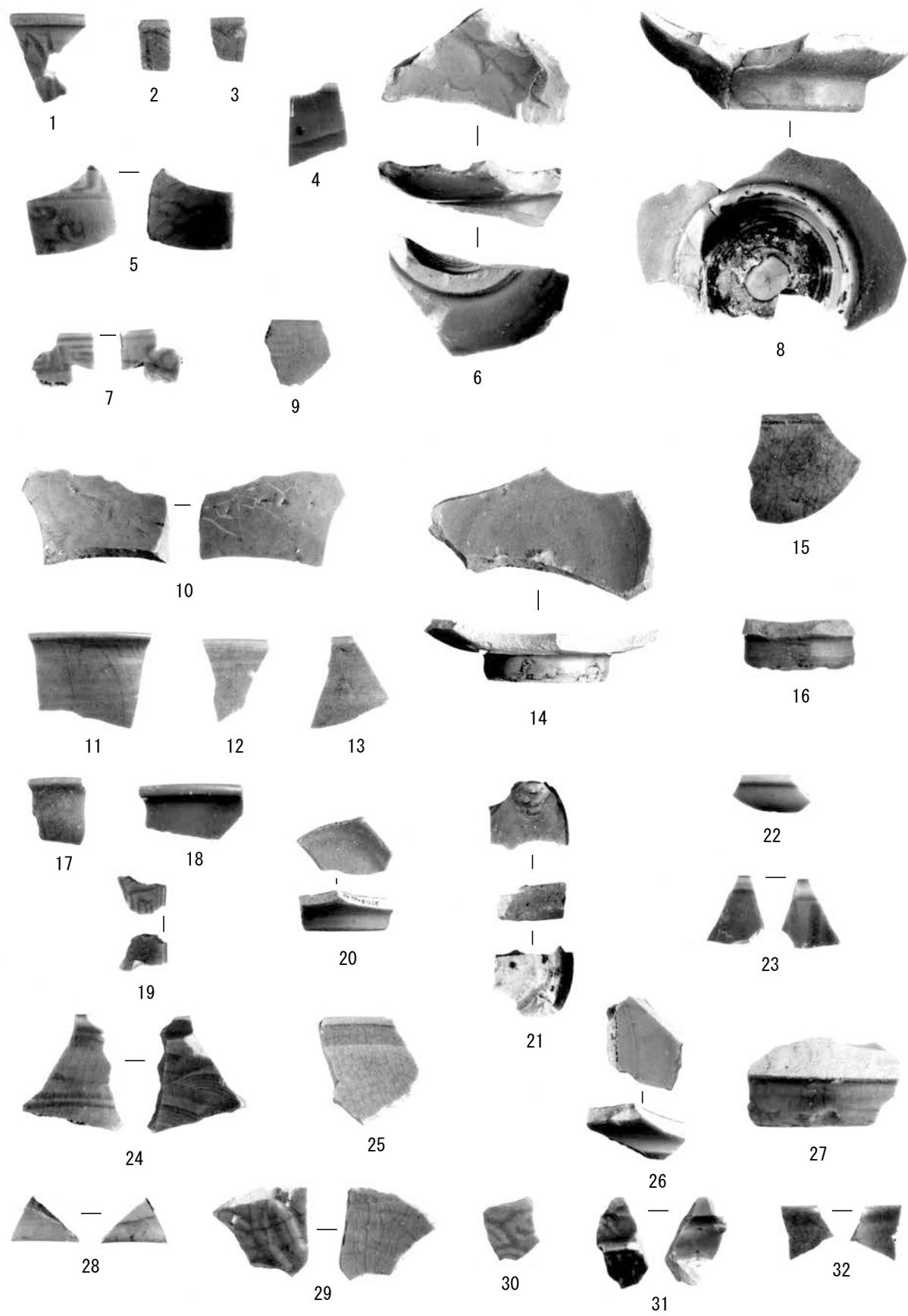
11 遺物包含層検出状況(西より)

12 遺物検出状況

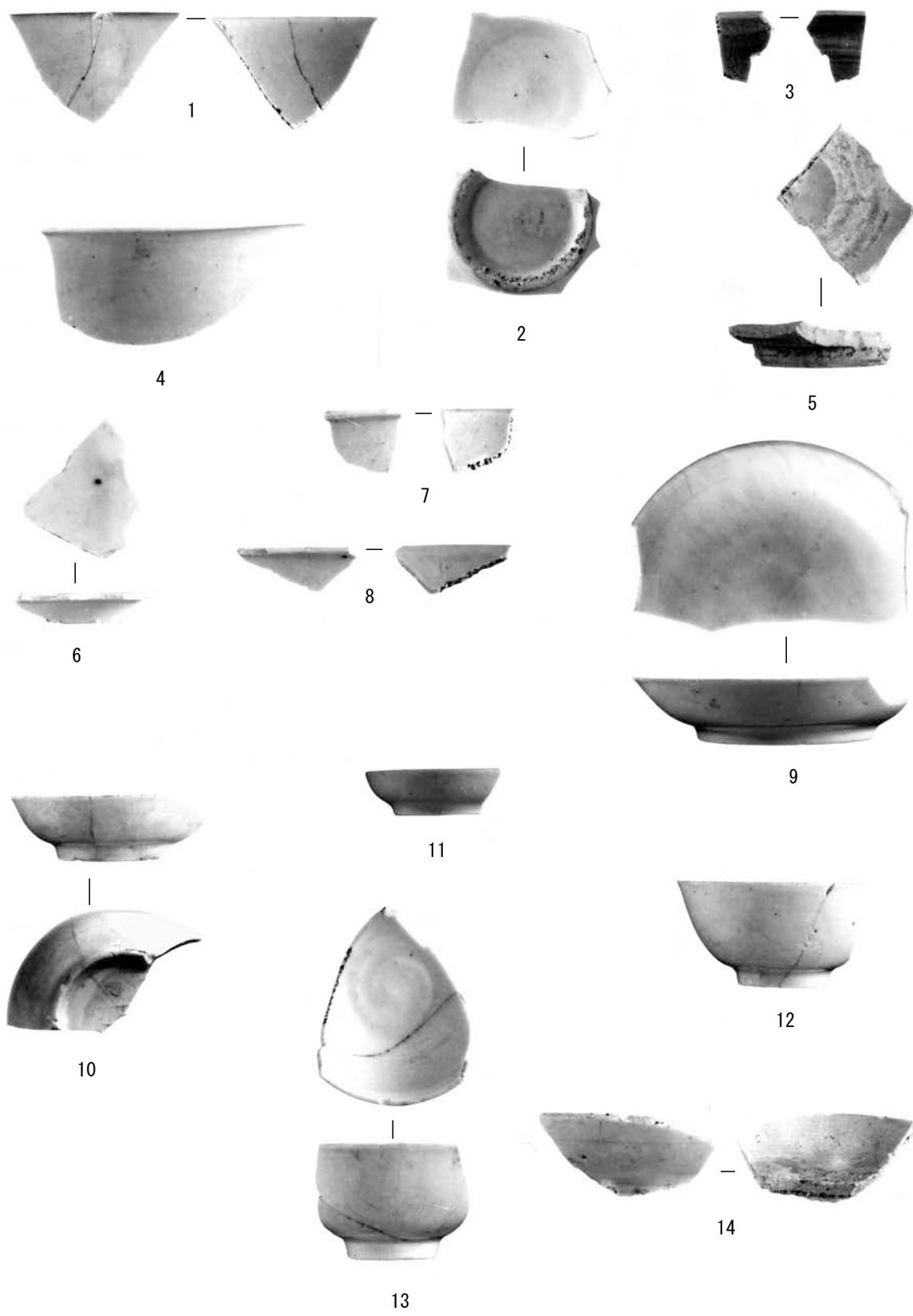
13 平成15年度完掘状況(南より)

14 平成16年度完掘状況(南より)

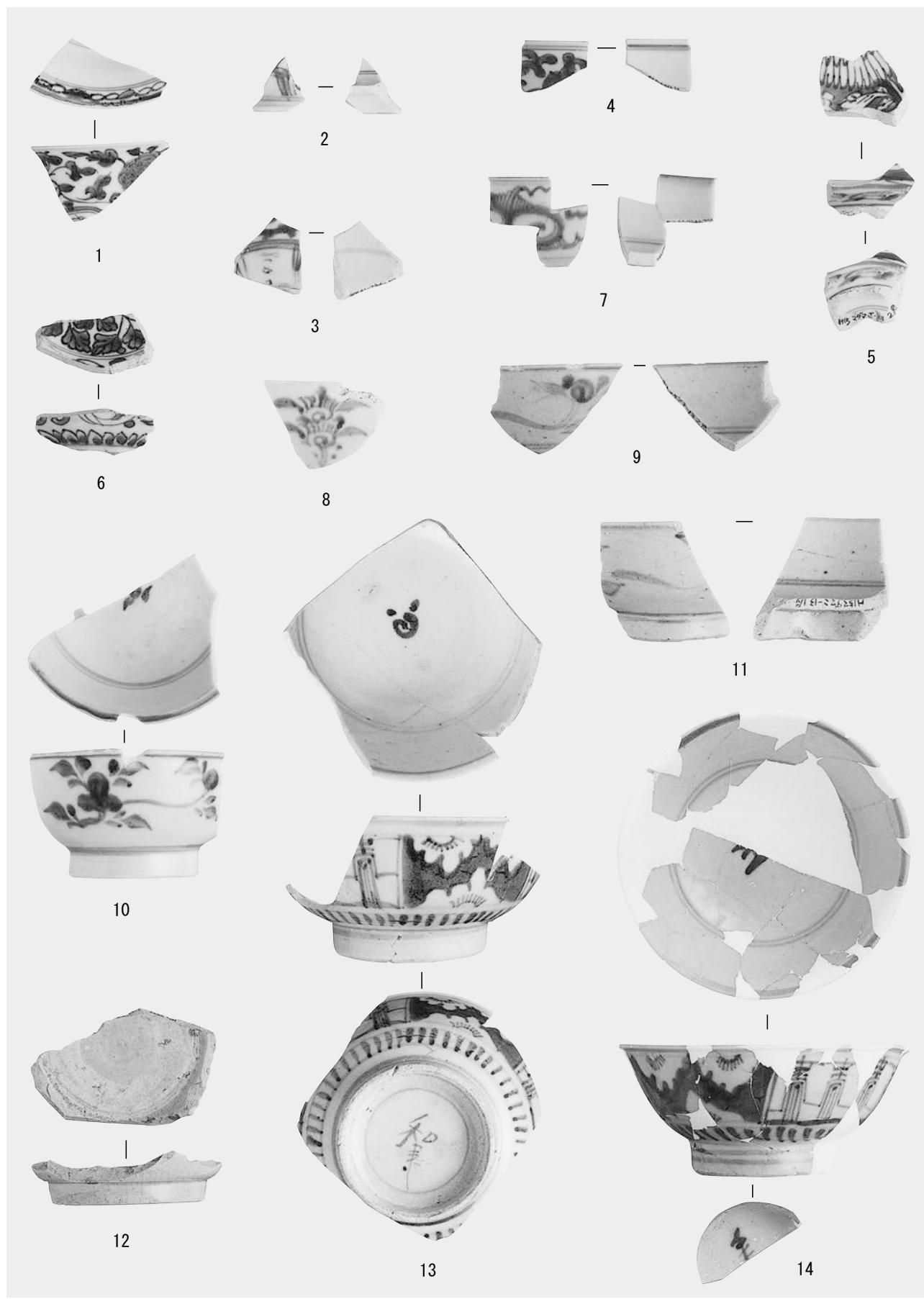
図版2 遺構検出状況2



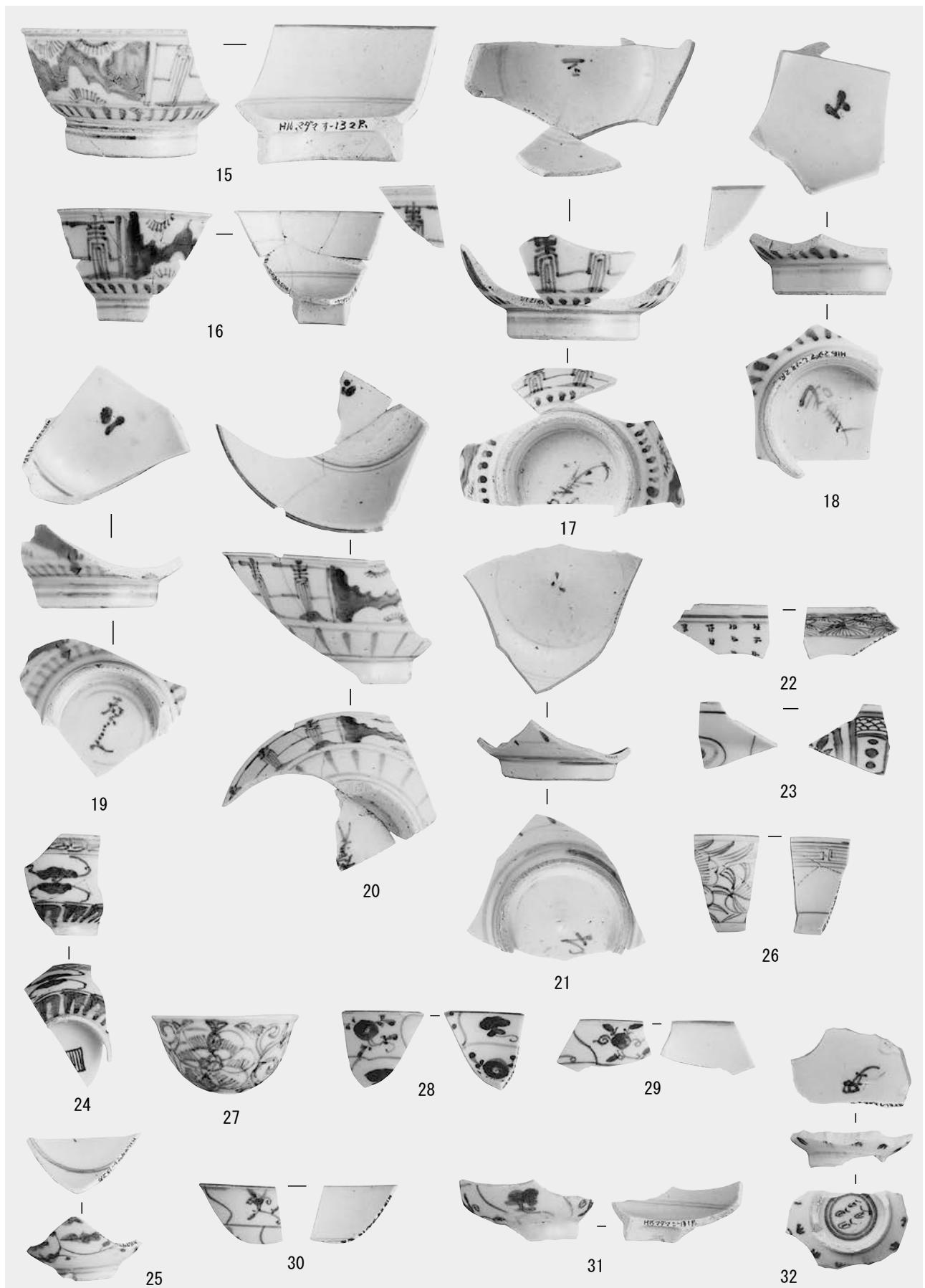
図版3 青磁



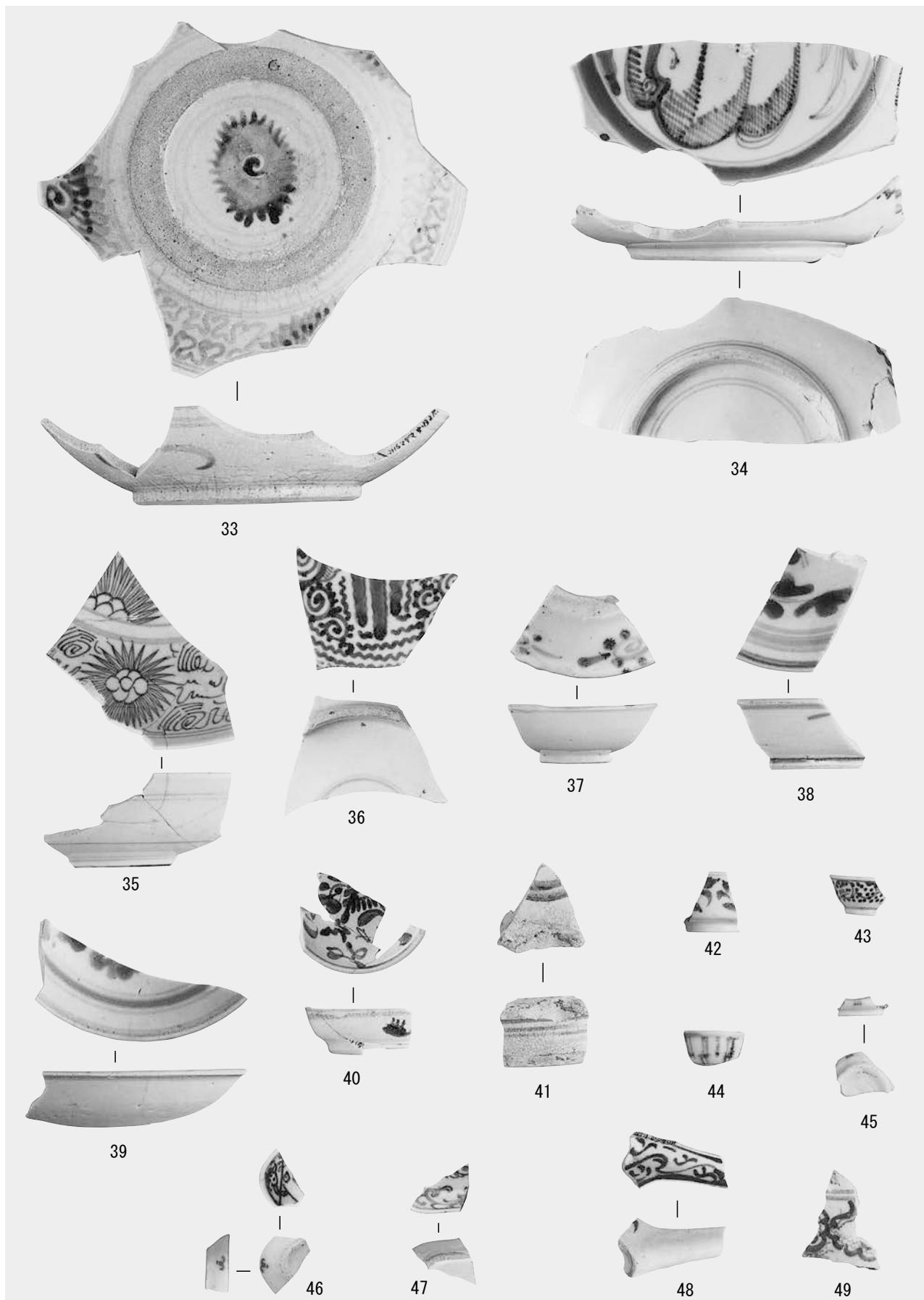
図版4 白磁



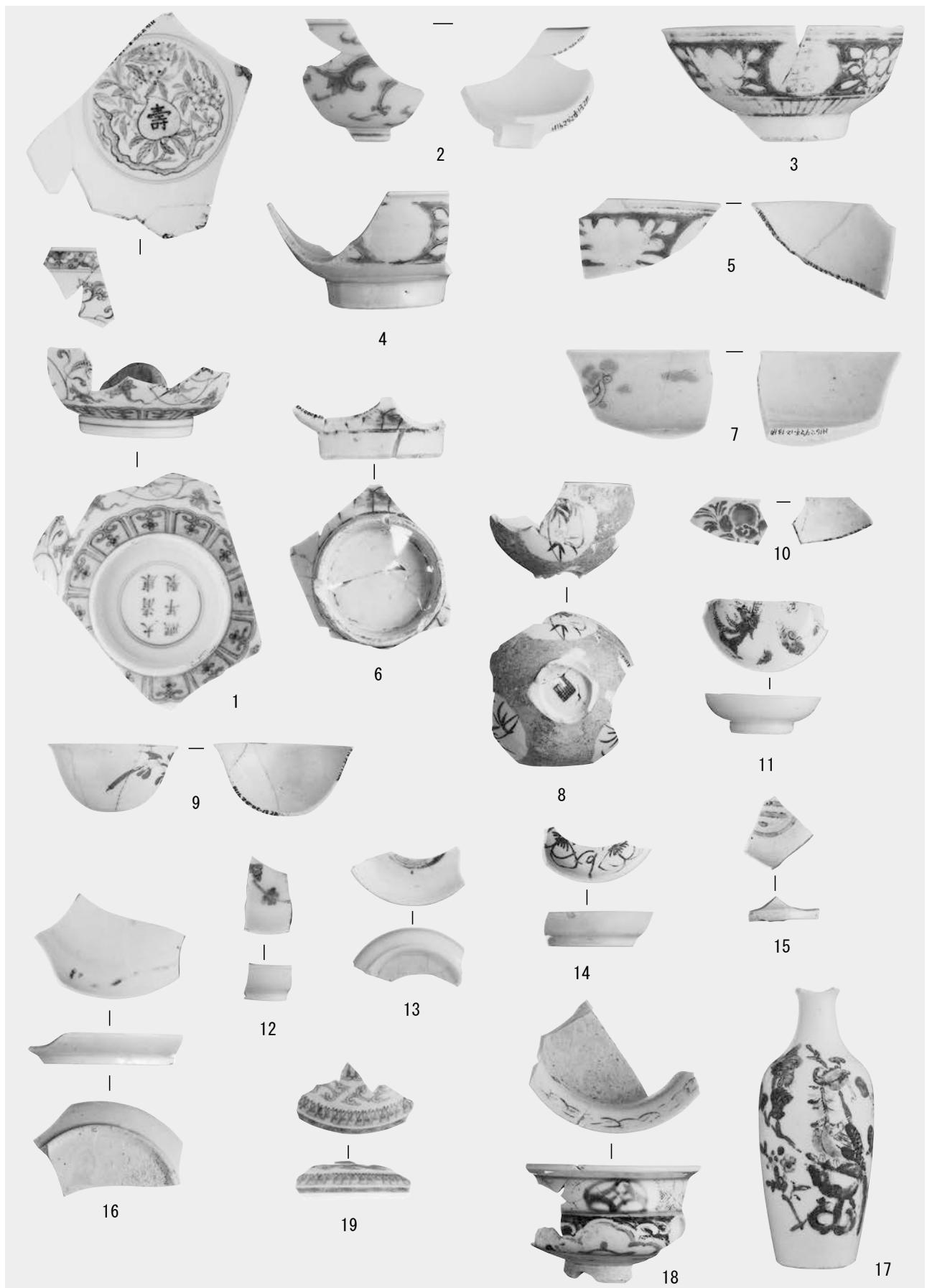
図版5 中国産染付 1



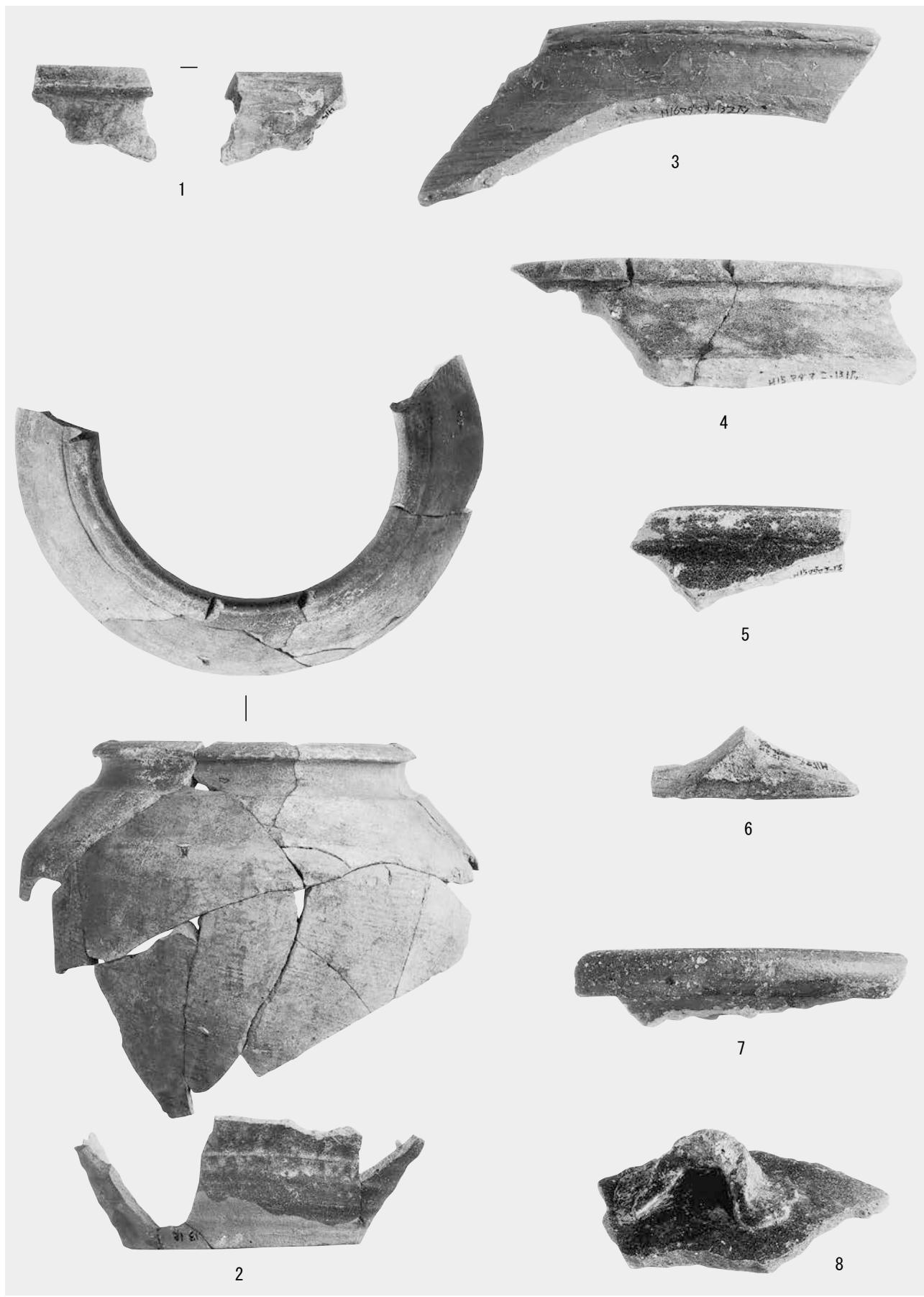
図版6 中国産染付2



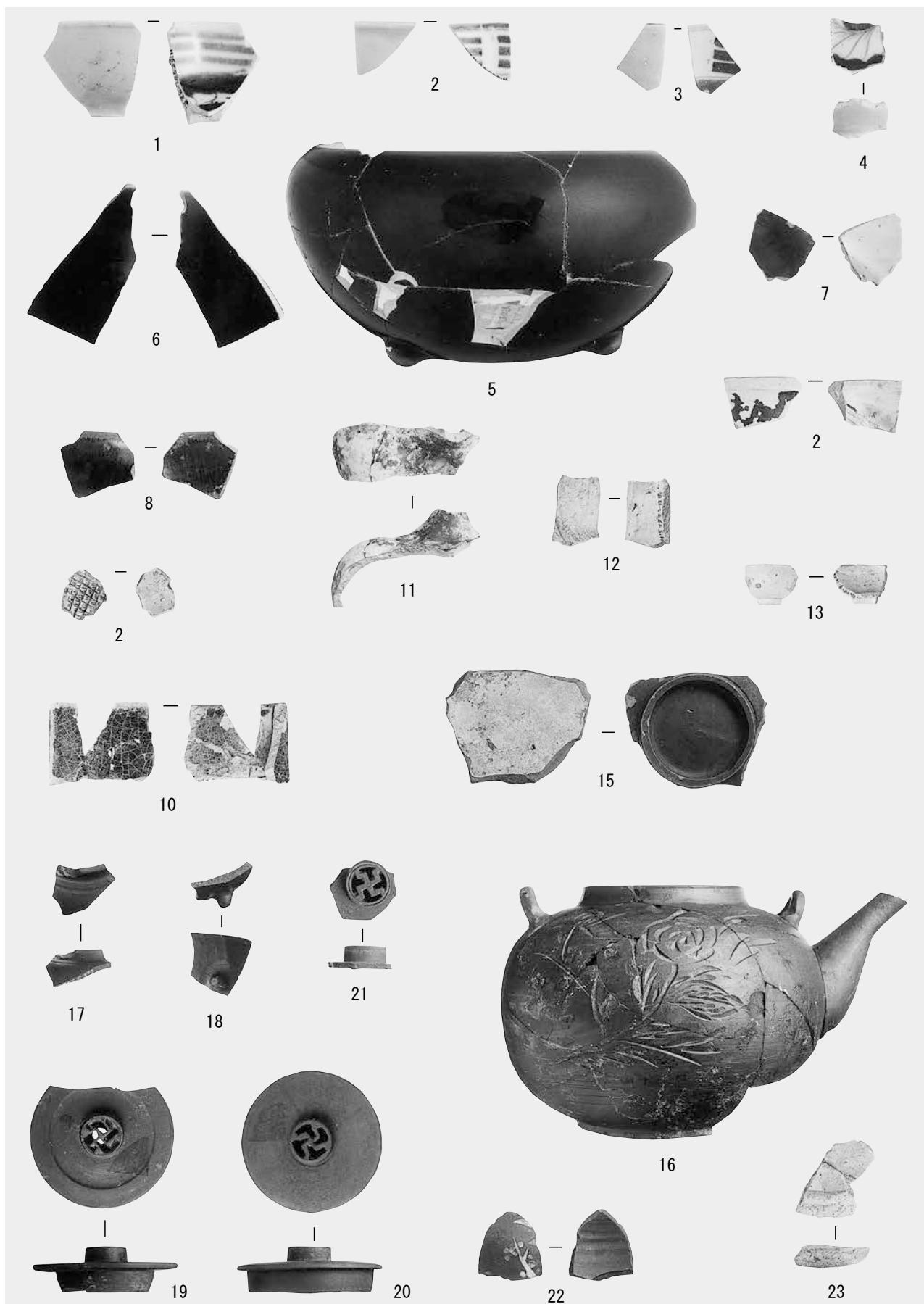
図版7 中国産染付3



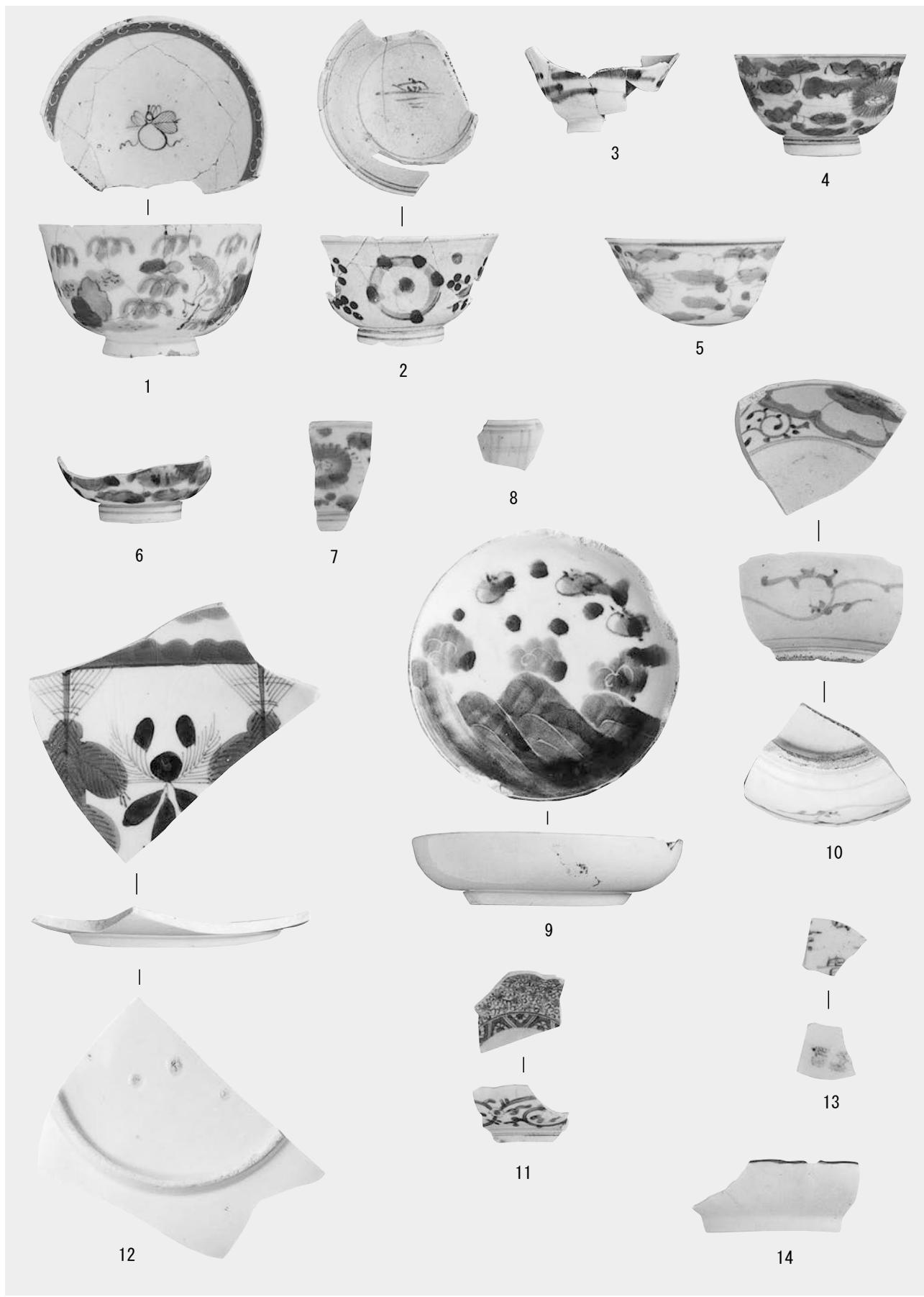
図版8色絵



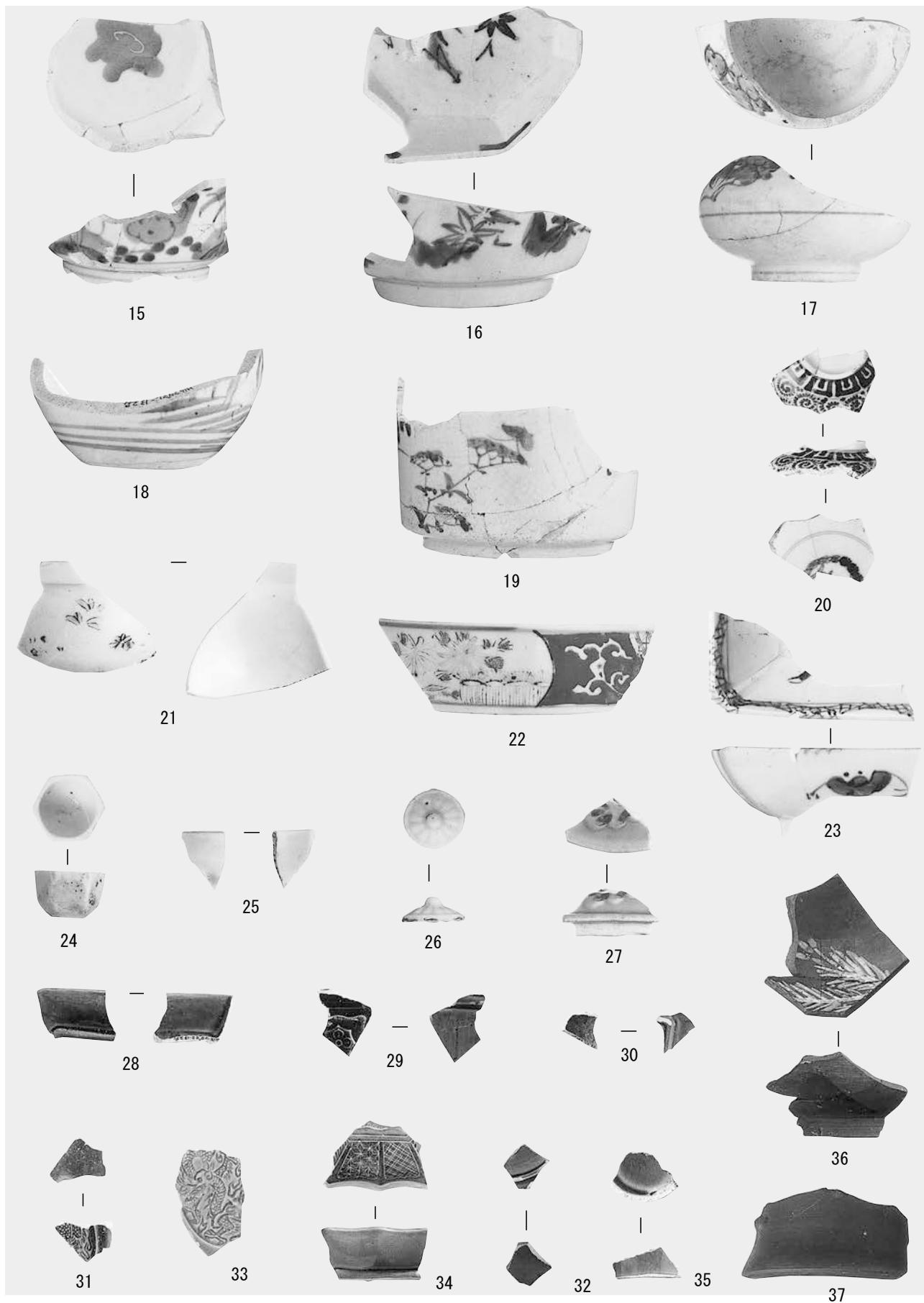
図版9 中国産・タイ産褐釉陶器



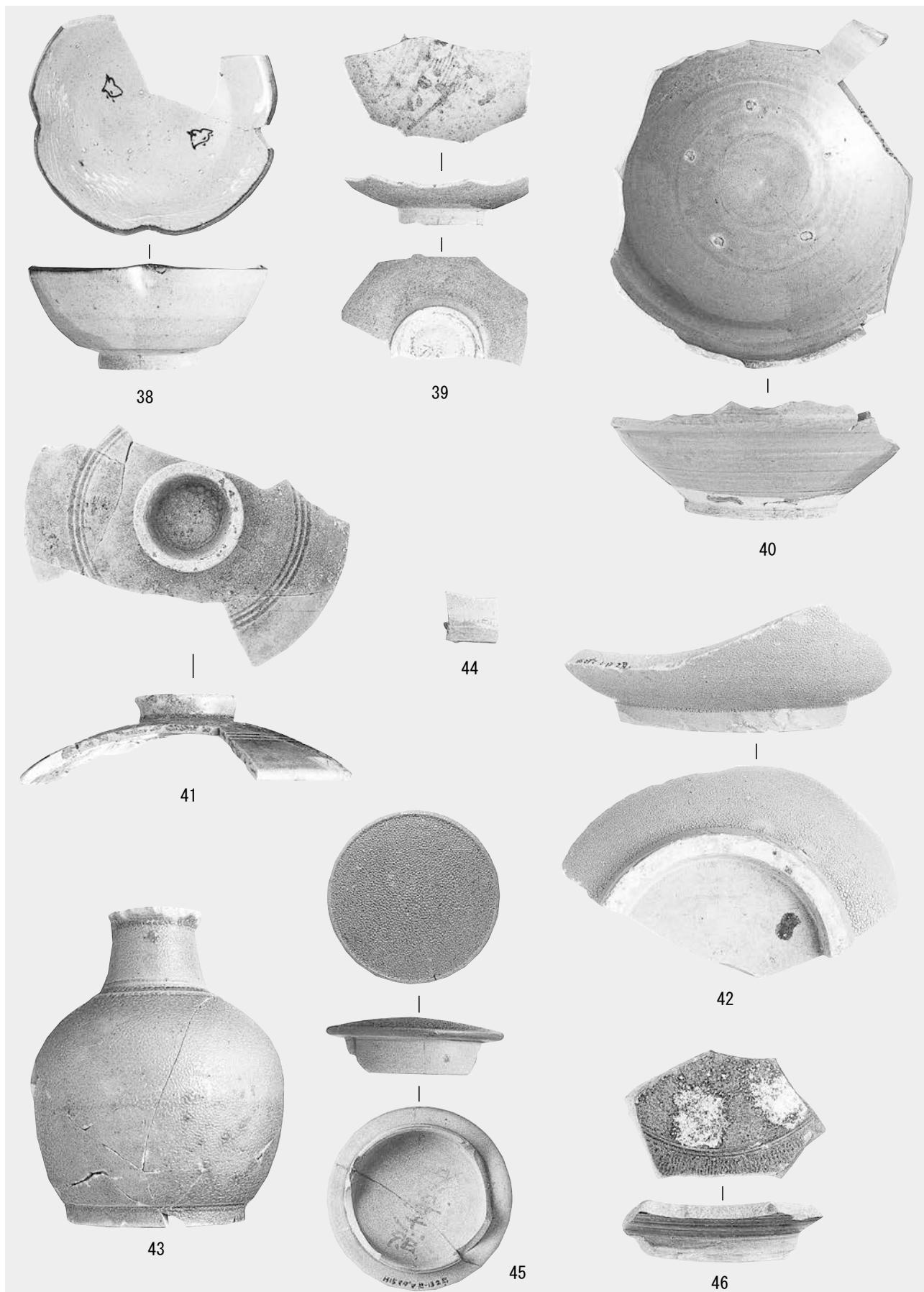
図版10その他の輸入陶磁器



図版11本土産陶磁器 1



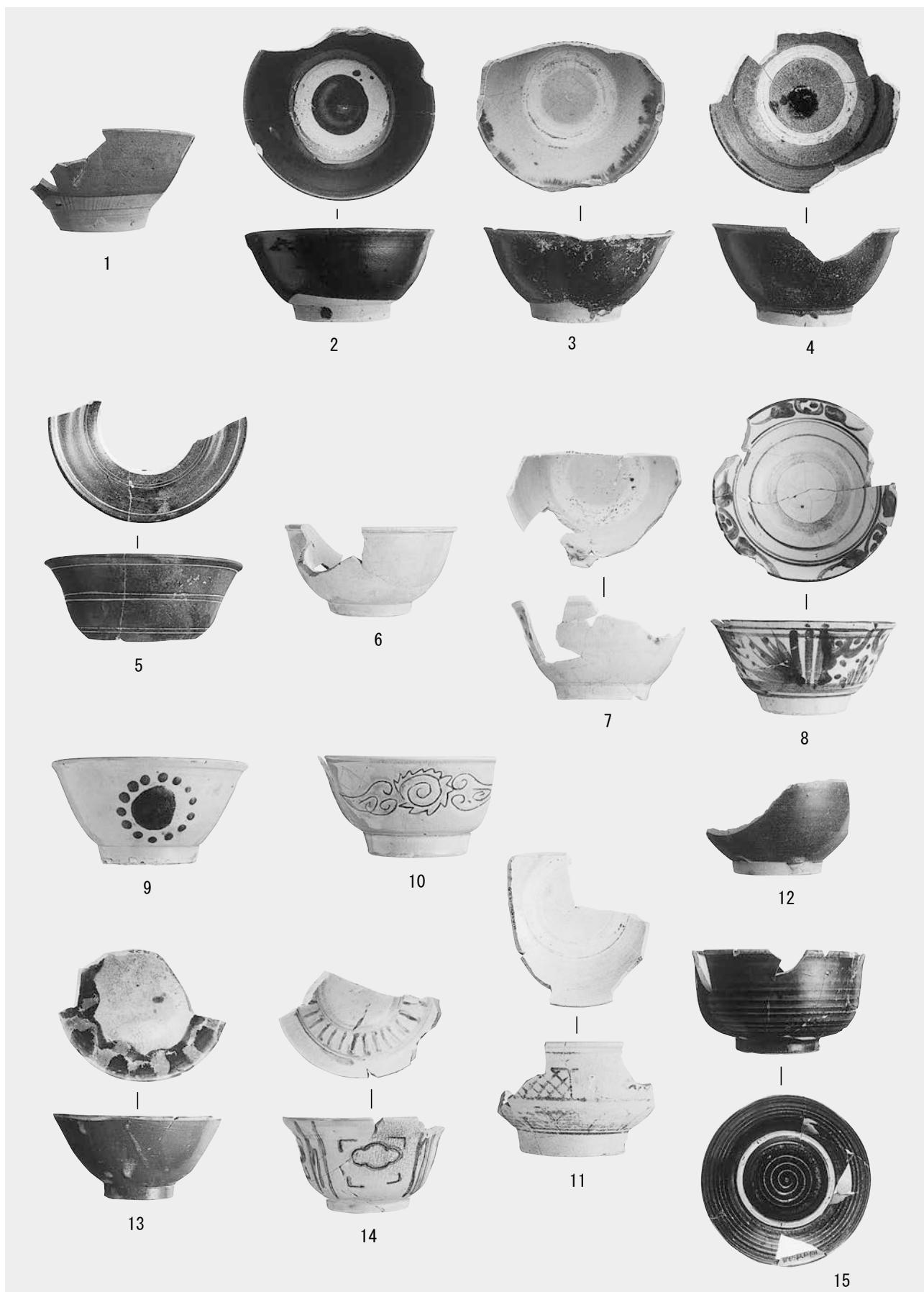
図版12本土産陶磁器2



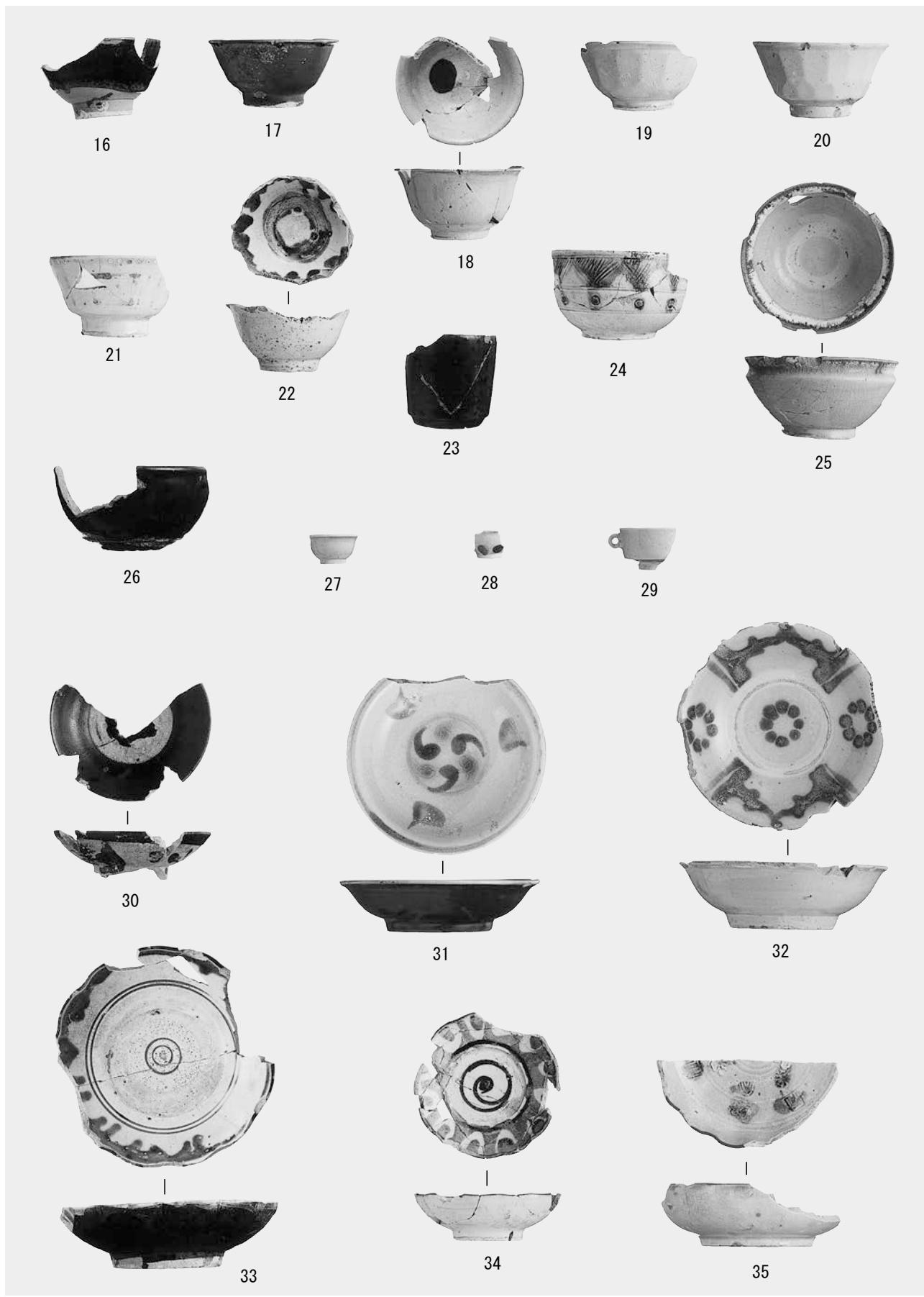
図版13本土産陶磁器3



図版14本土産陶磁器4



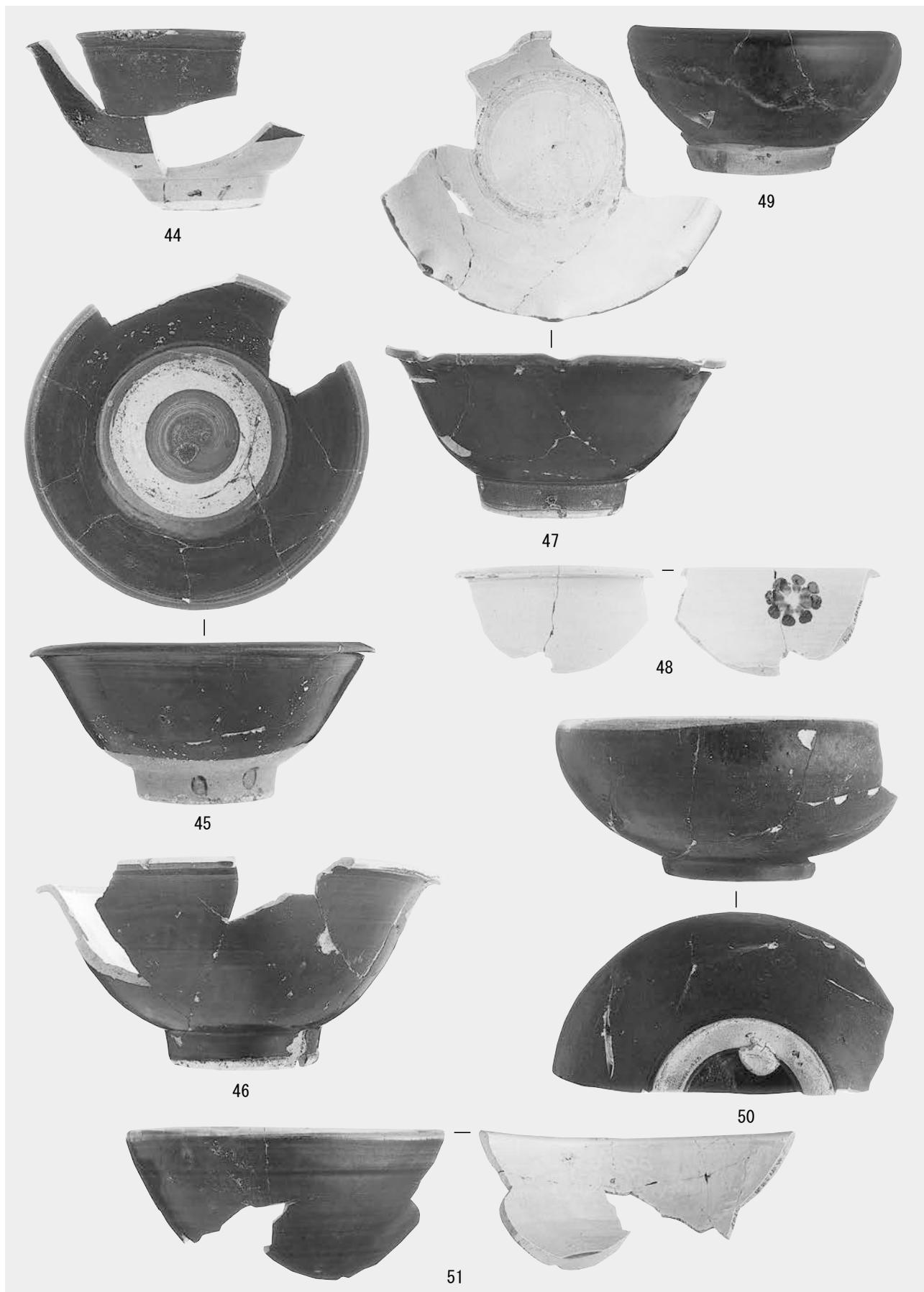
図版15沖縄産施釉陶器 1



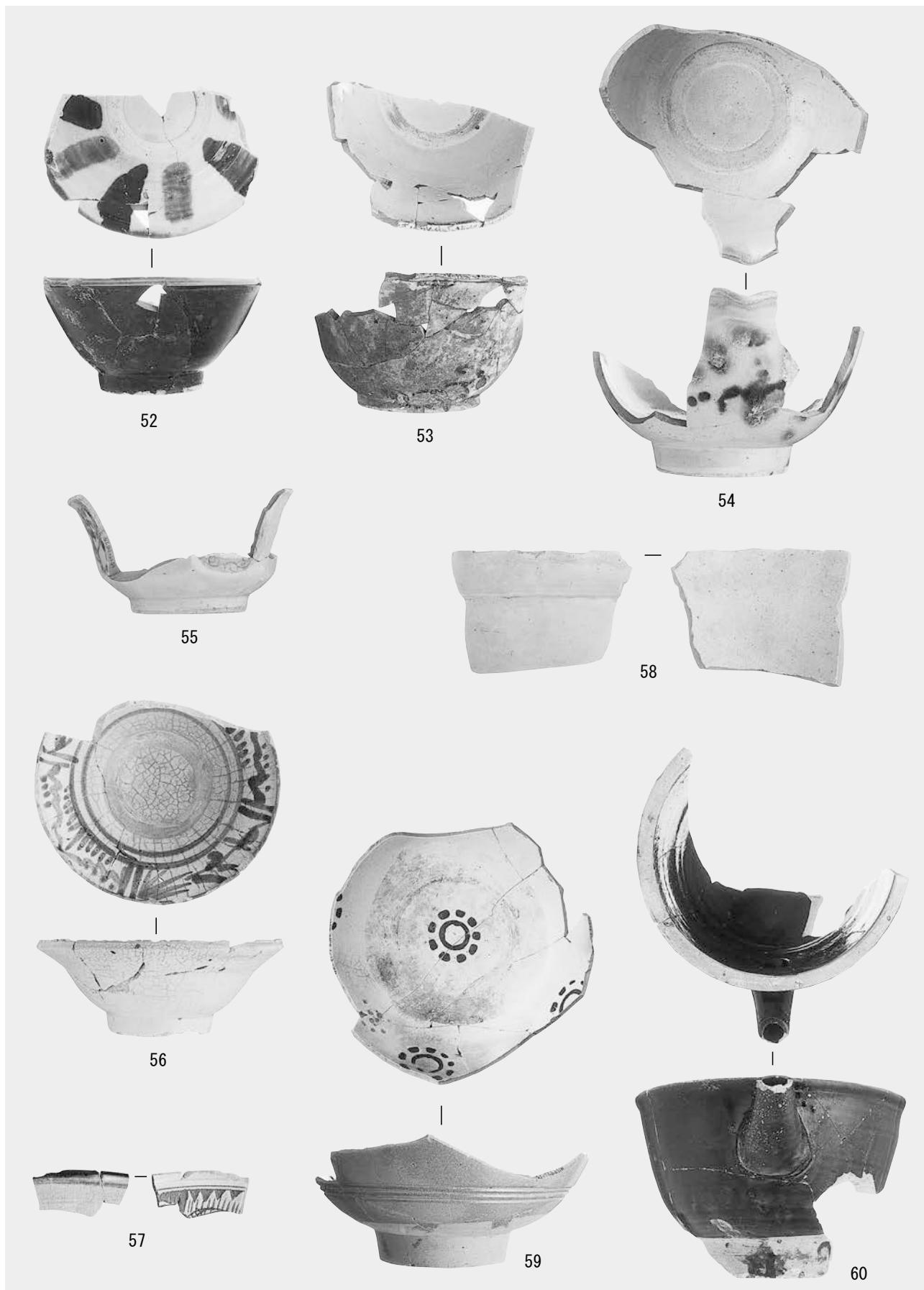
図版16 沖縄産施釉陶器 2



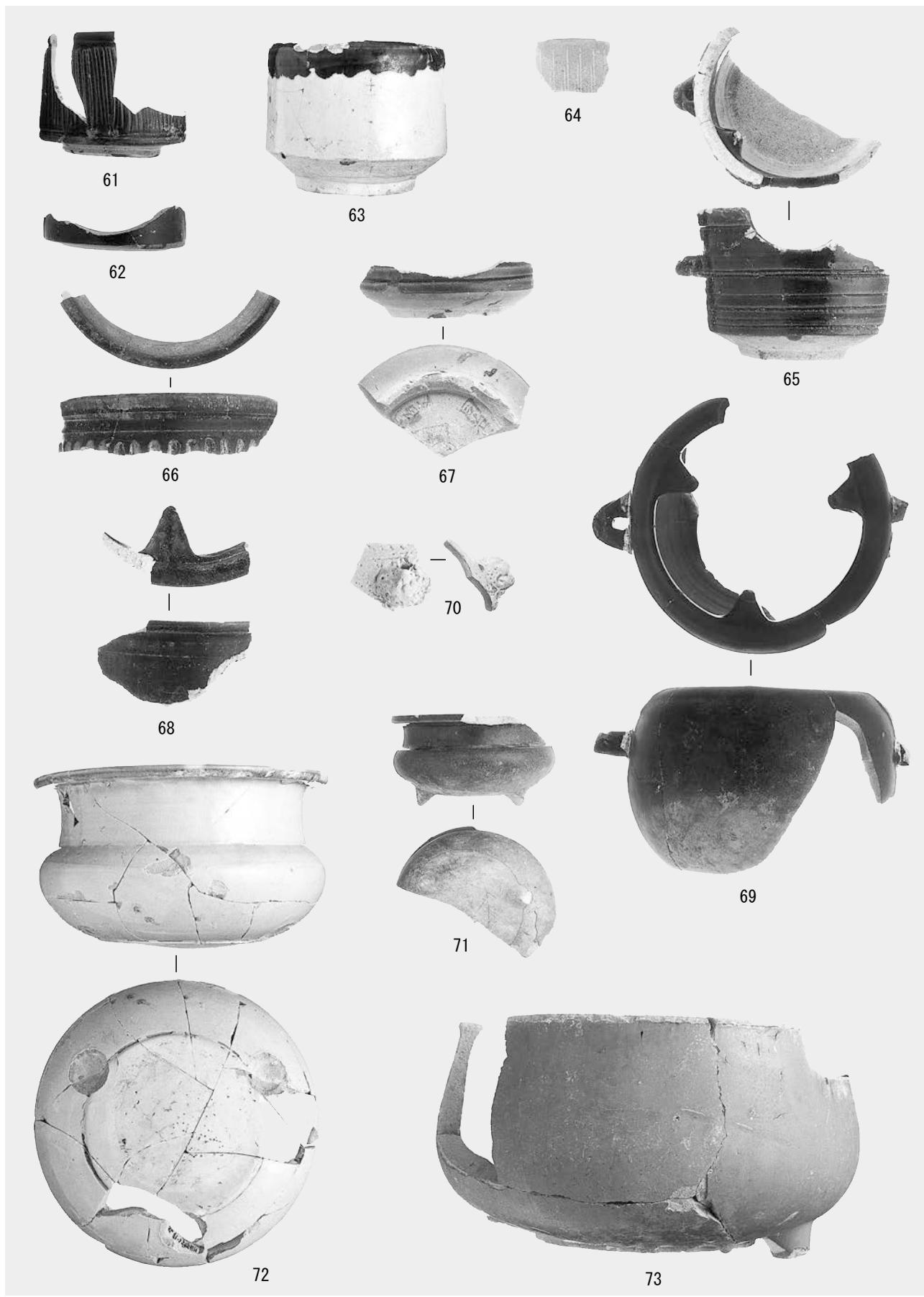
図版17 沖縄産施釉陶器 3



図版18沖縄産施釉陶器 4



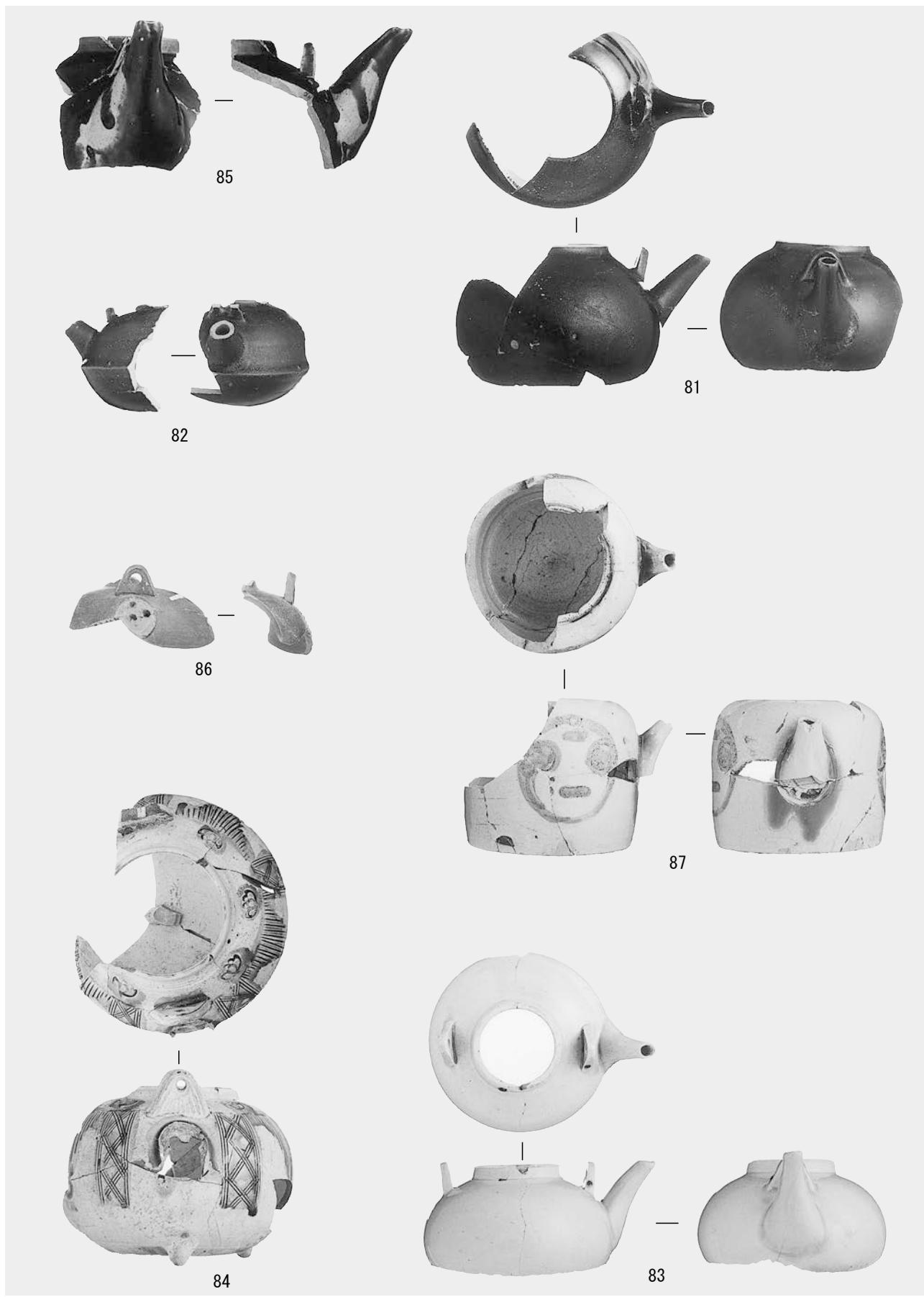
図版19沖縄産施釉陶器 5



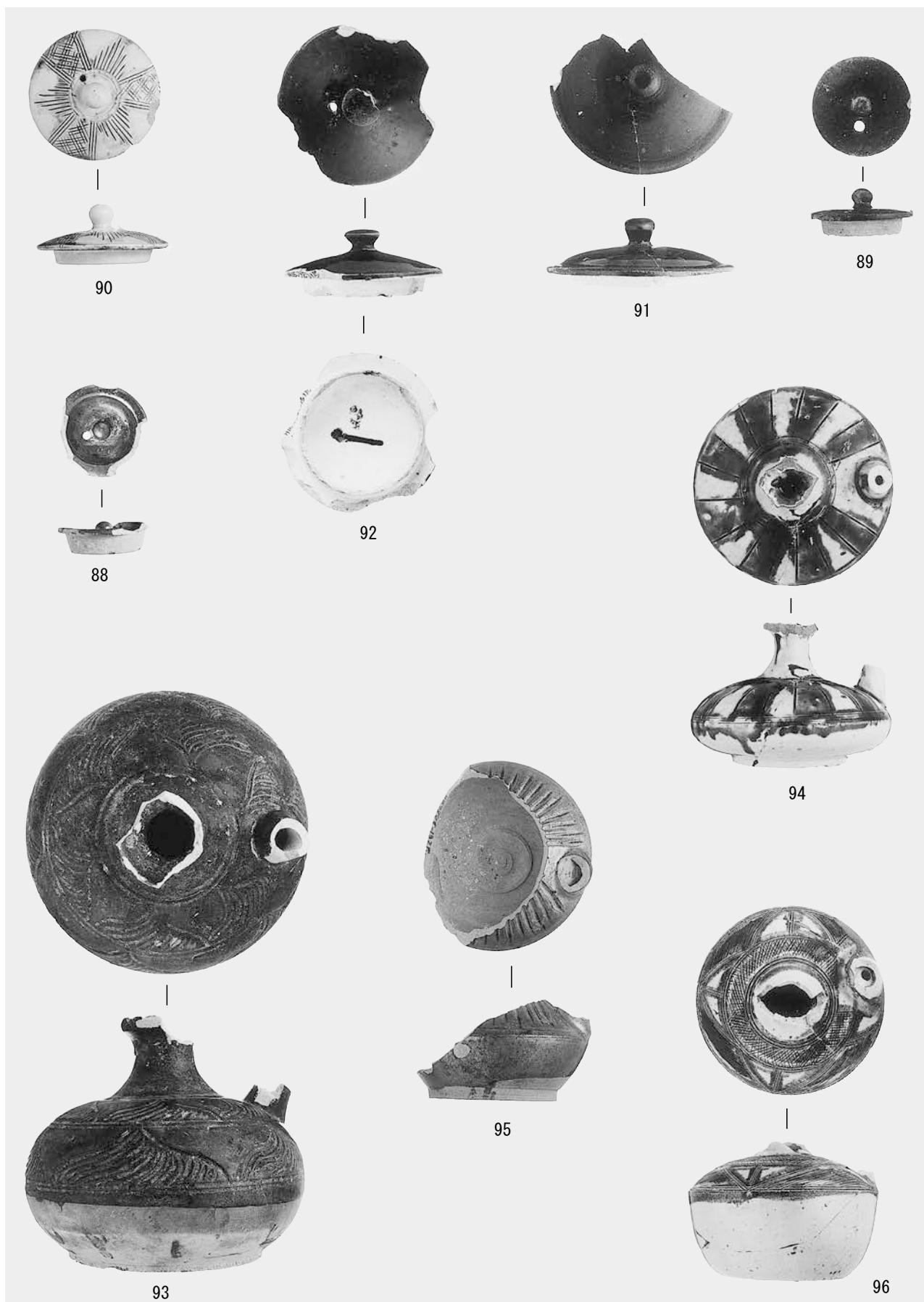
図版20沖縄産施釉陶器 6



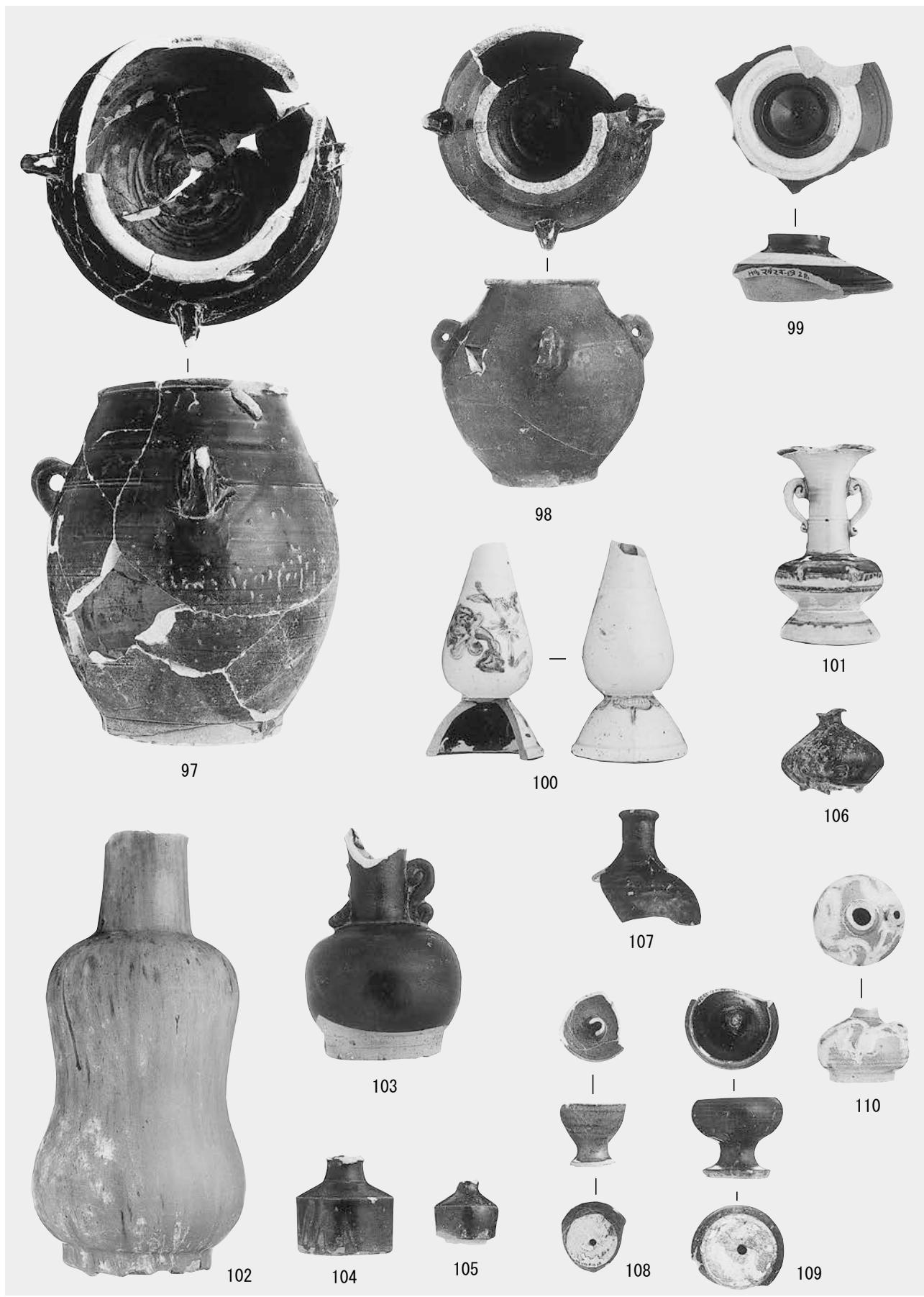
図版21沖縄産施釉陶器 7



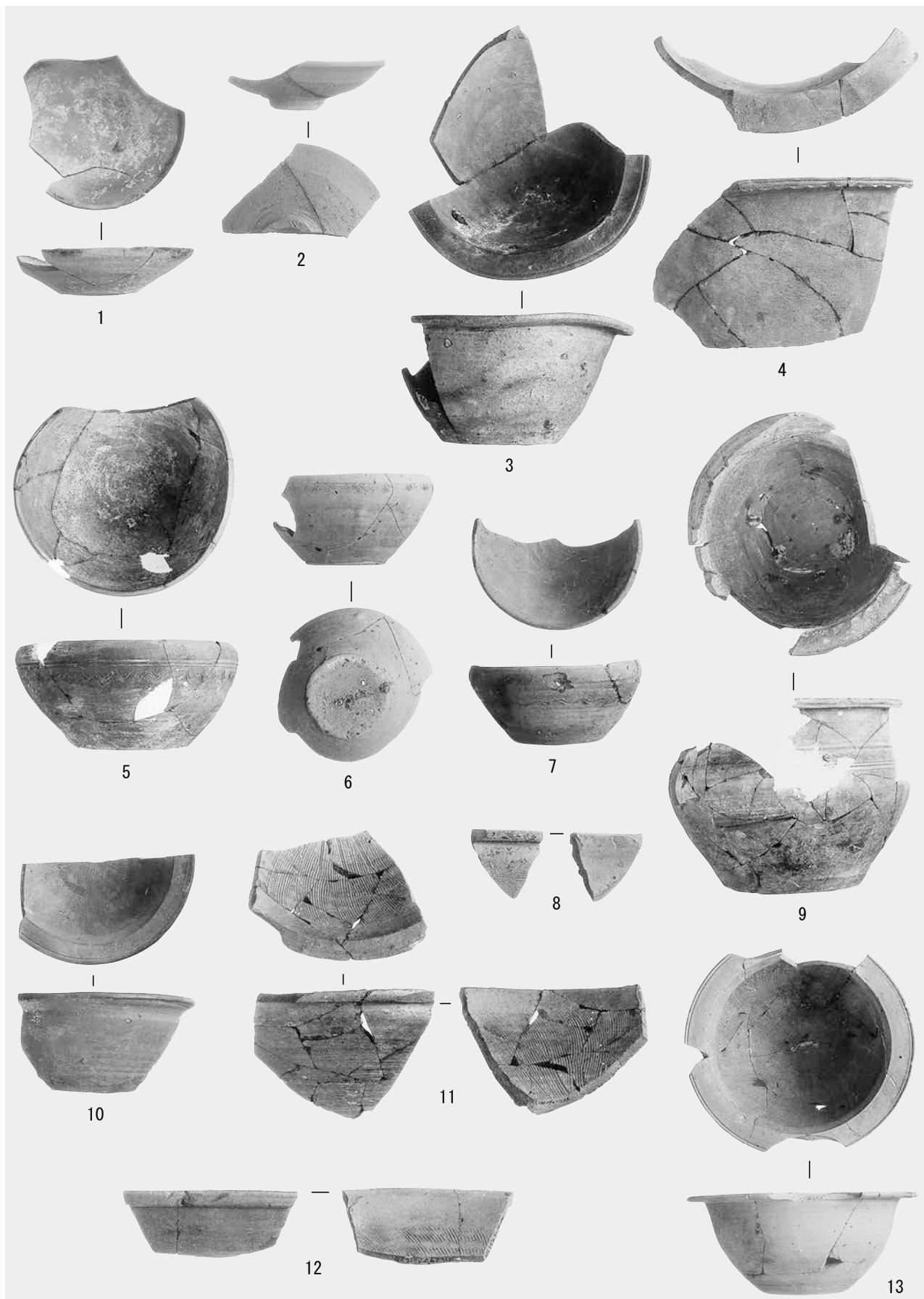
図版22沖縄産施釉陶器 8



図版23沖縄産施釉陶器 9



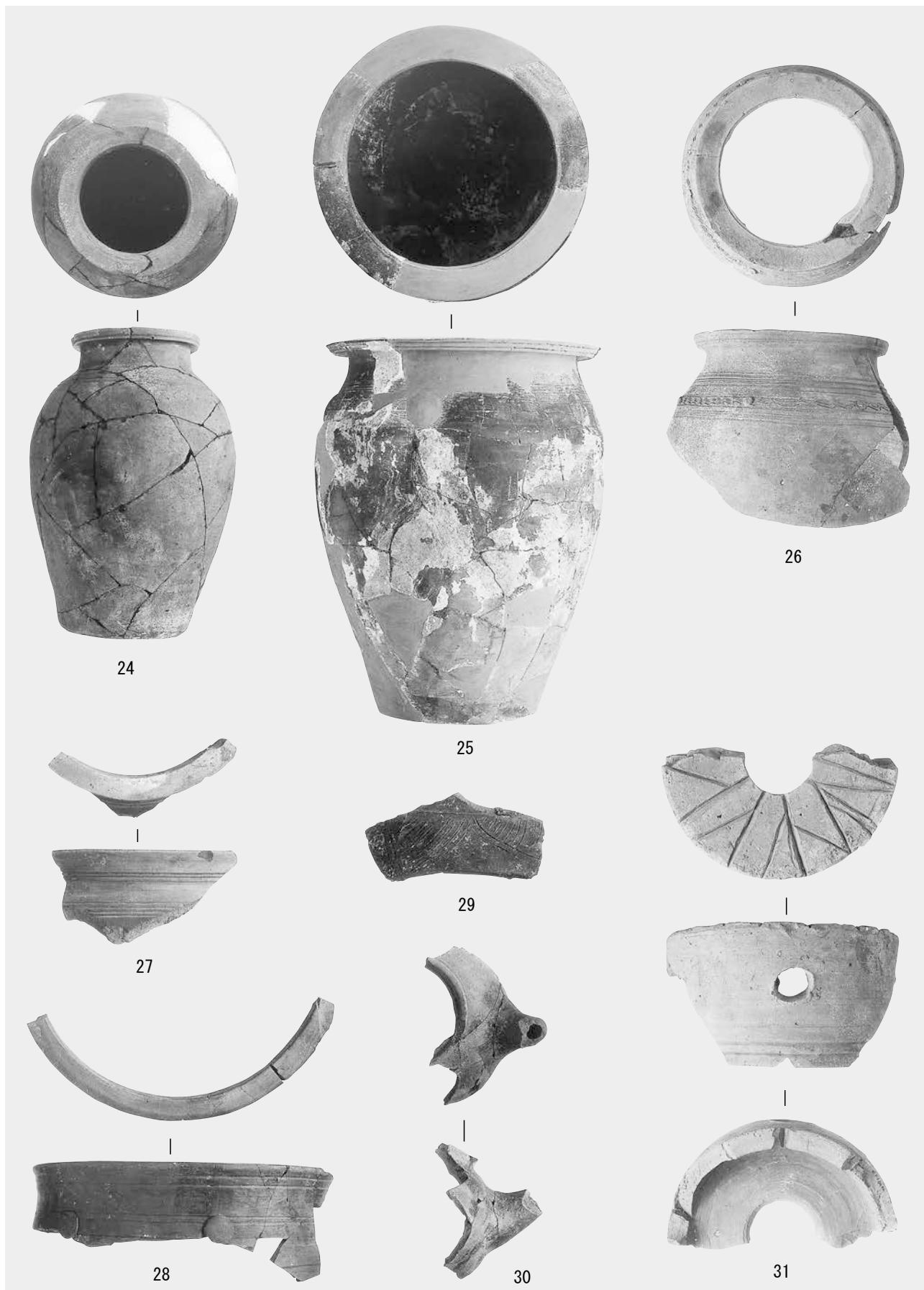
図版24沖縄産施釉陶器10



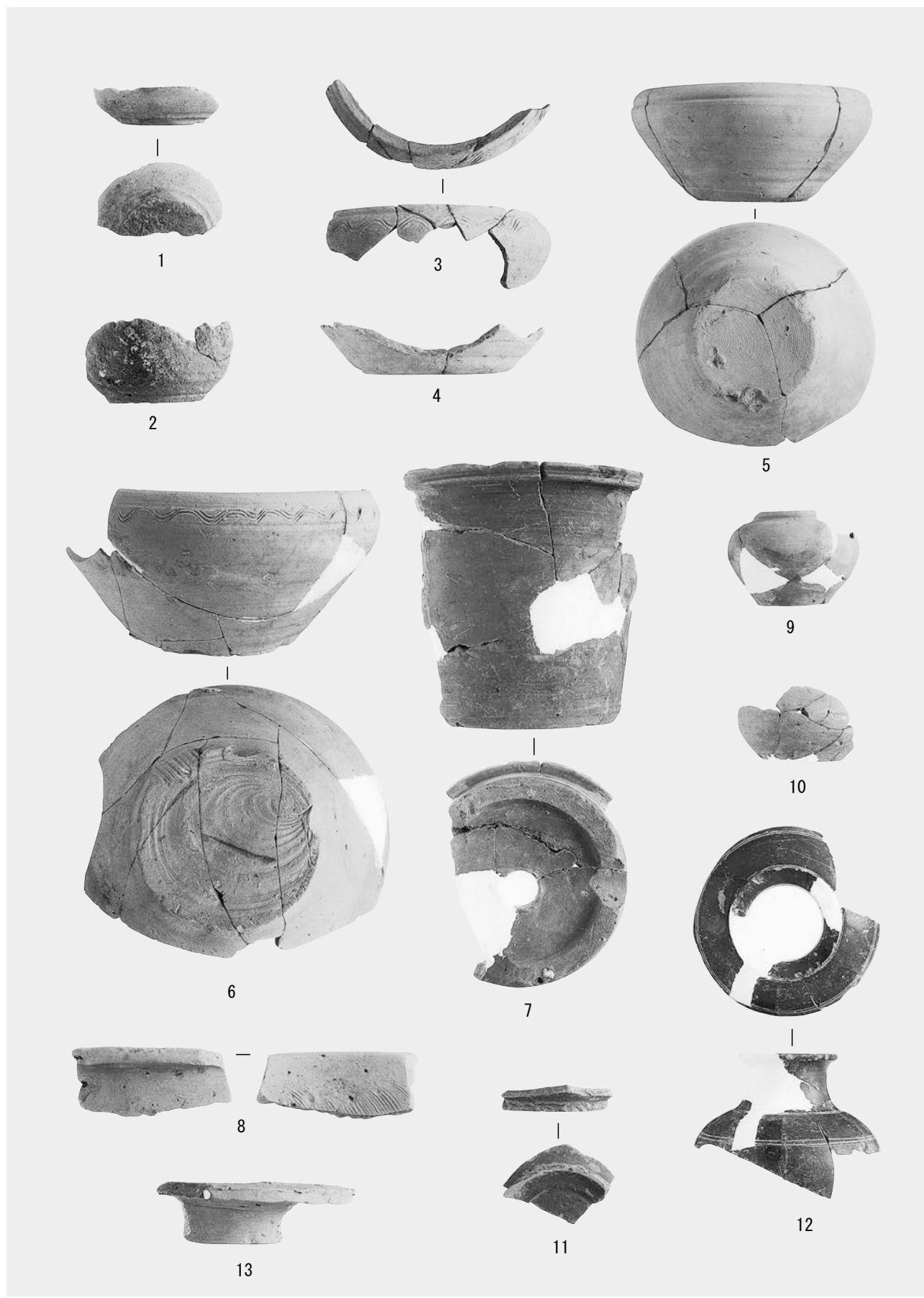
図版25沖縄産無釉陶器 1



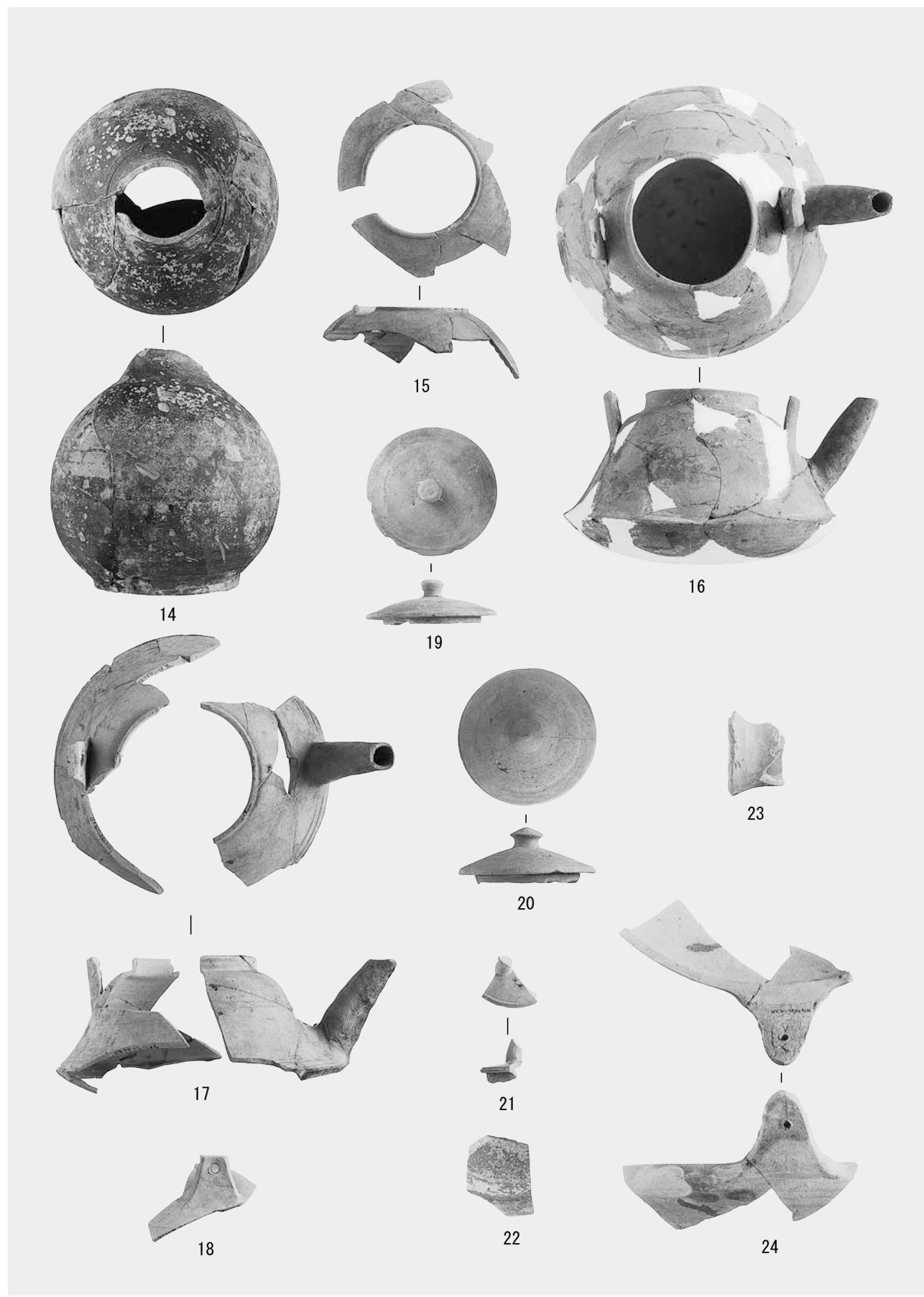
図版26沖縄産無釉陶器 2



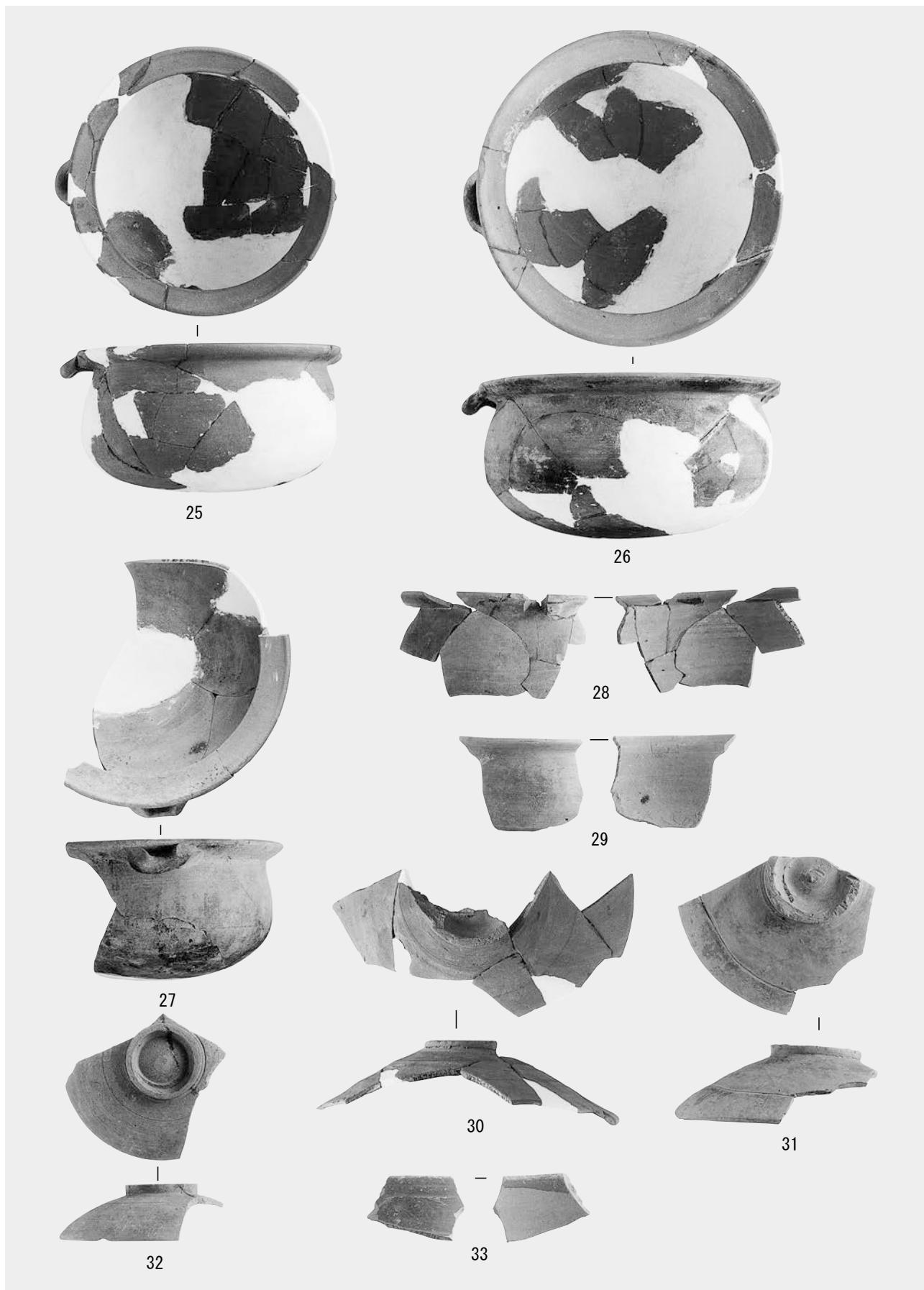
図版27沖縄産無釉陶器 3



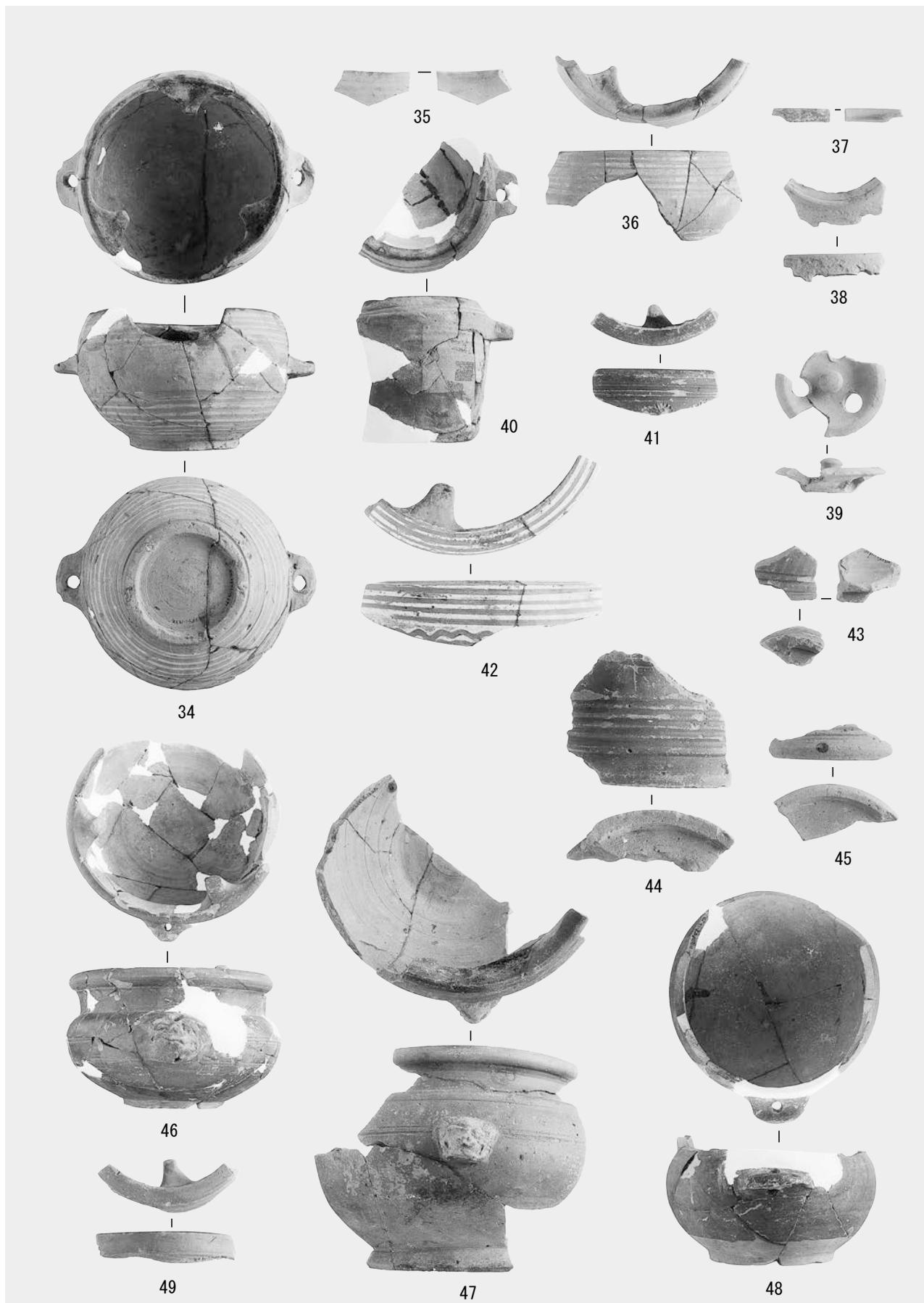
図版28陶質土器 1



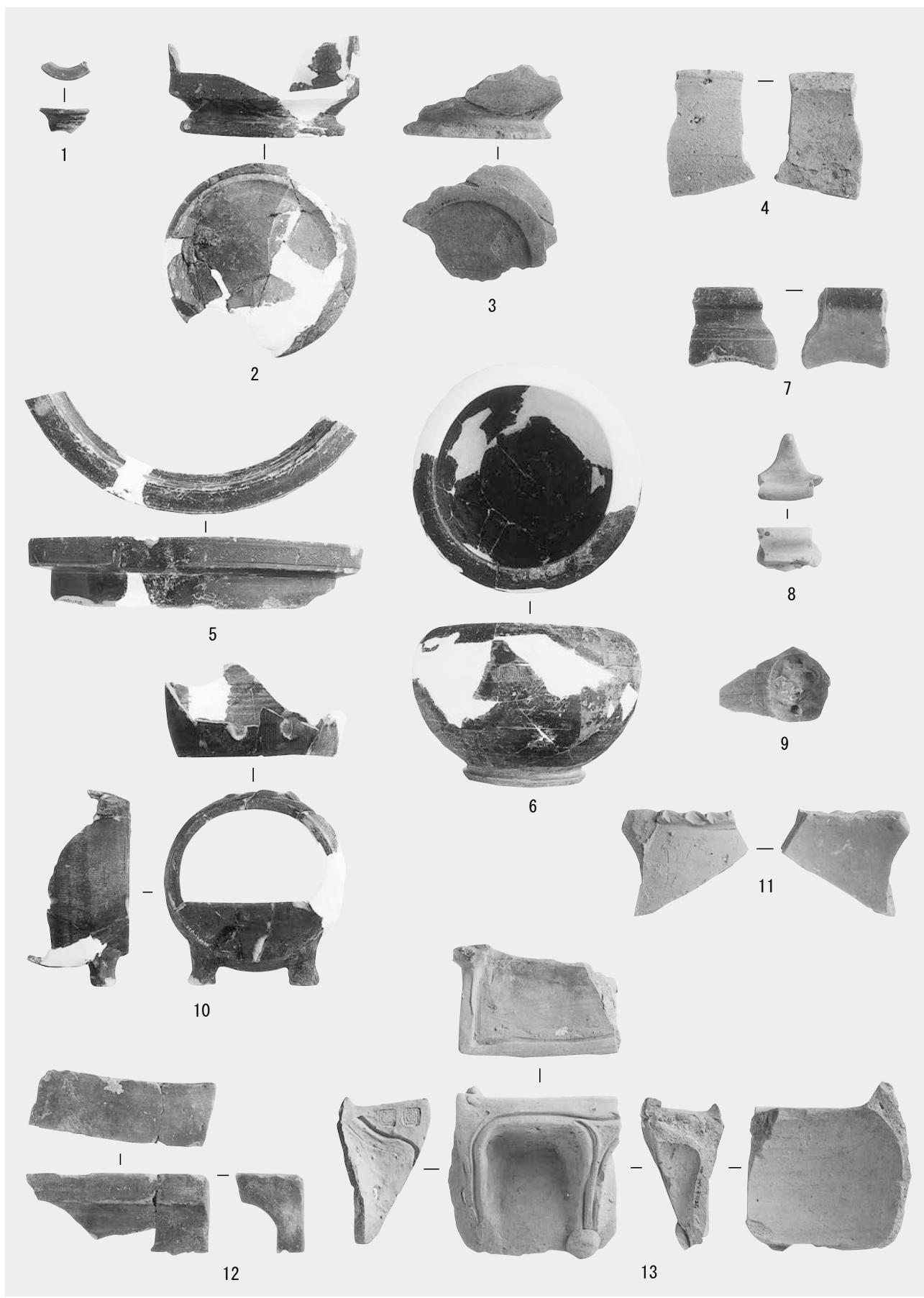
図版29陶質土器 2



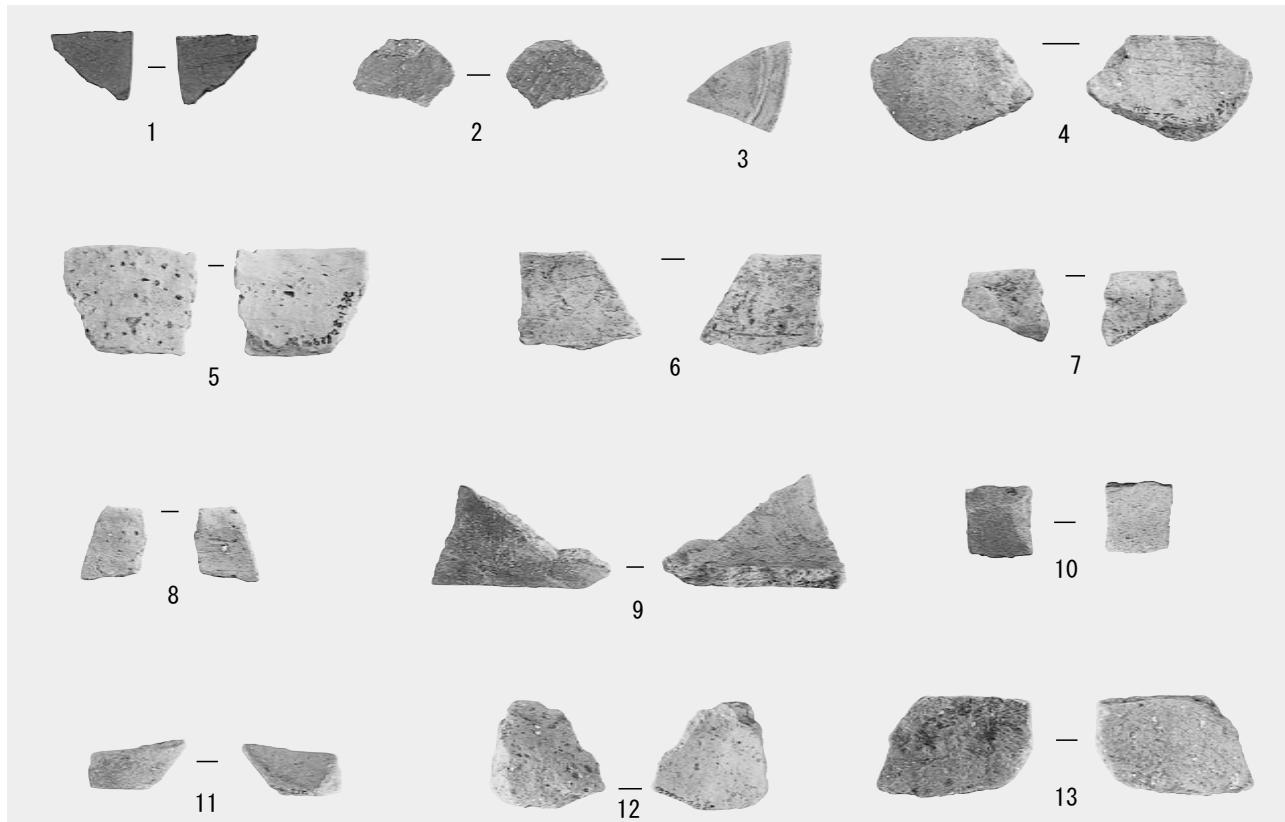
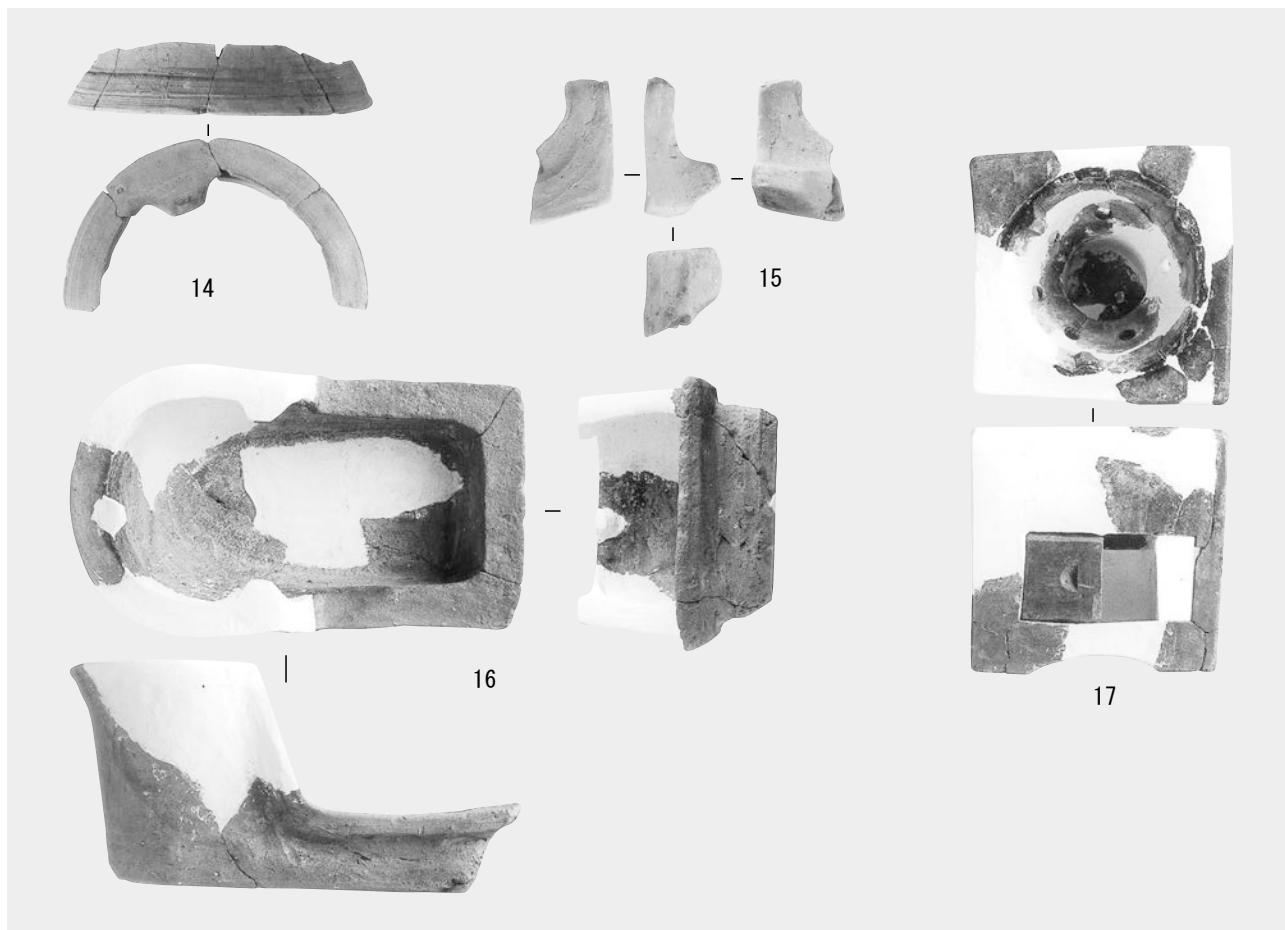
図版30陶質土器 3



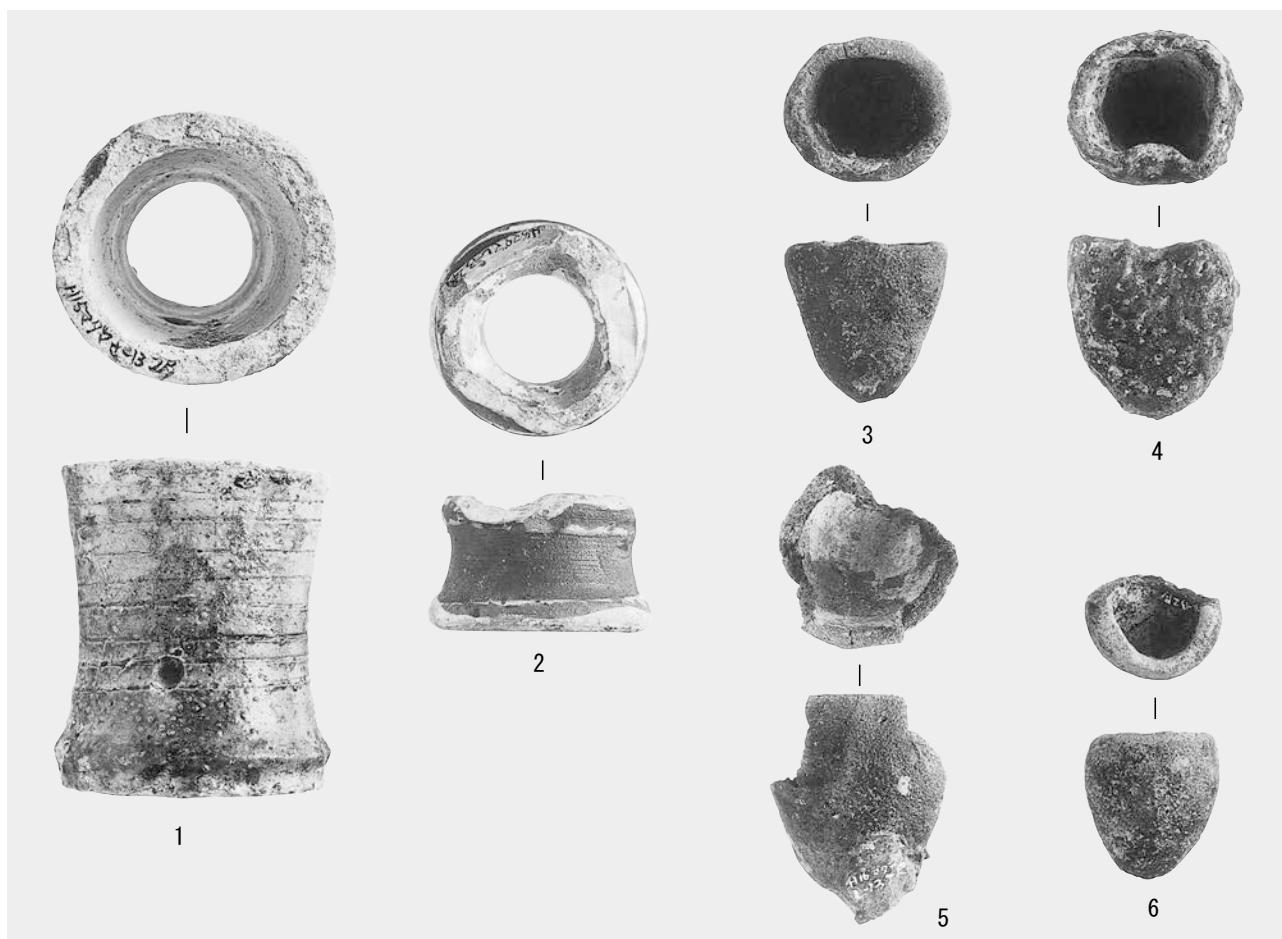
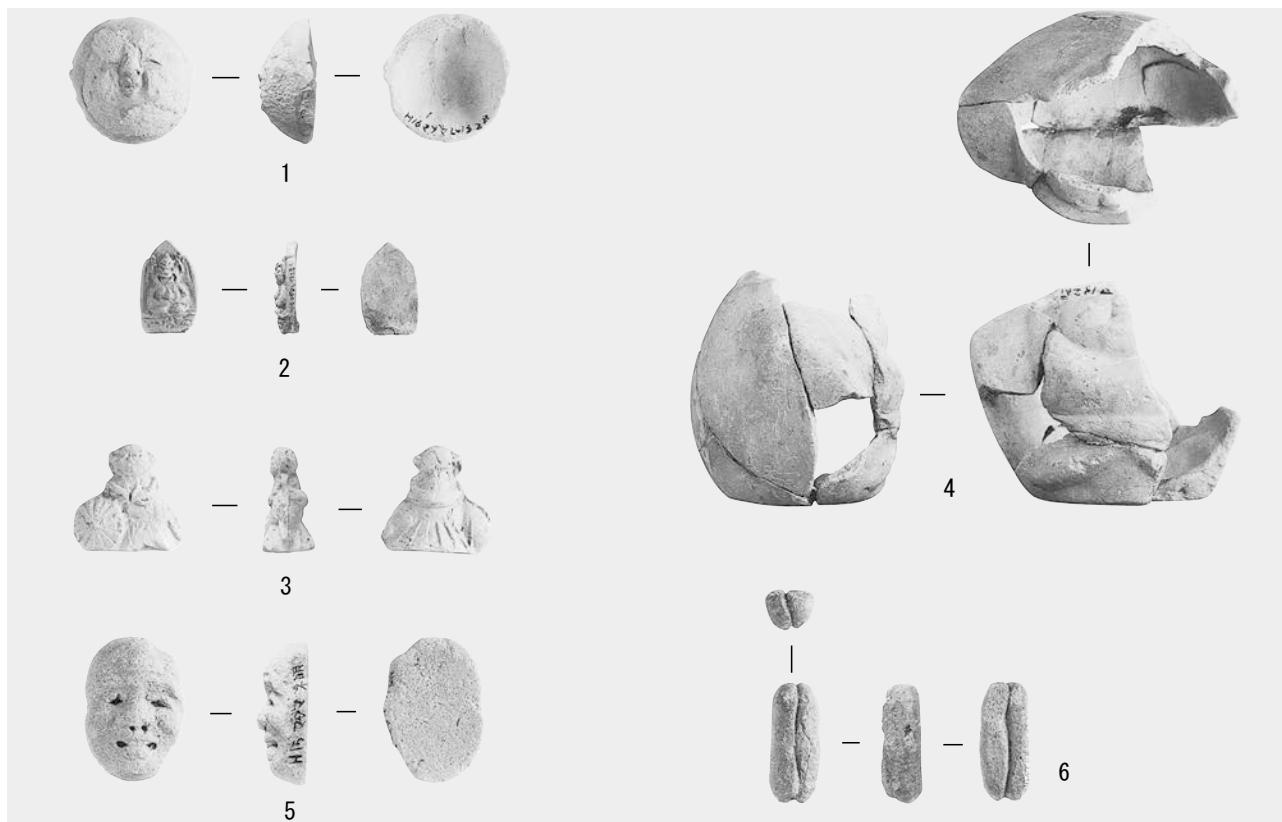
図版31陶質土器 4



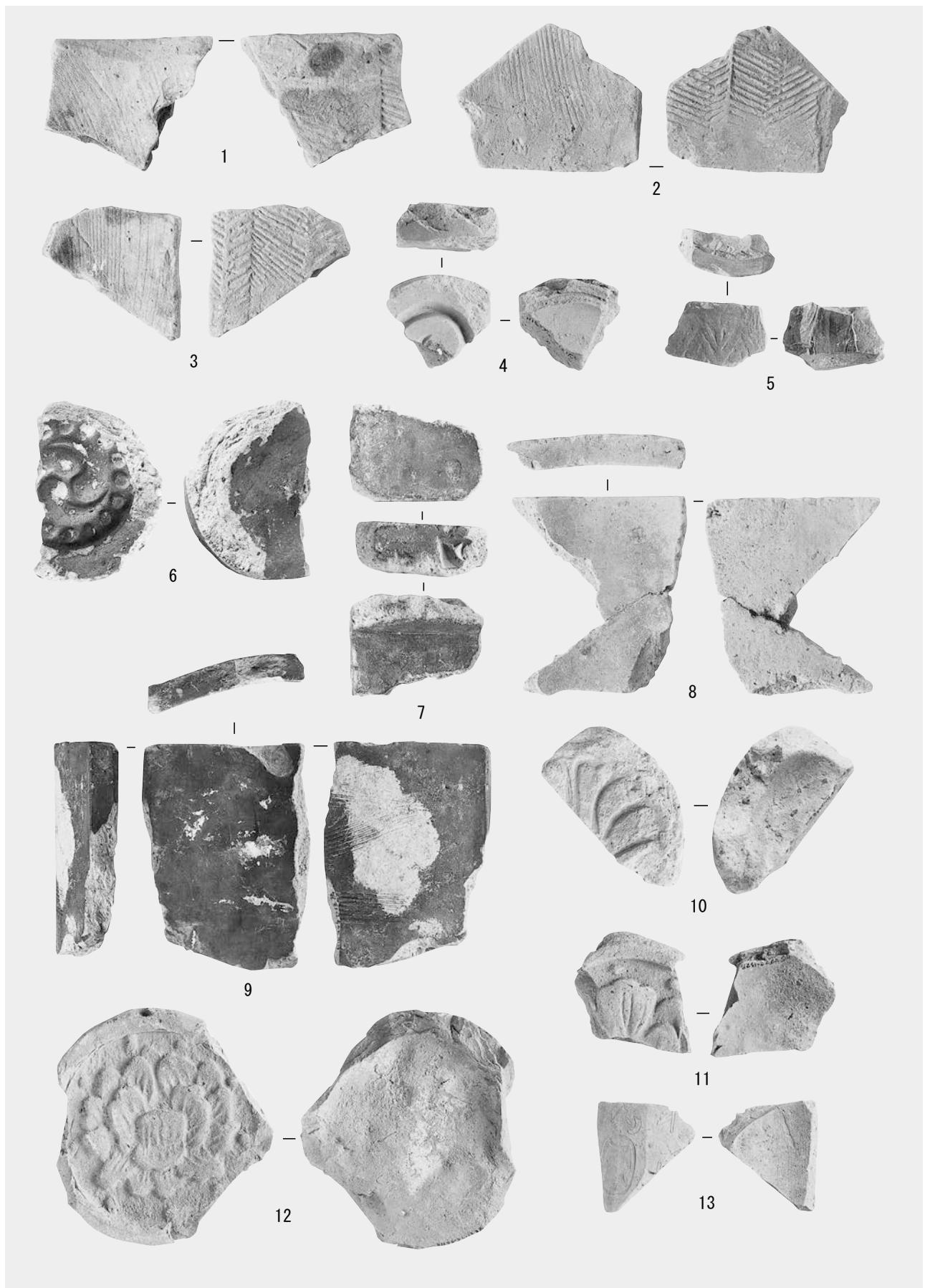
図版32瓦質土器 1



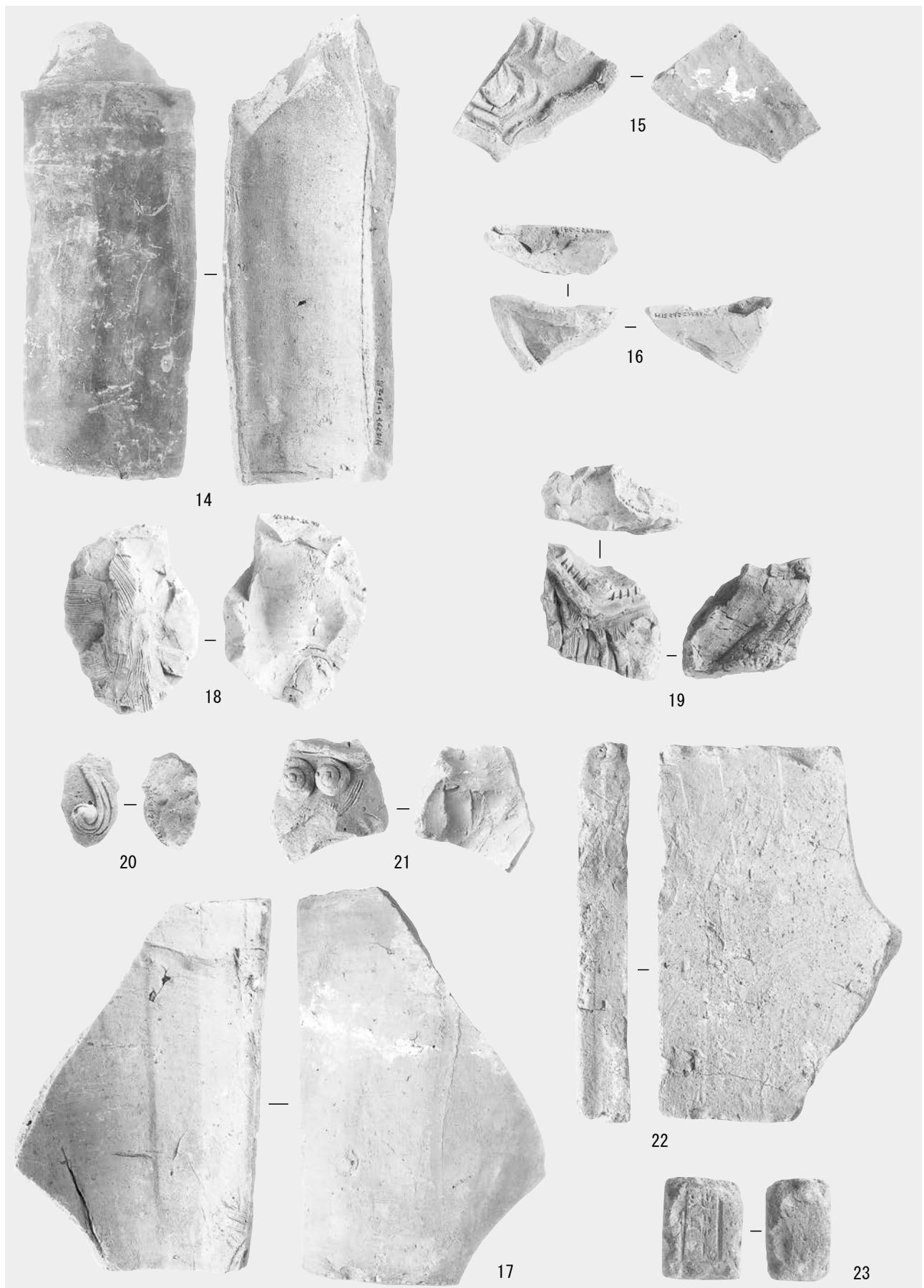
図版33上：瓦質土器2 下：カムイヤキ（1～3）土器（4～13）



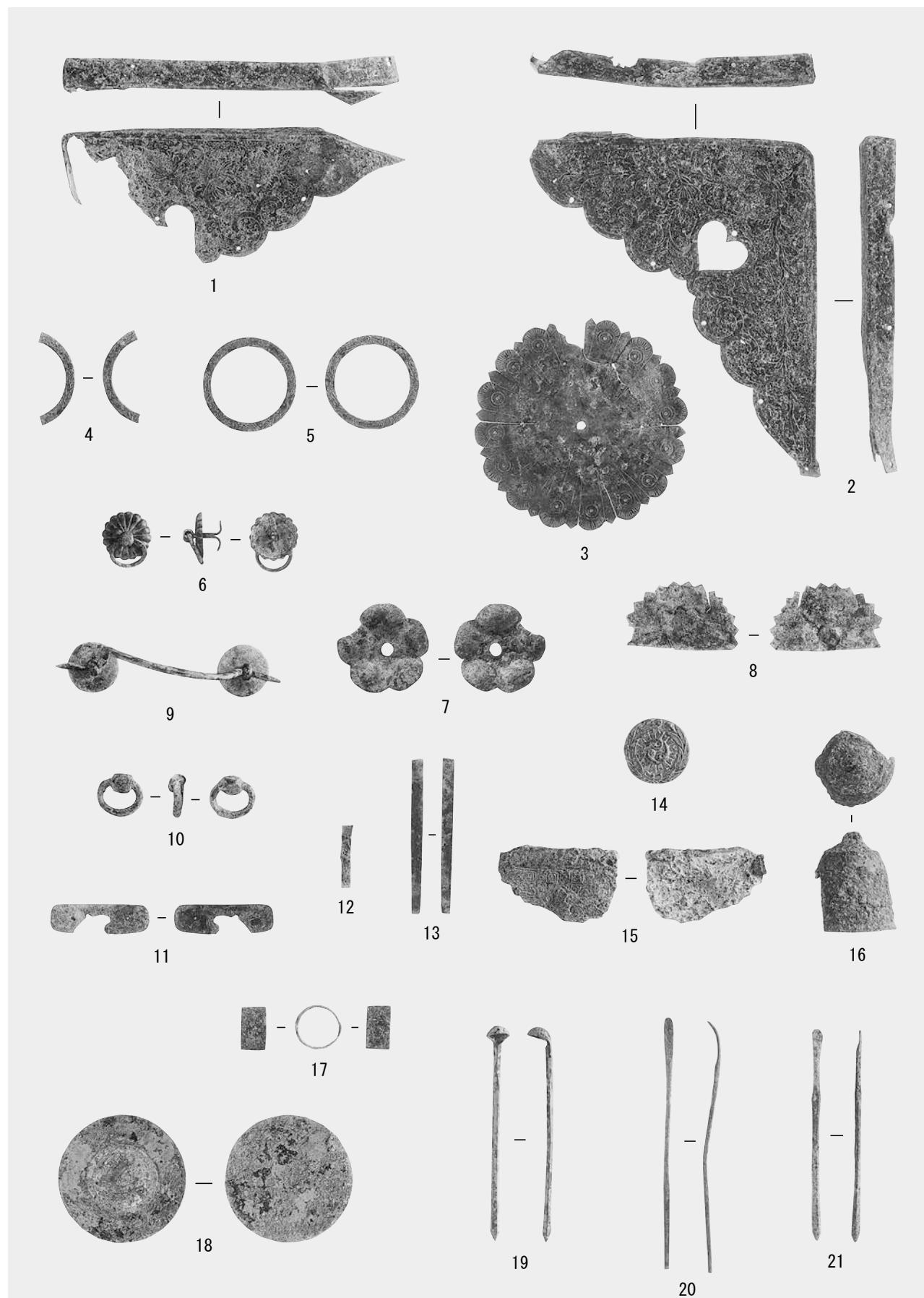
図版34上：土製品 下：窯道具・坩堝



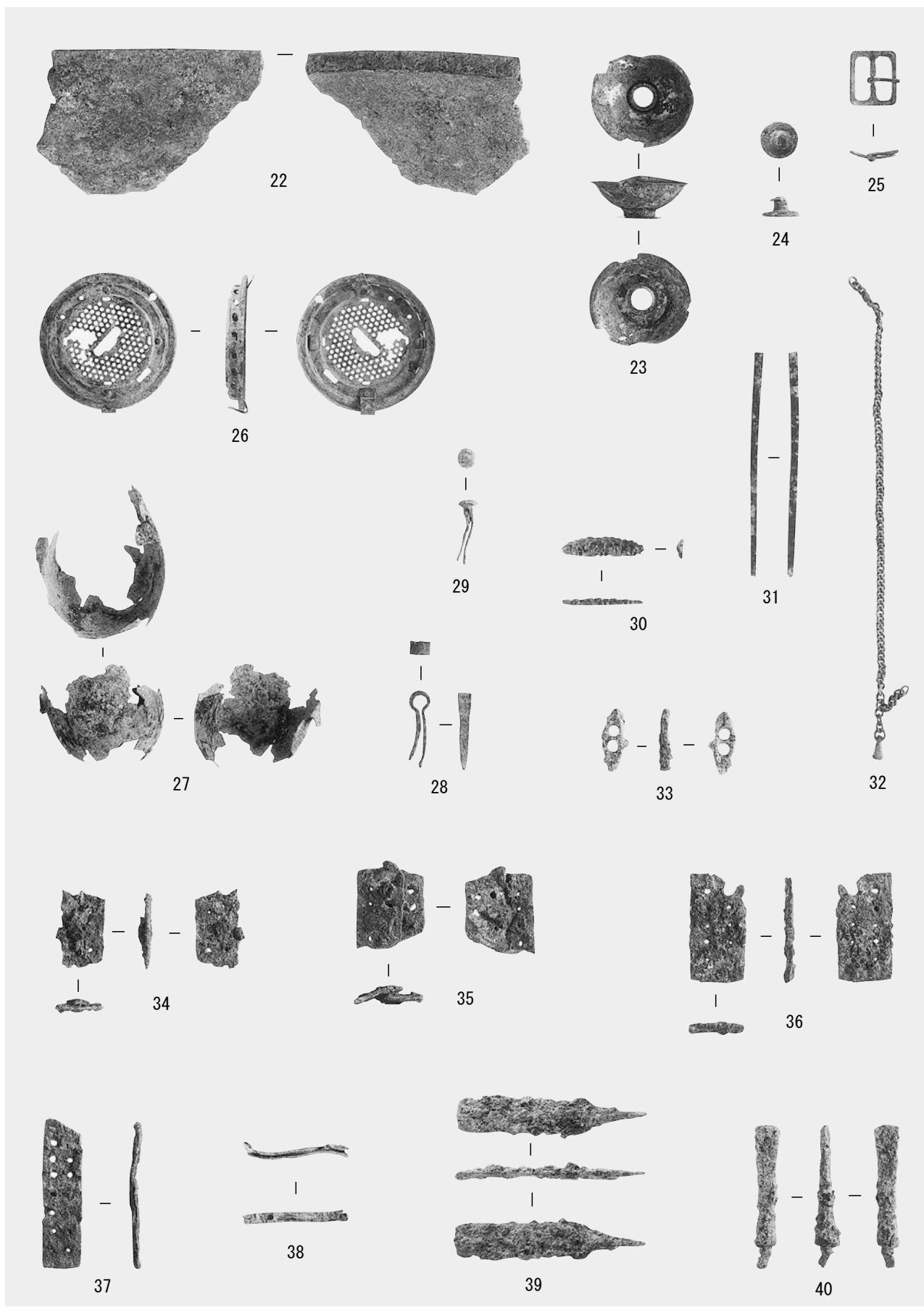
図版35瓦 1



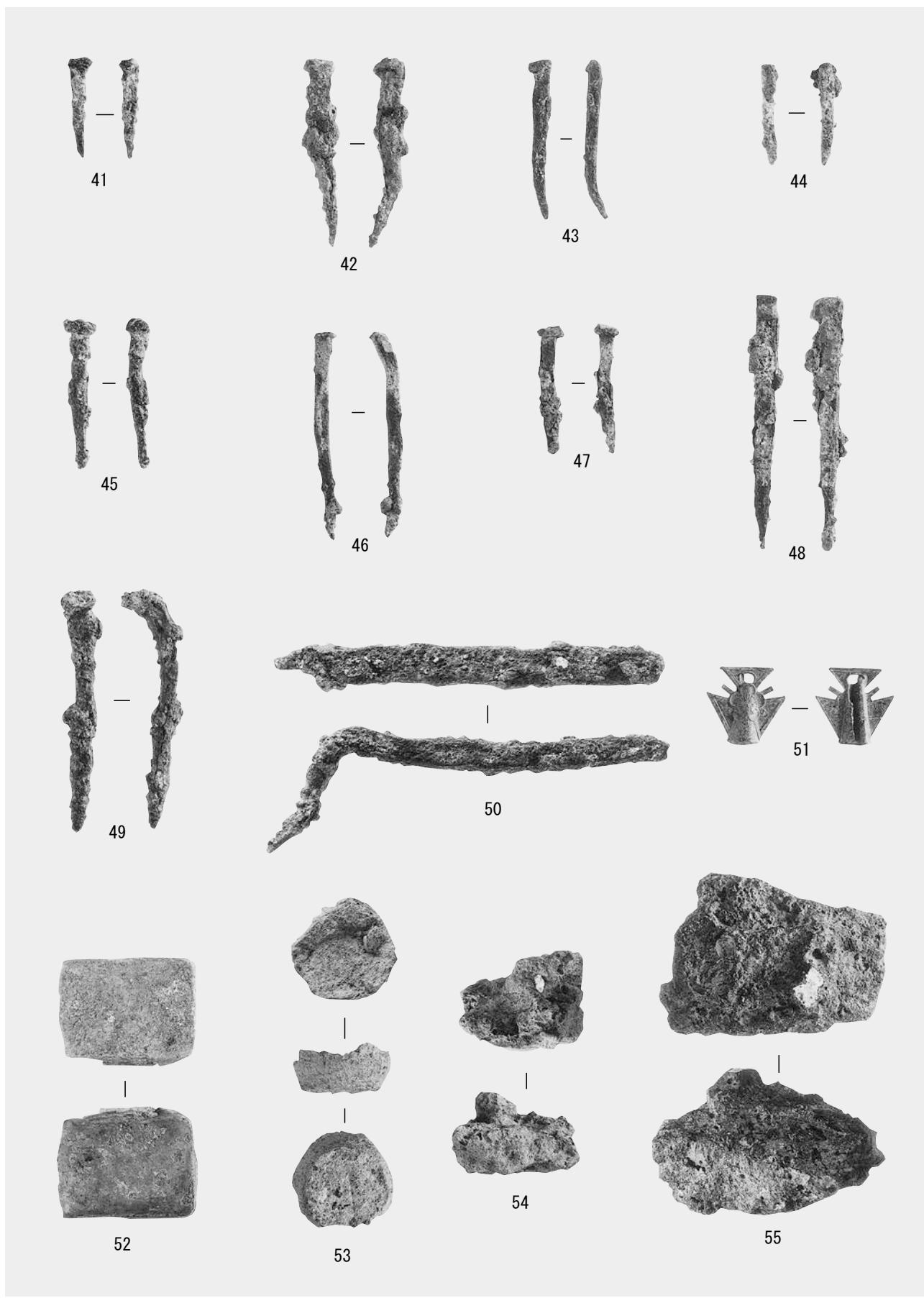
図版36瓦2



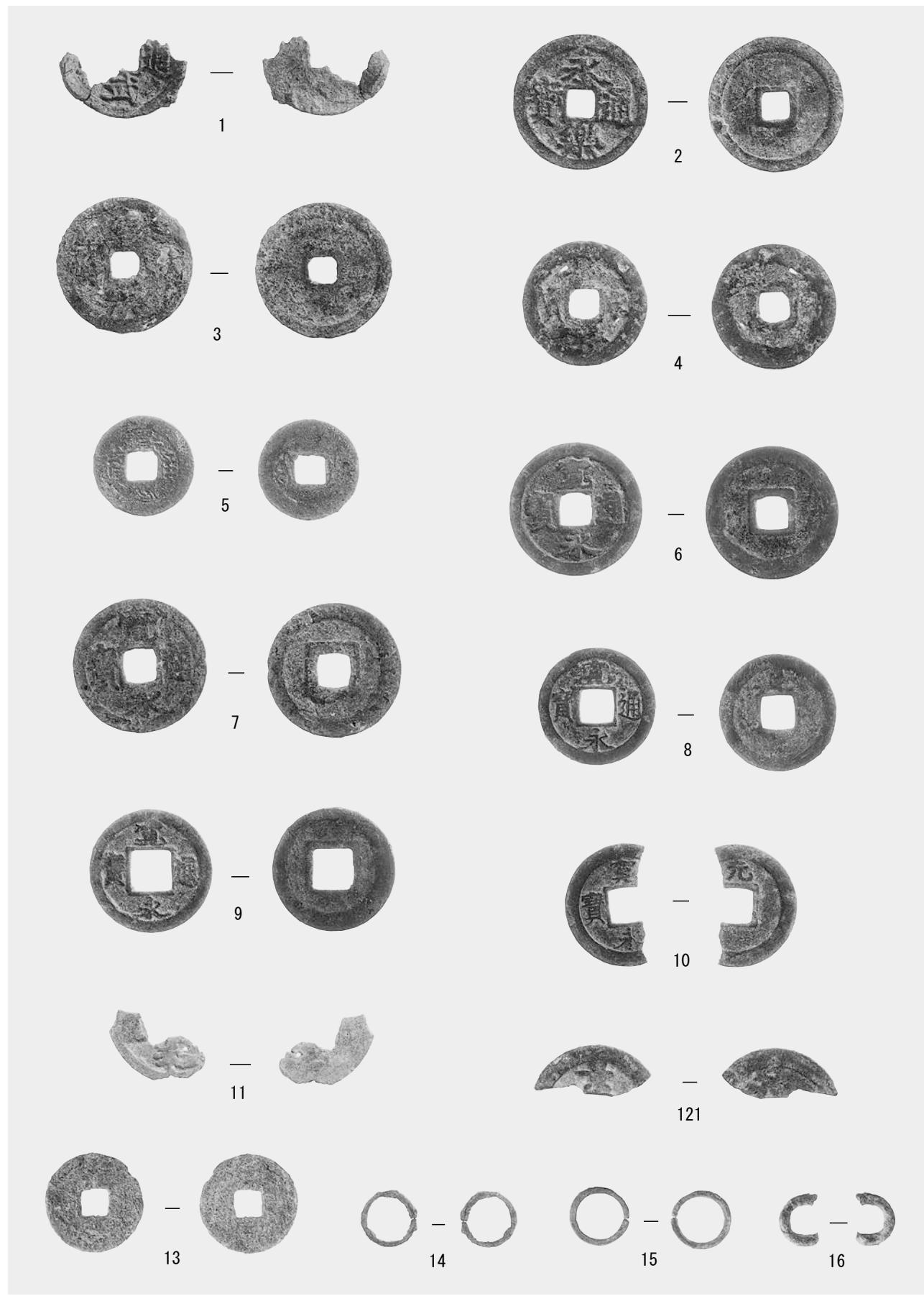
図版37金属製品1



図版38金属製品2



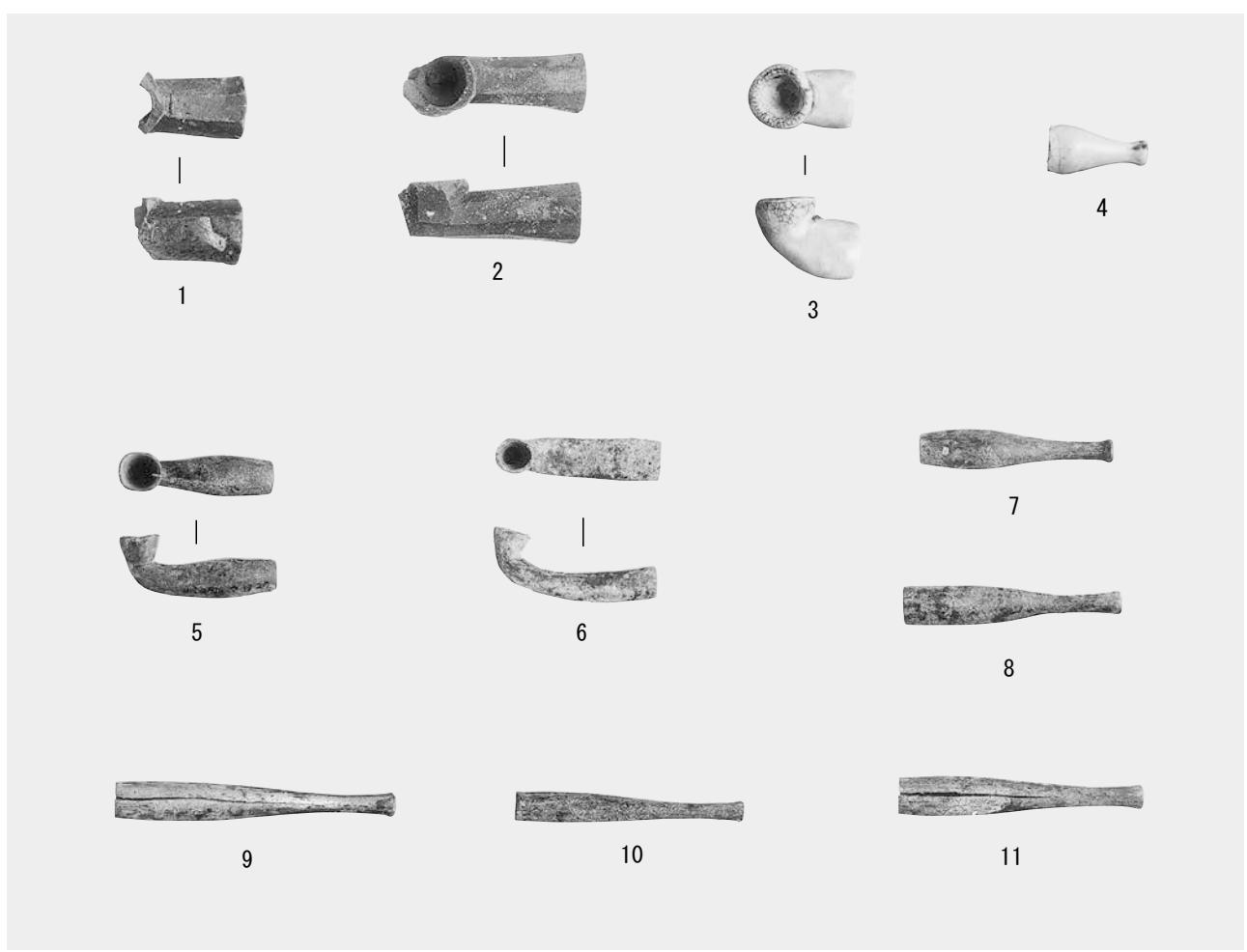
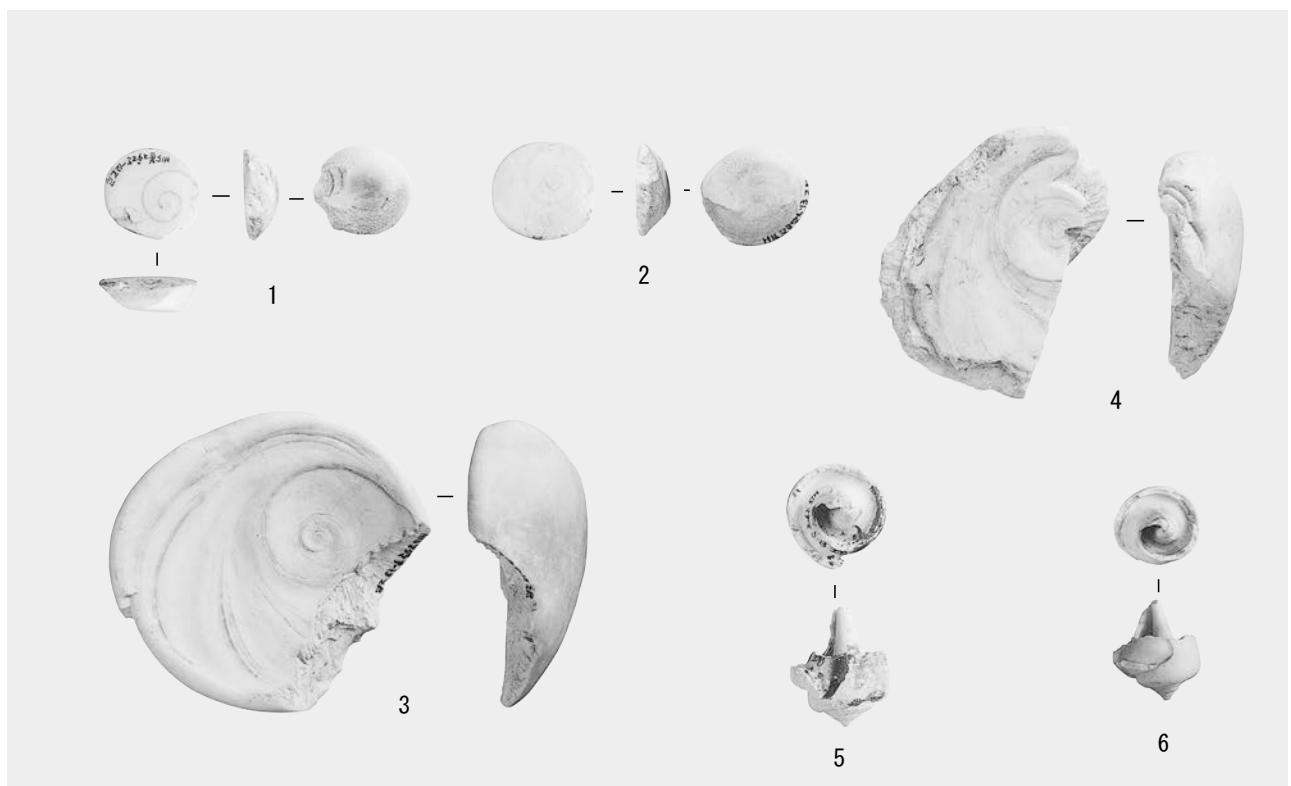
図版39金属製品3



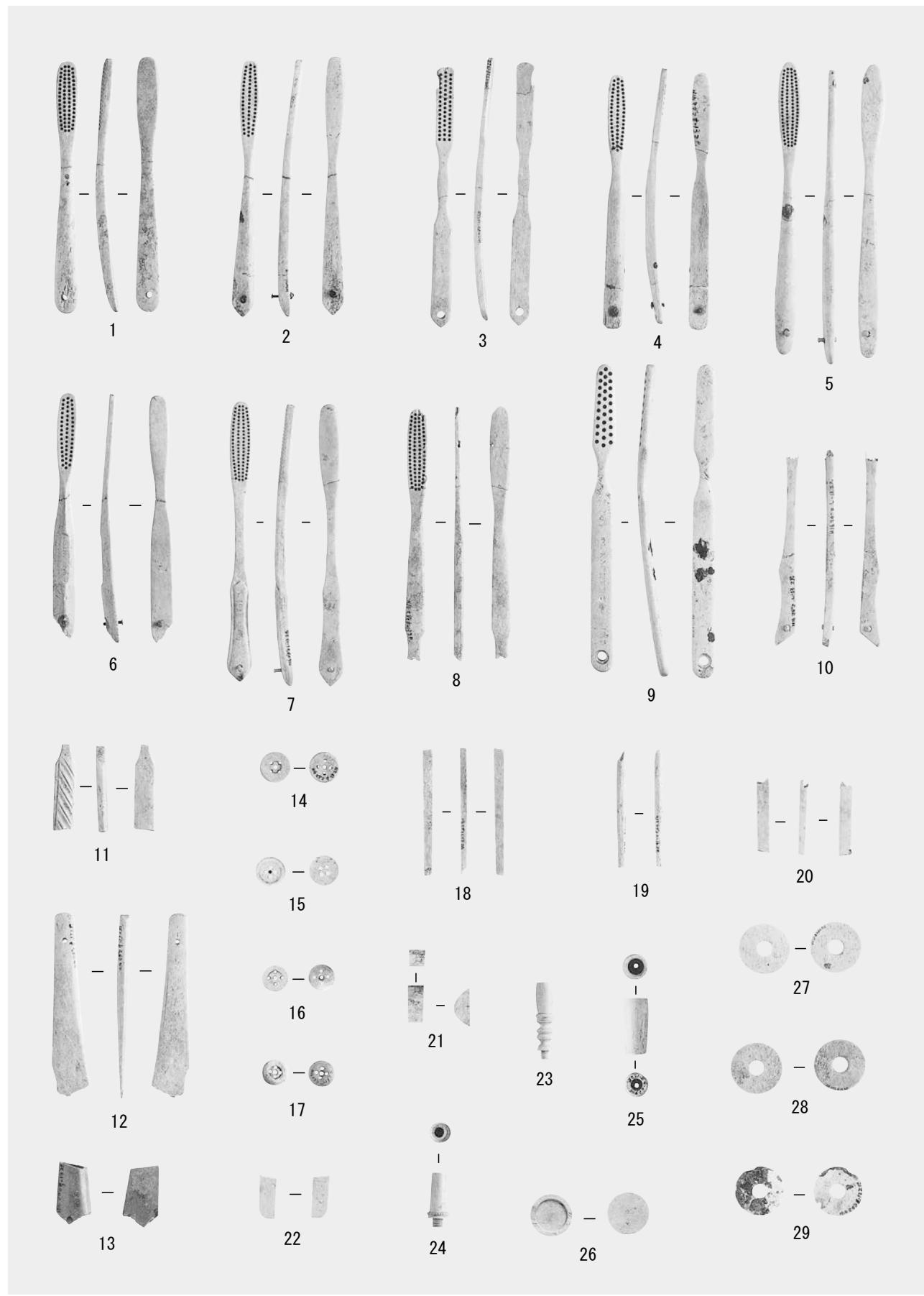
図版40銭貨



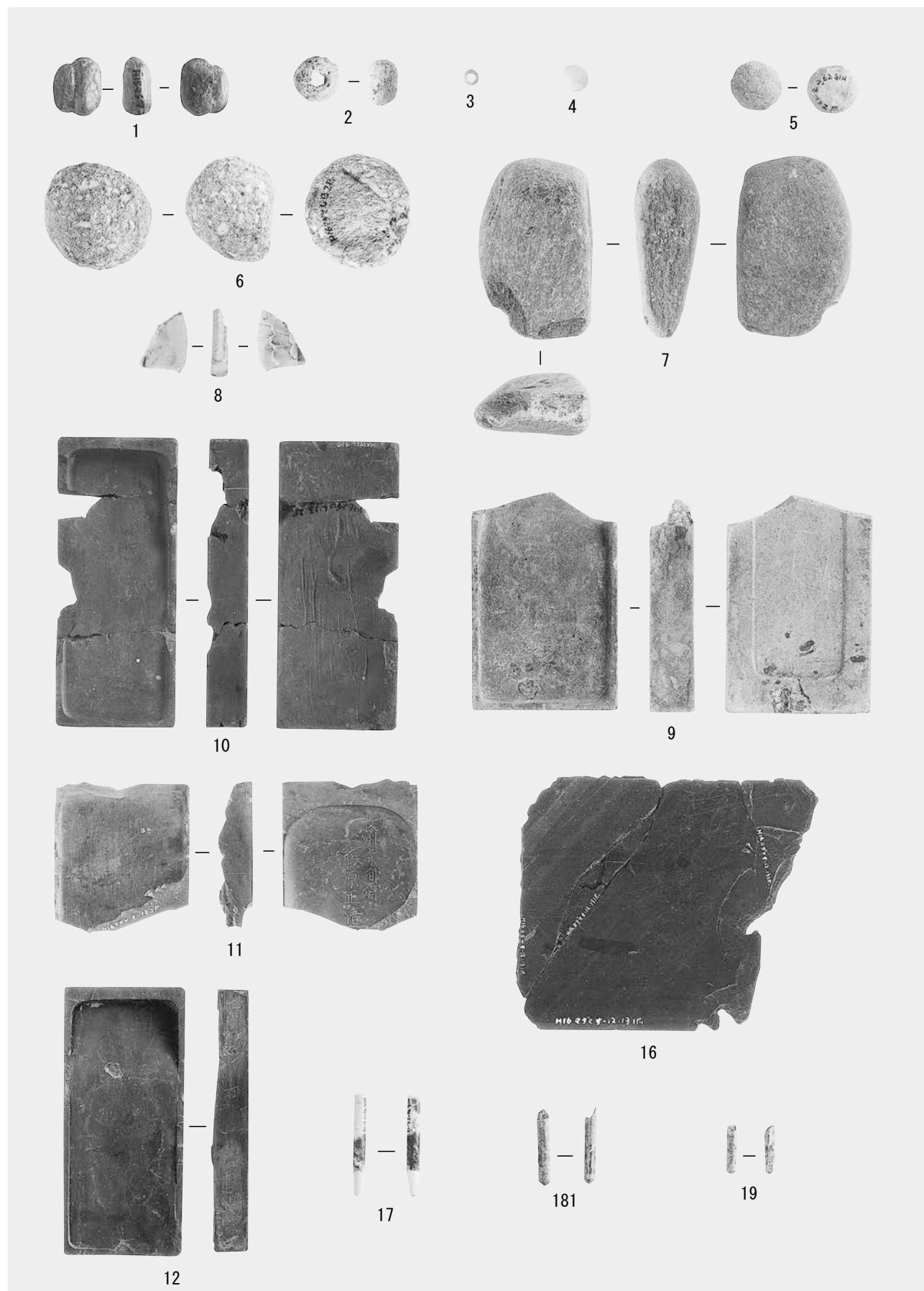
図版41貝製品



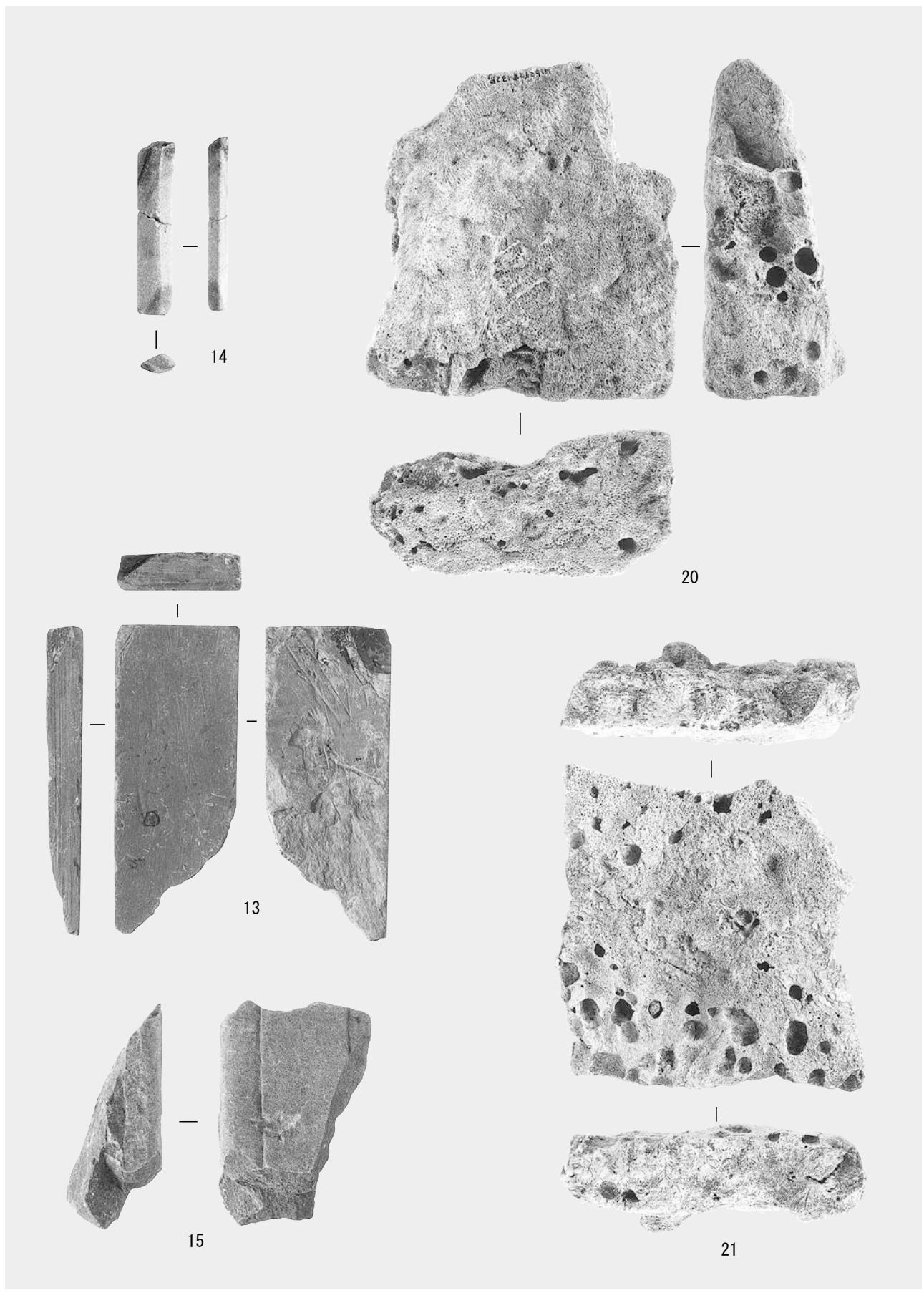
図版42上：貝製品 下：煙管



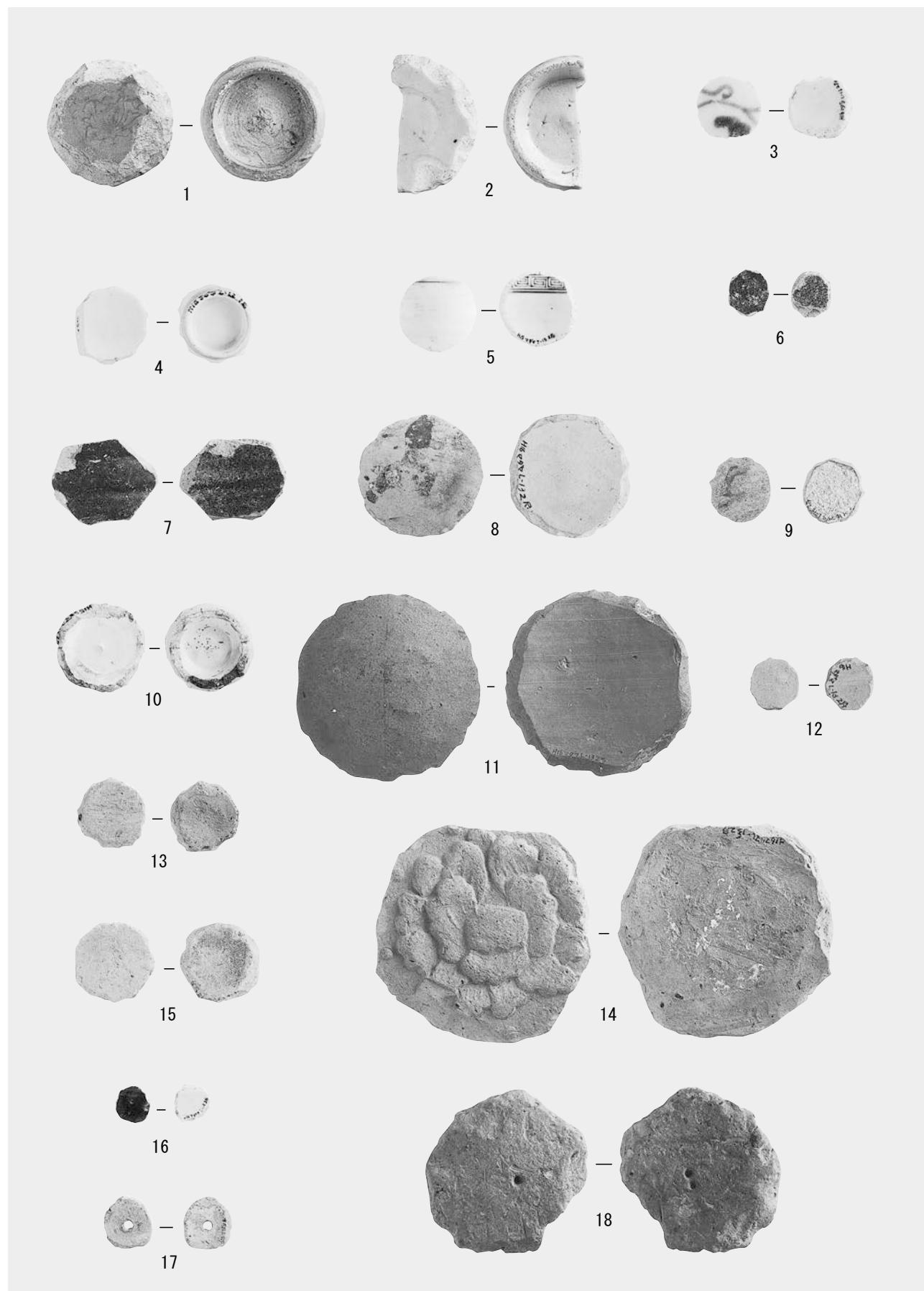
図版43骨製品



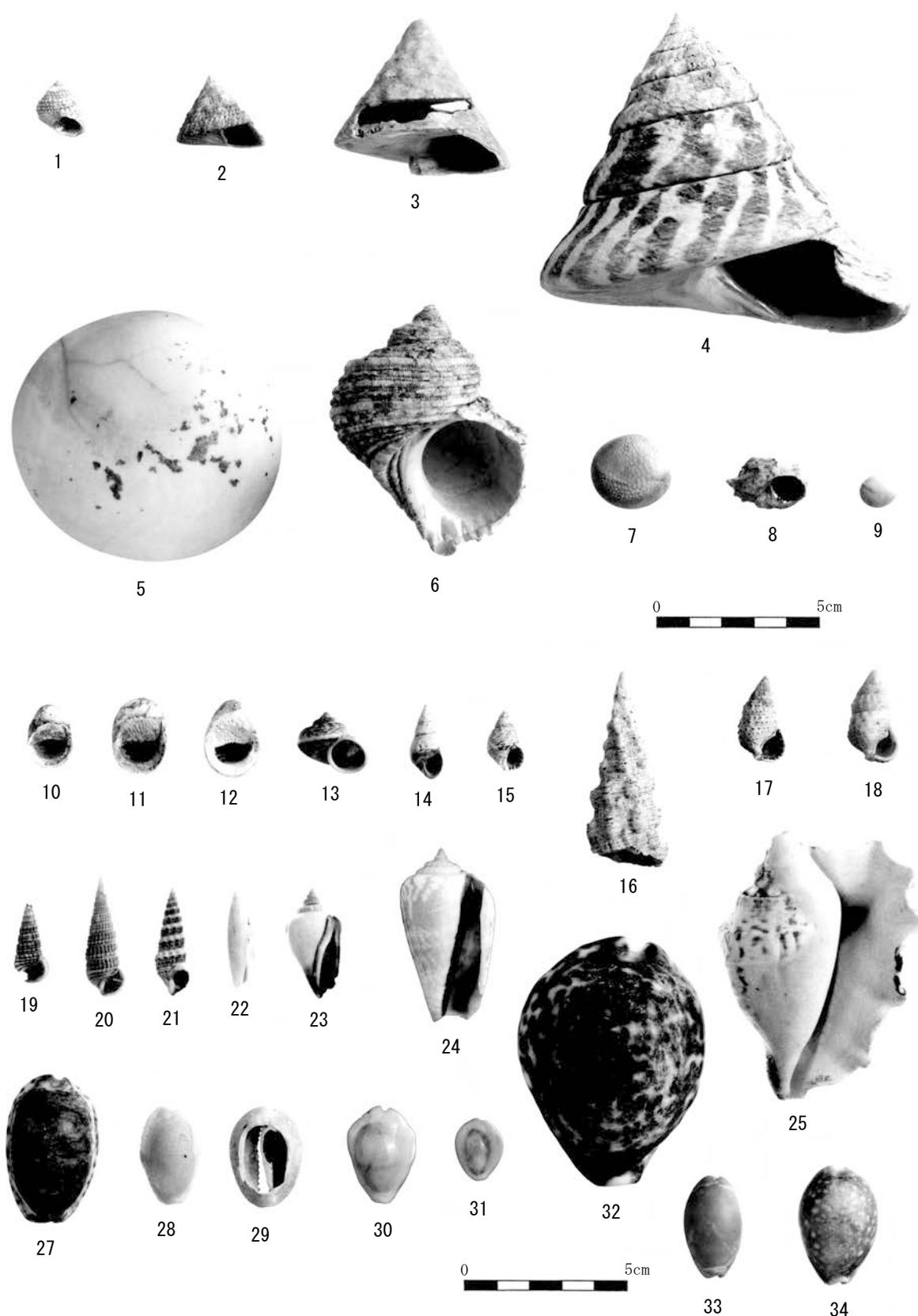
図版44玉・石器・石製品



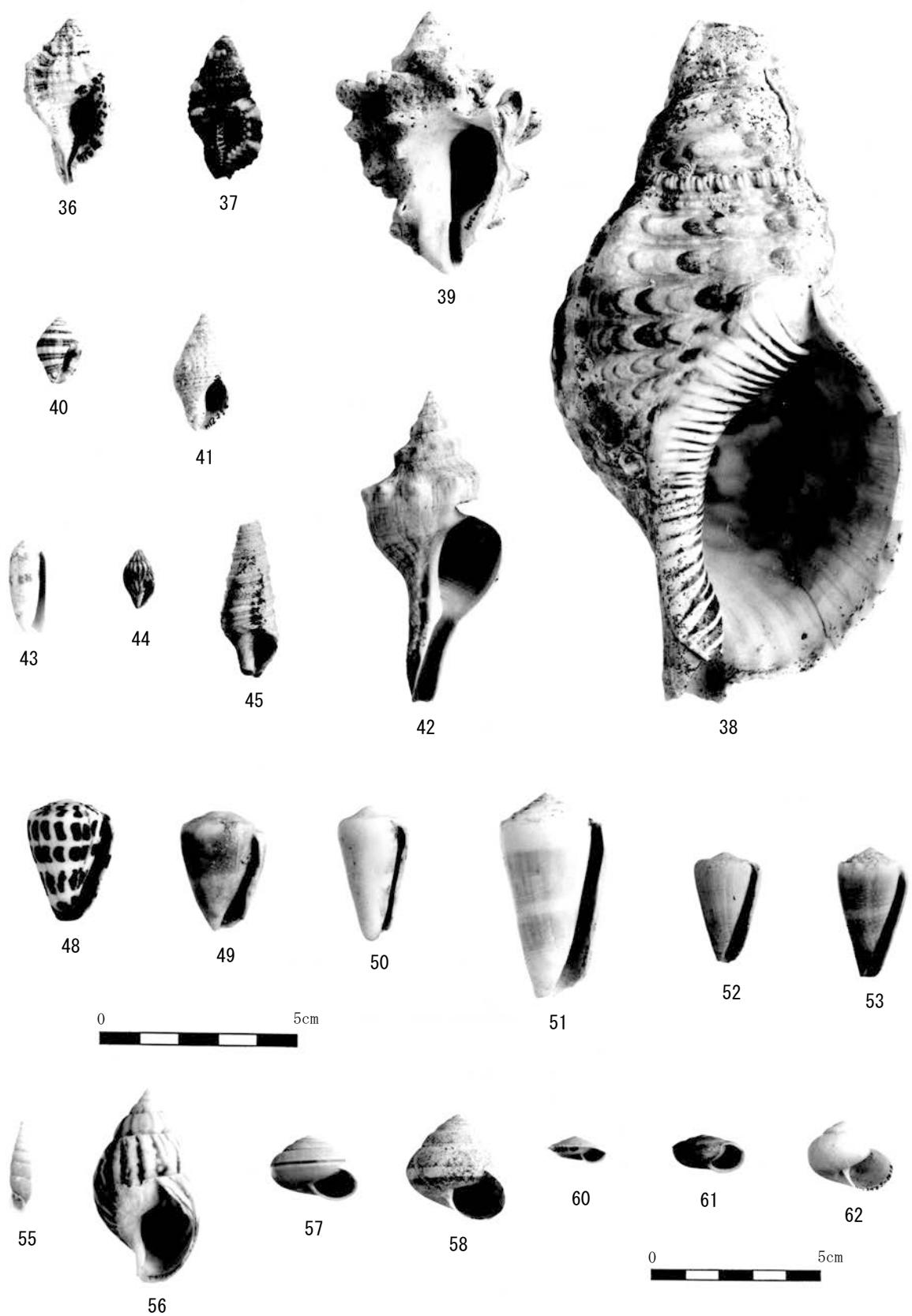
図版45石器・石製品2



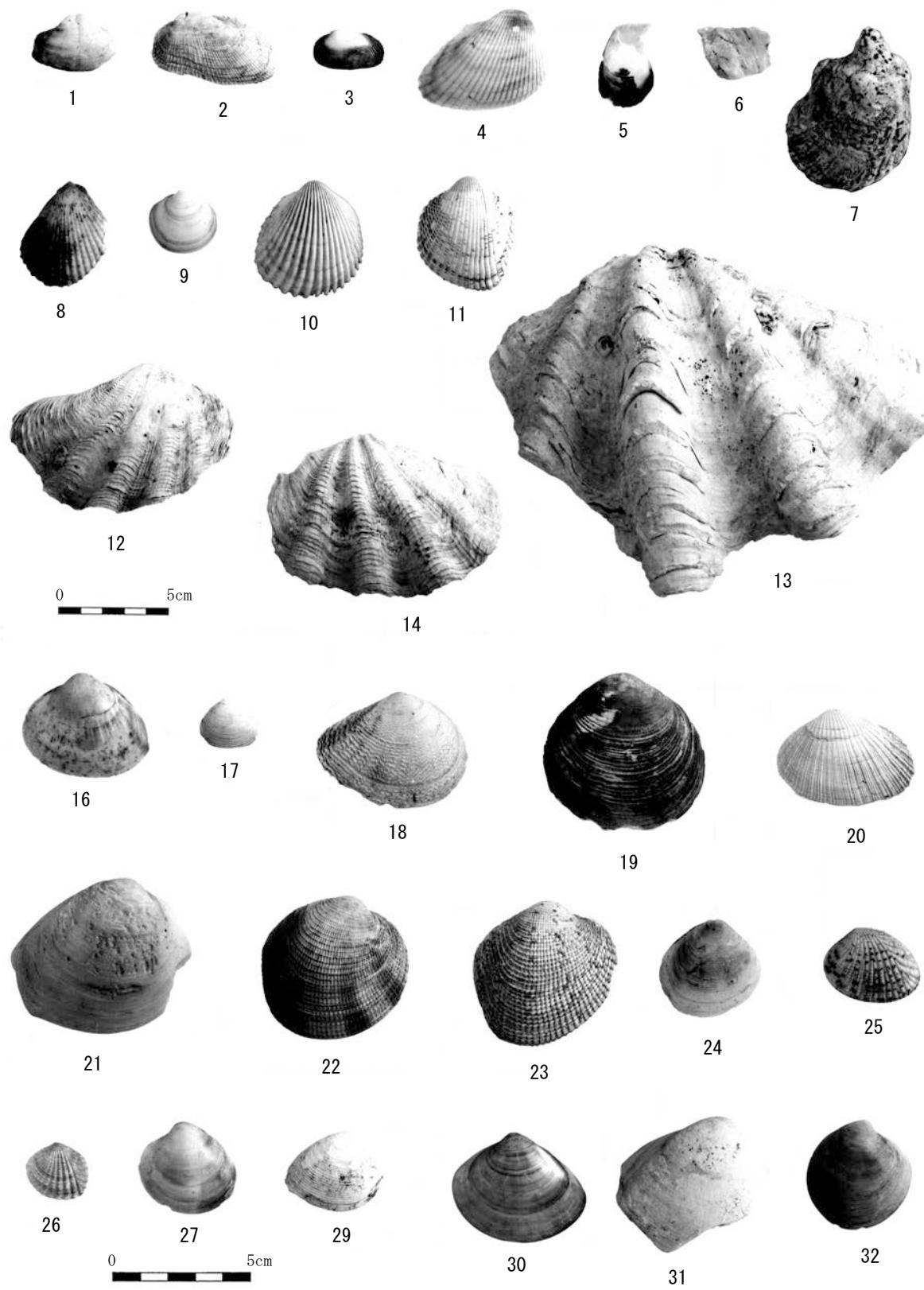
図版46円盤状製品



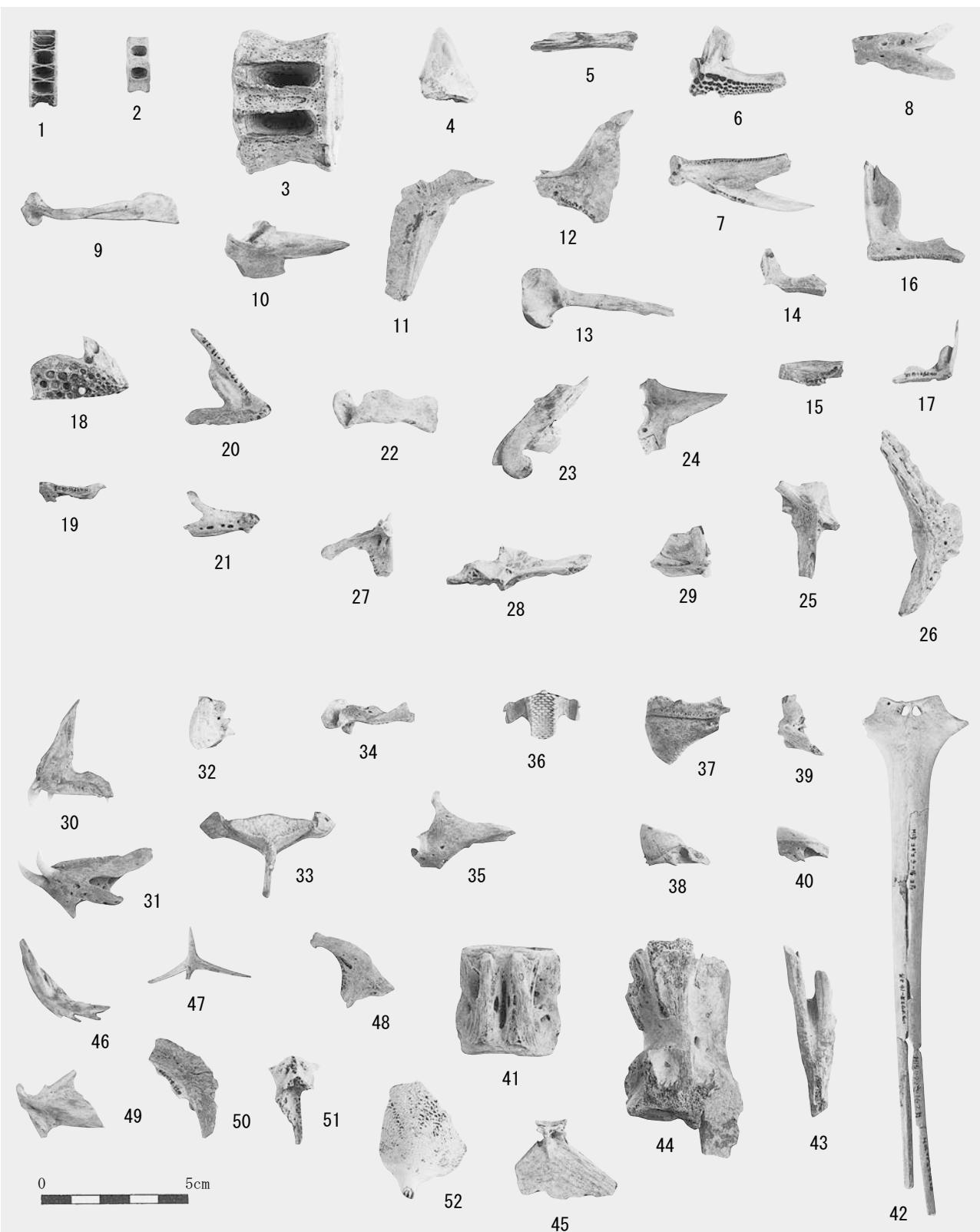
図版47貝類遺存体：巻貝 1 番号は表と一致



図版48貝類遺存体：巻貝2 番号は表と一致

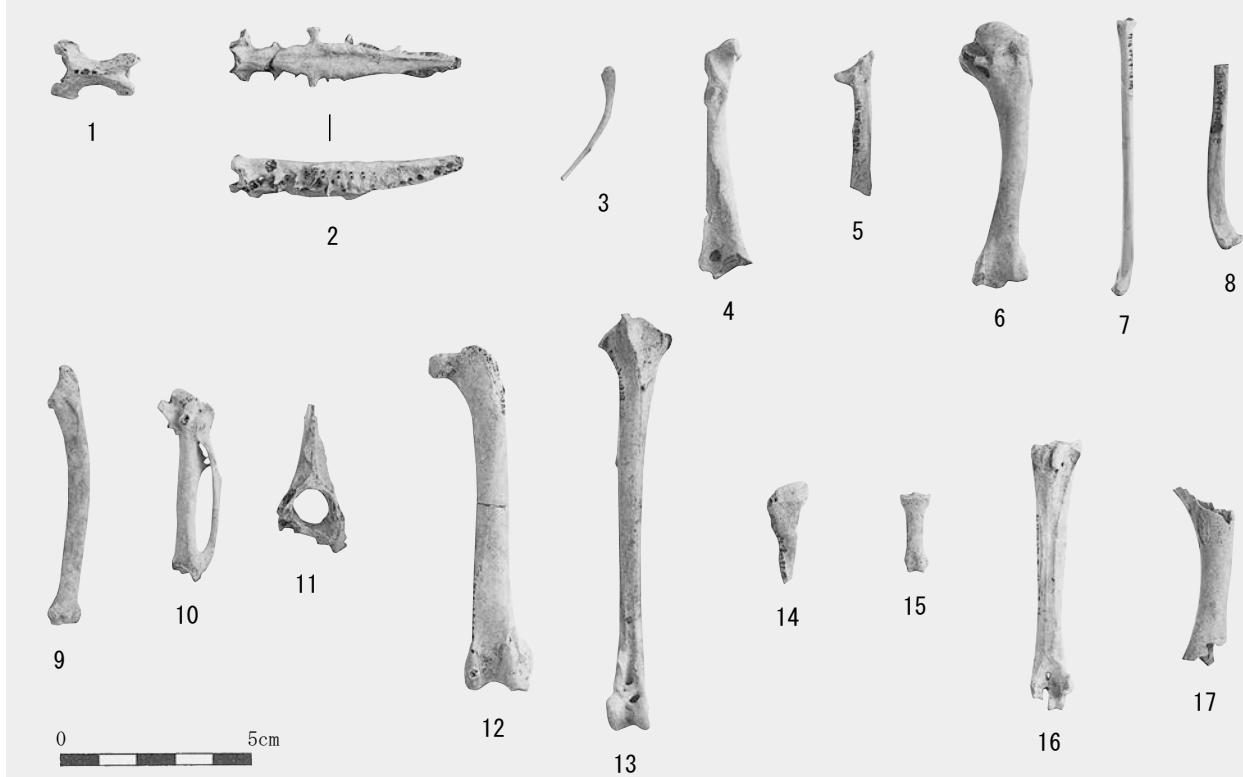
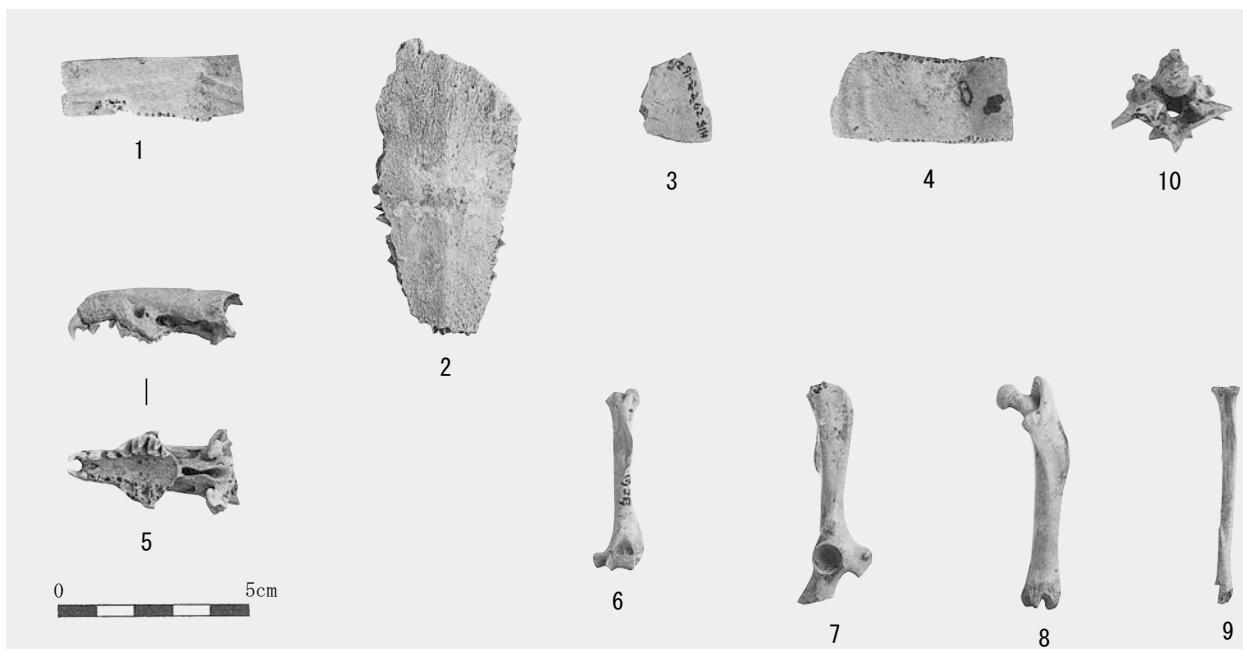


図版49貝類遺存体：二枚貝 番号は表と一致



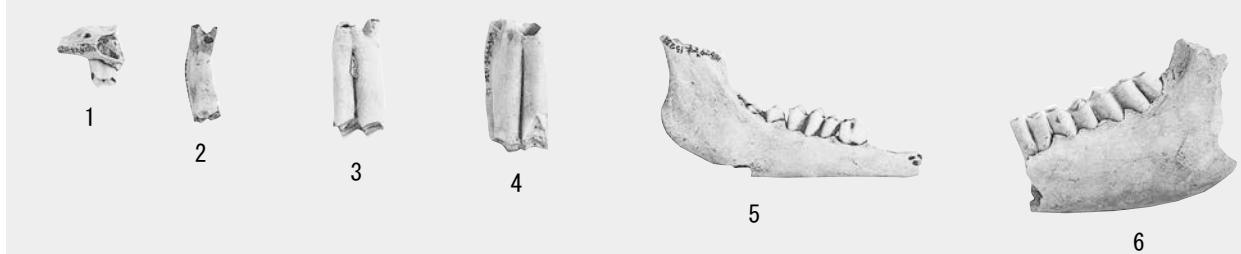
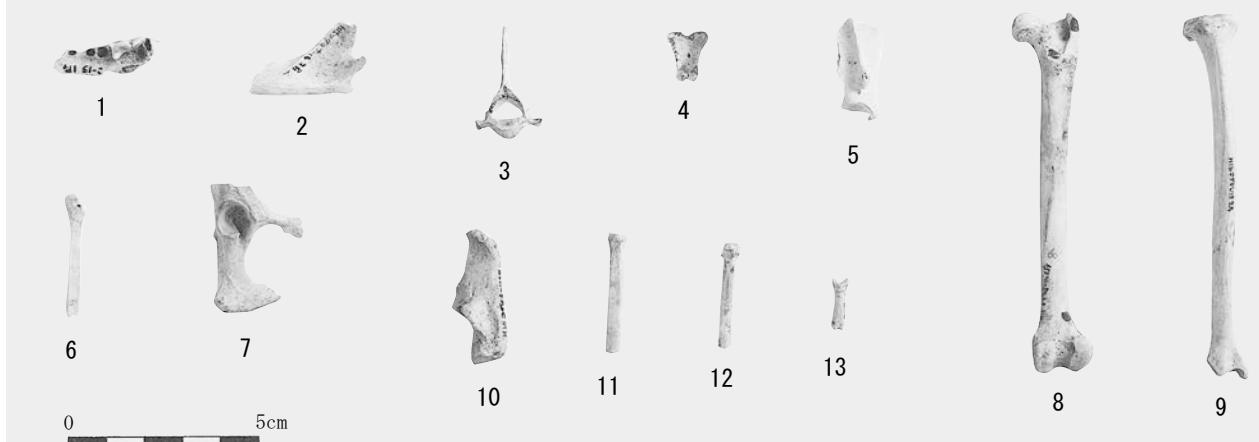
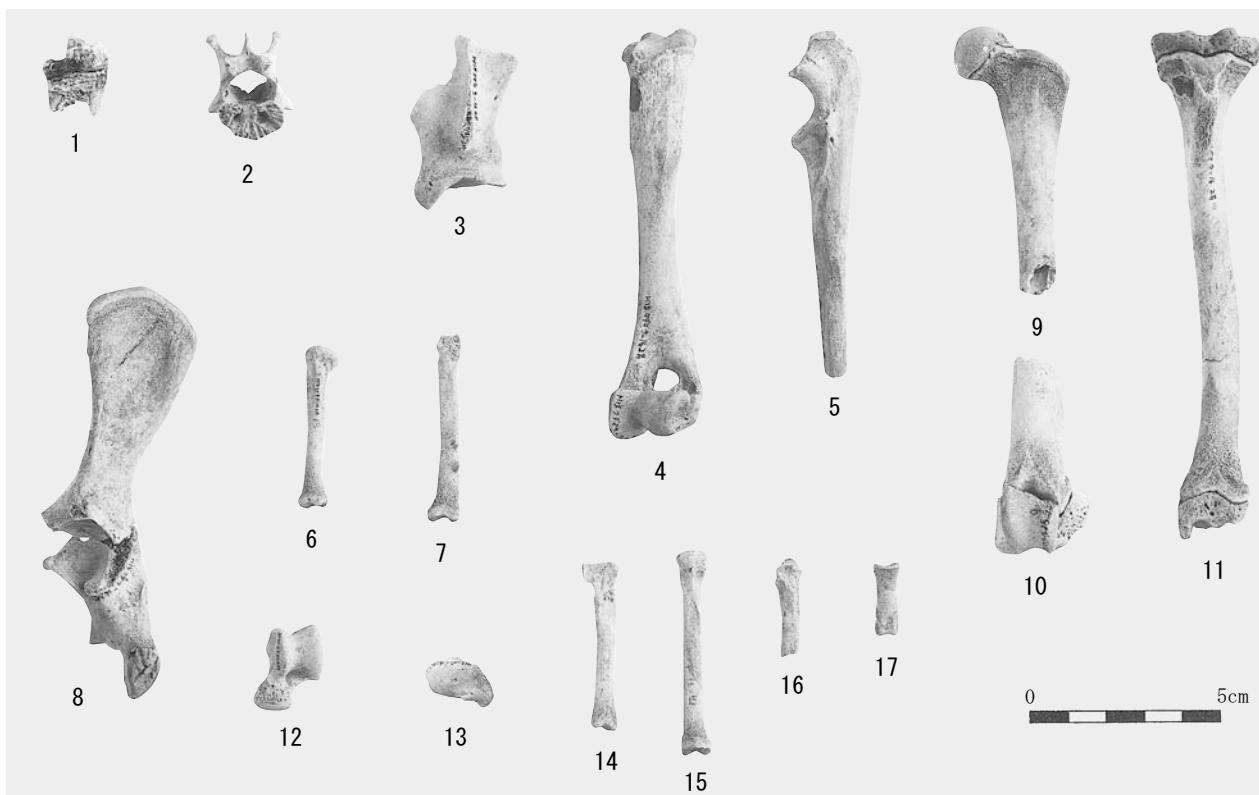
図版50骨1

サカナ [上] : ネズミザメ科: 1. 脊椎骨 メジロザメ科: 2. 脊椎骨 3. 脊椎骨 サメ: 4. 齒 コチ: 5. 右 齒骨 ハタ科A: 6. 右 前上顎 7. 右 齒骨 ハタ科B: 8. 左 齒骨 ハタ類: 9. 右 主上顎骨 10. 右 角骨 11. 左 前鰓蓋骨 12. 左 擬鎖骨 イトヒキアジ類: 13. 主上顎骨 ブリ類: 14. 右 前上顎骨 15. 右 齒骨 アジ科の一種: 16. 右 前上顎骨 フエダイ科: 17. 左 前上顎骨 クロダイ: 18. 左 前上顎骨 19. 左 齒骨 ハマフエフキ: 20. 右 前上顎骨 21. 右 齒骨 22. 左 主上顎骨 23. 左 口蓋 24. 右 角骨 25. 左 舌顎 26. 左 前鰓蓋骨 27. 左 主鰓蓋骨 28. 副楔骨 29. 左 方骨  
[下] : コブダイ: 30. 右 前上顎骨 31. 左 齒骨 32. 左 上咽頭骨 33. 下咽頭骨 ベラ類: 34. 左 主上顎骨 35. 右 角骨 ナガブダイ: 36. 下咽頭骨 ブダイ科A: 37. 左 前上顎骨 38. 左 齒骨 39. 左 方骨 ブダイB: 40. 左 齒骨 マグロ類: 41. 脊椎骨 カジキマグロ類: 42. 背鰭棘 43. 神經血管棘 44. 脊椎骨 45. 尾椎 スズキ目: 46. 左 前鰓蓋骨 ハリセンボン科: 47. 棘 種不明: 48. 左 口蓋 49. 右 角骨 50. 左 前鰓蓋骨 51. 鋤骨 イカ: 52. 甲羅



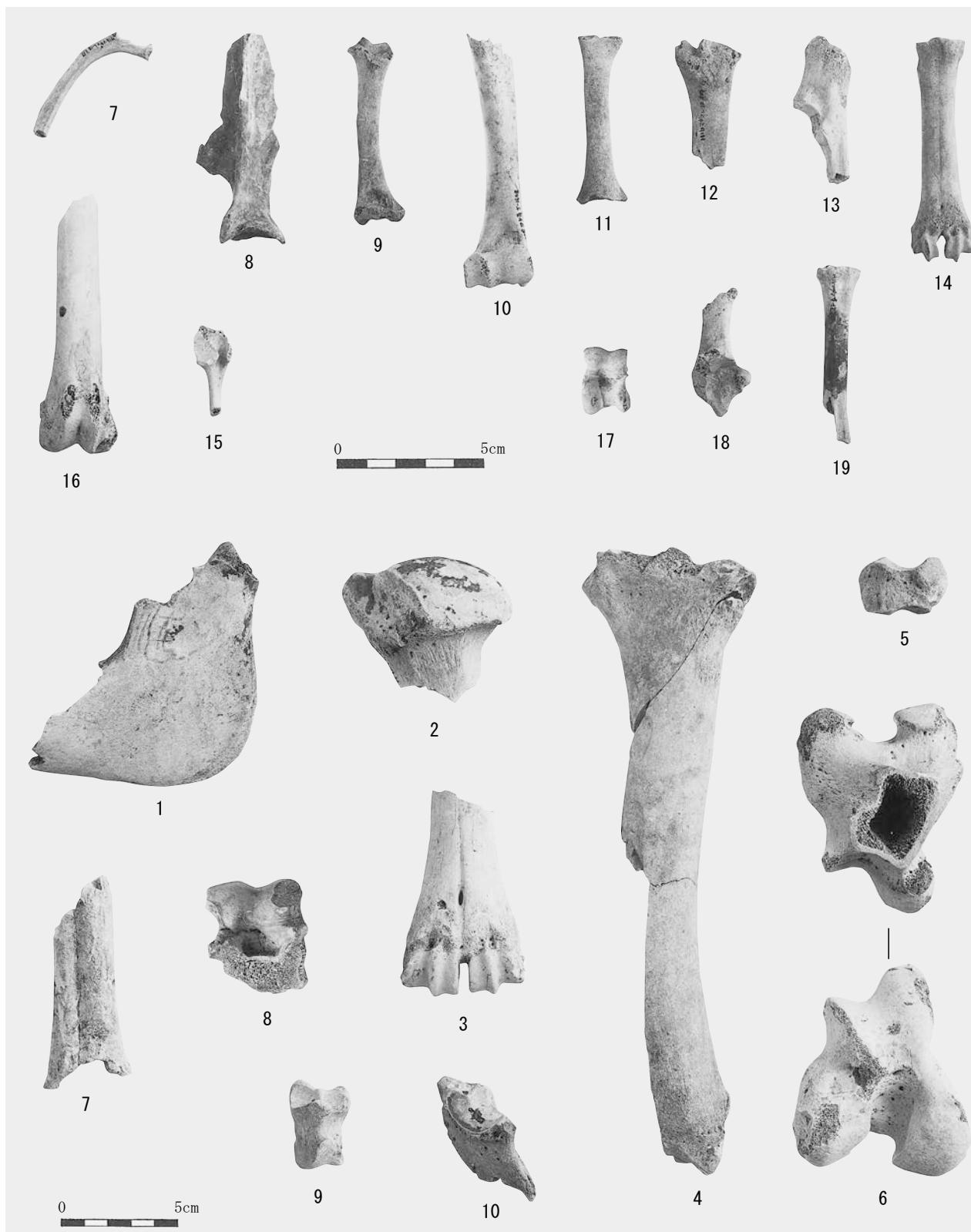
図版51骨2

[上] リクガメ：1. 中腹板 2. 椎骨板 3. 縁骨板 4. 肋骨板 モグラ：5. 右左 上顎骨 ネズミ：6. 左 上腕骨  
7. 右 寛骨 8. 右 大腿骨 9. 左 脛骨 ヘビ：10. 脊椎骨  
[下] ニワトリ：1. 頸椎 2. 胸椎 3. 肋骨 4. 左 鳥口骨 5. 右 肩甲骨 6. 右 上腕骨 7. 左 桡骨 8. 右 桡骨  
9. 右 尺骨 10. 右 中手骨 11. 左 寛骨 12. 左 大腿骨 13. 右 脂骨 14. 左 腓骨 15. 跖骨  
16. 左 中足骨♀ トリ：17. 右 上腕骨



図版52骨3

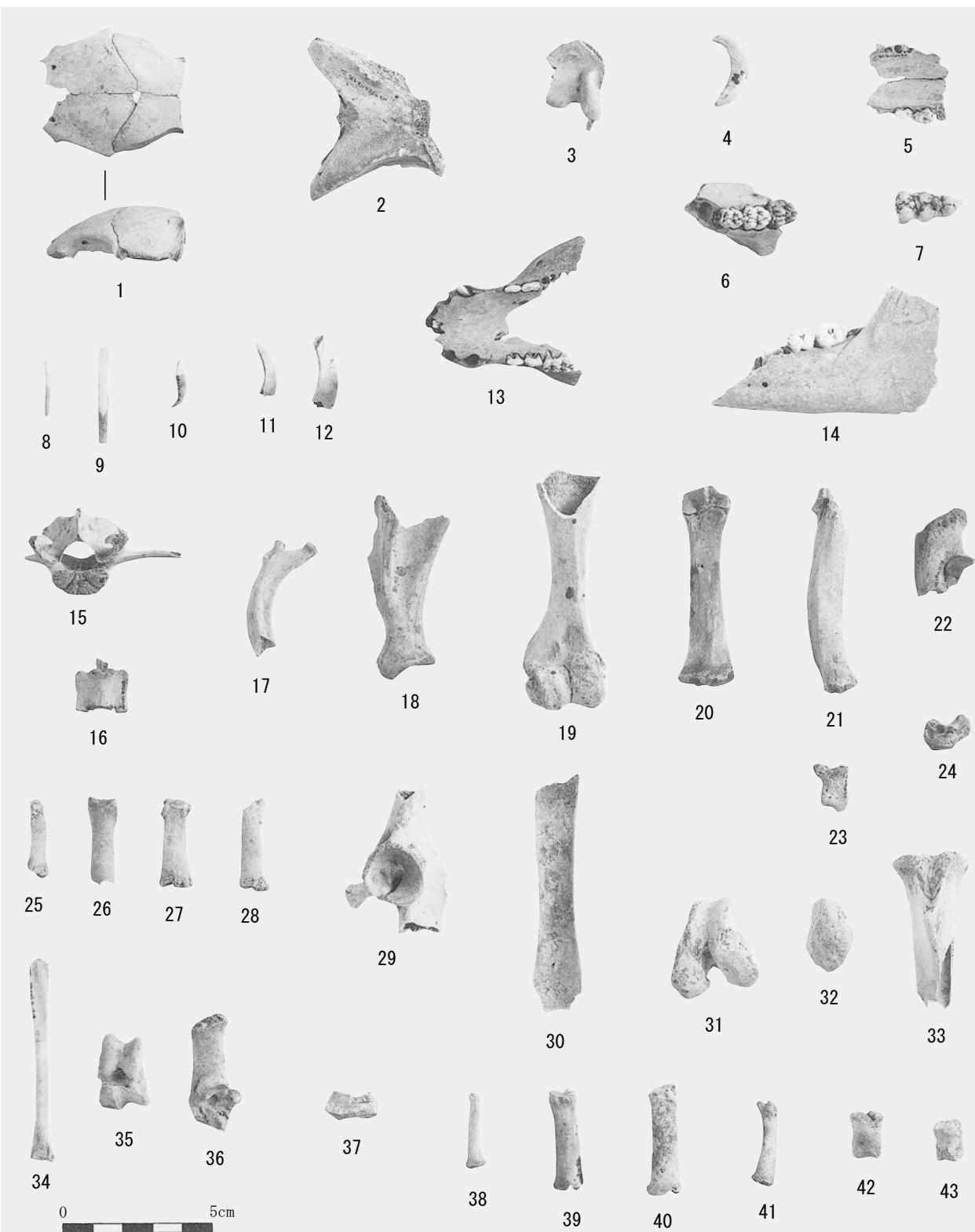
- [上] イヌ：1. 右 下顎骨M<sub>1</sub> 2. 腰椎 3. 左 肩甲骨 4. 左 上腕骨 5. 左 尺骨 6. 右 中手骨(II) 7. 左 中手骨(III)  
8. 左 寛骨 9・10. 左 大腿骨 11. 左 胫骨 12. 左 距骨 13. 足根骨 14. 右 中足骨(II) 15. 右 中足骨(IV)  
16. 左 中足骨(V) 17. 基節骨
- [中] ネコ：1. 左 上顎骨P<sup>3</sup> 2. 左 下顎骨 3. 胸椎 4. 尾椎 5. 右 肩甲骨 6. 右 尺骨 7. 右 寛骨 8. 右 大腿骨  
9. 右 胫骨 10. 右 距骨 11. 左 中足骨(III) 12. 右 中足骨(IV) 13. 基節骨
- [下] ヤギ：1. 右 上顎骨P<sup>1</sup> 2. 右 上顎骨P<sup>2</sup> 3. 右 上顎骨P<sup>4</sup> 4. 左 上顎骨M<sup>1</sup> 5. 右 下顎骨dm<sub>3,4</sub>M<sub>1</sub>  
6. 左 下顎骨M<sub>1,2,3</sub>



#### 図版53骨4

[上] ヤギ: 7. 左 肋骨 8. 右 肩甲骨 9. 右 上腕骨 10. 左 上腕骨 11・12. 左 桡骨 13. 左 尺骨 14. 左 中手骨  
15. 右 寛骨 16. 左 大腿骨 17. 左 距骨 18. 左 跗骨 19. 右 中足骨

[下] ウシ: 1. 左 下頸角 2. 右 上腕骨 3. 中手骨 4. 右 桡骨 5. 右 桡側手根骨 6. 右 大腿骨 7. 中足骨  
8. 左 距骨 9. 右 中節骨 10. 右 末節骨



図版54骨5

ブタ：1. 右左 頭頂骨～前頭骨 2. 右左 頭頂骨 3. 右 後頭頸 上顎骨：4. 右  $I^1$  5. 右  $P^{2\cdot 3}$  左  $P^{(1)}$  6. 右  $P^4 M^{1\cdot 2}$  7. 右  $M^3$

下顎骨：8. 右  $i_2$  10. 右  $I_3$  11. 左 犬嚙♂ 12. 左 犬嚙 13. 右  $i_1$   $cdm_{2\cdot 3} \sigma^2$  左  $dm_{2\cdot 3\cdot 4}$  14. 左  $P_4 M_{1\cdot 2\cdot (3)}$  15. 腰椎 16. 尾椎 17. 右 肋骨 18. 左 肩甲骨 19. 右 上腕骨 20. 左 桡骨 21. 左 尺骨 22・23. 右 尺骨 24. 右 第4手根骨

中手骨：25. 左(II) 26. 左(III) 27. 左(IV) 28. 左(V) 29. 左 簧骨 30・31. 左 大腿骨 32. 右 膝蓋骨 33. 右 膝蓋骨 34. 右 胫骨 35. 右 距骨 36. 左 跗骨 37. 右 中心足根骨 中足骨：38. 右(II) 39. 右(III) 40. 右(IV) 41. 右(V) 42. 右 基節骨 43. 左 中節骨



---

沖縄県立埋蔵文化センター 調査報告書第32集

## 真 珠 道 跡

—首里城跡真珠道地区発掘調査報告書( I )—

発 行 年 平成18年(2006) 3月27日

発 行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
〒901-0125  
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7  
TEL 098(835)8751

印 刷 有限会社 金 城 印 刷  
〒901-0305  
沖縄県糸満市西崎町5丁目9-16  
TEL 098(995)0001

---

©沖縄県立埋蔵文化センター 2004 Printed in Japan  
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。